明治卅三年十二月廿五日
第三種郵便物認可
明治四十年十二月五日発行
（毎月一回五日発行）

女學世界

第七巻
第十六號



博文館發行




御歳暮
謹啓仕候。
れ正月迄で一ヶ月を餘
すのみに相成申候。弊店
にては此際歳末年始の御
進物用として理想的品と
の評を得たる
商品切手
を始め最も適當なる
御贈答品
種々取揃へ陳列販賣仕候
間續々御用命仰付被下度
奉願上候。敬具。
三越呉服店

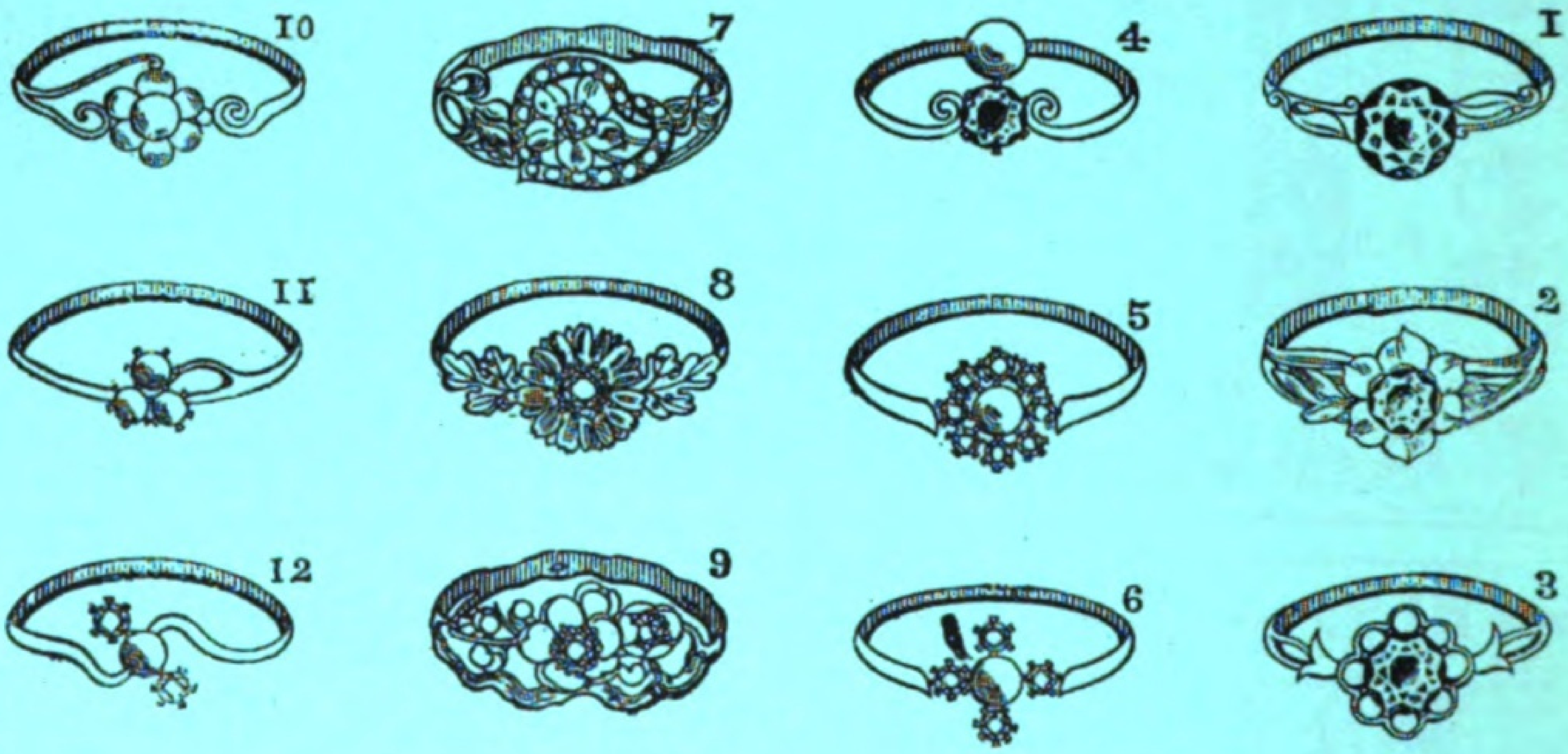
女學世界 第七巻第拾六號 目次


流行女帯地
登録
山吹織
御注意
近來帯地界の流行品として本品の非常に歡迎せらるゝや續々模造品を製造販賣致すもの有之候間當製造元は特に御愛顧の御方々へ左記の御注意申上候
甲品 金糸にて登録山吹織と織込あり
乙品 友糸にて山吹織と織込あり
全國各地著名呉服店にあり

（電話本局三十番。三千番○振替貯金口座九二九三番）

東京南傳馬町 大西白牡丹

寶石入新式指環



(1) 十八金唐草式ダイヤモンド入 甲價五百圓 乙價四百五十圓

(2) 金及白金水仙之圖金剛石入 甲價百貳拾圓 乙價壹百圓

(3) 十八金松梅形ダイヤモンド入 甲價貳百五十圓 乙價貳百圓

(4) 眞珠ダイヤモンド入 女夫形 甲價百五十圓 乙價百貳十圓

(5) ダイヤモンド八個及眞珠入 甲價百五十圓 乙價百三十圓

(6) ダイヤモンド四個及眞珠入 甲價八千五圓 乙價七拾圓

(7) 廿二金ハートニスミレ形 眞珠及ルビー入價貳十四圓

(8) 廿二金菊花彫刻ルビー又ハ 眞珠入價貳十圓

(9) 廿二金枝梅彫刻眞珠又ハ ルビー入價貳十八圓

(10) 十八金唐花式眞珠入 甲價拾貳圓 乙價拾圓

(11) 十八金眞珠三個入 甲價拾貳圓 乙價拾圓

(12) ダイヤモンド及眞珠入 甲價五拾圓 乙價四十圓

(いの一)

●通信敎授 自宅獨習生募集

産婆學講義錄

新學期十二月開始毎月一回發行六ヶ月修了

●産婆科を卒業したる者は直に産婆試驗に應ずる事を得
●看護科を卒業したる者は直ちに就職の資格を得
●尙卒業後は永く會友として實習及就職の便宜を與ふ

看護學講義錄

新學期十二月開始毎月一回發行四ヶ月修了

●束修五十錢各科共月謝……八十錢

（注意）總て全授業料前納者束修免除

▲本講義錄は婦人にして將來産婆看護婦希望者の公醫界の泰斗たる醫學士ドクトル諸先生が親しく執筆文章を言文一致體となし總ふりがなを附したれば恰も手を取りて敎へらるゝが如く何人と雖も其了解に苦しむ事なし尙就職の目的にあらざるも衛生を重んぜらるゝ淑女は講習の必要あり

會長 陸軍二等軍醫正 正六位勳四等 ドクトル メヂチーネ 渡邊鼎

講師
仁濟堂病院長 醫學得業士 石井虎之助
醫術開業試驗委員 醫學士 長谷川順次郎
正六位勳四等 ドクトル メヂチーネ 渡邊鼎
陸軍二等軍醫 醫學得業士 根本麟之助
日本製藥社技師 藥學士 中村信治
東京醫科大學 醫學士 福島尙純
兒玉産科婦人科病院長 ドクトル メヂチーネ 兒玉林平
東京醫科大學講師 ドクトル メヂチーネ 佐藤運雄
陸軍三等軍醫 正八位 岩淵豐治
平山外科醫院長 醫師 平山成之助

幹事 平山成之助

◎第一卷發行入會の最好期見本進呈
●規則書送呈
●郵劵二錢要

東京四谷內藤町一番地 東京産婆看護婦講習會

妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇藥を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし三錢郵劵を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀 河村愛子



大勉强一割引

當店今般業務を擴張し博文館發行の新刊圖書雜誌を初め市內各書林に於て發行する書籍類は凡て定價の一割引（外に送料を要す）を以て迅速御取次仕るべく候間多少に拘はらず御注文の程願上候但し郵劵代用は定價通り且つ中等敎科書類は定價通り申受く

東京神田三崎町三丁目 日清堂書店

女（いの二）

○直に美人となる可驚美顔白色劑

藥學得業士從七位鏑木靜夫先生證明製劑

●高等化粧料 美顔白色劑 **ホワイテン**

WHITEN(化粧。消毒。經濟の三大德用)

價格(特製壹圓廿錢送料八錢 大瓶七拾五錢送料六錢 小瓶四拾錢同四錢 試用廿錢同二錢)

右高等美顔料白色劑(一名ホワイテン)は現今歐米各國紳士貴婦人間に於て唯一の洗滌白色劑として愛用せらるゝ一種可驚秘方劑にして是れに加ふるに鏑木藥學得業士が多年藥理化學研究の結果更に有効新劑を配合し本邦人の常用に適せしめたるものなれば世に在り觸れたる無責任なる賣藥化粧品と同一視せざらんことを乞ふ

●ホワイテンの特効

一、朝夕用る時は色白くきめ細かに麗き膚となる
二、にきび、あせも、そばかす等苟も顔の荒るゝ如き事なく光澤を増す
三、白粉を附るの必要なし充分白くなるべし
四、香水石鹸洗粉の必要なし夫れ以上の効能あるべし

郵便にて申込の際は爲替東京市芝櫻田久保町局切手代用は總て一割増代金引換小包料一個に付廿四錢

◀千名限試用半額▶



發賣本舖 東京芝區櫻田伏見町三番地 **東洋堂藥局** 電話新橋二九四二番 電信略號(カヲ)

第二回新學年 **會員大募集**

婦人 **技藝講義**

見本は四十錢にて送る

本科一ケ年 去十一月初め初號發行會費參拾七錢
高等科六ケ月 四十一年一月第一號發行會費同上
撰科(本科)六ケ月 會費一科目一ケ月貳拾錢六ケ月分金壹圓

十七術科、八學科を各專門大家が最も平易の文章にて親切に講述し、多くの着色石版、寫眞版及び木版を入れて恰も教師の傍にある如く修習し得る我國唯一の技藝講義錄なり

營業部

諸種技藝の講習上に必要の器具材料、製作上の見本、及び美麗斬新の製作品を精々安價に販賣す

技藝練習部

通信講義にある各術科を最も親切に實地に就て教授す正規の學校以外に於て手藝を學ばんとする人には最適の講習所なり(詳細規則營業目錄は郵券貳錢又往復葉書にて送る)

振替口座一七〇二

東京市小石川區新諏訪町十三番地

帝國婦人技藝協會

女(いの三)


カメリヤ洗粉
あらいこ
艶麗花の如く純潔雪の如き
美貌は本品の愛用によりて顯る
カメリヤ洗粉は最新の化粧法に基き學理的に配劑なせる高等美身術に適したる最良の化粧料なれば皮膚の營養を助け、きめを細かに光澤を增し肌膚を艶麗美白ならしむる特効を有し其香氣の優秀なる永く身邊に薫りて自ら快感を起さしむ殊に寒冷に過ふて肌を荒害する憂なきは全く本品の純良なるが故なり
定價
大瓶 壹個 廿五錢
小瓶 同 十五錢
大袋 同 五錢
小袋 同 三錢
罐入 同 十三錢
發賣元 ライオン齒磨本舖
東京神田 小林富次郎

女(いの四)

歳の市



日高島助筆



あかげちゞれげくせなを

赤毛縮毛癖直

獨逸醫學博士發見化學應用赤毛縮毛くせ忽ち直り點艶美髪となる説明書藥名詳説の雜誌ハガキで申込次第無代進呈

東京市京橋越前堀　樂天堂

醫科大學藥學專攻　藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學説に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

東京市下谷區上根岸町　衛生書院

完全なる肺病療法は本書にあり

正三位伯爵大原、滋乃井兩閣下題字

醫學士常持閲　弘濟院中南著

肺病全治の秘訣

一名自宅療法　全一冊

肺病ハ善良の療法と藥物とに依りて全治し得るハ近世醫學界の公論なり本書ハ著者多年の肺病全快の實驗を得たる根治的療法を叮嚀に記述せし物一讀再生の幸福を全ふすべし送料三錢送れ無代進上

東京市芝區愛宕町二の十四　弘濟院

●小兒五かん●驚風●蟲おさへ

登録商標

本方 小兒蟲一切妙藥 奇應丸

定價　金五錢　金拾錢　金廿錢（遠國送料金貳錢）

發賣本舖　東京市京橋區銀座三丁目　松澤商店

賣捌は全國諸々藥舖賣藥店に特約あり（電新[illegible]）

エハガキ

出版製造　東京小石川　日本葉書會

發賣　東京本町　博文館



にきび●そばかす●こせがさ皮膚病一切如何なる難病も根本的全治せしむる一大奇藥を予が歐米巡遊中發見の結果餘りの不思議さに同病患者救濟の爲其由來冊子を進呈す郵券貳錢送れ

●東京品川海岸元芝岡別邸

女（ろの二）


THE GEM
ゼム
懐中良薬
衛生家必携
ゼム
ゼム一粒の　馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く爲人に愛用せらる
ゼム二粒は　煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は　音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を　食前食後に用ふれば食慾を增進し消化を助く故にゼムは衛生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は　異境に於ける風土病疾病食當り水傷りを治して神効あり舟車の酔を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價
七十五粒入十錢
百六十粒入廿錢
四百卅粒入五十錢
九百粒入一圓
容器入ゼム二十錢
日本一手發賣　東京馬喰町二丁目　愛國堂　山崎榮三郎
支舖　大阪高麗橋二丁目　山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

女(ろの四)

はつゆき

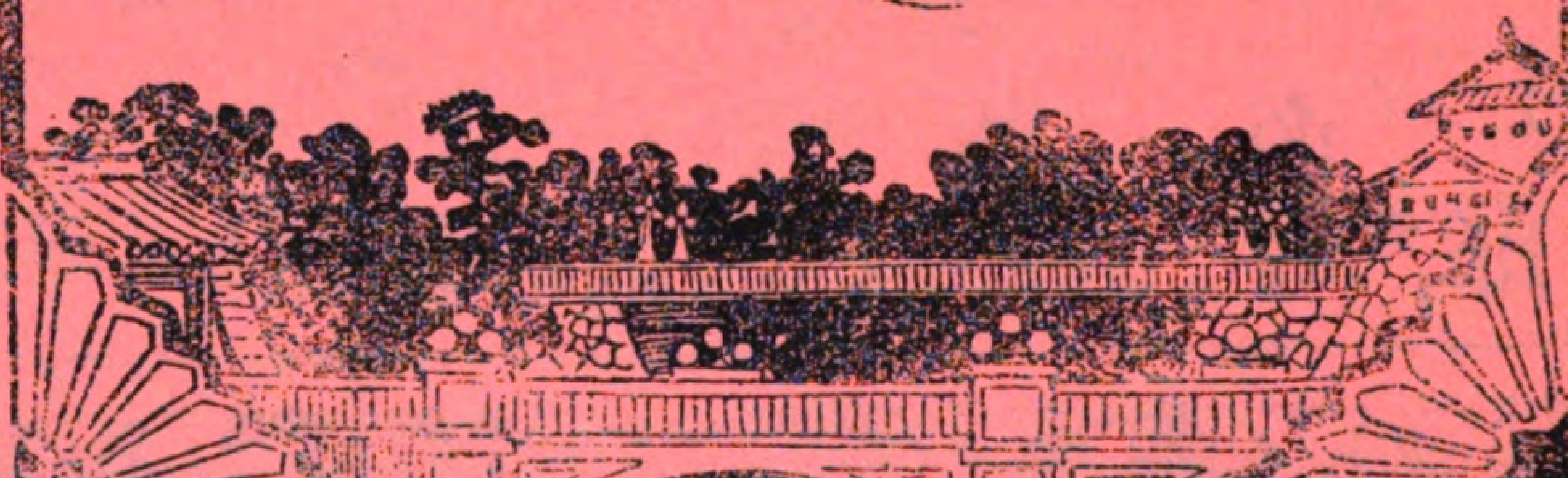


橋本邦助筆

最新の化粧法に基き配劑せる

高貴化粧料

千代田おしろい



千代田おしろいは
何故に高評なる乎?
一、最新完全なる無鉛の故に
二、衛生試驗所證明ある故に
三、のりよきと此上なき故に
四、少しも剥げる憂なき故に
五、日燒白粉燒の恐なき故に
六、溫泉塲でも變色せぬ故に
七、お化粧下の必要なき故に
八、厚化粧薄化粧自在の故に
九、香氣の最も秀れたる故に
千代田おしろいは
斯して歡迎せらる!!!

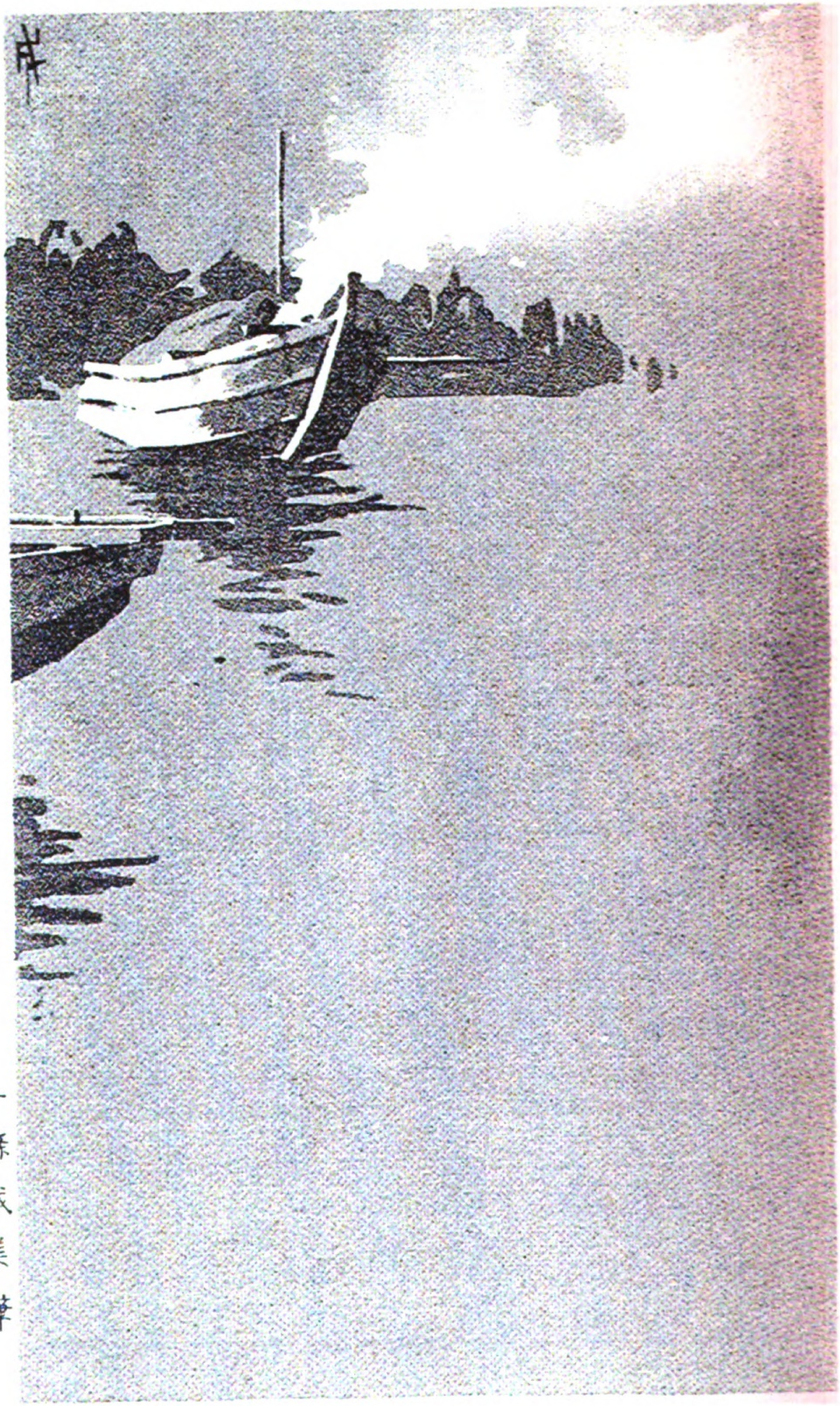
發賣元 東京馬喰町 山岸三之助

女(はの一)

（の二）

女はの四）

秋の夕



一條成美筆

遠山の雪



宮川安信筆

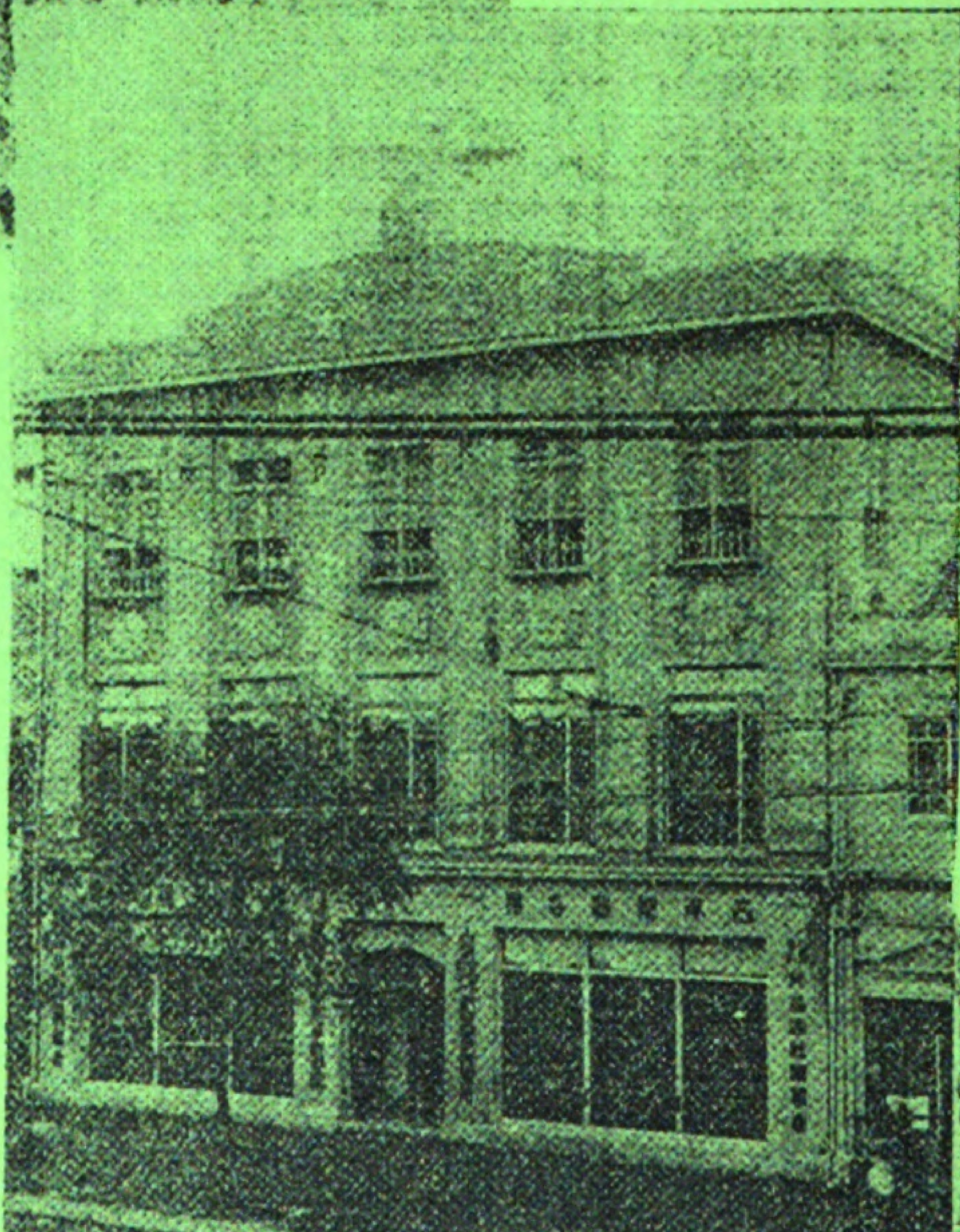
改築落成廣告

山葉風琴 金拾八圓以上金參百五拾圓迄各種

山葉洋琴 金參百參拾圓以上金壹千參百圓迄各種

鈴木ヴァイオリン 金貳圓以上金百貳拾圓迄各種

弊店儀多年大方各位ノ御厚情ヲ蒙リ以御蔭業務隆盛ニ趨キ從來ノ建物ニテハ狹隘ヲ來シ候ニ付今般改築擴張ノ上一層平素ノ御愛顧ニ背カザランコトヲ期シ候間何卒倍舊ノ御引立ヲ偏ニ奉希上候



舶來洋琴、風琴、ヴァイオリン各種

樂隊用吹奏樂器、手風琴、ハーモニカ各種

和洋音樂書各種

郵券貳錢御送附アレ詳細ナル目錄進呈

女(にの一)

(ピアノ・オルガン調律修繕應需)

東京市京橋 竹川町拾三 合資會社 **共益商社樂器店** 電話新橋五二九番 振替貯金口座一五八〇

女（にの二）

女（にの三）

女(にの四)

晩秋



蕉仙筆

あさよの
しもさむさやに
わか侍そめし
きくはちらさしに
明りにけれ

坂正臣筆

婦人世界は四十年を送るに如何なる記事を以てするや

材料清新

婦人世界

記事親切

十二月一日刊 毎月一回 二卷 拾四號 一冊 拾五錢 郵稅一錢五厘 六冊郵稅共九十錢 十二冊同一圓七十五錢

▲天下を驚倒せしめたる村井弦齋の男女戀愛論は最後の斷案を下して痛快淋漓

◎初めて就職せる時の所感（山元幸子）

◎婦人寫眞師の實歷（徳力作子）

◎ミシン使用の實驗（伊藤せい）

◎林檎の料理（弦齋夫人）

◎安産に必要なる手當　榊順次郎

◎最も重寶なる歳暮の贈物

▲私の最も感心せる歷史上の婦人……嘉悅孝子

▲私が祖母より受けたる感化……高等女子實修學校講師　星常子

▲十四年前の跡見女學校……桐島三菱銀行副長夫人　桐嶋銚子

▲愉快なるクリスマスの話……女子英語學會主任　藤生貞子

◎青年子女に對する母親の注意（中尾敎諭）

◎弟を助けて苦學せる婦人の實歷　山口しげ

◎注意すべき小兒鼻カタル　加藤博士

◎問答　婦人小兒科○齒科　質問随意解答親切

◎流行の防寒具　近藤蕉雨

◎小説 響　小倉富砂邸

◎懸賞繪探し

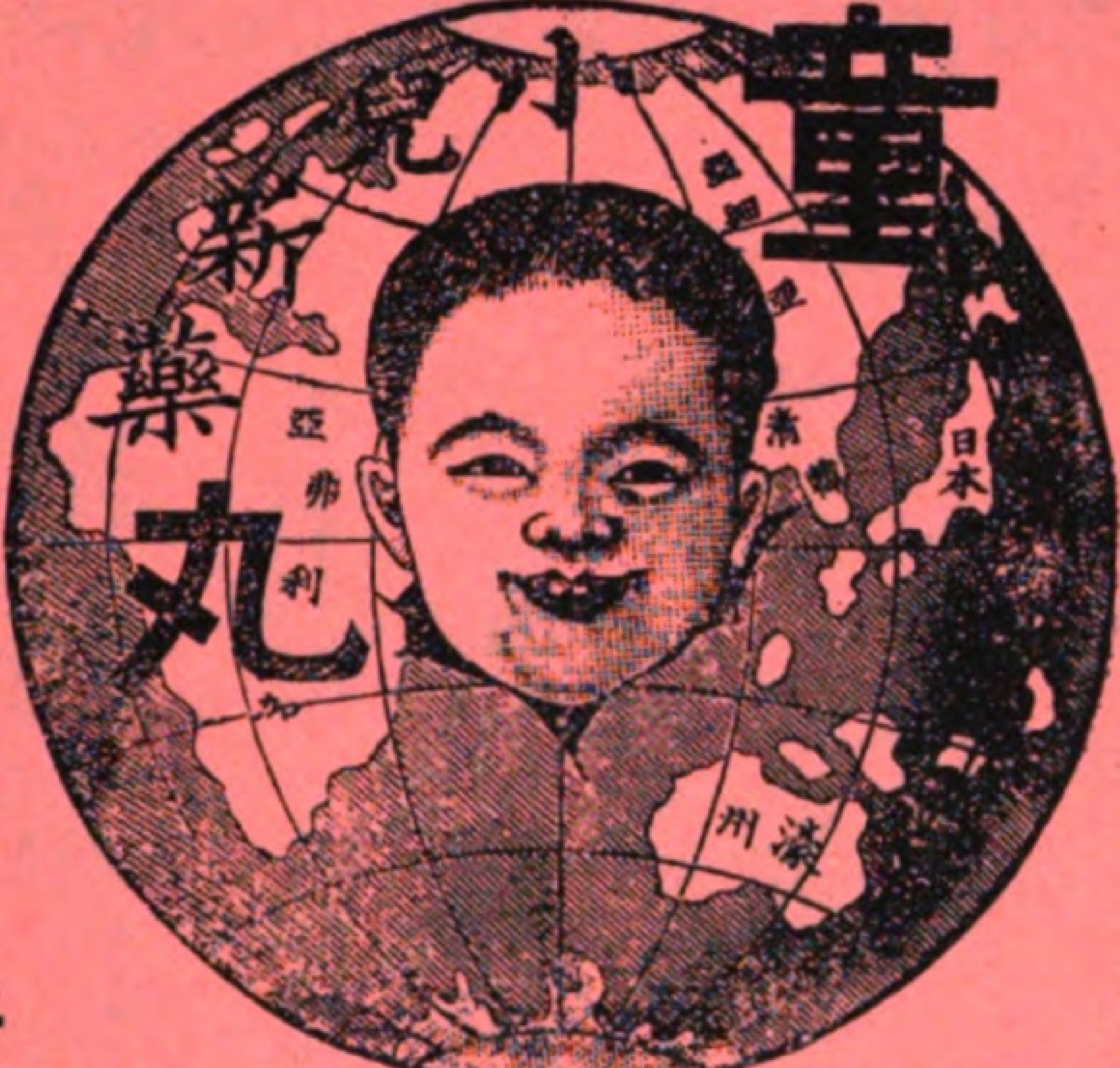
▲雙子は如何なる故に生るゝや……醫學士　伊庭秀榮

東京京橋南紺屋町十二　郵便振替貯金口座參貳六番　實業之日本社　電話新橋八七四番　賣捌全國書店

女（ほの二）

小兒新藥童丸生る

小兒科專門醫學博士
瀨川昌耆先生方劑



◉童丸は健童强兒の源泉なり
◉童丸は二十世紀の育兒法に適す
◉童丸は幼兒の生命也第二の慈母也

効能

◉小兒失氣◉吐乳病◉五疳驚風
◉腸加答兒◉小兒食欲不進又は飲過
◉小兒吐氣◉腸痛中毒
◉小兒虫氣一切又は熱さましによし

定價

拾粒入 金五錢	八拾粒入 金參拾錢
廿二粒入 金拾錢	百四十粒入 金五拾錢
五拾粒入 金二拾錢	三百粒入 金壹圓

◉童丸は有名藥店にあり若無くば發賣元へ御注文あれ

發賣元

東京市日本橋區通四丁目七
振替貯金口座第一六八〇番
津村順天堂

大阪市堺筋大寶寺町南入
振替貯金口座第三一六二番
津村順天堂

(ほの四)

木がらし



川崎蘭香筆

●大校舍落成

臨時入學募集

●定員　一千名
●寄宿舍定員　百廿名

東京市麹町區有樂町一丁目五番地

シンガーミシン裁縫女學院

▲規則書入用の方は郵劵二錢御送付あれよ

家庭向＝和服適用

シンガーミシン

減價月賦販賣

更に特減即金賣

全くの御素人を合手に大成効の

無報酬出張教授

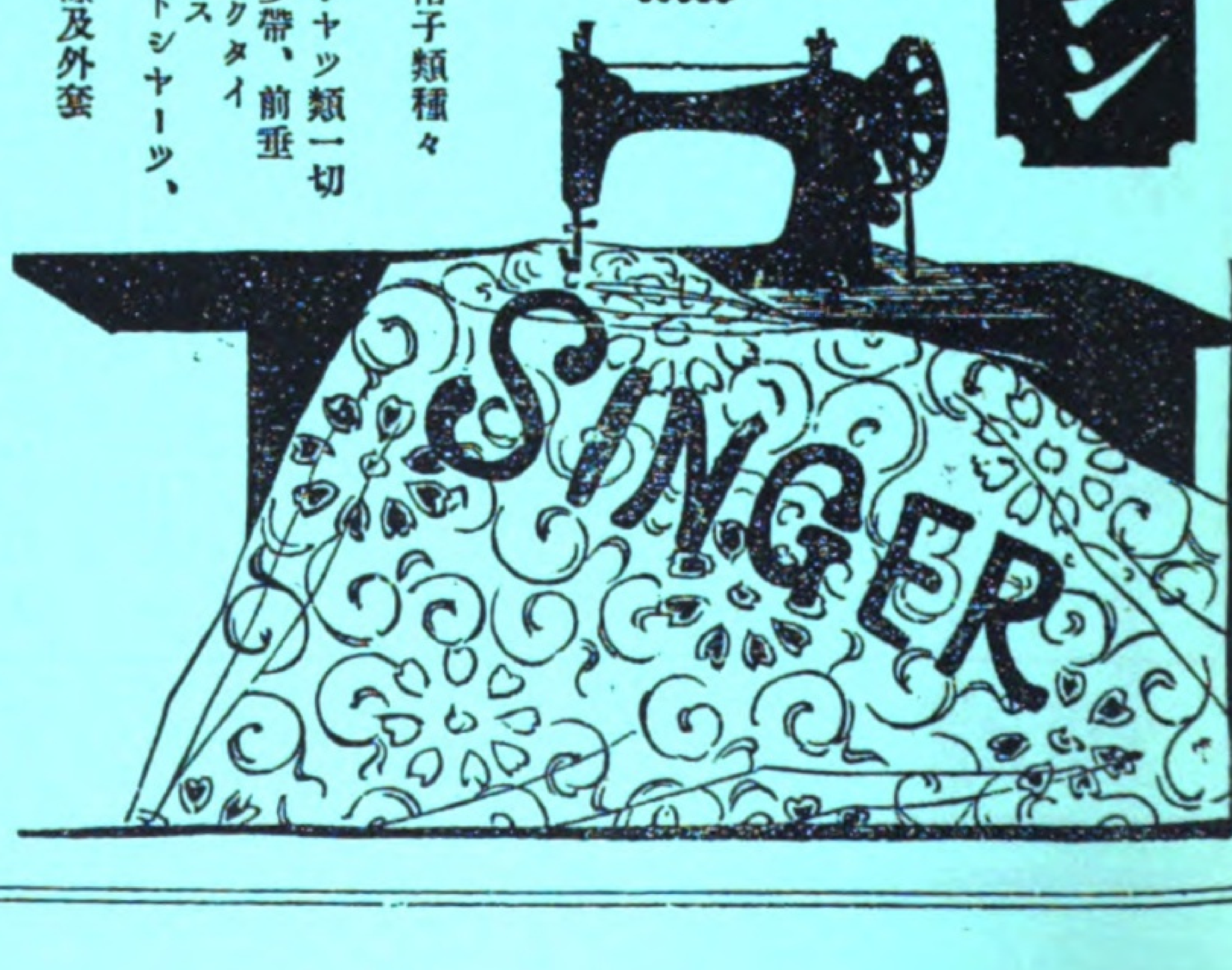
出張第一回	ミシン使用法
出張第二回	ミシン附屬品使用法
出張第三回	解き方及縫ひ方一切
出張第四回	裁ち方―小兒前掛類、帽子類種々
出張第五回	縫ひ方―襦袢、單衣
出張第六回	裁ち方―小兒簡單服、シャツ類一切
出張第七回	縫ひ方―袷、丸帶、博多帶、前垂
出張第八回	裁ち方―〔ヅボン下、ネクタイ　カラー、カフス〕
出張第九回	〔ホワイトシャツ、ソフトシャーツ、仕事着一切〕
出張第十回	水兵服、學校制服、立襟及外套
出張第十一回	以後裁ち方、製圖種々

☛明細書　御申越次第無代送呈す

○從來の普通賃貸法―亦其儘繼續致居候……

シンガー裁縫機械會社
東京支店

京橋區銀座三丁目
電話新橋三四六六



女(への一)

DIARY 1908

●英學新報社編纂●

●歳暮、クリスマス、新年等の贈遣に適す●

明治四十一年 英文當用日記

本社英文懐中日記を發刊するや茲に年あり、昨冬世は本社を促して更に當用日記を發刊せしめたり、而して其如何に歡迎せられたるかは、旬日を出でずして初版數千部を賣り盡したるを以て知るべし、今や愛用諸君子の恩顧に酬ひんが爲め、內容體裁大に改良を加へ面目を一新せり、而して卷頭卷末の附錄に至りては日用必須の事項を網羅し、他の日記に求むべからざる者少なからず、恰も日記にして百科全書を兼たるの觀ありと云ふも可なり、小形の懐中日記と自ら其用を異にせり、紙質裝釘共に遺憾なからんとす、乞ふ倍舊の愛顧を埀れ給はんことを。

四六判舶來紙
特製總布表裝
體裁頗優美
定價金五拾錢
郵送料八錢

明治四十一年 英文懐中日記

數年前本社率先して英文日記を發刊するや、或は最美の日記と、或は完全に近しと賞賛せられたり。爾來年毎に改良を加へ、愛用諸君子の恩顧に酬ひしは今更贅言を俟たるざる所なり、今や百尺竿頭更に一歩を進めて、挿篏せる偉人の肖像其數を倍加し、金言玉句最精撰せられ、卷末附する所の實用和英辭彙又大に增補せられたり、用紙印刷裝釘の美は他に其類を求むべからず、願くは倍舊の愛顧を賜はらんことを。

細小形舶來紙
特製總布表裝
優美携帶至便
定價金三拾錢
郵送料四錢

●賣捌所は全國到る所の書林雜誌店に有り●

發兌元 東京本町 博文館 東京神田 東京堂

（への二）

女（への三）



御料
畏き邊りの
御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
東京芝
胡蝶園
製造元
東京日本橋區橘町四丁目
丸見屋商店
發賣元
ねり製
御園白粉
水製
御園白粉
こな製
御園白粉
洋風化粧クレーム
御園の蕾
高等化粧水
御園とき水
御園なでしこ
濃厚化粧水
御園四季の花
御園香油
御園香水
高等はみがき
御園齒磨

女（への四）

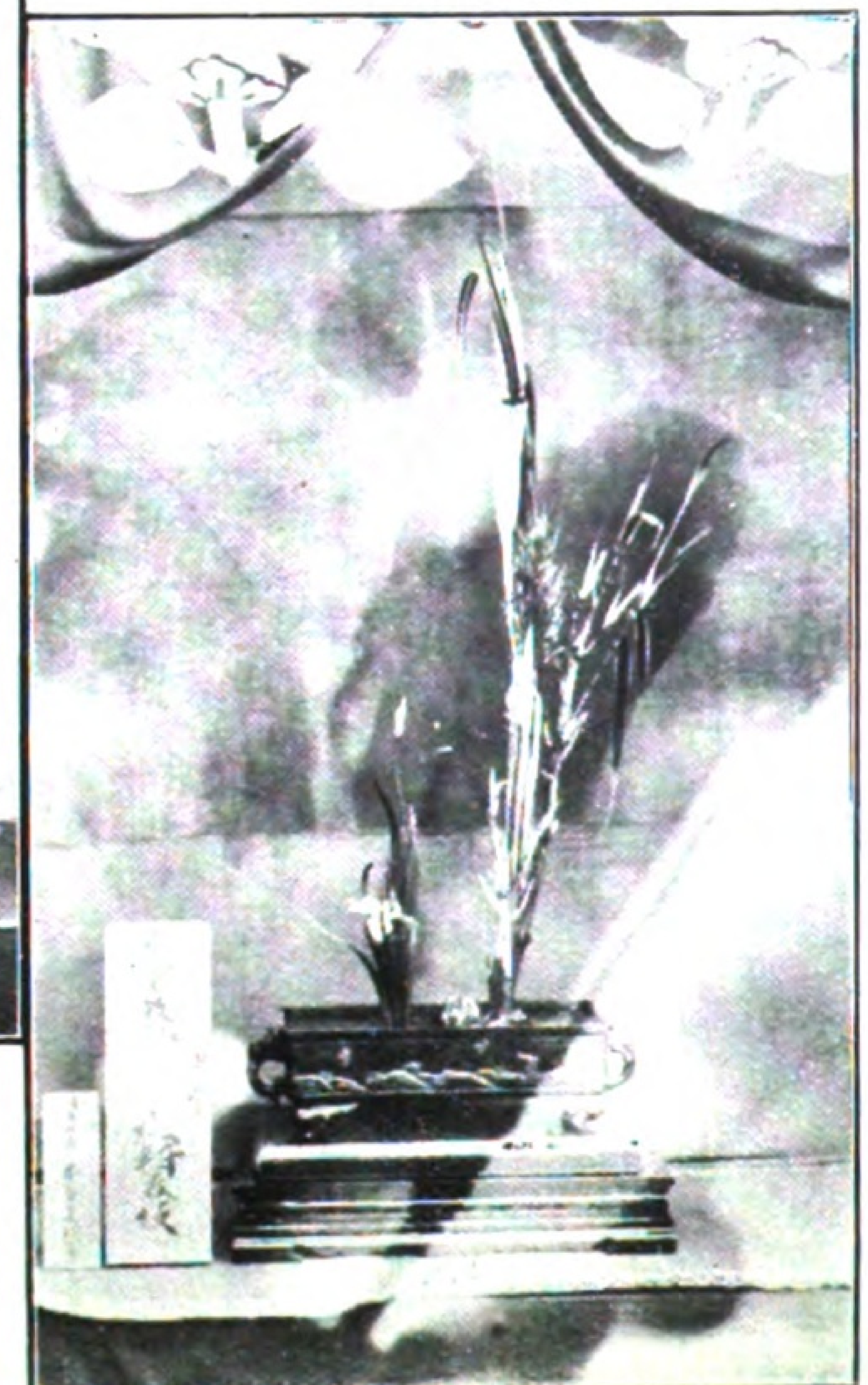
梨本宮妃殿下



池坊の華會







謹告

四十年間墺國宮内省御用

リスリン入

石鹸



此リスリン石鹸は芳香の馥郁たる色を白く皮膚を滑かならしむるの特徴を有する特に墺國醫學博士イー、イーボール氏の證明を得たり

一千九百〇五年

日本一手販賣 墺國タジク會社

東京日本橋區橋町二丁目

舶來化粧品輸出入商 竹間商店

●販賣所市内は信用ある藥店小間物化粧品店に有之候

「タジク」の名なきものは僞物なり御注意を乞ふ

GOTTLIEB TAUSSIG
Soap Maker and Perfumer to the Jmp. and Roy. Court
VIENNA-AUSTRIA.

(佳品)煉歯磨界の覇王

バイオレット 煉歯磨



(硝子入定價 金卅五錢)

本品は歯牙の保全に有効なる材料を以て精製す香氣は百花に冠たるバイオレットの香料を配合しあれば使用後口中爽快を覺ゆ

本舗 稻葉丹濱堂

東京市日本橋區橋町二丁目九番地

關東一手 竹間商店 電話浪花一六一四番

特約店 大和屋本店 新石町

(多價)紳士貴婦人界好評

女(その一)

ドクトル フーフェーランド氏著
文學士 杉谷泰山君譯述

身心修養 長命術



全一册菊判製本優美
紙數三百五十頁
正價金七拾錢
郵税金拾錢

人壽二百歳とは此著の研究なり、人生の意義より說き起して、衣食住は勿論敎育宗敎道德に亘りて誨ふる所、實に懇切丁寧を極めたり、人間生活の伴侶として此著に及ぶものなし、學說と應用との二卷より成り古今の長命術を細大漏さず評論し、東西長命者の生活狀態を記載し以て合理的長命術を唱道し、敎育法修養法料理法醫藥法變死應急策に至るまで詳述して餘蘊なし、譯文平易何人も之に依りて天壽を完うすることを得ん。

産科婦人科楠田病院長 楠田謙藏先生校閲
産科婦人科專門醫 稻生鑑次郎君纂著

實習産婆學

全二册 洋裝菊判美本
上卷 通常産 紙數三五〇頁
下卷 異常産 紙數約三〇〇頁

◎上卷正價金七十錢 ◎下卷正價金八拾錢……▲郵税各一册十錢

上卷は通常産を講じ下卷は異常産を述ぶ通常産の異常産に於ける産科の兩輪双翼にして助産婦たるもの相共に精修練磨せざるべからず然るに其一を修めて其一を習はざれば到底開業者たる資格なく又産科實習の効用を得ざるべし今や下卷の異常産を出版す上下完全して其全科を實修し得べし殊に行文の平易なる挿畫の精密なる世上未だ如此親切懇到のものあるなし開業者は素より本科の生徒諸孃は早く此要書を得て研修の便を得らるべし

東京 博文館 本町

女(との二)

生徒募集

●美術部（日本畫科 / 西洋畫科）

●技藝部（裁縫編物科 / 刺繡造花科 / 繪畫圖案科）

●美術部豫科

●選科

東京市下谷區谷中初音町四丁目

私立 日本女子美術學校（元日本美術院跡）

校長 子爵 秋元興朝

監督 小山正太郎

校主 福島甲子三

美術 純金包張 専門



●純金包張指環 目方三匁附

正價參圓八拾錢

彫刻御好の方は壹字貳拾錢

十八金包張時計鎖 八、九、十匁附 正價六圓八拾錢

廿二金包張同鎖 十、十三匁附 正價拾四圓

附言本品は在來人造金如と地質異故外部純金張せば光澤目方純金同一永久不變色

保險附●御注文者は指廻寸法御申越被下代金引換は半額御送付を乞但壹個參圓以上之彫製御好應

大阪東區淡路町二丁目

中川金光堂

女（その三）

懷姙避姙自由自在

子なき人は本書を讀みて懷姙の法を知るべく又子が出來て困る人は避姙の法を知るべく實に本書は懷姙避姙を望むが儘に自由ならしむる秘訣書なり郵券代用必一割增

全壹册 拾五錢 送料貳錢

大阪市東區和泉町二丁

泉陽堂

閨房必携 夜の綿

其妙効實に快絶にして●毛ぎれ●たゞれ其他きず一切に奇効あり●梅毒の豫防最要品早く用ひて快樂あれ■外男女用珍品各種有御注文次第嚴封で送る■大阪北區岩井町靈符南入

中尾商店

●拾日分廿錢●廿日分入五拾錢▲送料八錢■此局部用綿は男も女も是非試みられよ

女、との四）

繪畫と裁縫





日本女子美術學校教室の模樣（下谷區谷中初音町）

女（ちの一）

趣味横溢　歳末年始贈答用繪葉書

◎三宅克己◎丸山晩霞◎大下藤二郎三先生畫

水彩葉書　朝暾

◎一條成美　三枚組石目付　定價十錢　郵税一錢

◎中澤弘光◎橋本邦助三先生畫

戊申の春興

◎跡見花蹊◎野口小蘋先生畫　三枚組　定價十錢　郵税二錢

勅題　社頭の松

◎大下藤二郎◎三宅克己◎丸山晩霞三先生畫　二枚組　定價五錢　郵税二錢

水彩　新曙光

（再新版）三枚組　定價十錢　郵税二錢

◎太田三郎先生案　定價二十錢郵税二錢

ハツピクリスマス

二枚組色紙　リボン装飾　[illegible]

四十年十二月再新版發行

新案景品付袋入繪葉書　惠美須ふくろ

◎一袋　金十錢　郵送料二錢

▲惠美須袋は趣味の庫なり

▲惠美須袋は寶の山なり　景品は袋の裏を見られよ

▲惠美須袋は鰕で鯛なり

葉書帖

◎一條成美君案　◎中村不折君案　◎武内桂舟君案　◎結城素明君案

◎太田三郎君案　◎丸山晩霞君案　◎橋本邦助君案　◎佐藤生巣君案

以上何れも優にして季節柄の贈答品として最も好適品なり定價はカタログに就て見られたし

日本葉書會發行　繪はがき美術圖書総目録

繪葉書カタログ

▲申込次第無代進呈す▼

寫眞版數葉入袖珍美本

發行元　東京小石川　日本葉書會◎發賣元　東京本町　博文館

（ちの二）

老若男女を問はず生殖器衰弱者試みよ服用忽ち名の如く愉絶快
絶精神爽快生殖器を强健に勃興せしめ人生最大の快樂を得せしむる完全無缺の神藥なり詳細長文憚り御使用の上藥力の絶妙知り給へ



商標
神秘 愉快丸（ゆくわいぐわん）

▲藥價▼
半劑 九拾錢
壹劑 壹圓四拾錢
貳劑 貳圓六拾錢
試用 卅五錢
送料 貳錢

花柳衣
本品はルーデサックを再三精製したる珍品にして男女○○の際之を覆らせ用ふる時は避姙及梅毒淋病等の感染を防ぐ又女（月經中必要
價拾貳個入拾錢 廿五個入壹圓 五拾五個入貳圓 送料各參錢

男女和合奇藥 いもりの黑燒
本品は男女なれそめ藥と云ひふしぎの特効あるは古來より諸君御承知故敢て云々せず用ひて奇効を知り給へ
價 別製一双壹圓 並一双五拾錢 秘密送料八錢

子宮サック
本品はゴム製にて婦人の局部に挾み置く時は月經の際經水の漏洩を防ぎ立居を便ならしむ故に男女交接の際と雖も用ふる時は汚物の附着せず且梅毒痳疾及子宮をきづする憂なく又懷姙なし
▲價金上製壹圓 並製七拾五錢 ▲秘密送料拾錢

世界一 保險附 毛生劑
價半劑五拾錢 壹劑壹圓 特別貳圓
本品は毛の有べき處に毛のなき人に用ひて可驚特効ある事を確證す（秘密送料八錢）
大阪市東區和泉町松屋町東 覗泉陽堂
振替貯金口座第壹壹八壹五番

純金張新製品の完成 技術之進歩 化學之發展
弊堂專賣の左に揭ぐる金張新製品は專門技師が多年苦心慘憺の結果遂に大成功せし重量及金光は毫も眞正の純金に異ならざる物即ち特種の金屬に純金を以て外部を卷たる物故如何に磨擦するも永久不變色は本品の特長

獨乙玉入眼鏡



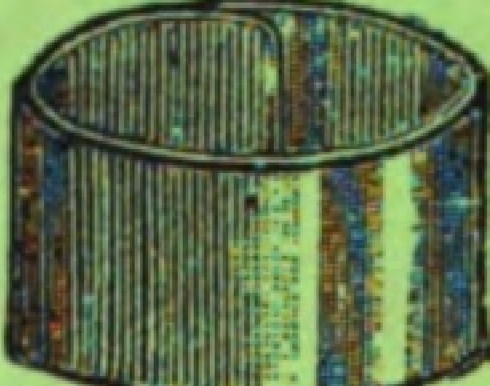
美麗サック付（素透し）
價甲 金參圓
價乙 金貳圓
近眼老眼の度付は卅錢上り色玉隨意 送料十錢

印面付指輪



美麗サック附き
四匁附 大減價 金參圓
五匁附價 金參圓半
貴名彫刻料壹字毎廿錢註文の際指廻寸法知らせ名義彫刻註文前金の事 送料拾錢

平打指輪



美麗サック入
三匁付價 貳圓
四匁付價 貳圓半
五匁付價 參圓
送料各拾錢

寶石入指輪



壹號 參圓半
貳號 參圓
參號 貳圓半
四號 貳圓
五號 壹圓半
箱入送料拾錢

弊堂は各國時計中品質精良にして堅牢確實なる物のみ撰拔して廉價に發賣す



金張時計 甲卅五圓 乙廿五圓 丙十五圓
同婦人持 甲三拾圓 乙二十圓 丙十貳圓
銀側時計 甲拾七圓 乙拾圓
合成金時計 丙八圓 丁六圓
腕時計 甲八圓半 乙五圓半
銀上八圓 鍍上五圓
入置時計 甲四圓半 乙三圓半
上記懷中時計は總て三枚蓋各卅ヶ年保險證添付送料各拾貳錢

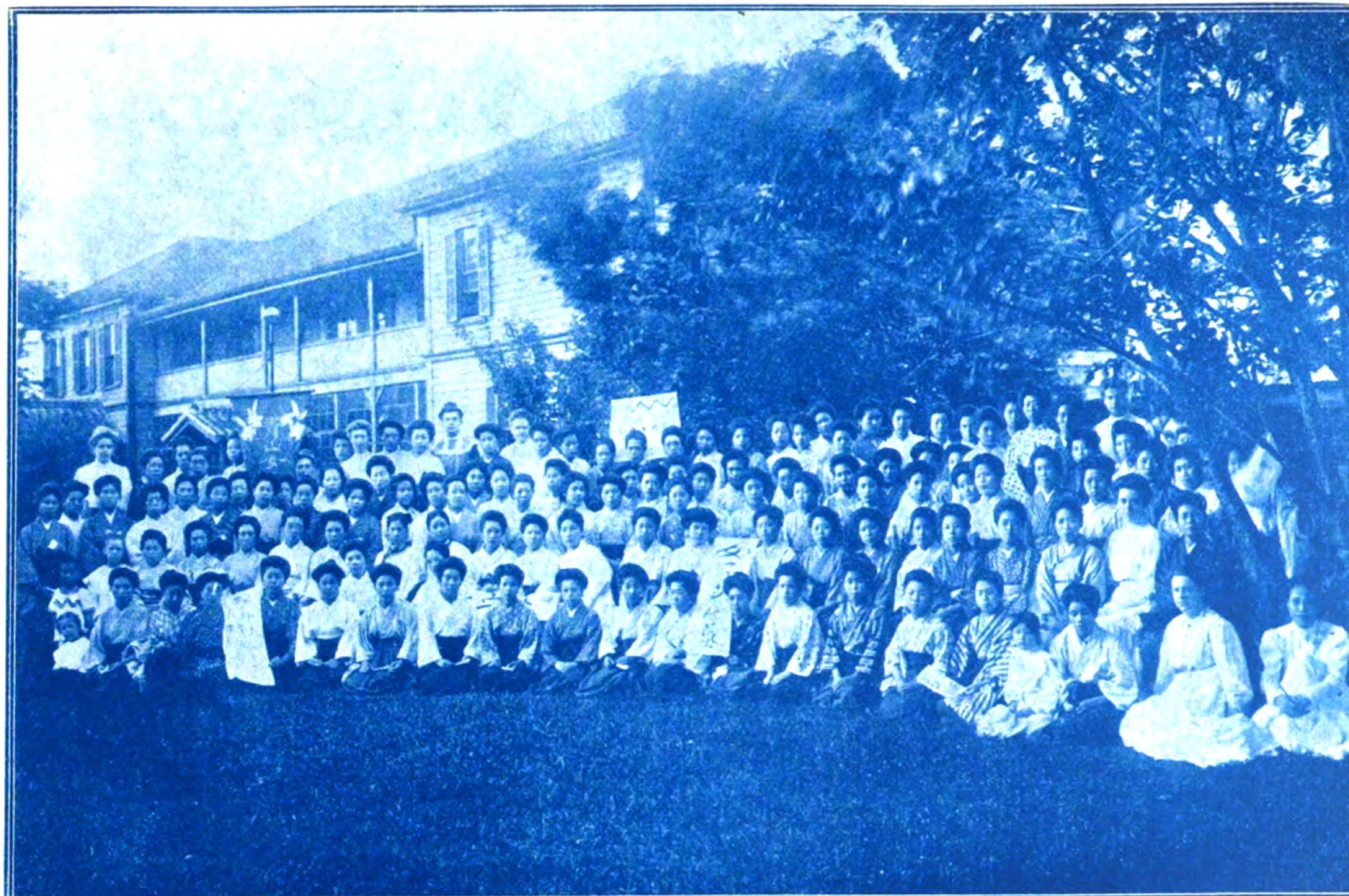
註文切手代用必一割増
貴金屬雜貨御用達
大阪市東區和泉町二ノ三
金賞堂



竹崎順子刀自

沖商會主人沖竹子

青山學院の集り



京濱に於ける基督敎女學校生徒の集會

特許專賣

改良魚焼器

丸



定價
大形……金貳拾貳錢
中形……金貳拾錢
小形……金拾九錢

東京市日本橋區通四丁目六番地
製造販賣所
九ッ屋商店

根治確証

わきが

新治療薬 ラピヨシン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ

價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢丙

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔淨驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の雜重症も甲種特別製を用ひよ

毛のはへる

Hair Vegenes

毛髮生養液 原名ベグネス

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ

有力なる最新液にして毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

化學製品

色の白くなる

防ハンドコロン溶液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

根治確証 新治療薬

梅毒（ばいどく）

GINEL ギネール

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒を大小便にとり如何なる劇烈のばい毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこねかんそ骨うづき其他如何なる惡性の梅毒も必根治す輕症は半劑惡症重症は二劑用よ暫て發效す世間種々雜多の無效なる驅黴藥の比に非ず藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑三圓郵券代用一割增

電話下谷二五三五

專賣 東京本鄉湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

女(へりの一)

博文館女學世界　編輯部新案

明治四十一年

家庭日記

總クロース金字入題簽美本紙數五百餘頁　正價參拾八錢　郵稅十錢

家庭日記は最も進歩したる。且つ最も文明的なる日記にして新家庭の要求に應じたるもの也、苟も我家の規模を知り我家の地位と品格と勢力とを知らんとする人の机上に缺くべからざる重寶日記なり其の目次左の如し。

家庭日常の寶典

○貨幣度量衡比較表
○內國郵便大要
〜
○郵便爲替貯金大要
○郵便電信大要

▲收入明細表
▲支出日計表
▲家計分類出納表
▲年中行事豫記
▲家庭重要記錄
▲我家の家族
▲家庭紀念事項
▲戶籍表
▲崇廟祭祀日錄
▲通學要錄
▲兒童生育要錄
▲健康要錄
▲衣類目錄
▲財產目錄
▲貸借關係錄
▲音物贈答日誌
▲通信日誌
▲親族名簿
▲傭人名簿
▲知人名簿
▲備忘錄

附錄

●世帶の要訣
●器物取扱法
●衣服保存法
●勝手元の竅法
●日常心得草
●一年中の仕事配り
●臺所百事便
●衞生心得草
●看護の心得
●育兒の大意
●新年料理
●總菜の栞
●日々の献立表
●洋食の心得
●產兒一週間の心得
●魚類と野菜の季節分
●挿花水揚法
●音物贈答の心得
●訪問の心得
●日用品買物の心得

▲本書內容の一斑▼

本書は始めに一年三百六十五日の日々欄を置き、七曜を順記し、天氣、寒暖の各座を設け、以て日々の事項を記入するに適せしめ更に月の始には其月の行事、季節、家事、食品、遊樂の心得を抄記して月令の栞となし、次に此日記の特色ともいふべきは他の日記簿に類例なき「記錄表」なるもの約二百頁とを設けこれには前表家庭重要記事を始め、交際、通信、音問、祭祀以下日常諸般の事項を分類し兼ねて財產、衣類等の品目を掲記して以て複雜なる家事を整理して一目瞭然たらしむ。猶前掲附錄十數次は家事當局者の心得にして朝夕必要なる家政智識を網羅せり。

家事整理の墨繩

○滿年求月表
○年數早見表
〜
○印紙稅法大要
○名所舊蹟案內

家庭日記は日常の家事を整理する金針にして又家運振興の指南車なり、其內容は從來有觸れたる日記簿とは全然面目を異にし統一あり、秩序あり、教訓あり、趣味ある日記にして眞に一家の重寶たる實質を具備せり。

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

☞ ▲婚禮に關する諸禮
諸儀式は勿論結婚上何人も知らんと欲する——又知らで叶はぬ秘事密件悉く此一册中に在り!!

新編

日本婚禮式大全

書入り美本全壹册
正價金四十錢
郵税四錢
但注文郵劵代用は一割増

世間從來婚禮の書籍少なからず小笠原流伊勢式など稱すも實は孰も二百餘年前の舊式に係り事々往々當世に適せず又世の變遷につれ徒に華美を衒ふて禮の本意を誤る等如今婚禮の諸式一も其正を見ず是れ弊堂が特に斯道の大家篠田翁に囑して爰に本書を刊す所以にして一々故實に則り誤謬を正し諸禮諸式**詳細**洩さず先づ見合の式より結納の式里出の式嫁入の式婿入の式里開の式媒人の心得等大綱七章細目百數十欵——細は物の折方包み方から贈答の仕樣——密は床入寢所の取り樣まで——書中幾多の**圖畫**を挿みて懇切丁寧に記述し遺憾なきは勿論殊に本書の**特色**は意を最も實用の上に注ぎ貧富貴賤何れの資格の人の見給ふも克く之を採用さるゝにあり尚ほ特に**附錄**として婚姻に關する古今の沿革且は又伉儷に就ての根本的注意——即ち妻を撰び夫を擇む上に就ての心得を周到悃切に論究し猶必要上新郎新婦閨房上の心得即ち生殖作用の神秘及其衛生——さては姙娠中の注意まで殘る方なく敎示せりされば苟も將來婚を結ぶの才子佳人は勿論其が父たり母たる人も亦必ず一讀すべき實に空前無二の大寶典也

發行元 松雲堂
大阪東區釣鐘町一丁目
(振替口座第六二四七番)

女(りの三)



女(りの四)



「カーナックの遺跡」の作家　吉田ふじを子


宮内省御買上ノ光榮ヲ得タリ
東京博覽會賞牌受領
パール
四季ノ化粧及ビ毛髮ノ養生ニ適シ世界的流行ノ逸品ナリ
毛髮料
美顏料
二種
東京ハマ町一


登錄商標
高木
近來同名類似之品數多相見へ候に付御愛求の節は人魚の商標と高木與兵衛の名義に御注意被下度候
懷中要藥
清心丹
東京
高木製
定價
箱入 金一圓
同 金五十錢
同（ニケル、カン入） 金三十錢
同 金十五錢
紙包 金二十錢
同 金十錢
同 金五錢

女（ぬの一）

中學世界（第十卷第十五號）定期增刊

歐米學生社會

全一册洋裝菊判紙數二百四十頁正價廿錢郵稅六錢

幾十萬の少壯學徒を擁して、明治の聖代に燦然と輝けるわが學界、未だ完備の域に達せずとするも、また一代の光華たるは容易に否む能はざる所、而もこの光華の淵源や、果して何れより來りし乎。多語を要せず、皆なこれ歐米學風の移植のみ。範は遠く歐米の彼方にあるを知る。吾徒が中學世界の最終增刊として、「歐米學生社會」を主題に選み、本年棹尾の光彩たらしめんとしたるの用意、實にこゝにあるなり。

既成發行

東京本町 博文館

學生觀

歐米學生の特質、特色、美點、美風等を多年彼地に滯留の諸先輩に依りて紹介し、徐ろに我が學生界の反映鏡たらしむべし。

學校事情

單に學校と云へばとて、日本のとは大に差異あり。此欄には、これ等の智識を供給せん爲めに設けらる。例へば、グラヂエートポストの如き、カレッヂの如き、ハイスクールの如き、グランマースクールの如き皆なこれなり。

學生生活

これ諸君の爭ふて見んと欲する所のものなるべし。「吾等と生命を共にし、境遇を共にせる歐米の學生は、果して如何に生活せるか。如何なる風俗習慣を有せるか。如何なる趣味娛樂を有せるか。如何なる氣風を有せるか。男女學生間の交際振は如何。これ等の事、皆な纏めてこの中にあり。

其他の諸項、例へば、吾國の留學生の狀態の如き、勞働學生の狀態の如き、共に皆な趣味を以て具體的に描かれ、觀察を以て精密に說明せらる。又附錄には、現代日本の『中學校生活』一篇を添ゆ。其筆の佳麗、其內容の豐富、加ふるに其事實の精確、恐らくはこれ我が中學生の代表せるものなるべし。口繪は中村不折氏快筆を揮って、歐洲の學生生活を描寫す。

（其の二）

十二月一日發行　四卷第十三號　一冊十錢郵稅不要　八冊前金七十五錢

月刊美術文藝雜誌

ハガキ文學

内容概目

●逝く年やけい●文藝家の功勞　上田万年●誤れる學問の仕方
尾崎行雄●舟夫　三木露風●趣味の科學　浩洋生●自然主義と諸
大家　廣津柳浪氏談、川上眉山氏談、木村鷹太郎氏談、掬泉筆記
●冬　久保天隨●眠山　上芳葉●醒中醉語　鹿目野徑●玩具に表れ
たる國民性　黑田峽隱●乞食　日野蘆水●手紙の趣味●一少女の
艶書　大原源一郎、冒險青年の書簡、松田義文●獨りもの　清水
橘村●クリスマス　元良南山●燒石　狩野君水●振袖の洋行　中里
澄子●緣日　菊地曉汀　獸妻小說に付き記者●初めて見た先生
田舍書生●精神的歩行　XYZ●戀を得たる學生の自由△藤△雄
●諸國珍話奇談●普通文●新體詩●ハガキ文●和歌●俳句●新川
柳●如是餘聞●口繪木版、寫眞版、スケッチ、漫畫、繪葉書圖案等
如例誌上躍如

來る新年の本誌は如何の盛裝如何の内容を以て江湖に見ゆる？●特に紙數十二頁の附錄と橋本邦助氏が苦心になりし春裝美人の極彩色刷大の附錄額面を添へ口繪は大家の靈腕になりし水彩畵木版畵等何れも垂涎措く能はざるもの奇抜なる文藝諸大家の作品と相待つて誌上は一般の光彩陸離爛熳たり

發行所　東京小石川　日本葉書會　賣捌　全國各書林

本年も餘す所僅かに卅日大方御得意御多用の事と恐察仕候
扨廣告界の寂寥を感ずる十二月に於て本誌始め各雜誌共豫定の頁數に超ゆる廣告を收め得たるは弊館雜誌廣告の効驗漸く社會の認むる所と相成候結果とは申しながら畢竟大方御得意の眷顧に外ならず弊館の最も感銘する所に御座候間乍畧儀誌上に於て御禮申上候尚ほ明年も倍舊の御引立を蒙り度併せて希望仕候

博文館廣告係

廣告御得意各位

女(ゐの三)

最上醤油　キハク印

醸造元
茂木七郎右衛門
千葉縣野田町
電信略號ハク又キハク

東京支店
中野長兵衛
日本橋小網町三丁目
電話浪花百七十七番

毛はへ

最新薬ハロールは歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密薬を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て専門的に多年苦心研究の後其有効成分を検明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を参考し最新薬を配合したる世界無比の學理的最新薬なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する禿薬丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣薬にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髪、へきは、まゆげ、ひげ陰毛等の薄を濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し抜毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツボー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合薬價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

取次所ナキ地方ハ直接本舗ヘ注文アレ

毛はへ薬取次所　東京市本郷六丁目赤門前　瓜生薬局
らい病薬取次所　名古屋市鐵砲町　谷田薬局

らい病

此のらい病薬は數種の有名なる癩病治療薬を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新薬を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新薬なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二薬を六ヶ月併用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる薬品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする瞞着主義の賣薬に非ず

サノサール　一ヶ月分　貳圓
複方サノサール　一ヶ月分　參圓

醫師は癩病者を診察せば届出る規則なれど薬劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

本舗　醫科大學卒業薬劑士　三河國碧海郡刈谷町益世館薬局主
從七位勳六等　中島龜之丞鑑製

東北女子職業學校卒業生



（仙臺東三番町）

共立女子職業學校卒業生



女（ろの一）

豫約

▲現代精華の結晶たる權威的活歷史▼

約

女、るの二)

伯爵大隈

開國五

編纂
寄稿者

伊藤公　山縣公　西園寺侯　松方侯　故副島伯　山本伯　井上子　田中子　前島男　澁澤男　石黑男　後藤男　加藤、尾崎、島田、井上、青山、富井、益田、三宅、坪內、箕作等諸名家七十餘人

我最近五十年間の進歩は獨り開闢以來の盛觀たる耳ならず**世界歷史の一大奇蹟**として長へに炳然たるべし列國以て不可解とするは勿論日本人亦自ら惑ふ處あらん今や其解答は**開國五十年史**に由て與へられて遺憾なく**日本今日の强盛に達したる有らゆる方面の奮鬪の行路は一大パノラマ**を鋪張したるが如く**爛として陸離たり**

是れ實に**大隈伯が一世の心血を傾注し伊藤、山縣、松方、西園寺等諸公を首め各方面を代表する學者縉紳七十有餘名の力を合して成りたるもの**此の如きは**大隈伯の威望と大氣根**とを以てするにあらずんば**決して成し能はざるの大事業也**

其記述や各々其舞臺に活躍したるアクトアの手に成れば盡く其眞相を記して**從來訛傳せられし謬說を破るに足るもの及世間未聞の新記事に富めり**且推敲に推敲を重ね洗煉に洗煉を加へ稿を更むる十數回の多きに及びたるものさへあれば尨然たる二千有餘頁一語の空文字なく一行の閑話說なし盡く是れ**現代各方面の心腦のエッキス也**加ふるに每項の記事は一々遡りて其發展の跡を尋ね遠く寧樂以前の古に及びたるが故に**名は五十年史と雖實は二千五百年史也**

此の如きは我**出版史上空前の一大産物**にして以て明治の文明を代表すべき光輝たるは勿論**世界に於ける日本の國譽を愈盛んならし**

重信君撰

十年史

むるに足るべく大隈伯の一代の事業として後世歷史に燦然たるべき曠古の一大著述也

豫約募集

●體裁＝は菊判二卷、舶來上等紙摺二千餘頁、挿畫コロタイプ及寫眞版約六十面

●製本＝は背角革、最上布製、金文字入、最堅牢且最優倚也

●出版＝は上卷本年十二月、下卷來四十一年二月、此期限は極めて精確也

●代價＝は正價金拾貳圓とし、豫約價甲種（一回拂）金八圓、乙種（三回拂）金九圓也

●發送＝は代金拂込順に由る、發送料市内金八錢、内地金卅二錢、清、韓、樺太、臺灣、各金八十錢也

●見本＝發刊趣旨及本文、挿畫、用紙等の見本は申込次第送附す

豫約申込所

東京市牛込區早稻田大學出版部内
開國五十年史發行所

東京市日本橋區本町三丁目八番地
同　博文館

▲豫約締切＝十二月十日限り

注意

豫約〆切期日の切逼せる今日却て申込の增加する傾向あるも期日に至れば猶豫なく謝絶すべし機を逸し千歳の憾を貽す勿れ

募 ▲歷史界破天荒の巨觀▼ 集

女（ろの三）

大日本淑女學會

▲御自分のお宅に居って高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によって獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で、會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美くしい躰裁の、利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

◎詳はしい規則書は申越次第差上げます◎東京神田駿河臺（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

第五回新學期開始

此際入會者に限り入會金全免すべし！

本會の講義録

▲大版三百頁優麗なる冊子

▲講義平易にして興味多し

▲各科講義の程度一定せり

▲各科皆聯絡し組織的なり

▲講師は專門女子教育家也

▲科外講師は博士學士卅家

▲毎號科外講話を附録とす

▲純潔高雅の家庭小説あり

▲會員の質問は直に解答す

▲學期毎に修業證書を與ふ

▲講義録は貳ヶ年完結とす



女學世界

第七巻　第拾六號

十二月五日發行

行事＝十三日煤掃ひ、昔は此日新吉を迎ふる準備として家内を掃除したるものなるが、今は日を撰ばず、年の市、東京市内にては此日より年末まで歳の市立つ。○二十日歳暮の廻禮、此頃より始まり・砂糖、鰹魚節、鹽魚、鳥類等を年末の進物として知己の方へ贈る○二十一日冬至、一年中尤も日の詰りたる時、家事に忙殺さる、此日湯屋にて柚湯を沸かす○二十五日耶蘇降誕日。

家事＝菜漬、澤庵漬をなし、味噌、糀の仕込をなす、又年中の出納、家計の決勘定をなし、雇人、出入者の心づけそれ〴〵振り合を考へて手落なき樣計較すべし。

食品＝白魚の吸物、ヒラメの煮付、鱈こんぶの煮付、あんこう汁、おこと汁、小鳥飯、葱めし、蕪菁の千枚漬、大根の淺漬、新鹽鮭、乾海苔、鳥獸類。

遊樂＝時下見るべきの花はなけれど郊外に枯野の寂たる景を見るもよく雪降らば雪見にころぶところまでの雅懷を縱まゝにするも亦此時なり。

日曜＝一日、八日、十五日、廿二日、廿九日、



今の世はどんな婦人を求むるか

安部磯雄

旣に理想といふ以上は決して實際の事をいふのではない。余がこれより陳べんとするのは或歷史上の婦人若くは今日世に在る所の婦人の事ではなくて、全く余が理想として書き出したるものである。余は此の如き婦人が實際に在るか否かは知らないけれども、余自身の娘を敎育するに當りては少くとも此理想を標準としたいのである、換言すれば余は余が娘に於て此理想を實現せしめたいと思ふて居る。

身體の發育

理想的婦人の第一資格が身體の發育と健全にあることは言ふまでもない。若し婦人にして虛弱であれば一家の不幸これより大なることはなく、其災は遠く子孫にまでも及ぶのである。勿論病身なる妻に對して夫が充分の親切を盡すべきは言ふまでもなく、吾人は屢其實例を見るのであるけれども、男子が其妻を擇ぶに當りては出來得るだけ其健康に注意すべきである。現今各國に於て行はるゝ所の習慣に依れば、男女が其配偶を定むるに當りて、血統、敎育、品性等に就

き精密なる調査を爲すのは普通であるけれども、體格に關しては、殆んど何等の調査をもなさないのである。トマスモアーといふ人の著したユートピヤといふ書物には理想的社會の情態が書いてあつて、男女が其配を擇ぶに當りては裸體となつて見合をなすといふことが書いてある。今日斯る事を實行することは出來ないけれども、双方醫師の診察を受け、其證明書を取り交はす位の事はなすべき筈であると思ふ。身體の健康と共に吾人が理想の條件となす所のものは身體の發育といふことである。美といふことは單に容貌の事のみではない。姿勢即ち四肢の釣合よく發達せることは慥に美の要素であると言はねばならぬ。吾人は決して色蒼白くして瘠せ、身長短くして少しく前に傾きたるが如き婦人を理想的といふことは出來ない。若し運動によりて男子の身體が立派に發達するものであるとすれば、婦人も亦適宜の運動法に依りて立派なる筋肉と優美なる姿勢を得ることに勉むべきである。

容貌の美といふことは男女に限らず人々の貴重する所のものであるが、婦人に於ては殊に然りである。余は理想的婦人を畫くに當りて決して美貌なるものを輕視することは出來ない。若し男女が單に美貌のみに重きを置くが如きことあらば、余は勿論これに反對するのであるけれども、美貌を輕視し、若くはこれを蔑視するが如きは僻論であるに相違ない。人は天然の美を愛するが如くに男女の美貌を嘆美するものである。是れ即ち自然の情にして何等恥づべき所はない。されば男女に拘はらず種々なる方法を盡して其美を發揮するのは寧ろ當然の事といふべきである。然れども余は美貌を發揮せしむるの途が必ずしも香水や白粉といふが如き物質的のものに止まるとは思はない。容貌は或程度まで心の反射であるから、心さへ美であれば容貌にも一種の光が添ふ樣になるのである。如何に容貌が美であつても敎育がなく人格が卑ければ何となく品位がなく引締つた所がない。此の如き婦人を美人と呼ぶのは少しく不適當であるかも知れぬ。亦容貌美といふことは永く持續するものでないから、單に容色のみに依

賴して居る婦人は早晩衰退の時期あることを覺悟せねばならぬ。然れども高尚なる教育と純潔なる品性は永く婦人の容貌に光を殘すものである。余は此消へざる美を以て理想として居るのである。

女子教育の主眼

婦人は男子に比して理解力が乏しい樣であるが、これは婦人が男子に比して長き間高等教育を受けなかつたにも因り、亦男子の如く實際に理解力を運用する機會が少ないにも因るのであらう。されば女子を教育するには單に歴史や地理の事實を暗記せしむるだけでは足りない。なるべく思考力を働かして事物の道理を考へしむる樣にせねばならぬ。余は平常女子に多く數學を學ばしむべしと論じて居るのであるが、これは全く婦人の理解力を發達せしめんが爲である。婦人が一家の經營をなし子女の教育を爲すに當りては自ら判斷して決行せねばならぬ場合が多くある。此點に於ては男子は却つて女子に及ばぬ所がある。男子が社會に立ちて事業を爲すや、獨立の經營を爲す者も多いが、他人の指揮の下にあつて働く者も少くはない。婦人の場合はこれに異なつて居る。彼は常に一家の女王であるから十中八九までは自己の判斷に依りて諸事を決行して行かねばならぬ。故に女子が教育を受くるに當りては先づ理解力を養成することを主眼とすべきである。婦人は夫に對して從順でなくてはならぬけれども。從順といふことは一も二もなく夫の意見を聽いて之に服從するといふ意味ではあるまい。婦人には何事に關しても先づ自己の考へを定むるだけの識見がなくてはならぬ。自己には自己の意見がありながら、尙ほ勉めて夫の意見に服從するのであらば甚だよい。然し何等の思慮もなくて夫の意見に從ふのは全く無能であり無見識である。此の如き婦人が一朝夫に死別することとあらば如何であらうか。彼は恰も浪に漂ふ捨小舟の如く其行くべき方向にさへ迷ふに相違ない。余は理想的婦人の資格として理解力の發達てふことを數へたいのである。

知識の程度

人間は男女に拘はらず機會さへあれば勉學すべき筈のものであるから知識の程度に制限のあるべきものではない。然し余が理想とする婦人の知識は如何なる點を以て最低度とすべきか。聊か左に意見を陳べて見たい。余は婦人に專門的知識を要求しない。寧ろ淺くとも廣き知識のあることを望むのである。若し婦人が今日の新聞紙の二面に掲げられたるあらゆる記事を讀んで了解する力あらば、余は是以上を求むことをしない。二面記事は外國電報を始めとして、政治、經濟、社會、宗教、文藝等多方面に亘つて居るのだから、其意味を了解するには少からぬ素養を要するのである。若し婦人の知識が此程度に達して居るならば、彼はよし交際場裡に立つことあるも、決して談話の材料に窮するが如きことはあるまい。若し亦家庭てふ一小天地に蟄居することがあつても、彼は常に新聞紙に依りて天下の大勢に通ずることが出來る。婦人にして斯る知識を有することは啻に其夫に愉快と幸福を與ふるのみでなく、自身も亦これに依りて如何に多くの愉快と幸福を得ることであらうか。世には女子に高等教育を與ふることに反對する人があつて、手藝を以て教育の代用をなすが如く思ふて居るけれども、以上陳べたる所により其誤謬なることは明白であると思ふ。手藝は婦人にパンを得るの途を與ふれども、決して婦人の眼界を廣くし、其識見を高むるの力はない。手藝は婦人をして高等下女的ならしめ、教育は婦人をして高尙優美なる細君ならしむるものである。

文學の趣味

婦人は男子の如く或職業に依りて衣食の途を求むるといふ機會が多くないから、必ずしも專門の知識を修むるの要はない。然し婦人にして何か專門の學問を爲すの機會があらば、文學の如きは最も適當なるものではないかと思ふ。余は必ずしも文學とは言はない。音樂も繪畫も婦人が其才能を發揮すべき適當なる領域で

ある。凡て美術に關することは婦人の最も得意とする所であつて、此點に於ては充分男子と競爭することが出來る。男女に拘はらず苟くも一事に秀でたる者は世の尊敬を受くるが故に自重の念も自ら生ずるものである。且つ專門の知識を有するものは社會に乘り出して自己の知識を示すの機會を有するが故に自ら社會と接觸することゝなるのである。文筆に秀でたる婦人は啻に古今の文學を樂むことが出來るのみでなく、亦自己の著作に依りて廣く社會に接觸することが出來る。米國の女流小說家ストウ夫人は『アンクル、トムス、キヤビン』と稱する小說を著はしたるため終に奴隸廢止の輿論を惹き起すに至つた。此小說の一たび世に出づるや七臺の印刷機を以て晝夜印刷したるも尙ほ世の需要に應ずることが出來なかつたそうだ。其後十數ケ國の語に飜譯せられたのであるから、今日までに賣れたる册數は慥に百萬以上であるに相違ない。ストウ夫人といふのは貧しき一牧師の細君に過ぎなかつたけれども一册の著書は終に彼の名を世界萬國に轟かしむるに至つた。故に彼が夫と共に英國に漫遊するや、到る所盛大なる歡迎會は彼等の爲に開かれたそうだ。これは勿論稀に見る所の實例ではあるが、苟くも才能ある婦人にして社會の爲に何事かを貢獻せんと思はゞ、先づ文學の方面に其力を注ぐのは極めて適當なることであると思ふ。よし自ら大なる名を成すことが出來ぬにしても社會を益することは必ずしも難きことではあるまい。

常識に富むこと

婦人は專門の知識よりも普通の知識を廣く有して居る方がよいといふことは前に陳べたる通りであるが、これは氣質の點に於ても同樣である。人間には知情意といふ三の性質があるが、世には隨分一方に偏したる氣質を有して居る人が多い。知力のみに勝れて居る人は唯理屈ばかりに傾くのであるから自ら冷淡に陷り易い。感情一方に流るゝ人は心が變り易く、意志のみ强き人は頑固といふ弊に流るゝのである。常識といふこ

とは慥に知情意の釣合がよく取れて居るのをいふのであつて、これは如何なる人にも望ましきことではあるが、殊に婦人に望ましきことである。婦人は概して感情的であるから、外物の爲に往々動かされ易い。人々の批評に心を苦めたり、些細なることの爲に怒つたりすることは慥に婦人に多い樣に思はるゝ。されば婦人の最も勉むべきは知力や意力を以て常に感情を御して行くといふことである。然し余は感情を全く抑へよと言ふのではない。婦人に感情といふものがなかつたならば生命のないのと同樣であつて、婦人の婦人たる所がなくなつてしまふ。故に婦人は一方に於ては感情を發達せしむると共に、一方に於ては知力によりてこれを宜しき方へ誘導し、意力を以て其濫用を拒がねばならぬ。常識といへば何だか六ケ敷ように思はるゝけれども、これを平易に言へば利巧とか賢いとかいふことである。吾人が通常利巧といふ時には知情意の釣合のよく取れて居るのをいふので、吾人の所謂常識と異なる所はない。余は此利巧といふことを理想的婦人の一資格と考へて居るのである。

快活なる氣風

少しく愁を含んで居るのを美人の資格である樣にいふ人もあるが、余は斷じてこれに反對する。人生には勿論悲慘の事も多くあるけれども、如何なる苦痛や艱難に對しても常に樂觀してゆくのが吾人の理想として進むべきの點ではないか。人は生れながらにして樂觀的のものもあれば悲觀的のものもあるけれども、吾人の修養如何によりては、如何樣にも變ずるものである。兎に角悲觀する所の人は啻に人々に不快の感を與ふるのみでなく、自らも亦損するのであるから、余は悲觀的の婦人を以て決して理想的であるといふことは出來ない。如何に美麗なる容貌を具へたる人でも若し愉快なる微笑を湛ゆることが出來なかつたならば如何であらうか。余は慥に其美が半分以上の價値を失ふたるものと思ふのである。快活といふことは顔になくして心にある。若し心に愉快がなくして、强いてこれを顔

面に現はさんとすれば其微笑は必ず淋しき性質のものとなる歐米諸國に於ては母が其娘を教育するに當りて最も交際法に重きを置き、如何なる笑ひ方を爲すべきかをさへ教ゆるさうだ。實に愛嬌といふことは婦人の生命であつて、彼が交際場裡に勢力を有するも、亦其家庭に在つて夫を慰藉するのも多く此力に因ることを記憶せねばならぬ。然れども笑ひ方を練習するが如きは抑も末の事であつて、余は婦人が先づ其本に溯らんことを望むのである。若し彼にして中心常に愉快に充ちたらんには、爭で其喜悦を包み隱すことが出來よう。快活なる心は必ず美はしき愛嬌となつて顏色に現はるゝに相違ない。

親切なる心

親切と言へば如何にも簡單であつて別段說明を要せぬ樣であるが、實は決して左樣でない。親切とは如何なるものであるか。單に人々に同情し、人々の難儀を救へば宜いのであるか。聖書の中に『愛は人の益を謀るなり』といふことがあるが、若し親切といふことが他人の利益を謀るといふことであれば、單に人に物を與ふることが必ずしも親切でないことが分る。貧民に施すことも果して彼の利益となるや否やを考へたる後實行せねばならぬ。されば余が此處に言ふ所の親切なるものは眞實に人の利益を思ふて其人の爲に盡すのでこれが爲には自ら多少の犧牲を爲すことも厭はないのである。聖書の中に今一つ說明があるが、これも慥に親切といふことに一の重要なる意味を附加したものである。『悲む者と共に悲み喜ぶ者と共に喜ぶべし』と言ふのであつて、古人が人に親切を盡すに當ては此心得がなくてはならぬ。吾人は他人の悲を見て悲むことが出來るが、果して他人の喜を見て喜ぶ程の度量があるだらうか。婦人は强き嫉妬心のあることは人々の常に言ふ所であるが、他人の成功を見て嫉むのは獨に婦人のみでなく、男子も亦同樣であると思ふ。兎に角親切を以て凡ての人に接するといふことは容易の事でない。親戚や友人に對して親切なる婦人は多くあれども、

其家庭に出入するあらゆる人に對して其愛心を傾注する婦人は極めて少ない。利己的なる婦人は勿論他人の利益を謀るなどゝいふ心がないから、人々の多く其家庭に出入するを好まないのである。余は此の如き婦人が決して幸福なる家庭を組織し得べしとは考ふることが出來ぬ。亦彼に教育せらるゝ子女が偉大なる人物となり得べしとは考ふることが出來ない。

以上陳べたる資格は何れも重要なるものであるけれども、其中最も重要なるものは品性である。婦人にして高尚なる品性を有すれば、よし知識は少々不足であつても、身體は幾分か虚弱であつても、余はこれを忍ぶことが出來ると思ふ。殊に容貌の美ならざるが如きは敢て論ずるの要もないのである。

○ブライアン氏の夫人は夫を補助する爲めに自ら法律學を修めたりと云ふ、婦人の教育は少くとも夫や子の事業に同情し得る程度に迄進めざるべからず。

女性に對する希望

村上辰午郎

女子は社會の表面にこそ華々しく活動力は見えぬが、其實裏面に於ける經營の力はなか〳〵のもので、古來の歴史に溯つて見ても、英雄とか偉人とか云はるゝ人の影には必ず女の勢力が潜んで居る。奈翁でもシーザーでも若くば秀吉でも、其過半は婦人の内助によつて成功した。けれども又それが爲に失敗もした。現今でも之と同じく異性を利用して成功した男子もあるが、其代り反對に利用されて失敗する者も少なくない。一方から云へば女子は多くの場合に、男子の道具に使はれて居る樣であるが、然し其道具に使はれるだけ、それ丈け潜勢力の有るものと見なければならぬ。そこで此勢力の要素をなして居るものは何であるかと申せば、即ち婦人に特有の愛情であると言はねばならぬ。

この愛情が千變萬化して偉人豪傑をして時に異常な

働きをなさしめたといつてよいのである。女子に愛情あるは即ち天地に精氣あり、萬物に變化あらしめる至大の力と言はねばならぬ。

▲勇氣の鞭と誠意の鏡

美人の紅涙は珠を聯ねたるが如しとやらで、女の涙脆いのも或程度までは美的であるが、單に女々しいばかりで勇氣の伴はぬ感情は、實際の世に處して困難の關所を通り越す事が出來ぬ。さて其の勇氣とは彼の米國流のお轉婆をいふのではなく、柔順なる心の奥に潜む處ろの威嚴を意味するのである、即ち我邦婦人の特色たる温順の中に、一段の勇氣を加味せよと謂ふのである。それは決して六ケ敷い事ではない。唯己が心に誠意さへあれば勇氣は自ら生ずるのである、畢竟精神が公明なれば天地に俯仰して、毫末も愧づる處、怖るゝ所はないから、大膽に安心して己が信ずる處を行ひ、且つ行くべき道を濶歩し得らるゝのである。之に反して心に疚しい事があつたり、虚僞を以て世を渡つたりする人は、毎に戰々兢々として他人の顏色ばかり窺つて居なければならぬ。所謂疵持つ脛は枯尾花にも驚かるゝと云ふやうに、我から世間を狹める上に、彼方へも此方へも鼻が支えて、到頭其行くべき道すら失ふことになるので、彼の如き人を救ふにはドウしても勇氣の鞭と誠意の鏡とに因らなければならぬのである。

▲雅量と自省心

男子でも勿論同うであるが、取分け女子が人と交際をする場合には一種の度量が必要である、例へば自分に何か過失のあつた時、其友達が親切に忠告をして呉れたりすると却て反對に、人は神様ぢやありませんからね、貴女だつて少しも欠點がないとは云はせませんよ、なぞと腹を立てる人がある。是等は人を容るゝの勇氣と雅量のない者で、恁那風では到底親密なる交際は出來るものでない。私が教育上の實驗によると、ドウも男子よりは女子の方が狹量なる上に、動もすれば小感情に支配され易い傾きがある。殊に修養の足らぬ

婦人の如きは聞さへあると額を鳩めて何かしら囁き合ふて居る、それも好い話ではなく大抵は人の身の上話である。其癖自分の非を擧げられると忽ち立腹して、更に復讐的の惡言を放つ、これは丁度血で血を洗ふ樣なもので交際上尤も不結果を來する處のものである。他人の事は千里の遠きも見ゆれど、我事は眼上の塵さへ見る能はず。とは古人の知言で、兎角人の短所や過失は見易いものだが、サテ自分で自分を見る眼は案外盲目なものであるから、若し他から忠言を受けた場合には宜しく内心に省みて、其諫言を感謝する樣にしなければ所詮圓滿なる友情は保たれるものではない。

▲遣繰算段

女子の虚榮心を戒める聲も隨分久しいものであるが、幾等側ではかり喧ましく責立てたからとても、之を聞く當人が心から矯正する氣がなければ、ツマリは無益な殺生で何にもならぬ譯であるが、併し多數の中には眞面目に聽いて下さる方もあらうと思ふから殊に云ふのであるが、それは何であるかと申せば、例の社交に伴ふ服裝の件である。人として世に在る以上交際は素より大切であるが、今日の婦人間に於ける社交に就て見ると、人と人、心と心との交際ではなくて衣服と衣服との交際、虚榮と虚榮との交際である、即ち所謂華美の競進會である。先づ中流以上の婦人の身裝を調べて見るに、時計から指環から其他一式の附屬品を合して、之で可といふには千五百圓から二千圓を要するさうである、最も質素にしたと謂ふのでも尙ほ二三百圓を下らぬとの事である。

尤も年々生活の程度が高くなつて一般に華美に流れて行くのは、一つは時世の然らしむる處でもあらうが、さりとて今日々本の富の程度に照して見ると、右の如きは分外の贅澤であると言はねばならぬ、それも財産の有餘る家の婦人なら未だしもだが、其夫は高々百圓内外の俸給を取つて、漸く一家の生計を維持して行く位なのに、其細君が所謂貴婦人の仲間入りがしたいばかりに、ヤレ流行の衣服、ヤレ金時計、それ指環

と、其都度良人をセビる樣では、決して家庭の平和を維持されるものではない。

▲社交の犧牲

世間の附合と稱して家は火の車なるにも拘はらず、分外の華美を競ひ心配さうな貌をし乍ら集會に臨む令夫人もあれば、又世間並の風が出來ぬからとてか不足をいふ嫁もある。是等は徒らに心を空虛にしてたわいもない世間の犧牲となつたもので、寧ろ憫むべき人達と云はねばならぬ。勿論人と交るには餘り粗末な服裝では濟まされぬが、さりとて一家の平和を破つてまでも、華美の競爭をする必要はないのである。

最後に重ねて一言して置きたいのは、婦人が世に處して、身分相當の交際は何人にも必要であるが、それにしても浮華なる虛榮の犧牲たる社交を主とせず家庭をヨク治めた後に、餘り失費の多からぬ程度に止めて欲しいものである。（これは弘道會婦人部で述べられた村上民の談話也）

◎日本女子美術學校の擴張

同校は新に實業界に聲名ある兒島甲子三氏の引受くる所となり校舍を下谷區谷中初音町なる元日本美術院跡に移して、規則を改正し將來大に女子美術の爲に盡すべしと云ふ。今其設備を見るに、該校を三部に分ち、第一美術部は日本畫科、西洋畫科とし、第二技藝部は刺繡造花科、裁縫編物科、繪畫圖案科と爲せり、修業年限は本科は各三ヶ年なるが別に一ヶ年乃至三ヶ年の撰科を設け時間に乏しき婦人の爲め其任意の學科を選擇するを得せしむるが故に各自將來の志望及び現在の狀況に應じ如何なる人も其好む所に從ふて目的を達するの便あり、尙ほ同校は子爵秋元興朝氏を校長に畫伯小山正太郎氏を敎頭に、帝室技藝員荒木寛畝同瀧谷直廣外十數氏を各々敎授と爲し、淸野長太郎、富田鐵之助、古市公威、男爵千家尊福、子爵牧野忠篤、肥塚龍、林董三氏等朝野の名士數十名は商議員として盡力せらるると云ふ。

千人の職工を使へる 大商會の女主人

芙蓉生

月給五圓の身分より

奮然として起つて今の堂々たる沖電氣商會――第一工場第二工場を合せて職工一千餘名傳習生三百名といふ盛況を致し、純粹に日本人の手になる電氣商會として、全國に唯一と言はるゝ沖商會を建設したるはいかなる人か、又いかやうにして今日あるに至つたかと言へば、昨年亡くなられた沖牙太郎氏の奮闘の結果なること勿論ながら、實にその一半は同夫人即ち今の女主人の内助の力に依るのであります。これは同氏夫妻の事を知れる限りの人の異口同音にいふ所、立派な婦人といふはまづ牙太郎氏夫人たけ子などの事であらうと評判せられてをるのです。抑々同夫人たけ子とはいかなる人であるかといふに、

夫人は舊幕臣の家に生れたので、幕府瓦解が恰ど夫人の十一二歳の頃でしたから、それまでは兎も角も祿を取つては居るし、氣樂に生長なされたのですが、父上はもう早く亡くなられたので、兄の手によつて一家を支へてゐたのですから、瓦解後二三年は隨分狼狽たのみならず、その内に兄の妻が子供を一人殘して亡くなつて了つたのです。處が母上はもう老衰して居られて、孫の世話も出來かねたので、まだ年若い身ながらもたけ子は老母を助けて子供の面倒や一家の世話をしたのでした、夫人自らも「其麼譯で、今ならば女學校へでも這入つてゐる時期、即ち肝腎の教育を受ける時期を、全く家の世話をして暮して了ひましたのです」と語られた。その後兄上が後妻を貰はれる事になつたので、夫人も他家へ行ける身體になり、こゝに縁あつて沖氏へ嫁がれたのは明治九年即ち二十一歳の時でした夫人の言はれるには沖が廣島在から東京へ出で參つたのが明治七年で、その上京についても、上京後の身の振方についても、種々苦心をして、辛と遞信省へ出ることになり、後に強つて賴んで製機課へ廻して貰つた

のが、この事業の基でございましたが、その頃の月給が五圓。私の參つた九年頃が多分月給十圓位でございました。さうかうして居る内、沖も考へまして、自分の樣な學問の無い者は怎うして役所へ勤めて居つても思ふやうな出世も出來まいから、何でもまあ一つ獨立して電氣機械の製造をやつて見たいがと相談を受けましたので、私も賛成いたして、共々に、

一生懸命の覺悟を決めまして、愈々辭表を出したのが十三年でしたのに、役所の方で離してくれず、とうとう十四年の暮まで引張られて實に弱り切りました。そこで翌年の春開業致したのですが、資本と申しても極く薄給の中から少しづゝ貯蓄しておいたゞけのもので、實に哀れなものでございます。夫でもまあダライ盤の一挺もあれば二人位に困ることもなからうと、ほんとにダライ盤一挺で取りかゝつたのです。職工と申しても三人ぎり。唯今の販賣部になつてをる店の一部分が、其の折の店でもあり住居でもあり工場でもあつたので、極く小やかなものでございました。

初期の困難

處が其の業を始めた年の十二月から、主人に腸窒扶斯を病はれまして、翌年の八月までは何にも出來ず、全快して後も漸うぼつ〳〵手を出す位な事で、その折は極懇意な方々も「沖はもう今度はとても助からない」とお噂さ下さつたさうでしたが、それでも私どもまだ若いものですから、格別取越苦勞も致さず、唯助けたい一心で骨折つたのでございました。その上に、子供が——尤も總領は業を始める一寸前に亡くしましたが其の次のが——その開業の年の九月に生れ、その十二月から主人の病氣といふので、赤兒と病人を抱へて實に困り切りました。前後を通じてこの時が一番苦辛した時でございます。それでもまあお役所向の仕事、殊に遞信廳の仕事があつたので、それに助けられて、取りつゞいて參つたのです。無論この後とても、もと〳〵乏しい資本で始めた事ゆゑ、事業上の困難、主人の苦心も一通りではございません。開業後三四年間は、家

の事は殆ど私の手一つで致したので、殊に主人が身體が弱うございましたので、場合によれば外の用にも私が驅け出すこともありますから、

お神さんになつたり小僧になつたり

するのだと申して笑ひました、職人が來ればそれに食事もさせねばならず、それに子供はあり、家の事はあり、家の用もあり、外の用も出來てくると申す樣な譯で、隨分手の廻り切らぬこともございました。朝も早く、夜臥せるのも後く、少しも隙はなかつたのですが、然しこれは何方にもありがちの事で、何も事々しく申すには當りません、元來主人が實に勤勉家で、家の中の事へもよく氣を付けてくれて、どうしても働かねばならぬやうに自然になつてくるのです。これにつけても人の家は主人が肝腎だと存じました。この樣に共々に、少しも骨の休まる時はなかつたのですが、その、

出精の動力

とも申すべきは、全く家内の和合でございます。自分でも時々考へますので、何でも人の家は和合が第一のことで、私共も隨分困難致して來ましたが、幸に家内に蟠りがございませんので、そのお蔭でお互に張りを挫かれるやうな事がなく、始終元氣が持ち續いて來たのだとつく〴〵存じます。姑もございましたが國に居りましたので、何年頃でしたかまだ早い時分に呼寄せて、二年程一緒に住まひましたが、此方で亡くなりました。これも實によい人で樂でございました。何でも和合が第一だと始終存じてさう申してをるのです。されば、と申して、それなら家内を何ういふ風に取廻すかとお尋ねになる方もありますが、それは何とも申上げられませんので、それは私共では、

家事と主人の介抱

とで特別の事情があるからでございます。よく見習

ひの爲に娘を家に置いて貰ひたいなどゝ頼まれましたが、毎時お斷り致すので、と申すのは、若い方々にはまあ何事も約まやかにしてお目に懸けねばならないのに、來客のお方でも入らつしやると、さうばかりしては居られません。それに前申す通り主人が弱いので私がよく代つて外出を致しますし、家内の事をきちんと規則立てゝしては居られませんからです。さういふ譯で見習ひをおさせ申しやうがないので、お斷りしたのでございました、つまり主人の弱いのも一つは心配が多い故と存じて、どうかして及ぶだけは助力したい一心から、出來ますことなら外の用事でも何でも、務める心掛で致して居つたのです。それでも主人の身に付いた事だけは、人手にかけずに、一切私が致しましたので、兎角主人は腸胃が惡かつたゆゑ、食事などは注意し切つて居りましたのに、それでも赤痢などを病ひまして、よく女中どもゝ「家の旦那樣はまあ彼麼にしていらつして、それで旦那樣お一人がお病ひなさるのは何うしたことでせう」と申した位です。主人の身體には實に色々と氣を使ひました。

夫人は傳習生の母親

段々手廣く致すにつれて生徒――つまり昔の年期小僧のやうなものを仕立てることを主人が努めましたので、多い時には二十人も居つたので、その世話も隨分でございました。毎年盆暮には仕着せを出しますので、あの人間には此れが合ふだらうかと、這麼柄が彼れには向くだらうとか、一人々々に見立てまして、着物から羽織を着る者には羽織、それに襦袢からシャツから帶から足袋下駄まで、仕事着までも一切揃へて十人前なり十五人前なりをづらりと並べて置きまして、さあこれへお小遣を添へてやつて下さいと申した時には、實にほつと一息ついたのでございました、恁ういふ人達の中に今は家を持つて子供の出來てゐるのもございます。妙なもので、恁うして手元に置いて、一人々々に當つて世話した時分は實に宜しうございましたが、其後愈々數も殖えるので、合宿所を設けてからは、私

も重荷が下りて樂になつたに似合はず、却つて疲勞したやうに存じました。樂になつたのだから些と店の者の處でも廻り歩いたらよからうなどゝ申されましたがやはり何か子供が產れた祝とか申すやうな折の外は餘り尋ねて廻ることも出來ずに居りました。右申すやうな人達や、まして創業以來二十五年ずつと變らずに居つてくれる者もあり、その他古くから居る者も隨分ありその外すべて一體に忠實やかに働いてくれますから、幸福を得てをるのでございます。忰が一人きりで、それがまだ若うございますし、米國に修業中ゆゑ、それが歸つて來て確然引受けてくれるまでは、私も丈夫で居りたいと存じます。娘二人の內、姉は他家へ遣しまして、唯今妹が宅に居ります。

夫人は商會の的

私は工場の方へは餘り參つて見ません。店へは大抵毎日宅から出て參ります。强ひての用事もございませんが、お役所向の仕事ゆゑ、實印が始終入用なので、運動旁々參つてくれろと申されますので、さうして居ります。一つは皆の働いてくれますのに、的のあつた方が張合があらうと存じて、唯々的になりに出て行くのでございます。

女子文藝學校

麴町中六番地の女子文藝學校は島地默雷師の創立なるが、今度本願寺の裏方等の贊助を得て校舍を新築して去月十日落成式を行ひたり、日本風の座敷には靑き絨緞を敷き詰め、正面には厨子の扉を披きて金色の光眩き瓔珞の內に彌陀の尊像を安置し、燈を點じ、香華を供し、供佛の用意流石によく整ひまづ君が代の合唱に續いで、校長大谷籌子は（黑紋付裾模樣に金襴の帶を纏び金鎖は長く頸を飾り右の手首に珊瑚の珠數をかけ）燒香禮拜、式辭をのべ、評議員會長毛利公爵母堂外數名の祝詞、赤松連城師の演說等あり了つて別室に於て午餐の饗あり、午後よりは種々の餘興を催したり、當日來賓の重なる人は奧伯爵夫人、寺內子爵夫人、大島子爵夫人福島男爵夫人、千家夫人、清浦子爵同夫人、比志島中將夫人、大村子、三井榮子、有地男同夫人、長岡少將夫人、佐野男爵夫人、山田伯母堂、櫻井前子爵夫人、島尾前子爵夫人、九條公夫人、木戸侯夫人、長松前男爵夫人、小笠原伯令姉、南條博士等なりき、因に同校は尙ほ引續き寄宿舍の新築に着手する由、現在の生徒は九十餘名なりと。

内助とはどんな事か

小崎千代子

小說的の事は無い

家を持つてからもう二十六年で、隨分長い間の經驗でございますが、格別の波瀾もないので、内助と申して別に小說的の事柄があるのではございません。唯長い間から得た實際の經驗を二つ三つお話しいたして見ませう。

御承知の通り夫が教會を持つて居りますので、私も隨分外出を致します、これは固より必要に迫られてする事で、道樂に出る譯でも何でもございません。用もないに好んで家を外に出あるくのは大間違と存じます。然し私は止むを得ずよく外出致しますので、

第一の心懸

として居ることは、假令不在にしても後の少しも困らないやうに、それが爲に夫が不便や不快を少しも感じないやうにと言ふ事でございます、元來平生から下婢に責任を持つて働かせるやうにして、家事に慣れさせて置きますから、割合に不便はありません、子供には能く言ひ聞かせて「お母樣は御用でお出懸けなさるのだから」と十分納得させておきますし、又それが習慣になつて了へば、面倒はないものでございます。子供は只今三人ございますが、成るべく自治の主義を取り、自分の物は自分で始末するやうに致させますから、不在中も其麽に下婢の手を煩はしません。皆訓練次第でございますよ。隨分主婦が不在なばかりに、下女は勝手な事をしてゐる、子供は泣いたり騷いだりといふ亂脈。そこへ來客で主人には何が何やら分らず、下女には御馳走の工夫も付かず、何か出しても食べられないと言ふやうなお家も無いでもございませんが、幸に今日まで其麽事も無く經過して參りました。元來日本の婦人の外出が下手だと存じます。もつと上手に外出することを覺えなくてはいけません。そして最少

し外出して見聞を廣め世間へも出て見る必要があらうと存じます。

外出は一種の學問

でございませう。歡會に附屬したお方には財産家もあれば貧家もあります。その諸方へ參る度每に私は何か心に敎を受けて歸るのでございます。財産家は財産家だけ。お考がありますし貧家は貧家だけの遣方があります。お友達の處へ參つて考を話し合つたり、又は極くつまらないお香物の漬け方のお話しをして歸つただけでも、又それ〴〵の遣方の異つた處などを覺えて利益になります。心懸一つのものです。私は町を歩いても始終氣を付つて、珍らしい便利な道具とか、割に廉價な品とか目に留まれば、求めて歸るやうに致しますので、始終キョロ〳〵して……おほゝゝゝ可笑しく見えるかも知れませんが、まあ其樣心懸で居ります。廉價な品や便利な道具は、それだけ家計の爲にもなり、又それで家內の愉快を幾分でも多くすれば、それも內助の一つでございませう。



間違はぬ樣に

右の樣に申したからとて何も外出を無暗にお勸め申すのではありません。此頃は隨分出歩きを道樂になさるつて、家の事も何も棄てゝおいて外出ばかりする方もあるやうですが、凡そ此程間違つた事は無いと存じます。女は家を治めるが何處までも本務でございます、家を亂脈にしておいて出歩したのでは何のお手柄になりませう。修養の爲や用事の爲の必要な外出の外はまづ致すに及びません。私はごく子供の時から、學問は家庭の爲にするもの何でも學んだ事は皆家庭の爲になるやうに心懸けたいと、始終さう思つて居りました、これからの學問なさる若い方々も、やはり家庭を本位になさるのが眞正だらうと存じます。然し槪して申せば日本の婦人はまだ餘り內に引籠り過ぎて世間を知らなさ過ぎると存じます。それでは母の方が子供よりも世間知らずになつたりなどして、その間に答へてやることも出來ず、夫の話を興味を以て聽くことも出來ますまい。

家內の整理

を工夫して、少しは隙を拵らへて外出して見るもようございませう。處が上手に外出するには下女を多くばかりしても役に立ちませぬ。手が多ければ多いだけ大騷ぎになつて、やはり出るにも歸るにも困難は免れません。不在中の事の言置きなどはそれこそお脫漏になつて了ひます。私は今日は出ようと思へば朝から仕事を運んでおく樣にして、少しは下女の手助けもして、茶碗の一つも洗ひ、箒でも持つてやります。仕事が運んで居れば下女も快く出しますし、自分も後の手筈の間に間に合はぬを心配せずに出て居られます。そして成べく夫や子供の歸るより前に歸宅致しまして出るにも格別おめかしをするでもなく、歸つても着替へたものは直ぐ自身で疊んで了ひますから面倒はございません。知合の西洋婦人などは上手なもので、子供の四人も五人も居つても、差支ないやうに午後の外出

をよく致します。然し不在を安心にするには。下婢をよく訓練む事が大切、と申すよりは元來が下婢といふ者は無論家庭の一人ゆゑ、よく訓練けねばなりません然し私は、

下婢の訓育は樂みの一つ

と存じます。固より修業心の更に無いのはこれは致方がありません。給料を蓄めて着物をこしらへる、これだけの氣があるのはもう宜しうございます。これさへも無くて唯ぶら〳〵と樂をしてゐたい、かういふのは如何とも仕方がございません。それ故私は成るべく氣象の凜乎した者を選びます。氣象さへあれば此方の仕向け方一つで修業心は起すものです。それで私は最初の日に申し渡します。「私の家は骨が折れます。忙しく働かねばなりません。けれどもまあ少し居て見れば分るが、忙しいといつても物は遣方一つで、さう苦勞なものではないから」と申して段々と練習が積むにつれて、物を任せてやらせる樣に致します。唯今居るのはなか〳〵氣象者で、當人が修業の氣で居りますから少しも苦勞らしい顏も致しません。もう六七年居りますが、盆やお正月にも「別に疲れても居りませんし參らずともよいのですから」と申して、宿へも歸らないのでございます。夜は英語を少しづゝ習つて居ります。希望の見えてゐる人か、基礎の立つてゐる人かでなければ嫁りたくないと申して、それには自分もアメリカへでも參つて修業して來たいと、勉勵して居ります。まう不在も安心して任せて置かれ、子供に惡い癖を付けるといふ心配もございません。這麼譯で下婢をよく訓育ける事は、家内整理の大切な事柄だと存じます。それならば下婢をどう訓練けるかと申しますと、それには先づ、

家事の順序

を立てる事が第一でございます。物は順序が大切で順序をよくさへすれば十の勞力を六七で濟まされます。日本ではどうも西洋の家庭ほどに整然と定められ

ませんが、大體私共では土曜には大掃除で、厠りから物置の隅まで……と申しても毎週致しますから其塵に汚れては居りません。日曜は下婢は食事の世話位で餘りの時間は自由に讀書なり縫物なり自分の事を致させます。月曜には多く洗濯で、火曜にはそれを火熨斗を掛けるなり疊むなり、それ〲始末するといふ樣に、日々仕事を變へておきますので飽きずに出來ます。この方が其日〲に毎時新らしく考へる面倒もなく、又順序よく事が運んで參ります。順序こそ家内整理の大要件でございます。そして又事を簡易にするが大切で私は衣類にしてもこの冬ならば冬に要るものだけを用意致して、それも箪笥の抽出しを決めて入れておきます。來年の夏着る物の事までは考へません。ですから着換へるにしても彼れにしようか此れにしようかなどと首を傾げる時間を費しませんし、子供などもちやんと自分の着物を抽出しから自分で出して參ります。然し家事整理のもつと根本を申しませうならば、それは主婦が無精ではいけません。主婦が働かねばいけません。即ち、

主婦の修業心

が最も肝要でございます。必ずしも下女同樣に立働かねばと申すのではなく、主婦の務めをよく盡して、決して怠惰けて居らずに、毎時實地的の學問修業をする心掛でをらねばなりません。よく私は若い御婦人達に申すのですが、「私も始終學問して居るのですよ。世間の實際に當つての學問は一日もしない日はありません。人の妻となつたからとて、修業心を棄てゝいゝ譯がないのですもの。方面こそ違へ、共々に勉強しようぢやありませんか」と毎時から申すのです。主婦が此の樣に致してこそ下婢の修業心も惹起すことが出來るので、さもなくて下婢にばかり忠實やかに働かせようとしても無理でございませう。世間には隨分家内を亂雜にして夫に不愉快を感じさせ、夫の出入りにもいゝ顏をして送り迎へもせず、そして要求ばかりいろ〲する人もありますが、それは通らない事です

よ。主婦がよく心を働かすこと、修業心を忘れぬこと
これが最肝要の事と存じます。

一家の娯樂

私共は始終讃美歌などに慰められて居りますが、さういふ事のない御家では、何でも宜いから樂器を備へて、毎夜でなくとも折々一同でその音を聽いて樂しむが結構でございませう。もし私共が樂器や讃美歌にまるきり放れましたら寂しくて堪へられますまい。西洋の家庭では兄弟姉妹集まつて合奏するなどが普通と申



してもよい位です。そして私共などは食事の時は同じ卓子で團欒して、成るべく品數でも多くし子供等にも喜ばせるやうに致します。下婢にも同じ食物の一部を遣しますが、これが然るべき事と存じます。子供を引連れて出る事も無論ございます。毎週ではありませんが、多くは土曜で、主人が日曜には勤めがございますから土曜は成るべく精神を休めておきますで、二人で子供を引連れて日比谷公園などへ参ります。その他折々夜などに、相手になつて子供

の話を聞いてやりますが。喜んで色々の話を致し、中には「其麼事まで母樣に話すのかえ」と申すやうな事でも、皆申して餘り正直すぎると申す位。然し親としては然うあつた方がどんなにか嬉しいのでございます。平生虚言といふものは微塵も申させぬことに致しておきますのです、さて彼是申して錯雜致しましたがお話したのは、皆實驗を申したので、名論ではございませんが、その代り口に唱へたゞけのものではございません、唯だ多年實際經驗して來たゞけを申したのでございます。

乳母の選擇標準

牛乳よりか人乳の勝れて居ることは既に醫家の定說となつて居ります、母親が疾病とか他の原因で乳が出ないとか又は他の事情で牛乳か乳母かに據つて養育せねばならぬ小兒は澤山ありませう、處で牛乳保育なれば乳の薄め方、溫め工合、その分量糖分の加へ方などに餘程注意せねばなりませんがその話は他日に讓る事として玆には乳母の鑑定のことを記しませう、乳母は醫師の鑑定に據るのは當然ですが其れのみに頼つて安心しては居られませんといふのは其の選擇の標準が全く見當違ひをしてゐるのが多いやうです、先づ性質の溫良を選び次は身體の健康です、それから乳質の良否乳汁の分泌の多いものですか、この乳汁の分泌の試しが一番難かしいのです、目見得に來た當時は乳房が張つてゐるのが普通ですが其れが續いて出るか否かは容易に分りませぬ醫師に於ても特に顯れた原因がなくば却々鑑定困難ださうです、一歩進んでは小兒の母親の年齢と略同じきか又それより年少きもの、小兒と同じ程の兒を育てるもの、初產よりは出產數の多いもの、限度が三十歳までのもの、こゝまでは少しく注意深い家庭にあつては研究されて居るやうですが、出產後幾日を經たか（四週乃至六週位が宜しい）、また親しく乳母の居住地に就いてその家系に遺傳症などの有無等を取調ぶるまで周到の注意を拂ふのは甚だ稀なやうです、これ等は是非とも爲さればならぬ、當然の途を怠つて居るので、小兒の身體と精神とに容易ならぬ關係のあることは言ふまでもないことです。愛兒生涯の最初に十分深い考慮を盡して永き悔を殘さぬやうにしたいものです。

媒妁人の見たる處女

某紳士の媒妁談

仲人口と一口に斥くるけれども、然樣ばかりも言へぬものである。若い者同士互に欠點を隱し合つて、他を巧く欺いた積りで、巧く他に欺かれて居て、斯て其の互に欺いて而して欺むかれたもの同士、他人入らずの自由結婚、「高砂や此の浦船に帆を揚げて」、目出度蜜月旅行と出かける。十日も立たぬ内に、離れて居る僅に隱せた身の缺點が一度顯はれ二度顯はれ、既や公然の秘密となつて、今更既う隱せなくなる。其でもお互樣の事だからとて互に差引勘定して、見て見ぬ振をして居る間は先つ天下太平と云ふものであるが、然じ然樣續くものではない、人間勘忍は四十過ての事、結婚時代の血氣盛、餘り同じ事を遠慮なく繰返さるゝと、口では和かに言つた積でも腹の蟲が劒を吐いてる。此からが喧嘩時代だ。合歡の夢短く覺めて自由結婚の非を悟る曉茲に始めて媒介を用ひなかつた愚を悔ゆるのが、今日の結婚生活に少くないと云ふ事だ。

然れは凡の自由結婚が悉く惡くは無い樣に凡の媒介が悉く惡いと云ふものでは無い。前途多望なる男子が居たり、缺點の少い女子か居たりすると、彼の好男子に好い嫁を持たせたいものだ、彼の好い處女に適しい男を持たせたいものだと世話するとなく世話をする先輩の世間に往々あるものだ斯かる媒介者は決して媒介口とて斥くべき種類のものでは無い。

現に自分も然樣云ふ筋から頃者一人の女子を一人の紳士に媒介して幸と都合よく成功したので、茲に聊か自分の經驗を語つて愛讀の諸嬢の參考に供しようと思ふ。

先づ其の紳士の方から言へば其專門は敎育家で、其の長所を言へば勝れて常識に富んで居て、一人で五人前の經驗を兼て居る位に世故に長けたものである。其で年は猶三十以内である。殊に女子敎育の經驗もあるのであつて、又來年は洋行する計畫も出來て居る。先づ理想的の明治式の良人であると思ふ。

而て肝腎な女子の方は何樣であるかと云ふと、自分が見得た主なる點は是である。

第一は意思の強い事

男は誰しも同じ事で、結婚前には女は優なしく、女らしく、内輪で奥ゆかしい樣なのが、好ましい樣に思ふが、結婚後には此の思想は一變する女は強くなければ可けない。女が強い男を欲するのみでなく、男も亦強い女を要する、此の生存競爭の社會、活動の社會共營的社會に、女らしく奥ゆかしい女では間に合はぬ。此れは自分が未だ社會に立つて居ない見地から見た考へである。活動の社會に立つて居る媒妁人の見地から見た女子は、第一に意志が強からねばならぬ。所で此の女子は幼少より父を喪ひ母の手一に育つたので、隨分艱難辛苦を嘗めつゝ人となつたもので、自分が始めて其人を認めたのは苦學生であつた其の兄を助けて、寒朝牛乳を配達して來た際であつた。其後上野の體操學校を卒業して、長野縣の或る山郷の學校に奉職し、崎嶇羊腸たる一里の山路を毎日草鞋がけで通つて居たので、其土地でも評判になつて、然る高級の軍人から又然る金滿家の息子から嫁に所望せられたのを、自分には思ふ所があるからとて、固く斷つた。所が其の金滿家の息子の方は甚く執心して巨額の金錢を郵便爲替にして彼女の許に送つて、金で其の心を買ふとしたのだ。彼女は痛く怒つて突き返したのであつた。先づ此等が其の意志の顯著なる發露であつた。

第二は快活な事

意志が強いと言つて強ち快活とは限らぬ。隨分執念の深い惡意地の女もある。然るに此の女子の陽氣なのほど人を喜ばせる者は無い。冬の日は愛すべしと云ふ諺があるが、彼女を見るは日に向ふ樣な心地である。「樂しい家庭」と誰も言ふが「樂しい家庭」は第一「陽氣な家庭」でなければならぬ。陰氣な家庭に樂しい家庭のあるはづが無い「笑ふ門には福來る」と云ふ何故乎、笑は元氣の發動である。元氣が發すれば作事が捗ける

泣きながら働くことは出來ぬが、笑ひながら働くことは出來る。笑つて働けば作業が捗けて、金も這入れば福も入る。笑ふ門に福の來る道理である。此の女子には始終元氣の發動が見える。他の女子が坐して考へこんで居るときに、彼の女は立つて働いて居る。何様な事でも行つて見る。何様な難しい事でも些とも難しいと思ふ様子が無い、唯體操科の免狀ばかりで、裁縫も教ふる唱歌も教ふる、バイオリンも彈く、器用なと云のではない、億劫に思はないのだ。其で子供には非常に好かれる、土地の婦人社會には持て囃される、其の一區域の婦人會の會長と推選せらるゝ其の重任に當つて盡す。其處を辭して歸京するときには、丁重な紀念品の贈物を受けて來た。皆其の快活の賜である。



第三は秘密を守ること

私の家に入り來るほどの女は皆他人の秘密や他人の私事を口賢しらに言はぬは無い。此の類の婦女に決して心を許してはならぬ。面白がつて其の言ふことを聞いて遣つてると、何時しか我が內輪の事柄を外に持て言ひ觸して居る。女ほど淺猿しいものは無いと言いたい。（失禮ではあるが）其は如何に目を掛けて使つて遣つても如何に金をかけて其の急場を救つて遣つても、有り難いと禮は云ふが、然し其家の內事を他に漏すなどは平氣

なもので、其の恩に感じて其人の利益を謀るなど〻云ふ人情は、聊も無い者が多いからである。其處へ往くと彼の女は見上げた者で、境遇上、多數の家を渡つて來た者だけれど一言其の主婦、主人の失德を言はない其の主婦主人の失德につき、他より聞こんだ噂をして尋ねて見ても、些とも言はない。「却つて其樣な事はありません」と固く言ひ消すのである。此を彼の口賢しらに喋舌する女だちに比れば幾何か愛嬌の薄い樣ではあるが、人の妻としては之に增した美德はないと自分は感じた。

第四は「思ふ事がある」

と云つた其の思ひである。彼の女に虛榮心があつて(無い女子は無い)、其の虛榮心を滿足せしめやうとすれば、高級の軍人でも金滿家の息子でも、又其の郷國の收入ある醫師でも(彼の女に對する求婚者の一人)擇取りである見取りである。所が彼の女には之を差し置いて「思ふ所がある」、其は何か、彼の女の母なる婦人が非常な逆境に在つたとき、精神的に之を維持して遂に稍順境の來るのを待ち得さした一個の學生があつた。其の學生が即ち今の教育家であつた。彼の女は未だ嘗て此の學生と直接に會つた事は無かつた。唯當時其の母よりして其の學生の恩義を語るを聞いたのみであつた。之を聞いた彼の女は、此時心を決したのである。母に代つて此の高恩を報んには、不肖の身をも彼の方に獻ぐるより外は無いと、此樣思つた。同時に又教育家の淸貧的生活の内に誓つて其の良人を助くることを以て、唯一の希望としたのである。其故三方からして縁談を受けた曉、先づ彼の方に自分の恥しい意中を告げて其の採否を仰ぎたいと云ふのであつた。其の微かなる聲が自分の耳に入つたので、實に尤と自分が中に入つたのだつた。

欠點を知らして呉れ

然し双方の位置が餘りに懸隔して居ること、又對手は其の關係した學校から如何なる剛愎でもハイカラで

も自由に撰める位置にあること、此の二個の事情の爲に自分は深く彼の女の爲に危んだが然し有り體に自分の所見と當人の意志とを告げて遣つた。其の後對手方から詳に當人の欠點を知らせて貰ひたい、仲人口では眞平御免と云つて來た因て其の教育の不足なる事を首として、數個條の欠點を列擧して遣つて、何樣言つて來るかと待つて居ると一向に返事が無い、多分出來ない相談だらうと諦めて居たところが二週間ほど經て罫紙五枚ばかりの手紙が來た。喜憂に充ちて讀んで行くと非常に長く悶かせた末に、「感謝を以て御請申し候」と擱筆して居た。



自分が爲て貰つた恩返しに一生に三度は媒介をするものと昔から言つたものだ。否三度とは限らぬ。四度でも五度でも爲るが善い自分も善い縁さへあれば、幾度でも爲やうと思ふ、然し此の第一回の其の如きは到底再びとはあるまいと思ふ位の良縁である。

絶望の後に始めて理想の配偶者を得る

翻つて顧ると、自由結婚の聲は今日青年男女の間に非常に高く叫ばれて居る、けれど實際は甚だ少數な樣に思ふ。諸新聞の不平欄にも、青年の獨身嘆が隨分多いし、又結婚欄に就て見ても、概して媒妁結婚である。自由結婚の聲ほどには無い、而て見ると今日滿都の女子が男女交際論を口にして、其の思想感情から言語動作、被服裝飾の末に至るまで岌々として男子の意に投合しようとするのは猶見當違ひではあるまいか。女子は果して盡く其の交際する男子と結婚するものであらふか。若くは交際は交際、結婚は結婚と云ふ樣な事に終るのが多くは無からうか。若し然樣であるとすると否少くとも其の半數は其であるとすると、女子は男子の見る目にも留らねばならぬ同時に、又媒妁人の目にも留らねばならぬのである。猶一步を進めて考ふると媒妁人の見る目と男子の見る目と正に一致しないものにも限らぬ。否、今日女子と往來交際して居る男子は寧ろ男子中の女子に屬するので、男子中の男子に屬するものは、遠く離れて冷靜に女子を觀察して居るではあるまいか。僕の敎育家の如きは正に其の一人なので親しく多數の女子に敎授しながら、其の中よりは擇ばない、其等に就ては絶望して居つたらしい。一度も二度も絶望して始めて最後に理想に近い妻を得るのである。一寸した機會、一寸とした便宜、一寸した行がゝりから交際して、其から握手し結婚するのは何樣しても眞摯でない、交際する前に既に已に迷つて居る。迷つて居るから交際する。迷つて居なければ交際は爲ない。自然に任せて冷靜に觀察する、而して後可と見れば交際するのだ。交際して他の是非を觀ようとするのは抑も顛倒した話である。いや媒妁人もまた却々入用である。





大名華族の家庭

夢蝶閑人

▲一歩足を踏み入れると別天地

大名華族の家庭は、十萬石以下の中藩以下は、年月と共に、昔日の格式風習は漸次減消したやうだが、十萬石以上の大藩華族に爲ると、封建制度破れて爰に四十年、日清戰役より日露戰役を經て、世は幾多の變化を見てゐるにも拘らず依然として、舊日の格式慣習を維持して、舊幕時代の面影を遺こしてゐる。

最も大名華族といふ中にも、國柄に依り、家格に依りておのづから相違がある。時に明治維新の際に、時代の趨勢に連れた薩長土肥その他の大名華族と、失脚した大名華族とは多少の相違があるのは免れないが、それでも大名華族と爲ると公卿華族や公侯の新華族とは、ずんと違つて、中流社會に比ぶれば、別天地の觀がある。

　中にも島津、毛利、前田、細川家などゝ來ては、屋敷内の格式や、舊藩臣の關係などは、舊幕時代と大した相違がない。たとへば君公と使用人の間柄などがそれで、家令、家扶、或種の奥女中を除いて、直接君公御夫婦に面會が叶はない。毛利母堂の如き、愛國婦人會等の席上では、氣の輕い、こま〳〵した貴婦人だが、一歩屋敷内に足を踏み入れると、面會もついちよいと手輕くゆかない。のみならず、若し母堂がお閑のつれづれ。庭内を散歩ありても、植木職人の類は、わざと後方を向いて、お顔を會さないやうにする。或階級以下の用人等も、障子を締めて視線を避ける。細川家な

どは、舊幕時代とそつくりその儘、藩臣の或者等は、土下坐して挨拶申すと聞いてゐる。島津家は、當主は國元に居らるゝ故か、格式が殊に嚴重であるといふ。

▲徳川家は質素

唯獨り大名華族の筆頭である、徳川將軍家は、明治維新の瓦解で、大打擊を受けられた故か、或は慶喜老公の思し召しによるの歟、案外質素のやうだ。從つて舊臣の關係も、白湯のやうに、さらりとしてゐる。毛利、島津、細川家等を見た眼では、むしろ平民風とも言ひ得る、毛利公爵家を例に取らう。伊藤公や山縣公等は政府隨一の功臣で、宮中順で見ても、親王に次いで攝家の九條、二條を越へて、上席に椅子を構ゆるのは何人も知つてゐる。けれど、宮中を離れ、社會と離れて、毛利家の屋敷に入ると、如何な大勳位の伊藤公も山縣公も頭が擧らない。毛利公の前に出ると、依然たる當年の伊藤俊介だ、山縣狂介だ。最も十年二十年前に比ぶれば、時勢の變化につれて、幾分か變つて來たやうだが、それでも君公と大勳位の間には非常の距離がある。細川家に爲ると、特に著しい。井上子爵でも米田男爵でも、井上ッ米田ッと呼びッ放なし。井上子も米田男も、君公に對ふと歌申上ぐる蛙の體、姓を呼ばるゝのがまだ良い方で、普通の藩臣に爲ると、名左衛門或は五郎兵衛と呼び捨てゝある。

其處に爲ると、將軍の徳川家は寛大で、むしろ文明風で、勝或は榎本等の人達に對しては、相當の敬禮を拂つて居らるゝ、屋敷の經濟も、島津、毛利、前田、淺野、黒田、細川等は、家令や家扶に高額の給料を拂つて、仕掛が大きいが、徳川家と爲ると、まづ普通伯爵家位の規模で、使用人の數も遙然と尠い。而して老公爵の方は、澁澤男爵が世話してゐるが、千駄ケ谷の屋敷は、溝口老人が一ッ橋家より隨伴して來たが退隱した後は、大體家達公自身で遣つて居らるゝ、他の大名華族に爲ると、這んな事が夢にも無い。之について鍋島侯爵夫人の述懷談があるから、挾んで置かう。

▲華族は窮屈なもの

鍋島侯爵夫人といへば、曾て侯爵に伴はれて、公使夫人として伊太利の交際社會に羽振を利かされた夫人で、毛利母堂と並んで、各種の婦人會に關係ある、大名華族中の文明夫人であるとは、世間の普く知つてゐる所であるが、此の鍋島侯爵夫人が、嘗て昵近の某氏に話された言葉の中に、一人で外へ出ることも自由でなく、途中で欲しいものがあつても金一圓遣ふことが出來ない、日本の華族といふもののほど窮屈なものはないと、しみ〴〵語られたと、記者はその某氏より直接に聞いてゐる。



鍋島夫人の述懐は、大名華族の家庭の模様を赤條裸に露はしてゐる。たとへば金銀の取扱など第一其れで家令の許より、御夫婦の小遣として、一ヶ月百圓或は二百圓と割り當てられてゐる。けれど、金一圓といへども、自身の思ふやうに遣へないのである。況して事業など飛んでもない事である。

啻に君公夫婦のみならず學習院に通つて居らるゝ姫様なども、矢張それで、日々人車で學習院に通學ある途中で、眼新しい物が眼に入るけれども、巾着の結目を開くことが出來ないの

である。之について、融通の利くやうにといふ特別の依頼を受け、本年十二歳に爲る二人の姫樣を預つてゐる某婦人の話說に――四年以上も經つたから、此頃は敎師の家は屋敷のやうに親しみ、夜分には下女を添へて緣日へも出すといふ鹽梅式に育てゝゐるが、姫樣が緣日に於ける慰樂といふは、財布の口を開いて、五錢十錢の買物するのである、と笑ひながらの話說。之は舊と十萬石の某華族の姫樣であるが、それでさへ恁ふだ。屋敷より直接學習院に通學する姫樣の模樣が、想像さるゝであらう。

▲集會の出席にも家令家扶の協議

金錢取扱の如きは、微細な事であるが、愛國婦人會等の集會は別として、臨時に出來する音樂會、美術會、慈善會等の如き集會さへ、大名華族の家庭となると自由が利かない。悉く家令家扶の協議あり、協議の結果でないと、勝手に外出する譯にゆかないのである

愛國婦人會等の席上で見ると、大名華族の令夫人も、新華族の夫人や、博士夫人等と竝んで、活潑潑地の動作はあるらしいが、屋敷へ入つて見ると、集會の出席さへ自身の勝手に參らぬとは鍋島夫人が窮屈の嘆を發せらるゝのも無理がない。

啻に御婦人ばかりでなく、君公といへども矢張それで、貴族院開會の時期を除けば、親戚友人の訪問さへ手輕く行かないのが大華族の身上だ。たとへば蜂須賀侯爵の如き、公使、知事、大臣、貴族院議長と幾種の官歷あり、世間を切つて廻はされたやうに見ゆるが、屋敷に入ると、矢張格式と權威に取り捲かれたお殿樣相應に位置ある者でも、電話で對話ができぬといふ。電話で思ひ出したが、電話口で直接應對あるのは松浦伯爵家位のもので、他は貴族院議員の連中でも、主公との要事には、短くも三十分は掛るといふ。

▲奥樣姫樣の衣裳

令夫人の雜費といへば、衣裳の費用が七八分を占む

るのは、何人も想像するに難くはないが、島津毛利などの大華族と爲ると、令夫人の分のみでも、一ヶ月四五百圓、姫樣の分だけでも、島津家では一ヶ月二百圓の規定であるとか。島津家は華族隨一の方で、徳川家などは遙然と下つて居るらしいが、それでも奥向の衣裳料は一ヶ月四五百圓以上は出てゐるであらう。

爾して此の衣裳――婦人唯一の生命である衣裳も、奥樣、姫樣等、各自の好嫌で購はれるのではなく家令と奥女中との協議の結果、買上と爲るので、三越の「嗜好」などが、如何かすると奥樣姫樣の眼に觸れることがあつても、選定は老女と家令にあつて、肝腎の奥樣は、アー綺麗だとと仰せらるゝ位のものだ。啻に衣裳の買上ばかりでなく、衣裳の着用も、公會の出席、親戚の訪問、遊覽と、整然と定まつて、御自身の好嫌で、衣服を定める譯にゆかないやうに聞いてゐる。啻に奥樣姫樣ばかりでなく、奥に使はれてゐる女中といへども、それで、或侯爵家の如きは、女中は白襟を用ゐられぬことに定められてある。



▲奥向の調度

奥向の調度も、殿樣は殿樣、奥樣、若樣、姫樣と、膳、皿、鉢の類に至る迄、模樣が附いて

一々區分を仕てある。
で、爰に異樣に覺ゆるのは、若樣姫樣の名である、詮議の上詮議を盡されて、名は定まつてゐるが、何の君と、實名ある外に、姫樣、若樣の頭には、一種の符牒が附いてゐるのは奇妙だ。たとへば松印とか竹印とか、或は鶴印、龜印と符牒が附いてゐる、なかには依印とか宅印とか、ちよと意味の解せない符牒も見へる龜印樣、梅印樣と名を呼ぶのみならず、調度の類まで符牒を書き加へて、整理の用に立てゝゐる。

▲慰樂

大名華族の慰樂は如何なるものであるか。奥樣の慰樂といへば、毛利母堂や、鍋島夫人等は、社交に趣味があるやうだが、之は例外で、多くは屋敷内で、歌、挿花、點茶、なかには彈琴で鬱を遣らるゝ位のもので、極めて單調である、或は新聞紙が媒介となつて、小説に嗜味を持たるゝ方もある。けれど、之は少數で、小説といつても、馬琴の八犬傳とか、種彦の田舍源氏位が關の山、明治の小説は頭で入つて居らない。最も小藩の大名華族に爲ると、女中の手からして、文藝倶樂部或は新小説の類が、奥に入るとはあるが、大體から言へば、馬琴種彦物が勢力を占めてゐる。露伴も紅葉も漱石も四迷も、いや幽芳、柳汀、弦齋、浪六等の明治文士も、大名華族の奥には、馬琴種彦の足の指に當らないのである。

君公の慰樂は如何か、之は比較的單純でない、徳川公は相撲好、前田家は大聖寺も富山も謠曲、紀州の徳川家は旅行好、酒井伯爵家は寫眞と植木、伊達伯は銃獵、秋元子爵は相撲好、碁好、繪好、松浦伯爵は茶、書、諸禮式、古物學、その他、近頃は高山植物に趣味を持たるゝ者も大分殖えたらしい。寫眞に凝る者も、ちよい〳〵見受くる。

が、最も趣味の多いのが、徳川老公であらう。圍碁謠曲は言ふ迄もなく、書でも、油繪でも投網でも、銃獵でも、寫眞でも、樂器でも何でも趣味を持つて居らるゝ。いや、刺繍の如き末技まで素人以上とは驚くの外

ない。蓋し慰樂の多い上より言へば、徳川老公は大名華族中の隨一等であらう。併しながら、徳川老公の如き器用者もあれば、全體から言へば、われ等中流者よりも、慰樂の種類も範圍も狹くて。淺い、唯、立花伯爵の如き、鍋島子爵の如き、農業等に全力を籠めてゐる方があるのは、平民の社會にも珍らしい。



▲表向の役人

以上、漠然とはしてゐるが、大名華族の内容を書いて見たけれど、大名華族の家庭は、われ等平民社會と異つて、家庭の範圍も廣ければ、人數もづんと多い。玄關傍に、丸い大火鉢を中間に挾んで、ぐるりと輪を作つてゐるのは、家扶以下家從の類で、公侯爵の大華族と爲ると、家扶の上に家令あり家扶二人、家從三人、ヤレ調査掛だの何だのと、種々な使用人が顏を揃へてゐる。

その給料は、島津家、毛利家、前田家、細川家等に爲ると、二百圓乃至三百圓、ちよいと高等官二等位の給料である。家扶は三四十圓、家從に爲ると、十五圓

位が多い。最も十五圓の給料といつても、食事は屋敷で賄はれ、家宅も支給はれ、その上時々下賜品があるから、世間の給料に比ぶれば、遙に多い勘定である。で、家令は大名華族の總理大臣、財政の取締はもとより、如何かすると、奥向の相談——衣裝、調度、奥女中の事まで相談に與かる。細川家の家令津田靜一氏などは、一時天下に鳴つた名士であつたとは、讀者の中に御存知の方もあらう。表向の役人は、良い加減に切り上げ、早速奥女中に入らう。

▲奥女中

奥女中にも殿樣付、奥樣付、姫樣付と勤向が變つてゐる。舊幕時代と比べて見れば、人數も減つてゐるが禮儀諸法は昔日と相違がない。

先づ女中の人數を擧ぐれば、德川家では、十二三人しか見えないやうだが、細川家などは、殿樣と奥樣に四人、姫樣や若樣に二人の女中が附いてゐる。それに御隱居などの女中も居るから、隨分と人數が多い。なほ女中を總括してゐる女中頭——老女といふのが、一人居る。

勤務に當番と非番とあり、一日勤めると、他の一日は、自宅に退がつて自分の身體と爲るのが、大名屋敷の慣習。で、女中は各々自分の室がある。德川家などは、女中二人に一室、老女のみは獨り一室を支給はれてゐる。當番の時にはお屋敷の食事を取るが、非番の時は、各自に自炊を遣つてゐる、女中室に赴つて見ると、一種の世帶を張つてゐるので。

その女中は、多くは舊臣より出てゐるが、中には日本橋の問屋邊から、禮儀見習として上つてゐるものもあり、老女に爲ると、十一二歲の時より屋敷に上つて四十年五十年と勤續してゐるのが多い。德川家の老女などは、近衞家より隨伴して來た老婦人で、七十位のお婆さんである。开は兎もかくも、何處の屋敷でも、老女は表向の家令と類似する役柄であるから、當世流の教育こそなけれ、禮儀に於ては諸法通せざるはなく一擧、一動、整然と模型に嵌つてゐる。行儀作法ばか

りでなく、奥向の事は奥樣姫樣の衣服調度より、御外出の事まで扱つてゐるのであるから、尋常の婦人では勤まるものでない。幕末當時には、攝家の奥女中に、傑物を出してゐるが、今日でも大名屋敷の奥には、人品の立ち勝つた老女が見へないでもない。

けれど、奥女中の多くは、未婚で終るのが多いやうだから、女學校の所謂老嬢氣質が免れない。然かも女學校の老嬢は、同情のない、つめたい性情である中にも、新しい敎育に觸れてゐるから良いが、大名屋敷の奥女中と來ては、幼年の頃より、大名屋敷――時勢と離れ世間と離れた別天地に居るのであるから、普通の女性から見ると、よほど性格が變つてゐる、尖つてゐる、飾られてゐる。



大名華族の姫樣や若樣は、此の奥女中の間に取り捲かれ、養はれて、學習院では、新敎育を受けて居らるゝのである。

▲家庭の敎育

近頃大名華族の間にも、家庭敎師を置くことが、だいぶ流行つて來た、島津家が英人を聘して家庭敎師として居らるゝのは、著しい例だが、その他學習院の女敎員を聘して、時々講義を聽いて居らるゝのもあり、三十圓

内外の給料を與へて、屋敷に住はせてゐるのも、ちよい〳〵見受くる。華族社會に取つて喜ばしい現象である、看護婦も此頃入り初めた。

けれど弊を言へば、此の家庭教師は、家令と老女とに壓せられて、何時の間にやら雇人と爲つて仕舞ふとである。折角の家庭教師は、奥女中と同樣、雇人根性と爲つては家庭教師の權威が無く爲つて仕舞ふ、と左る人が憤慨してゐたが、兎に角も堅く築かれてある城壁の罅隙よりそよりと新空氣の入つてゐるのが事實である。かくて年月と共に大名華族の家庭も、早晩變化を見るとであらう。

〇人若し女兒を生まば土地を購入し置き後日縁談あらば之を賣却して嫁資を作るべし、蓋し土地は世の進歩に伴ひ何等の施設を待たずして其の價格騰貴すべければなり。

〇家庭は國の礎なり、家庭にして健全ならば風儀風俗其他總てのものが健全ならん。

公設展覽會の三秀才

磯千鳥



榊原蕉園女史

芳紀僅かに廿一歳。併も其技は遙かに群を拔いて、胸中の思ひは一つの美しい美人畵となつて現はれる。其名さい床しい百合子女史を元金杉、恰度根岸の裏通り、山茶花の花も零るゝ優しの門に訪れたのは。雲間

移りの日光の影さへ果敢ない、何時時雨降り出すかと思はれるやうな日の午后二時過ぎでした。

「蕉園樣を、」と云へば女中が首傾けて、

「は？」と問ひ返す。我乍ら自分の迂濶さに思はず微笑まれて。

「御孃樣に。」と云ひ直せば、女中も笑ひ乍ら、

「御出でゝ御座います。」と云ふ。

直ぐにと云ふので、三疊の玄關を通つて、廊下傳ひ、四十許りの丸髷の、見るからに優しそうな、蕉園女史の母上に導かれて行く。

八疊の部屋に、蒔繪の桐胴の丸火鉢を中に、友禪のメリンスの座蒲團を進められる。

座敷の中程に、繪の具皿や、畫筆や。今恰度畫を描かれて居た處。

その畫は十七ばかりの娘が猫を抱いて居る處。之から顔にかゝらうと云ふ處だつたので。

「未だ顔が濡れて居りますから。」と母上が云はれる。

やがて笑ひ乍ら、高島田の蕉園女史が御挨拶下さいました。

「此畫も猶且り何處かへ御出し遊ばすので？」と申しますと、

「否。もう別に這麼畫は何處へも出しません。唯畫きたくつて堪らないものですから描いて見ました丈で、先生にも御目には覧けられませんので御座います。此度のだつて、私等のよりずつと佳いのが澤山に御座いますのに、私等のを彼麼に仰在つて下さいますのは、眞實にお恥かしい位でございます。左樣でございますね。下畫や何かで「もの詣で」等は半月程かゝりました。「もの詣で」の時は可笑しいんで御座います。私の着物を母に着て貰ひましたり。母の着物を女中に着せましたり致しまして、種々と恰好を拵らへて貰ひまして、夫れをモデルに致しまして、下畫を拵らへました。でも奈何致しても女中等では自分の思ふやうな恰好に參りませんから、今描きかけの畫で御座いますが、是れは私が猫を抱きまして、斯う立ちましてね、母にざつと下圖を取つて貰ひました。（母堂は西洋畫の素養深き

方です）はね、もう畫を描き初めますと外の事は恰で考へません。唯もう畫の事許り思つて居ります。ソレで顔を畫きますのが何より一番樂しみなので御座いますよ。目が一つ出來ましても何だか嬉しいやうな氣が致します。着物の模樣なども隨分苦しみます。でも此頃は怠け勝ちで御座いまして、先生の御宅が近くなりましたのに、以前程は伺ひません。却て富士見町に居りました時分の方が勉强致したやうに思はれます。夏などは學校が午前限りで御座いますから、朝の内に琴の稽古へ參りまして、ソレカラ學校へ參ります。歸りますと直ぐに富士見町から谷中の先生（水野年方氏）の御宅へ伺がひます。と云ふ風に致すので、宅でも然うしないでも佳いぢやア無いかと云はれましたが。でも午後からでは歸りが夜になりまして厭で御座いますから時間が餘り澤山ではござりませんから、もう土曜日になりますと、明日は日曜日だから終日先生の御宅へ上つて畫が描いて居られると思ひますとね、嬉しくつて堪らないんで御座います。先生の御宅ですと皆樣が種々の畫を畫いて被居るのを見て居りますのも面白う御座いますのですよ。先生には無論で御座いますが市川秀方樣などにもよく見て戴きました。見て居りますとね皆樣のはどれも／＼好く出來るのに私一人幾程一生懸命になつても描けないんでございませう。學問は勉强しさいすれば出來るのに奈何して畫は出來ないのだらう。眞實に畫が一番難しいと思ひました。而して餘り出來無いから先生からお斷りを受けやしないかともう夫れ許り心配致して居りました。私が先生の御宅へ參り初めましたのですか。恰度十六からで御座います。展覽會へでございますか。まだ二度しか參りません。大抵の展覽會へは二三度參つて見ます。美術協會へも參りました。何だか自分のが出て居る時は恐くつて參り難う御座いますね。初め參りますと唯もう皆樣の御畫はどれも／＼よく出來て居ると許り見えまして、宅へ歸りましても皆樣のが佳い／＼と申す許りで御座いますから、父などが、然う／＼お前のやうに唯佳い／＼許りぢやア一寸も判らないと申しては笑はれ

ます。が全く初めは佳い處許り目に着きますが、二度目からは少し宛判るやうになります。

上村さんの「長夜」などは全く佳いと思ひました。お上手で御座いますネエ。西洋畫は唯自分の好き嫌ひしか判りませんが、「南風」と云ふのが佳いと存じました。

外のもの〻稽古で御座いますか。もう此頃は怠け勝で御座いましてね。今月から參りませうと思つて居ります内に、書でも書き初めますと參りませんし、而して居る内にも半頃になりますから又來月からと云ふ風になりましてもう怠けて許り居ります。



小説なども此頃は讀みませんが、好く少さい時分に讀んでは叱られました。鏡花と仰在る方の「照葉狂言」や「誓の巻」をよく讀みました。清方さんの畫が小説の口繪には佳いやうで御座いますネ。（判りませんが）小説らしい口繪をお書きになるやうに思はれますが。春汀さん。あの方は子供をお描きになるのがお上手で被居いますネ、皆んな可愛い〻ぢやア御座いませんか。自分が好きで御座いますから私の畫には、子供か動物を屹度入れて有るつてよく笑はれるので御座いますよ。

何日か日脚が傾いて、何となく夕暮の色の迫

るやうに思はれるので、話半ばながらそゝくさと暇を告げて歸りました。

玄關迄送つて出られた蕉園女史の姿と、門の山茶花、折からの時雨に、二瓣三瓣ハラ〳〵と零れるのとが、何となく風情の有るやうに思はれる。御院殿の坂昇る頃は。時雨晴れて、一入紅い紅葉に夕日眩ゆく。振り返る。根岸の邉り。虹の果敢無く立つたのもうれしい。

（十一月十二日記）

椎塚蕉華女史

田端小學校を右手に見て細い畑道を少しばかり奥へ入りますと、直ぐ突當りの至つて閑靜なのが椎塚蕉華女史のお住居で御座います、丁度記者の訪問致しましたのは、秋も最う末で何となく風の冷や〳〵いたします頃、女史は裏のお稻荷樣の在る淋しい木立の處で熱心に寫生して被居いました、却つて斯ういふ處でお談話を伺ふのも結構だと思ひましたが女史が是非とお進め下さるので御一緒に茶畑の間を拔けてお座敷へ參りました。

「此樣な田舍へ引込んで仕舞ひまして、唯だもう閑靜だと申すばかりで御座いましてね」と仰有り乍ら褪紅色の大きな形のついたお座蒲團をお進め下さいました、丁度十疊ばかりの女史のお部屋で御座いませう、新しい簞笥が二棹並べて置いて在つて、其傍にお琴が一面立て掛けてございまして、玻璃窓の明るい壁際には書きかけの畫や何か澤山ございました、でお談話は文部省の展覽會の事から始まりました。

「皆樣大層お立派にお書き遊ばしまして御座いますね、なかでも彼の女の方の方では京都の上村松園女史の「長夜」は實に私立派な作だと存じました、何しろ全體非常に老熟で一種の品が出て居りますね、一個處一個處申しましても實に佳う御座います、まア顏、髮、毛畫、から色の配合など誠に申分ございませんね、殊に御本の字が眞個に美事で乾度畫ばかりでなく、字もよつぽど立派にお書き遊ばすのだらうと思ひました、唯だ最う感心致して仕舞ひましたの、風俗畫には實に

得難い作だと存じました。

はア私は二度ばかり見に參りました、西洋畫の方では尙且黒田さんのが好いやうに存じますね、私の「卯の花垣」で御座いますか、まア私のなんかお耻しくつて、尙且モデルを使つたので御座いますよ、谷中に居りますおきく婆さんから雇ひましたの、以前の博覧會の時のよりか少しはまア佳い積りなんで御座いますけれども如何でせうか、奈ういふ處から考へると仰在るんで御座いますか、まア彼の私は平常でも斯う大きな氣持から考へるので御座いますよ、「卯の花垣」を書きます時には始め長閑な娘を書き度いと存じましたの、而して四月下旬か五月の上旬德川末世頃の優しい娘が用事有りげでは無く、そゝろ歩るきと云ふやうにぶら〳〵出て、卯の花垣の靜かな家を二人で訪問ると云ふ風な積りでね、夫れで一人の方は最う日傘を窄めて居りますと一人はまだ傾しげてさして居るんで御座いますよ。



「庭傳ひ」で御座いますか、彼れは秋も最う暮れで殊に日暮の積りで御座いますから庭の燈籠には灯も點い

て居りますし、鼓を持つて居りますでせう、樂器の中でも鼓が何ぞの淋しくつて音色が秋といふ時候に合つて居るかと存じましたから夫れで書きましたの。

何かと申して顔を書きますのは隨分樂のしみでございますよ、其代り苦しう御座いますけれどもね、まア第一が格好でございますね、夫れから着物の着付や模樣なんかも苦心致しますの、で失禮とは存じながら外出へ出ますと皆樣の召して被居るお召物や何かに氣を付けるやうになるんで御座いますよ、何んでも斯うはつきりとした大きな柄が見る目に氣持が好くつて宜しう御座いますね、決してね自分があゝいふ着物が着度いの、斯いふ帶がしめたいのつて云ふやうな事は御座いませんが、只だ自分の畫く畫に着せ度いと思ひましては、色の配合や何かにも自然注意するんでございますよ、幾程流行だからつて其人々に似合はないものを着たり致しますと切角の好いお召物でも却つて妙に可笑しく見えますからね、よく氣を付けて居りますと畫きます時の參考に成る事が澤山御座います、模樣の參考に致しますのは、三越から出ます時候だの、草紙の田舍源氏なんかの畫にも種々面白いのが有るんで御座いますよ、夫れから別に模樣本と云ふのが隨分澤山御座いますの、其時候々々に合はせまして成るたけ飛離れのないやうに氣をつけて居りますの。丁度私は四年ばかり村田丹陵先生に願つて手ほどきをして頂きまして、夫れから水野年方先生へ參りまして入門を願ひました、はア西洋畫も少しばかり致しましたの、あの研究所といふやうな處へ參つたのでございますか夫れはもう眞の少しの間で御座いますから、ですから人物ばつかり習つて居りました如何しても花鳥等も少し稽古を致し度いと存じましてね、遅ればせに只今跡見玉枝先生に就いて花鳥を學んで居ります。私は唯だ最う畫が大好きと申すばかりで、些少とも出來は致しませんが、夜分等も大抵は休んだ事も無い位で畫筆を持つて居ります、まア私の日課と申しますと、家政の事は成丈手早くして仕舞つて畫を書くと云ふだけで、御覽の通り家内も良人と書生と三人ぎりですから、大

抵宅に居て稽古致して居ります、ですから學校の同窓會なんかへもめつたに出た事は御座いません、ハイあのお琴だけは致しますよ、恰度、お隣の方が尺八がお上手で御座いましてね、月の好い晩なんかお吹きになつて被居るのを伺つて居りますと實に何とも云へない程よくつて、氣が靜々するやうで好い氣持に成るんで御座いますよ。

御承知か知りませんが良人も倘且畫を致して居ります、はアあの西洋畫で以前はよく學校へ出て教しへましたけれども只今は宅で勉強いたして居ります、私は第一に良人を助けると云ふのを思つて居りますから、此後も自分の力で出來得る限り勉强致しまして、少しでも進歩致すやうにと思つて居ります。

と女史は一寸お立ちになりました、最う日も傾いたやうでしたから是れでお暇を致しました、玄關迄送つて下すつて、田端の停車塲へ行く途が分り難いから何ならお送り致しませうと仰有つて下さるのをお斷りしてお別れ致しました。

（十一月十四日記）

河崎蘭香女史

「夕雲」作成の苦心談

蝸象子

妾は只さへ技量の足りませぬ處へ、如何云ふものですか惡い癖がございまして、いよ〳〵日限が迫つて参らぬと如何しても畫けませんので、何時でも間際になつて急に火のつくやうな騒ぎを致して仕上げるのでございますから出來ましたものは何れも〳〵誠にお羞いものばかりで、畫會などのある時は何時でも後悔致します。今度の「夕雲」などでも、展覧會が開くと承知致したのは今年の春の事ですから、十月廿日の期限迄には隨分日數もあり、思ふ存分にゆつくり畫けたわけでございますが、矢張り何時もの癖が出まして、十月へ這入つてから漸く着手したやうな次第で、全く追はれるやうにして畫きましたから、誠に粗略なものが出來ました。自分では秋の夕雲の淋しいやうで荒れたやうな而かもかう那邊とも無く澄んだ處を現はしたい積り

でしたが、其の心持が如何も現はれて居らぬやうで御座います。

今になつて考へますと、日本畫でもつて、而かも妾ら風情が、恁んな大きな畫題に手を着けたのは餘りに大膽でございました。之れが西洋畫で御座いますと、其の雲の具合などを面白く畫き、一見夕雲と會得させる事が能るでございませうが、日本畫ですと、雲を澤山に畫いては、只だ畫面がうるさいばかりで、すうツとした心持を出せません。それで妾は雲としては後の方へ夕映のやうな色をほんの少し位使ふ丈にして、若い女が廢れかゝつた奧庭へ出て、何するでも無く只だをツとりと眺め佇んでゐる其の一帶の光景の中に、秋の夕空の澄んだ乍らも暗い淋しいものが上から覆ふてゐるやうな處を現はしたいと思ひましたのですが、全く失敗で御座いました。日本畫には矢張り切ないとか優しいとかと云ふ體度が適當しいのですから、其樣云ふ風のものを畫けば宜しうございましたのに、生意氣に彼んな考を起しまして……。是れも經驗になりませうが、兎も角も好くない癖で御座います。

人樣の御說を伺ひますと、畫題を先に定めてから其れに適當な繪を畫くのがよいか、或は繪を畫いて後に畫題をつけるがよいか、と云ふ事に就て色々意見もあるやうでございますが、妾は如何云ふものか畫題を先にする癖がございまして、今度なども「夕雲」と云ふ畫題の下へ何も彼も集めるやうに致しました。

すると先づ困つたのは彼のモデルで御座います。秋に適當しいのが欲しいとおもひまして、最初から嬋妍なのを望まないで、成る丈淋しみのある而かも那邊かおツとりとしたのをと思ひましたが、ふツくりと肉付の好いのは淋しみが無く、又瘠せたのは淋しみはございますが只だそれ丈けでもいけませず、何うも注文通に參りませんでした。

彼の繪を畫きかけました頃は、展覽會の爲に恰度踏方でモデルを使つて居ましたので、周旋者に賴みましたけれ共、モデルと言つては好いのも惡いのも殆んど無かつたものでございますから、最初は友達に賴んで

なつて貰ひましたが、其人は大變忙はしいので、此方で十分も言つて居られず、兎角する中に周旋者から背の低いポチヤ〱とした可愛い娘を寄越して呉れました。然れ共妾の畵かうと思ふて居ります繪に此のモデルでは一寸困りますから、周旋者に恁う云ふ風なのをと能く言ひ含めて、外のに來て貰ふ事にして歸へしましたが、さて代つて參ツたのを見まするとと何うも思はしく無い。それで今度は心安いお孃さんに來て貰ひました。此方は大變好うございましたけれ共、何しろ職業で無いものですから、こちらで遠慮して、も少し斯樣とか彼樣とか言つて十分使ふと云ふ事が何うも能きにくうございますので、これも一日で止めました。それから色々手を廻はして漸く索ねましたのが彼の繪になつてゐる婦人で御座います。



背景に色色秋草を添へて見やうかとも思ひましたがゴチヤ〱と澤山畵くよりもあつさりとした方が却てすうツとした心持が現はれやうかと思ふて、僅に一種の草花を畵ときました。之れは原名は何とか申しましたが、我國では餘り見受けません。花は黃色で

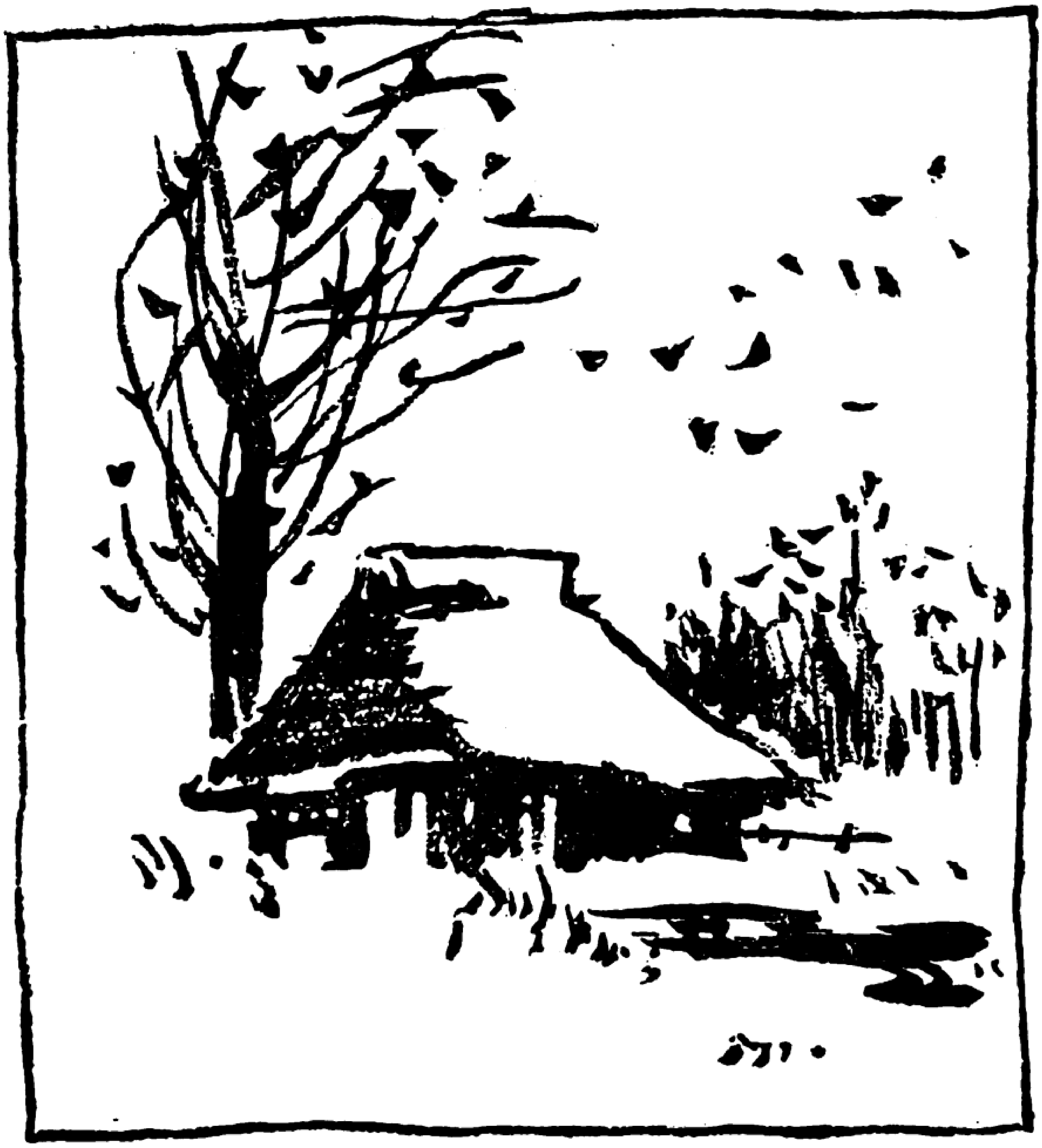
照日葵の小さい姫日廻と云ふのに能く似て居ますが、それとは全く別物です。姫日廻は丈は低いですけれど彼の繪に書きましたものは丈がのび〳〵として、最も高いのは二間程もありませう。秋の末頃に華麗で無く那邊か清々しい花が咲きます。それが妾の知つた家のつい隣りにあつて、非常に面白い花ですから、一度書いて見たいと思ふて居ました處へ、今度の事がございましたので恰度適當しいと存じまして、花を頂いて參つて寫生をして書いたので御座いますが、彼の繪の上には些も花の風情が現はれて居りませぬ。

尤も實物はもつとつや〳〵とした美い色なのを、日本畫で實物通りに寫生しては、何うも卑しく見えて可かぬと思ひまして、彼の花は實物とは大分異へてございますが、或る方の御批評を伺ひますと、それも其樣かも知れぬが、今少しく鮮やかな綺麗な色を出した方が却て好くは無かつたかと申されるので厶います。

彼の女の着物なども何うも書けないので困りました。木綿物は皺が堅う厶いますから繪の上には自然堅い線で現はし、縮緬や絹物は皺が少なくてどろりとして居ますから自然軟らかい線で現はすので御座いますで美人を書きますには、此の軟らかい線が適當なやうですから、彼樣云ふぽつとりとした着物に致しましたが、さて其の裾を纏めますのに大變苦心致しました。此の纏まりが旨くつくと、繪は餘程締つて參りますが其れが妾らには却々能きないのでございます。

着物の色は、成るだけ秋の心持を逸さぬやうにと思ひまして、最初は草色に茶色がゝつた極くさびたものに爲やうかとも存じましたが、其の向ふへ當かうと云ふ花は黄色くて葉が青いですから背景と略々同じやうになるので、配色上何うも面白くございません、それで、他の淋しい冷たいやうな何か工合の好いものに爲なければならぬと思ふて用ゐましたのが、あの薄藍色で御座います。之れが果して好かつたか何うか分りませんが、藍色は一體に寒そうな感じを與へ、其れに些でも紅が入つて藤色のやうなものになると、温かい感じを與へるんぢやないかと思ふて、彼樣なとに致した

のでございました。表情は殆んど總て顏で現はしますから、顏は繪の主眼で御座いますが、妾が之を畫くと、何時でも同じ彩色で同じやうなものばかりが出來まして、畫題の意味を顏で十分現はし得ないので困ります。今度の繪も矢張り其の傾きがございませうと思ひます。何うしても自分の好きな顏に偏りまして、幾度畫きましても似てくるので、繪には大變不都合でございますから、何うか今少し我を捨てなければならぬと、常々考へてるので御座います。



彼の繪を見まするど、髮の様子なども、ちと可笑いでやうで御座いませう。此頃下町邊で流行る銀杏返しは、あれよりはすツと意氣に出來て居りますが、彼の人物には餘り意氣なのは如何かと存じまして、殊更にあゝ云ふ風に致しましたが、何うも自分の理想通りになつて居りません。

手を畫きますに就ても隨分困りました。若し西洋畫でございますと、手

の工合で遠近を見せやうと致すには、暗い光線を用ゐて、自由に好ましい形態が出來ますが、日本畫は大抵線ばかりで遣りますから、形態の上に幾らか不自然が出來てまいります。で寫生通りですと好い格好が出るかしらと存じて幾度か書更へても見ましたので、今度は手には一番苦しみました。

女の帶は白色を用ゐて置きました。彼の繪には外に白色を些しも使つてございませぬから、之を此の色にしてすツきりとした氣持を現はしたいと存じたのでございます。後ち或人の批評を聞きますと、帶を白色にしたのは大變さツぱりとしてゐるが、畫面全體から言ふと、女の顏に集注して見る人の注意を、帶の白い爲に却て散らして仕舞ふ恐れが無いか、顏に對する帶としては、今少しく如何にかなつたらうにと言はれました。成程尤もな御說で、言はれて初めて氣が附きました。つまり部分〳〵に夢中になつて全體を忘れて仕舞ふからの事で、之れにつけて熟々經驗の必要な事を覺りましたのでございます。

季節料理

◎豚の味噌煮

豚の肉を刺身の樣に薄く切りて、之を鍋に入て煮出汁か又は水を十分に加へて煮詰め次に大根や、胡蘿蔔や、葱などを切つて入れ味噌を合せ砂糖、酒などを加へ味をつけて胡椒をふりかけて膳に上すなり。

◎ほうれん草ひたし

まづほうれん艸の芥と枯葉を除きよく水にて洗ひ水を切り、根元をそろへ、數個の束となし、これを沸湯の中へ入れ、暫らくしてほうれん艸の周圍に泡の生ずるを待ちて裏がへし、更に一回煮立てゝ取出し、これを冷水に放ち、兩三回冷水を取かへ、よくひやし、取出してよく水をしぼり、又煮出汁と生醤油とを等分に合せたる汁の中に一寸浸し置き又これを取出し汁をほどよく搾り、根元のところを少しく切り捨て、一寸五分ほどの長さに切り、葉先の方と根元とを前後してそろへ皿に盛り、花がつをおくか又は炒りたる罌粟をふ

りかけて出す。

◎大根のふくめ煮

まづ大根の皮を剝いて小口より五分位の長さに切り、それを縦十字の銀杏に切り、少量の米糠を加へて柔らかになるまでゆで、別の鍋に味淋醬油等分の汁を煮沸てゝ其中へ投じ、ほどよく煮へた頃、鰹節の粉に包んで器へ盛るなり、さてかツぶしの粉の製法は薄く削ツたかつぶしを炒り鍋へ入て暖め、擂鉢へうつして細かに擂りて篩でふるひ出て味淋醬油を鍋に入れ、湯煎にかけた中へ投じ、竹箸で底からかきまぜながら汁を乾かすなり。

◎蕪のおろし薄あんかけ

まづ蕪の皮をむき、水にてあらひ、水をきり、卸し金にておろしおき、別にほぐし卵と煮出汁とを一杯と二杯との割に合せ、これに前のおろし蕪を布巾につゝみ、極く軽くしぼりて加へ、猶これに生醬油をほぐし卵の量の五分の一ほど加へ、味をつけ、これを數個の茶碗へもりわけ、茶碗に蓋をせずして蒸籠の中へ入れてむし、薄あんをかけ、おろし山葵を添へ蓋をして出すなり。

◎大根の風呂吹

冬大根の大きなるを撰び、皮をむいて之を五分位の厚さに切り、釜に入れて茹でる時、釜の湯に酒を少々注すか、又は白米の洗つたのを少しく布巾に包んで入るれば味ひは一層よくなるものなり、さて茹であがりたらば器に盛りて、胡麻味噌をかけて出すなり、さて胡麻みその煉り方は、まづ黒胡麻を煎り、これを擂鉢にてよく擂り置き、別に胡桃の皮を去り、ぬるま湯につけて垢を出し、これも擂鉢に入れてよく擂り、そして赤味噌をまぜて裏漉にかけ、砂糖と煮出しを適宜に加へ、火にかけてほどよく煉つたところで鍋をおろし、右の胡麻をまぜるなり、猶胡麻は五人前ならば五勺ほど、又胡桃は二つ三つほどにてよろし。

最も安全なる生活上の一方便

矢野恒太

一　簡易なる家財の保護法

火災保險は我々が火災に遇ひし時、その會社より保險金を受取つて損害を免れるといふ仕組のものであるから、其の必要な事は言ふ迄もないが、此の保險中、主婦として最も心得置くべき事は、家具に保險を附する事で、中流社會の人々に取ては最も急務であらうと思ふ。先づ考へても御覧なさい、此の澤山の家具が一朝火災で無くなつたとすれば更に之れを買ひ集むるは容易な事で無いでせう、のみならず家具に保險が附て居ないとすれば、火災の際に之を取り出さんが爲め猛火中に飛び込むやうな氣も出でゝ其の爲めにどんな災厄を蒙らぬとも限らない。然るに保險を附してあれば、只自身と家族一同との危害を避くるに勉むるのみでよいのである。が、此の必要なる家財の保險を等閑にして、實行して居る者の少數なるは驚くの外はない。

また會社の者も、家具に保險を附ける事を左程希望しない、といふものは元來家具は一種の動產であつて、甲所より乙所へ轉じ、乙所より丙所へ轉せしむる事の出來る自由の便があるので、家具を他に運搬して置き、自ら出火して保險金を受取らんとする樣な强慾非道の輩があるからであらう、故に家具の火災保險には、信用といふ事が必要條件となつて居る、即ち信用の出來る人物と見込めば、主人の書籍、衣服、その他の日用品を目的物として、保險をつけるといふ事になつて居る。假りに、總ての家具が三千圓の價値あるものとすれば、場所にもよるけれども、大抵は之に對して十五圓より二十五圓位迄の保險料を拂へば、一ヶ年はそれで安心が出來るのである、今それを同金額の土藏を建つるものとすれば、建築金額の利子よりも保險率の方が遙かに安いのである、若し假りに千圓の土藏を造るとせんか、年々八十圓内外の利子を拂ふべき義務

があるでないか、而してその土藏が、果してあらゆる家具を保護するかといふに、僅かに餘所行の衣類、客用の夜具位を保護するに過ぎない、のみならず土藏は絶對的に防火の効あるものともいはれない、然らば一千圓を投じて土藏を造るべきか或は一千圓の火災保險を附する方が利益かといはば、無論後者を採るべきであらう。

時正に梧桐婆娑として庭前に舞ひ、市街の警鐘は、一夜なりとも止む時がない、去れば主婦たるものは、豫め意を此に用ゐて、事を未發に防ぐ準備が必要であらう。



二　俸給取の安全策

俸給によつて衣食する家庭の、第一の資本は何であるかといふと主人の身體である。若し主人にして、一朝不測の事に罹れば、父母妻子を擧げて、生計費の供給を失ふて、路頭に哀を乞ふの人となるは、その例決して尠くない。此の點より

考ふれば、一家の主人たるものは、身體强健の間に、生命保險を付けて、萬一の場合に處する覺悟と準備とがなければならぬ、然るに今日中流の人々の現狀を見るに、遺憾ながら主人の身體の生命保險によつて、保護されて居るものは、約半數にも充たないのである。

我々の營業上の經驗よりして、最も痛切に感じ、また最も同情に耐えないのは、主人の死亡である。然るに多くの人は最初生命保險を勸めると、意氣昂然生命保險の不必要を唱へ、死後の事迄心配は仕切れるものでない、例令死んでも生命保險の厄介にはならないといつた樣な見幕でゐるが、奚ぞ知らん、一夕忽然として白玉樓中の人となるのを往々見受けるのである。古人も『命は朝露の如し』とか、又は『電光石火の如し』と迄形容してゐる事であるから主婦たる者は片時も警戒を怠る事は出來ぬのである。飜て日本の家族制度を見るに父母妻子の眷屬が一朝主人の死亡に際して、無止親戚朋友に身を寄せるのを甚だ不甲斐なき事として居るが、苟も中流の生計をなすものならば、保險料として月に二圓や三圓の積み金は出來るに相違ない、それで死後千圓の保險金を遺族の者が得たとすれば、それを資本として鳥渡した商店位は直に出す事が出來て、敢て他の力を假らずとも濟むのである、それ位の事が出來ぬとすれば何事も出來るものでない。然るに頑固なる主婦、又は迷信的の老人などは、間々之に反對して死を待つの必要ないなどゝいふけれども、敢て生命保險は死を待つものではない、寧ろ生の長きを希ふものである。故に主婦たる者は生命保險は何故に必要なるか、を充分理解すると共に、家庭の幸福を圖る上よりして、之を主人に向つて勸誘すべきものである。

三　生活の苦痛なき人と生命保險

富める人の生命保險は、前に申した俸給に衣食して居る人々の、生命保險の意味とは少しく違ひ、單純なる貯蓄の意味と見て差支なからう、且つ生命保險は人の禍を共通にし、夭死したもの丶災害を、長生した人

が補ふといふ組織であるから、若し孤兒院又は赤十字社等の慈善事業に贊成する位なら、同一なる慈善の意味を有する生命保險にも贊成するのが、富豪たるもの丶義務であらう。此の制度が充分發達するならば、主人の死亡後、老人を保養院に送り孤兒を孤兒院に送るなど云ふ悲慘な事は、自然滅却するであらう。人が不幸に陷らぬ前に、人を救ふのであるから、慈善の上より見ても富豪の主婦たるものは、その主人を勸誘する樣にするのが、至當の責任であらうと思ふ、而かも此の事業たる、他の純然たる慈善事業と、其性質を異にし、金はいくら出しても、その金は純粹の慈善事業の樣に全然放棄するのでなくして、死んだ後は之を受取る權利がある、尤も長命した場合には、利子が低廉に當るかも知れぬが、そこは考へ樣一つで、一夜に千金を投じて尙惜まざるのみか實際無駄な小使錢を多く使ふ事を思へば利子の低廉位は、何でも無い話であらう。斯くいへば或は寧ろ銀行に貯蓄して置く方がよいといふ人があるかも知れぬが、何十年といふ長



い間を、少しも欠けなく貯蓄するといふ事は、全く不可能の事で、少しく欲しいものがあると直ぐその貯蓄を止めるのみか、既に貯蓄したもの迄も引き出す事になる、即ち自然我儘になり、結局貯蓄を廢する事になる。然るに之を會社に托して置けば、會社はその都度請求に行くから、知らず〳〵の間に貯蓄が出來る。或は又生命保險にはいる事を、非常に不面目の樣に思ふて居るものがある。例へば我輩は未だ生命保險の厄介を受ける程に零落はせぬといふ風に生命保險は恰も貧乏人の集合所でゞもあるかの樣に考へて居るものがあるが、是れは誤解である。例令百萬圓の財産家と雖、一朝の失敗に、忽ち雨漏る茅屋に身を托する事がないとも限らぬ、活ける歷史は明に我々に此の事實を教へて居るではないか。

思ふに日本婦人の位置は、一に主人の腕一本に懸る事なれば、一朝の榮花を樂みに、後の計を爲さないならば、思はぬ悲慘に陥るであらう。斯うなつてから、始て目が覺め、俄に生命保險に加はらんとするも最早如何ともすることが能ぬ。

四　疾病と主婦の覺悟

世の陰鬱なる家庭は多くは疾病に襲はれて居るものである、病の家庭に對する影響は實に大なるものである。故に出來得べくんば、恰も各國の帝王に侍醫ありて、常に診斷を怠らざるが如くに毎日毎週診斷を受けて、身の豫防を勉めたいものである、然るに常に來往して居る醫者は、例令多少の弱點ある事を知つて居ても、御世辭のつもりか容易に指摘してくれない、却て健康なりと稱し、それで自分の責任を逃れて居る者が多い。然るに生命保險の醫者になると、御世辭は大の禁物で、わるければわるい、よければよいと宣告する故、實際の身の價値が解る、會社の立場よりして、遠慮なく弱點を指摘して貰ひたいといへば、忌憚なく指摘する、此の指摘によつて重症に罹らんとして全快して居る人は決して少なくない。

そして若し生命保險を付してあれば、一朝病の犯す

所となつても、生命保險の掛け金の外は、擧げて藥品滋養品に投ずる事が出來るのである。若し斯樣な事でもなかつたならば、全く精神上の死刑の宣告を受けたも同樣であらう。自分は此の病氣によつて、父母に先んじ、妻子を遺して逝かねばならぬと考へたならば、人情として一錢の金なりとも遺さんと試むる故、煩悶し、苦惱し、いやが上に病勢を增す事になるであらうが、若し生命保險を附してあれば、非常に心强い事であらう、故に主婦たるものは、後の安全を圖ると共に家庭の强固を致さんとするには、須く此位の心掛は無ければならぬと思ふ。（六尺生筆記）

明治母の會懇親會

明治母の會懇親會は去月九日午後一時半より本鄕中央會堂に於て開催されたり、先づ英語組と幼稚園生徒の『歡迎の歌』あり、唱歌『いらつしやい〳〵』は幼稚園部の可憐なる少女と少年だけに喝采せられ、對話『秋の日』は三人の少女が秋の野邊に菊花と畵帖とを交換する對話劇なるが、語調が明確して表情も甘く頗る同情を惹きたり、次に英語組の唱歌『廣き世界』と幼稚園部の『少き旅人』てふ面白き遊戲あり、英語劇『感謝祭』は挽粉人や來訪人料理人など大勢の少女と少年とが扮裝して出演したりしが何れも會話の流暢なるは感服の外無く中には老夫人ミセス、グレーを演じたるメレー、コーッコーッ氏の令孃は流石にお手のものにて申分無く、最後に七面鳥が喞ち言を呟きつゝ逃げて行く後から、グレーが愕いて居睡を覺め追ひ掛けるあたりは最も滑稽にて喝采されたり、其れより外國少女少年の唱歌、岸邊福雄氏の輕妙なるお伽話、琴、ヴワイオリン、英歌獨吟等を經て最後に會衆一同にて君が代を唱ひ終つて一同別席にて茶菓の饗應ありおもひ〳〵の談話をなし散會したるは午後五時過なりしが來會者は婦人と幼年者とが大部を占居たりき。

予が見たるブライアン夫人

米國文學博士　山下彌七郎

大統領の候補者ブライアンは、ルーズベルトに比すべき西半球の偉人物である。その懸河の如き雄辯は、希臘のデモスゼニスをも壓して、自由、平等、博愛より割出した政事上の主義は、今、已に世界の一勢力となつてゐる。二十四歳にして、文學博士、法學博士の學位を受け、三十歳にして、代議士となり、三十六歳にして、大統領候補者となり、理想の高き、人格の大なる、現代未だ、その右に出づる者を見ません。

氏常に曰く、「人格の高からざる人は、家庭の趣味を味ふことが出來ぬ。家庭の趣味を味ふことの出來ぬ人が、社會公共の爲めに、有益なる活動が出來やうとは、思ひも寄らぬ所である」と、宜なる哉、ブライアン氏の家庭の淸く美しきことは、現代稀れに見る處であります。この家庭の主人公こそ、即ちブライアン夫人です。

夫人の戀愛は何に基きしか

ブライアン夫人は、本年四十八歳、出は豪農の娘で名はメリー、今を距ること二十八年ブライアン氏が、首尾よくシカゴ大學を卒業して好配偶を求めんとした時、このメリーこそ、淑徳ありて、學識才幹衆に秀で加之、その家庭、極めて嚴肅なりとの聞えがあつた、而もメリーは、斯る才學無雙の身を以て、何故、ブライアン氏を戀したかといふに、言ふまでもなく、ブ氏の理想高く、才學德行、凡を拔きたるに因る事は勿論ですが、その近く情意を動したのは、其人物觀相的から來たもので、ブ氏が、顏面の巨大なるは豪快の性をあらはしその眼光の烱々たるは才智の絕群を示しその前頭部の擴大して居るのは正さに、智慮圓熟して居る相、其の口の大にして締りたるは意志の力あること、而して其の鼻の曲りたるは雄辯家たることを表示した

るものであるといふ事である、夫人この時、芳紀正に二十三歳。

夫人の修養と内助

夫人は、ブ氏に嫁がぬ前、已にセミナリー大學の文科を卒業して、文學博士の學位を有したのでした。その新しき沸くが如き才藻は、大にブ氏を動したるものでせうが、後、ブ氏に嫁ぎてより、永く良人が、政事家、法律家を以て、一世に活動せんとする志あることを思ひ、我れにして、政事、法律の知識なければ、どうして、良人の内助を為すべきやと進んで州の法科大學に入り、終に夫と同じき法學博士の學位を得たのであります。而して夫妻夫々辯護士を以て、世に立つたのに、その辯護士としての成功は、寧ろ夫人の方が勝ッて居たそうです。夫人は永く高等法院付の辯護士であり、學識の深いことも又良人以上であつた、それ故良人の大演説の原稿は、必ず先づ夫人の檢閲を經ることゝなつてゐます。そうして、若も、そ



の原稿の意味徹底しない處ろあり或は文字の穩ならぬものを發見した時は、直にこれを修正して出したといふ事です。初め夫人は、獨立して、辯護士の業務を執つてゐましたが、良人の政界に忙しい身となッてから一身を家事に委ねたのであります。

夫人の日常生活

ブ氏夫妻は、リンコルンといふ市に住して資産凡そ二百萬弗だと申します。邸内の廣さ、約そ十八萬二千七百坪まづ大概日本に於ける一個村位の廣さです、其中住宅の敷地が約そ一萬五千坪と申します。室内は二十八に分たれ其應接間に飾りつけた種々なる器には世界各國の珍らしい古器物など澤山あります。家の周圍はブ氏一流の田園で、遙にリンコルン市を臨み、四隣は極めて幽邃閑雅で實に絶景の地です。良人は毎朝六時に起床し、一時間計りは、必ず、この田園に出で丶働を執り、勞働した上、食事を終へ、軈て自ら經營して居る新聞社に出で論説を起草し又各所の演説會に臨まるゝのですから、日曜日の外は、毎夜十一時でなければ、寢室に入らないのであります。されば夫人の毎日の日課として、普通の家事、育兒の外は、各所より蝟集する來狀の整理を重なる仕事とし居られます、暇があれば尙訪問者の應接などをなさるゝのです。それから平素諸方から舞ひ込む書狀は、實に卓上に山をなしてゐます。夫人は、毎朝事務所に出で丶、敏速に之を檢閲し、整理し、速記者二名に、之を口授して、直に返事を出さしむるのです。斯の如くにして、私人たるブライアン氏は、忙しいのですが。又、ブ氏一家が、如何に美しく、如何に趣味あるかは、晩餐時の一家を見れば、知ることが出來ます。晩餐時には、一家擧つて食卓に着く、而して、その日の出來事を細大となく語り合ひ談じ合ふのです。この時は、子供等の學校の出來事が、主として話題に上ります。

日曜日に於ける夫人

日曜日は、平日の多忙に反對して、全然宗敎の信仰

と、一家の團欒とに時を送ります。ブライアン氏は、凡そ八時より九時の間に起床し、十時半に教會に行き安息日學校の教師をつとめる、夫人また之に從ひて、半日を信仰的生活に費さるゝのです。而して午後一時頃に家に歸り二時半頃までに食事を了り、それより、客室に於て、家族團欒の上音樂を初めます。令息は唱歌を歌ひ、令孃はヴワイオリンを彈じ、夫人自らは、ピアノを奏するなど、實に樂しき有樣です。それより四時頃より三臺の馬車に分乘して、散歩に出で、七時頃に歸宅し、夕飯を濟し、再び來客と共に音樂を樂み、十時就床することゝなつてゐます。



善い事は褒める

ブライアン家の育兒法は、積極的であります。子供を叱責する事は、決してありません。それは善いことだから遣れと云ふ風に、常に子供の精神を鼓舞することをのみ考へてゐます。されば、同家にて子供を叱屬したことは、絶えてないのであります。而しも子供に善い事のあつた時には、皆の面前で褒め稱へ又惡い事のあつた時には、之を皆の前で質さずして、

必ずや、晩の休息時間を待ち、其の一人だけ寢室には入らしめないで、諄々と說き諭すのであります。されば、子供に對して、やかましい敎訓をせずとも、自ら善を勵み、惡を再びせぬやうになつてゐます。要するに、兒童敎育の方針は、飽くまで自由制度を用ゐて、寸毫も子女の意志に束縛を加へません。その意の儘に放任し、各自嗜好の軌道に向つて進步發達せしむることを力めてゐます。ブ氏には三人の子あり。長女は二十四ですが十九の時、或る富家に嫁ぎました。次は、十七歲の男兒、十五歲の女子とですが幼少の折には邸內に小學校を設け、そこで勉强させられたものです、この小學校はブ氏夫妻が、特に設立されたもので、校規や敎員は、全く公立の學校と同じく、生徒は他の子供を加へて僅に五六人しかありません。

ブライアン夫妻は、簡易生活の人です。彼れの田園生活は、一種特別なものでその一例は、一昨年より昨年に掛けて、世界漫遊の途に上つた際にも、決して一人の從者をも伴はないで全く一家四人の同行であつた夫人の風采と擧動は、優美なる日本婦人の風があります。彼れほどの才學を有しながら、良人に對して一言の對抗を致しません。又その已むなき招待ある外は、決して外出をせず。好んで交際社會の花となる事は、大嫌であります。

爪磨化粧法

京橋區月島の小林鐐子といふは美顏術婦人の髮洗ひを業とし殊に日本人には耳新らしきマンキユーアといふ爪磨きの職業を營み每月百圓以上の收入あり同女はもと横濱にて夫吉五郎と共に種々の商賣に失敗せし結果、同地の石炭商マテン氏が勸むる儘爪磨術を覺へ今より十年前に始めて專ら歐米人にのみ施術なしゐたるが世話する者ありて卅六年中現今の地に移り各ホテルを始め各國大使館に出入して盛んに營業に從事し居ると云ふ、其爪磨きの術と云ふは爪の垢を取り去り鼈甲磨にて爪を摩擦し磨き上ぐるより、自然爪の下の肉色が現はれ來り其の光澤は殆んど水晶の如く光りて甚だ美觀を呈す、されば歐米の貴婦人紳士は歡んで之れを行ひ、大抵の理髮店にては其設備ありて爪磨術を行ふ者は何れも婦人のみなれば、華客は自分の好む婦人の前に遠慮なく手をかくればマニキユリストは叮嚀に其の術を施すと云ふ仕組なり、日本にては未だ廣く知られざるも遠からずして流行を見るに至らんか。

家庭の單調を救ふの道

高田美根子

家政以外の温か味

○もしやこの戀成就せずば、一生涯獨身で通すの、事を一思ひに死んでしまふのと、理も非も辨へず騷いで、さて好いた同志が夫婦になつて見ると、その味嘗めて見ぬ前ほど甘くないのは、今さら珍らしからぬ言ひ草ですが、これも否むべからざる事實なのですから、幾たび繰り返されても、敢て抗議を申し込む譯には行きますまい。

◎殊に、近頃の自然主義とかいふ流れを汲んだ小説を御覽なさい。その多くは、家庭の單調なのに飽き、細君の餘りに世帶じみたのに厭氣を催して、その良人が若い女を戀したり、家庭に悲慘な出來事が起つたりすることを、臆面もなく書き立てゝあります。なるほど、廣い世の中ですから、そんな家庭も隨分多くあるのでせう、そんな不謹愼な良人も、事實世に存在して居るのでせう。けれども、細君に子供が出來たり、世帶の苦勞が多くなつたりして、それがために結婚當時の若若しさが無くなつたからとて、すぐに他の若い女を戀するといふやうな、そんな冷淡な男子を良人と傅づくほど、あはれにも不幸な婦人の境遇はありますまい。婦人の貞操も、婦人の重大なる任務も、こゝでは全く蹂躪され蔑視されて、たゞ〱男子の玩弄物になッて居る樣なものですもの。

◎新奇なものを珍らしがり、單調な生活を厭ふのは、人間自然の性なのです。子供に玩具を與へますと、始めの間こそ喜んでこれを玩んで居ますが、やがてそれに飽きて、再びこれを顧みやうともしないのは、われ等が日常實見するところではありませんか。われ等とても、子供の成長したものに過ぎないのですから、やはり彼れ等と同じやうに、「飽き易い性質」を備へて居るのです。たゞ少しく異る點は、子供は是非を理解

し判斷する力が、まだ發達してゐませんから、厭と思ひ出したが最後、頑是なくこれを投げ出してしまひますが、われ等はこれに反して、たとへ心の中では厭と思ひましても、人の人たるべき務めや、世の中の風習や、さては利害得失の觀念からこれを判斷して、また氣を取り直すことが、しば〳〵あるのです。

◎家庭が寂しくてつまらなくなッたからとて、自分の家をいぶせく思ひ、他の賑やかな家へ、勝手に遊びに行くとか、或は自分の良人が爺むさいからとて、若い男と手を携へて散歩に出かけるとか、そんな我が儘放埒な所業は、たとへ七歲か八歲の小娘にでも、場合によつては許されぬことがあるのに、況してや家庭をつくり、主婦の任務を帶びたものには、夢にもあるまじいことではありませんか。第一、そんな放埒な眞似をしては、わが良心に耻かしい、第二には、婦人として將た主婦としての任務が盡されない、否、倫理道德上の大罪人となるのです。男子の中には、隨分得手勝手な理屈をつけて、不品行なことをするものも、無いとは限らないやうです。けれども、主婦たるもの〻範の取り方の如何によッては、か〻る忌まはしい所業を、或は未發に防ぐことが出來るかも知れません。それですから、家庭が單調無趣味になつたり、夫婦間の愛情が冷めたりするのは、或る程度までは、避けがたい人生の事實なのでせうが、併し主婦たるもの〻修養と心がけとによッて、これを樂しく且つ温かにすることが出來るのです。

◎然らば、家庭に趣味あらしめ、夫婦間の愛情を濃やかに保つには、如何すれば宜しいのでせうか。これは實に平凡な、古い問題でありながら、而もいつまでも新らしく聞えて、緊要な意義を含んで居るのであります。

◎夫婦相和するのは、人間の務めです、家庭を圓滿ならしめるのは、われ等婦女子の天職なのです。けれども、務めだの天職だのと言ひますと、何だか他から無理に强ひられるやうで、自ら努めなければならぬ、といふ感があります。そんな窮屈な思ひをせずして、

何時となく知らず識らずの間に、家庭の趣味を增し、良人の愛を深からしむる法は無いでせうか？　答へて曰く、あります、慥かにあります！

◎昔から「女子供の知ッたことではない！」と、日本の婦女子は一概に輕蔑されて居ました。ところが現今ではこの言葉を訂正しなければならなくなりました、否、婦人たるものはこの言葉に對して當然訂正を要求する權利があるのです。專門的知識に渉ることは、いかなる場合にでも例外がありますから、これは別問題として、およそ日常普通の出來事で、男子が知つて居るほどのことは、女子もまた必ずこれを知らなければなりません、啻に知るばかりではなく、それに對して趣味を抱くやうに心がくべきです。而して、家庭にあッては良人の心事を解し、社會の出來事に對しては、良人とゝもに相當の注意や趣味を持つやうにすれば、決して女子が蔑視される筈はありますまい。



然るに、現代の婦人は如何でせう？　學校卒業の當時（若しくは結婚の當初）こそ、若々しい感情をも抱き、新思潮にも觸れて居るのですが、一たび嫁いで主婦となッた以上は、俄かに學業を廢し、見聞を狹めて、ひたすら家事にばかり屈托するやうになるのです、隨つて早くから老い込んでしまひ、思想が偏狹になつて、やゝもすると、良人の不滿足を買ふやうなことが生ずるのです。こゝに於てか、嘗ては熱烈たりし愛情も次第に冷却し、和氣靄々たりしスヰートホームも、いつか、荒寥たる共同生活所たるかの觀を呈するに

至るのであります。

◎斯う申しますと、或る人は、家庭を處理する任務はなか〳〵複雜して居ッて多忙である、況して子供でも產れやうものなら、その養育に全力を注がなければならないから、とてもその他のことを顧みる暇がない、と言はれるかも知れません。至極御尤もです。婦人は家事を治むべきもの、子女を敎養すべきもので、それさへ適當に成し遂ぐれば、その任務は了れりと言つても宜しからう。けれども、心を大きくして、靜かに考へて下さい、家事を治めるといふのは、下女の形容語ではありますまい、子女を敎養するとは、保姆の別名ではありますまい。單に家庭に起り來る仕事を取り捌く以上、將たまた子女を育てる以上に、その家庭全體を平和幸福ならしめ、家族を慰藉するに足るだけの、主婦としての温か味と機智とを持つて居なければ、未だ賢良なる婦人とは稱せられないかと思はれます。

◎家事に精勵し、子女を敎養するのは、もとより家庭に於ける第一の重大事で、それを正當につくし得ないやうなものは、勿論主婦たるの資格はないのですが、併しそればかりに屈托して、少しも餘裕を見出さなかつたならば、それこそ生活は單調無趣味となり、思想は固陋となつて、良人の目から見れば、どうも家庭が面白くないものです。それですから、或る人などは、たとへ家庭を構成し子女の母となつても、女は何處か娘時代の若々しい感情を保たねばならぬ、と唱へられる位です。とにかく、家事と子女敎養との外に、出來るだけの餘裕をこしらへて、讀書と交際と旅行とに、絕えず知見を廣めて行くことは、家庭の趣味を豐かならしめる點から言ひましても、また自己修養の上から見ましても、非常に必要なことかと存じます。

◎婦人會とさへ言へば、衣裳の競爭展覽會であるかのやうな狀態では、交際や會合も、利益よりは弊害の方が、却つて多いかも知れませんが、併しそれは一時の誤れる風潮が然らしめたので、決して交際そのものが惡いのではありますまい。否、交際や會合によッて、知見が廣められることの多大なのは、言ふまでもなく

明らかな事實です。今後の婦女子は、よしなき虚榮を避けて、眞に温情あり意味ある社會的交際を、ます〳〵盛んにしなければなるまいと思ひます。これやがて、婦人の知見と趣味とを開發する最好方便なのです。

◎春秋二季に、上野公園で開かれる美術展覽會へ行つて見ますと、婦女子の觀客は、男子の五分の一にも足らぬほどで、實に寥々たる觀があります。美術展覽會でさへもこの通りなのですから、學校の運動會や野球競技などには、婦人の入場者は、ホンの數へるほどしか見えませぬ。これによつても、現代の婦女子の趣味が、いかに局限されて居るかを察することが出來るでせう。なほ一層舊式な家庭になりますと、その娘たちが音樂會やバザーの話をしましても、母なる人は、四部合唱が何のことやら、低音部とは何を意味するのか、その言葉さへも知らない位なので、非常に談話者の感興を殺ぐことがあります。こんな有樣で、果して家庭の團欒が保たれるでせうか。



◎婦人の足を入れる地は、ただに三越呉服店と白木屋との陳列場に限られて居るのではありませぬ。歌舞伎座と明治座との外にも、清新なる娯樂を求めるのにふさはしい天地が、到るところに我れ等を迎へて居るのです。空の晴れた日には、出でゝ郊外に散策を試みるのがよろしい、子女あるものは子女を伴なひ、子女なきものは良人と手を連ねて、郊外清快の天地に逍遥ふ習慣を附けねばなりません。野に立ち、流れに沿うてそゞろあるくのは、たゞに心身を爽快健全にする

ばかりではなく、路傍の草も虫も、水も岩も、空にただよふ雲の色も、みな我れ等に一種無限の教訓を齎らすのであります。

◎かくして、知見が豊かになり趣味が高尚になれば、おのづから家庭に色彩を帶びて來ますし、また心身が健やかで、常に快活に日を送りますと、いはゆる青年時代の若々しさをも保つことが出來ますから、夫婦間の愛情は、とこしなへに渝らないでありませう。而もこれは、決して困難な務めではなく、思ひ切り一ツで、愉快に習慣をつけ得られることゝ信じます。

倫敦婦人の生活狀態　二

秋

▲朝のお化粧

朝食(ブリークファアスト)は大抵八時九時の頃であるが、此前に婦人は一應化粧をする。朝起きて、臥床を離れると、フランチルなり絹布なりの寢衣を脫棄て、單に靴下を穿き、猿股樣の物の外に下袴を着けた丈で上靴を引掛けて顔を洗ひに行く。顔を洗ふには、溫湯よりは冷水を撰び、海綿と石鹼(香氣の無きを良とす)とを用ゐ、最後に手拭で拭くと云ふ順序です。且つ普通の家には、寢室間近に浴室があつて、毎朝入浴をする樣になつて居ます。

顔を洗ふと一緒に、婦人は齒磨粉と楊子とで齒を磨き、口を含嗽する、次に櫛、刷毛類を用ひて髮を洗ふ、髮は束ねた儘として決して布片や糸等の裝飾品で之を結ぶ事を仕ない、のみならず、髮に油を塗つたり、香氣ある物を抹つたりするのは、良い風俗とはされないのです。尤も學校に通ふ女子などは、所謂妙齡(十三歲より十九歲まで)の頃になると、今日我國の女子に見る如うに、髮を捲いて、リボンを以て結び、更に年少の女子は、之を背後に垂して居るのが通例です。

▲着物の着こなし

髮を洗ひ了つてから、婦人は初めて衣服を身に纏ふ

ので、先づ襯衣を着、胸當を當て、それから袴と上衣を着け、最後に襟、襟飾、カフス、前掖の品々に及ぶが時としては、佛國の職工が用ふる樣な、袖の廣い一種の襠補襠の外衣を纏ひ、其上を帶で結んで置くことがあります。

それで、愈々朝食の席に列する時分になると、上靴を脫いで、編上げなり釦止めなりの黑靴に穿替へる。靴は長短共に用ゆるが、踵の高いのは不快なものだから餘り賞用されない。吾々が一口に赤靴と云ふ鳶色、黃褐色、乃至黃色の靴は、主として夏時に於て用ひられる、又漆塗の光つた靴は、英人は平生用ゐないが、彼の舞踏會に臨む時丈は男女に拘らず「ポンプ」と云ふ漆塗の靴を用ゐてゐる。又雪の降る日は固より、總じて天氣の惡い日には、婦人は長靴の上に、防水した木靴を穿いて外出します。



▲訪問は午後四時過

英國では訪問の時日は却々正しいものです。普通は日曜以外の日の午後四時乃至六時に他家を訪問するので、其他の時日には、極めて親密の間柄でゝもなければ決して訪問致しませぬ。そして如何云ふものか午

後でありながら、之を「朝の訪問」と呼んで居ます。婦人も亦た面會日を定むるのが、一般の習慣となつて居ます。之が爲に、平生其の名刺に『月曜日在宅』とか『毎月第一第三兩水曜日在宅』とか書添えて置く。在宅日の制度とは即ち之を云ふのです。

他家を訪問する際婦人が着て行く衣服は、淡白清楚にして、美麗なのを良いとしてゐる。時候に應じて、輕く薄く色を帶びたものは差支ないが、餘に華美なもの、其他總べて注意を惹く樣なものは成るべく避けます。又通例衣服の色に調和する樣な手袋、並に金銀の腕環を嵌めて行く。普通外出の服裝に比較すれば、訪問の服裝は、槪して立派である。

婦人が結婚すれば、其の新夫の家に行つてから程なく知人の訪問を受ける。其の結婚が披露せられた時と婚儀の擧げられた時とには、知人は直樣兩親の家を訪問して賀辭を述べる。之に反して知人の家に不幸のあつた折には、若干時日を經過してから弔辭を述べに行く、又他家の晩餐に招かれ、或は舞踏の會に臨んだ後では、數日の中に必らず其家を訪問し、或は名刺を其門に遺して來るのが、普通の禮式となつて居る。

▲晩餐のいろ〳〵

英國の家庭では、通例一日に四度の食事をする。其中、最も重要なのが晩餐(ヂンナー)である。其の定刻(通例午後七時)になると、報知の鈴又は銅羅が鳴る、之を合圖に、晩餐服を着けた紳士は同じ服裝の婦人の手を引いて晩餐室に入り來つて其席に就く。そして家の主婦は最も入口に近い食卓の端に、主人は其の反對の端に席を占め、又他の婦人はそれ〳〵其の連の紳士の右側に坐るのが法であります。

晩餐が果つれば、主婦は逸早く其席を退き、他の婦人も亦た續いて去つて仕舞ふ。食後に握手する習慣は英國にはありません。で婦人連が客室に行つて少時待つて居る間に、男子は酒杯を擧げ、且つ主婦の許容を經て晩餐室で喫煙をする。すると程なく主婦の迎ひを受けるから、男子も亦た續いて客室に入るが、それか

ら音樂などがあつて、晩餐は全く終を告げる事になります。因に云ふ。他家の晩餐に招待されて行くには、定刻以前に行つては惡い、必らず稍々後れて――十五分位が程度――行くのが習慣となつて居ます。從て晩餐の招待狀には「七時に御來車下され度、同十五分より相開き候」と云ふ樣な意味を書添えられる事が、近頃一般の紋切形となりました。

△盛裝と半盛裝

婦人の服裝は樣々です。舞踏服、晩餐服、訪問服、旅行服、自轉車服、海岸服、作業衣、朝衣其他衣服の種類は甚だ夥しくて、皆其の用途に從つて織物、地合、仕立方、裝飾等が異つて居ます。そして婦人は常裝の場合には、總て襟と腕とを被覆するが、盛裝の場合には、必らず肩から腕まで露出するのを法としてゐる。此の盛裝は私人の催す歌劇の席へは爲て出るが、普通の劇場へ行く時などは滅多に用ゐません。又所謂半盛裝の場合ならば、上衣の胸と背とを開き、肘に袖を着けて、半分程肩と腕とを露出した丈で宜いとしてある。袖は昔の樣に固く結着する樣なのが專ら流行で例の廣く膨脹したのは餘り見受けません。

△帽子と外套

婦人が外出するには必ず帽子を戴きます。未婚女子の帽子は縁附の氈帽或は麥藁帽で、リボン、鳥の羽根、又は造花などで裝飾してあるが、既婚の婦人でも往々同樣に裝飾した無縁帽を戴くことがあります。又寒中は婦人は海狸若くは海豹の皮で製つた無裝飾の帽子を着用する。帽子の外、婦人が外出の際、覆面を用ゐる風俗は今も昔と變りません。

婦人の外套類には短外衣、肩衣、外套、塵除外套、毛皮、外套、或は歌劇、普通の劇場、夜會などに臨席するに用ゐる防寒外套即ち所謂歌劇外套など〻云ふものがある。其他婦人の防寒用として「ボー」（毛皮製の圓き襟卷）或は毛皮殊に海豹の皮襟卷暖手套等が使用せられる。



儂の良人

南紫胡

○良人は今年三十四の工學士、惜しい事にはお頭が聊か禿げて居らつしやる。同窓の友の初子さんは、何と云ふまあ恐ろしい物好きな女なんだらう、何ぼ何でも彼麼方なんか熨斗を附けて與れるつたつて、儂ならもう〳〵眞つ平御免を蒙るわと誰れやらに非常な御氣焰であつた相だ。苦勞性の麻布の叔母さんは、眞實くさよお前、誠に以て物騒じや無いかね、彼れじやあともすると大學目薬の商標と〻つ違へられませうぜと頻りに氣にして御出での御容子だつた。加之に彼の恁うも可なり長けの詰つた巾の、お廣い面形の物言ひ給へば薄唇の秋風寒し、微笑の齒の根現はに悚然する程見事に目立つ御色の黒さ。定かにありぞとも分かぬお口髭の嚴しう、揉み上げ心ばかりわざと長めに少しは景氣の添へ給へど、お口元からお鼻の恰好から、現在妻の我が目に見てすら、今の若さを何のまあ因果でと終我れ知らず愚痴にもなりて、勿體なけれど況して人前肩身狹う、しみ〴〵とお頭のお禿げが見返される事もある。

○けれど――私には兩親がありませぬ。と云つて、何も私の兩親の無いのと良人の風采の上らぬのと直接關係のある理由では無いが、春は末つ方の卯の花清う、若葉の影に郭公の音聞こえ初めて、其れは淋しい小雨そぼ降る五月雨の夕暮れ方ではあつた。母が臨終の病床に密と招かれて、何故か四邊憚り給ふ小聲の吐く息忙しう、途切れ〳〵の今に決して能うは記憶して居らぬけれど、……父樣のお顏すら確とは記えぬ其方の、其の上にも又儂が死んで仕舞つたら、定めて便り無からう心細からう、さらでも蒲柳其方が十二の肩の瘠せ痛々しう一層以後目に見える樣で私は悲しいよ。何と

云つても、其方の眞身の骨肉と云ふたら兄さん一人限りなれば、隨分仲能くして父樣とも母樣とも大切に事へねばなりませぬぞ。去りながら苦い母が四十年の經歷、語らばさこそ悲しがりもせん泣きもしつらん、其方の樣な子供心に言ふて聞かせて夢苦勞を增させ度うは無けれど、迚も死ぬ身を唯一つ其方への置き土產。よしさらば、水に映る月影の照りもすれ曇りもすれ、設令血を分けた兄さんなりとも、始終の便りに男子は必ずすまじきものぞよ……とばかり。

　夜嵐さつと母樣知死期の面やつれ。

〇云ふ迄も無いが、兄さんは決して惡い人じや無い。僕等は兄一人妹一人の實に心細い身の上なんだから何時迄も〳〵斯うして仲能く暮さうねとお口癖の樣に仰つしやつては、其れは〳〵勿體無い位能つく私の面倒を見て下すつたものだ。嗚、併しけれど兄さんは男で居らつしやる。僕は僕の母樣の仰つしやつた事は、一一決して能うは會得して居りませぬけれど、早く旣に父にも母にも別れて、人の世の辛さ悲しさに幾度も〳〵泣かされた丈に、如何なる場合に煌く瞬間の人情の機微をも、心と心、胸と胸とで直覺的に自分は捕捉出來る樣になつた、と一人で信じて居る。而して然かも母樣の短い生涯を通じた悲しい運命と、私の今日迄の經歷とが妙に一致してる樣な心持ちがするんで、母が臨終の繰り言をも分らぬながら、自分は眞理だと獨斷て仕舞つたのである。だから思つた程にも無い男子の下らなさが寧ろ氣の毒な樣な、女子には有り勝ちの一種痛快な誇りを覺える。と同時に、心細い自分の身の上が一入身に沁みて來て、うら若い青春身空を花も無く鳥も無く、所謂人生の寂寥を誰れよりも〳〵深刻に味はざる可く餘儀なくされたのは事實だ。

　更めて云ふ。兄さんには美しい若い新婚の細君がある。

〇ですものを、怎うして私には外樣の方の樣に、理想の愛の、眞正の戀のと人がましう其麼贅澤な氣の利いた高尙な考へを有つ閑がありませう。もう〳〵飽き飽きした氣の滅入る樣な詰らぬ淋しい今の境遇から脫

れる事さへ出來れば、よしやお禿げであらうと私は自分の終生の所天とするに少しも躊躇致しませぬ。自惚れるではありませぬが、旦那樣は儂の事を可愛い奴だと仰つしやる。金輪奈落三千世界に良人程好きな男はありませぬと自分も言ふ。買物にも一緒に行けば用足しにも夫婦で出る。散歩にも旅行にも寄席にも芝居にも儂の影の動く處に良人の姿の添はぬと言ふ事は殆んどありませぬ。彼の死ぬ時にも、寧つそ斯うして夫婦に死にませうねと儂は言ふと、馬鹿！馬鹿など口では強う眞面目にお叱りになるけれど、去りとて決して不快顏は遊ばさぬ。此の頃香ひ入りの汗知らずか何かをお顏へ打ちつけて、後は絹ハンカチのきゆつ／＼と御器用さ、男方の樣にも無い、チック香水はバイオレットの香氣に鏡前端坐の小一時間。怎うだ、見返り給ふ得意のお眉。でせうともね、此處にさへ良人……とわざと伏目に俯きて、恥かしらしうほゝとばかり嫣然に打ち笑めば、チヨツ生意氣な、何言つてるんだと御目の色啻ならぬ。

○だから儂は、人並々に、宗教の道德のと高遠な人生の趣味を、家庭の仲や夫婦の間に要求は致しませぬ。よし又其れが要求し得たとて、短い私共の生涯に差し引き如何丈の利益を與へませうか。人間には別に人類自然の本能の要求と云ふものがあります。儂は他人に對して大した迷惑を掛けない限りは、決して良人の本能の要求は妨げまいと考へて居ります。お好きな御酒ならお身體に障らぬ程度にして、隨分召し食れお煙草も召し食れ、召して醉つたら小兒の樣にお狎戯けなされ何も此の廣い天地に小さな身體一つもてあつかつて我れとお心から世間狹う、然う／＼老い込んでお仕舞ひなさるには當りませぬと自分は言ふ。

○勿論決して、良人は餘り人格の高い方では居らつしやらぬ。近頃去る筋の土木工事を女子は知らぬ苞苴の幾包み、されば何處やらで軍艦の一つ新しう出來れば何處ぞの將官樣の御身代が急に滅つ切り太うなりまするとやら。萬骨枯れて一將の功空しからず、況して人民が血の汗の行衛すらも大方其處等に御座んせうも

のを、迚ものお序、一層五萬と十萬纏つた處で手つ取り早くお行つ付け下され。ダイヤ入りの指輪一つ買つて戴けるでも無き其麼端た錢を、去りとては所天の樣にも無い強う寛大なされ方、第一折角のお男振がお下り遊ばしますと、見て見ぬ風に氣も無く笑ひ立つれば否其れも大きに然うだと、ても扨てもお可愛らしさ。だつてね、僕だつて其れや何もと存外罪の無い横顔をわざと見込んで去る事は仰つしやらぬもの御意遊ばさぬもの。花や一時水色桔梗の敵は本能寺と目前に見極むる迄は。はてまあ、ほゝ御合點の惡い。全體所天には未だお早う過ぎますよと。

　良人は清廉の名社内に匿れも無い。

○お魚なら生鮭の極く油濃い物が大好物、小鮎の天麩羅にお茄子は鴫燒き、其の爲では無論居らつしやるまいけれど、御氣象がねつから怎うも淡泊して入らつしやらぬ。惡くすると毒々しい誤解され易い、元來は餘り他人に好かれる性でも居らつしやらぬが、併し我れと自ら求めて他人と等衝突は決して遊ばした事が無い大なる袋には何物でも入れる事が出來る。無暗に人と衝突を演る奴は、自體人間が鄙吝に出來上つてるんで畢竟袋が小さいからさと氣焔幾萬丈、頗る以て侮る可からざるものが居らつしやるけれど、なあに、彼麼因循な要領を得ない男なんで、相手にしてからが一向下さらないからと、之れも負け惜しみか友人側の評語は其れだ。

　勿論何處迄も曖昧な煮え切らぬ樣な單純な平凡な。其れが良人の特色でもある代り、他人に優れたお偉い處と先づ以て僕は嬉しい。

○女もすなれど、男は況して、妻の手前異性等の手前可笑しい位乙う取り澄まし方。生ビール波々と注がせて晩餐は醉後の駄法螺、出處は御手近の四疊半、御書棚の新刊物大概に目星は附けて一通り目を通して置けば、夏は夕暮れ謹聽の體幾時、皺や汗も淋漓に蚤さん蚊さん、爲古しの生欠伸噛み殺す片膝の崩れ、妻なればこそとつく〴〵感ずる。怎うせ世の中は之れに限る。

二千年來三千年來、同じ樣な事を言つたり爲たりして、天晴御自分では新發見でも遊ばした樣に正氣になつて盛んに髯をお引つ張り遊ばす。貴方今日、先生の御講義がお了解になつて？と云ふ友の顏を見て、分ら無くつてさ、由來威嚴の無い人間は犬に吠えつかれ易い……てんで御座いませう。いやもう、僕共は犬には吠えられる先生からは受け賣りを聞かされると大笑ひに笑ひ合つた學校時代以來慣れてる耳には、良人の受け賣りも左程不思議とも思はぬ。お前何か、僕の言ふ事を耳で聞いてるのか鼻で聞いてるのかと良人の問ふ事のあれば、ハア口で御返事申し上げてますわと自分は笑ふ。流石は興醒め顏に默つて笑つて外方向いて、人生男と生れて女學生は妻にすべからずと。生意氣な事を仰つしやる。けれど僕は、這麼人でも所天としたのを名譽として喜んで居ります。

◎隱元のきんとん

隱元をぬるま湯から煮て沸騰したる時ぬるま湯をさして三十分ほど煮、其湯をかへ、また代へて煮ること三回ほどすれば豆は柔かになる、さてその豆の五分の一ほどを取り分けて殘りを鍋にあけ、豆一升に砂糖凡そ二百五十匁と鹽少々を加へ火の上にかけ、別に取り分けし分を裏漉にして鍋に入れ加へて煮るなり、但し煮る時は箸や杓子でかきまわしては豆が崩れて不體裁になるものなれば、かきまわさずに且つ焦つかぬ樣鍋を斜に火へかけて絶へずゆりうごかして煮るなり。

◎鰤の照り燒

鰤の切身を二三時間生醬油にひたしおきて後ち、金串をうち、鐵架に懸け渡し十分におこりたる火にて燒き切肉に火の通りたる時火よりおろし、手早く新らしき醬油をそゝぎかけ、一寸あぶり、刷毛（これは藁しべを束ねたるもの）にて胡麻を塗り再び一寸炙るべし塗り胡麻の製法は黒胡麻をほうろくにて炒り擂鉢に入れ、よくすり、これに味淋の煮切と少量の生醬油とを加へゆるめたるものなり。

小説 時雨

月露女史

「貴郎は誤解計りしていらつしやる、さう惡く取られては私如何したら宜んだか……困つて仕まふわ。」

癇高な調子で云ひかけたが終りの方は力なく獨語の樣に消えてしまふ。

田舍にはよくある隱居所で四疊半一間のはなれ座敷上り口は土間になつてあとは總て庭で圍まれて居る後ろの方は奥庭の築山の蔭に當るので、松だ槇だ檜葉だと云つた樣な、常磐木で鬱蒼と繁つて居る、前の方は蒔かぬ種が生へた譯でもあるまいが、桔梗、刈萱、吾木香、コスモスなど、半ばすがれたのや盛りなのが入り亂れて高いのは人の頭の上で匂つて居る、かと思ふと其下には小松が妙にひねつて、靜かな日には晝ながら虫の鳴く音も聞えさう、何年にも手入れをしないで荒れるに任せてある中に自然で飽かぬ野趣が充ちて居る。

野分けの風が荒ぶので閉め切つた一間には、自暴に薫らす煙草の煙がムットする程籠つて居る。机の上には二三部の法律書が積み重ねて、その側には淺黄ちりめんの肘付きが時には枕の代りにもするらしい、ひどく垢染んだのが乘つて居る、その外には本箱が一ツと母屋からの借物らしい火鉢に鐵瓶。其に粗末な茶道具が置てある計り、殆ど無一物と云ふ有樣だ。

主人公は瓜生明と云つて、三十未だ家を成さずの老書生、司法省の試驗を受けて辯護士になるのだとか云つて居るが何時も〳〵又か〳〵氣の毒な程落第計りして居る、本人は其度毎に身の不幸を喞ちながら、矢張り懲りずに續けて居る、友人間では眞面目に同情するのもあれば、中には又、宜い加減に思ひ切るが宜い、運計りではあるまいと冷笑して居るのもあれば、何をしたつて才がなくつてはと云ふのもあつた。

向ひ合つて今迄大分何か云ひ合つて居たらしい女は谷玉枝と云ふオールドミス、もう三十二とか三とか、

明より上だけれど色白で小柄なのを上手に作つて居るので、一寸見ると二十三四、よく見ても漸く六七にしか見えない、髪も鬚も延びるに任せて、一向構はぬ大男の明と並べると慥に四ツ五ツは年下に見える。此二人は許嫁の仲なのだ、併し何も親と親とがと云ふ舊式のではなく、本人同士で約束して、お互に最少し如何かなつてからと、其實は明の卒業を待つて、一緒にならうと云ふ考で双方の親戚も承知して居るのだ。

　元來二人とも孤兒で苦い經驗も等しく積んで居れば寂しい胸も似た同士であつたので、ふと知り合になつて以來、打てば響くと云ふ樣な面白味もあつて、互に同情仕合つたのが、何時しか戀に進んだ迄で、別に珍らしい徑路もなかつたのだが、此頃になつてから、水性と云ふでもなからうが、玉枝は明を嫌ふと云ふ程ではないが、二人の關係を少し悔む形になつて來た、神經過敏な明は直に其れと見て取つた、今迄が少し變り物で、女と如何かうと云ふ經驗もなく、三十年來燃やした事のなかつた情を此度一時に玉枝に注いで、今は全くこれ一ツを命と思つて居る、色こそ白けれ顔だちは拙い方だが、痘も靨に云ふ譬か、嗜好に適したと云ふ譯か、明の眼には又なき美人に映じて居る、だからなか／＼落着て居られない、傍の見る眼も可笑い程に亂れて居る、影では腫物に觸る樣に注意仕樣と思つて居ながら、如何云ふものか會うと遂ひ嫌味と愚痴を浴せかけて仕まふ。

　玉枝の方は此處から四里計りはなれた處でさる私立の女學校に奉職して居るが、其處には又檢定と師範との二ツの黨派が分れて居て、師範出の無經驗な若い先生だちが巾を利かして、檢定出の自分だちは、實力はありながら其の下に立つと云ふ不平がある、女同士の表面を美しく見せる丈に裏面は一層縺れて居る、其で口惜い悲しい思を忍ぶ毎に、情の厚い明を思ひ出して寧そ今にも學校を止めて明と一緒になつて、ホームの人と成つて仕舞たいと思ふ、これも影では懷かしいと思つて居るのだが、逢ふと直に嫌味や愚痴や聞かされるのが、辛く、何處か意氣地なくも見えて嫌氣がさし

て來る、若く見えても女氣の自分の方が年上と云ふ事が先づ第一に氣になり出して、何だつて約束して仕舞つたらうと取り返しのつかぬ樣な氣もする、さらかと云つて義理、兄夫婦が今日迄に世話仕樣と云つてくれたのは、皆四十以上五十近くの人物で、地位こそ滿更ではない樣なもの丶、何れも二三人は子供もあらうと云ふ後妻口、又新たな氣象氣苦勞をと思ふと、此も氣が進まない、人には云はね今日迄に心掛けて貯へて置た結婚費寧そ其を學費にして二三年充分に勉强して、基礎を固めて一生を獨身で押通さうかとも思はぬではないが、オールドミスも氣が利かず、何だか世間の冷罵の的に立つて居る樣に思はれて、謂い知らぬ寂しさ犇々と迫つてくる、婦人會などで巾を利かして居る細君連の案外に無能なのや不容貌なのが眼に付て呪つてもやりたくなる、呼び戻す術はないと知りながら、空敷送つた靑春時代が惜まれる、云ひ込んでくれた人のないでもなかつたのにと思ふと傾きかけた家運計りにやきもきして、自分の事なぞ見返つても吳れなかつたので、徒らに嫁期を失して仕舞つたのだと、兄迄が恨めしくなる、結婚するなら廿前に、親とか兄とかに見立て丶宛行つて貰ふに限る、三十越えては盲目になる程打込んだ戀は出來るものでない、縱や一時は迷つても直に理性が顏を出して、辛い煩悶を醸す計りだなど丶思ふ事もある、併し今でも明の情の籠つた手紙を見たり、影で考たりすると好い人が逢ふ度毎



に何か嫌な氣のするのは、戀を戀して居ると云ふのではないか知らと、疑ふ事もある、で此頃は逢ふのが一種恐しい樣に感じられる、こんなで一緒になつたらまあ如何なるだらうと甚だ心細い、だが又相手の熱心なのを見ると、自分が惡い樣にも思はれて約束を破つては濟まない樣にも思はれる、でこんな事を取とめもなく考へて居る中は宜が、ふと忘れ樣忘れて仕舞ふとつとめて居る一事、即ち自分はもう處女ではなかつたのだと云ふ事を、地の底から叫ばれる樣な氣がすると、急にハツトして惡夢から覺めた時の樣に、全身冷水を浴せられた樣で掻挘りたい樣にいら〳〵してくる、寂しくとも悲しくとも、何故一生を淸い純潔な處女で通さなかつたらうと、口惜氣に身悶えして泣くのが此頃の習慣である、泣き初めるともう世の中に希望も何にもなくなつて、眼の前で惡魔が招て居る樣な心持がすると其れが明であつて何でも其れに順はねばならぬ樣に思はれて、只物狂ほしく泣き沈む、すると其あとは極まつて劇しい頭痛を起す、神經衰弱だと云つて醫者は轉地を勸めて居る。

「誤解つて何も私が誤解する譯がない。」

と、急き込んで云つても相手が默つて居るので、

「私が嫌になつたのでないなら、かうまで云ふのに式を擧げて呉れても宜ぢやないですか私はさうしなければ、とても卒業は出來ないとまで打明けて云つて居るんだ、玉枝さんの前には意地も何にもないんだから。」

「そんな事被仰たつて私にだつて都合もありますわ、今が今と急かれたつて……。」

「何も今が今直にどうかうと云はしないけれど、玉枝さんは何時迄でも卒業する迄は來てくれない積で居るのだもの、そんな水臭い心ではいざ卒業する時分にやどんなに氣が變るんだかと、私は其れが氣になつてちつとも落着て勉強なんかして居られないのだ、だから此度だつて又失敗してしまつたんだ。」

と情なさゝうに眼を潤はして、

「都合つてどんな都合か知らないけれど、式だけ擧て一緒に居てくれさいすれば宜んだ、そして少しの內辛

抱して今迄通り學校へ出て居てくれゝば、私だつて遊んでは居ないから經濟も立つて行うし何も云ふ事はないんだけれど、玉枝さんは私が嫌になつたのか、虛榮心にかられたのか……。」

「嫌味なんかよして頂戴よ。」

と周章てゝ遮ぎると、もう額には筋が浮き立つて居る。

「一緒になつてからも矢張り學校へ出るなんて其は御無理ですわ、友達の手前だつて、……まあそれは宜としても、若し子供でも出來たら如何……。」

と云ひかけたが流石に赤くなつて口籠る。

「子供が出來る迄には私だつて如何にかならうではありませんか。」

と一寸莞爾としたが直に眞面目になつて、

「よし卒業前に出來たとしてもだ、子供を育てると云ふ事は、自然にやつて行けるものださうだ、立ん坊にだつて子のある奴もある、玉枝さんさへ決心してくれれば何でもないいんだけれど。」

何が氣に障つたか玉枝の眉は愈よ險はしく言葉遣ひまで改まつて、

決心はして居り升とも先程から申上て居るではございませんか、私の申す事なんか貴郞は少しも聞て下さらないで責めて計りお出なさる。」

「責めはしません志は充分感謝して居るです、これからは貴女が學費を見繼で下さるから專心に勉强せい、其はよく分つて居る、併しさうなると貴女は私の恩人になる……。」

「何を被仰るのですよ恩人も何もありはしません、同じ事ぢやありませんか、今迄さへ學費にかまけて、御自分の勉强は充分になされなかつたのに、家なんか持つたら其れこそ乾度後悔なさるに極まつて居升、さうなつたらお互にどれ程辛いか知れません、お願ひですから何卒私の云ふ通りにして下さいまし。」

「理屈はさうかも知れん。」

兩手で挘る樣に頭を掻くと、ばら〳〵と雲脂が散る

玉枝は只ぢつと其れを見詰めて居た、何時の間にか風

も和で、靜かに暮れゆく秋の日は、名殘の光を鮮やかに照らして居る。

つと立つたかと思ふと、明は鴨居の下に行つて、障子に寄り添ひながら、其處に吊してある手拭を取り下しもせず、其儘顏に當てゝしまつた、玉枝は呆氣に取られながら、稚氣を帶びた大男のその醜態には眉を顰めずには居られなかつた、直ぐ近くで蟋蟀が單調に鳴き初めた。

暫時くする、明は洟を啜りながら席に戻り、しんみりとした調子になつて、

「矢張り私が惡かつたのだ、こんな事を云ふのも畢竟玉枝さんを疑ふから起るので、疑ふと云ふのもつまり自分が劣つて居るので心配になるからだ。」

「何を被仰るのですよ。」

と遮ぎつても明は臆せず、

「イヤまあ聞て下さい、劣ると云ふのは決してお世辭ぢやない、境遇が然らしめたのであらうけれど、一體私は僻み深い、子供の時から逆境に計り立つて居たので、青年時代にはもう妙にいぢけて仕舞つて、年より質素な考計り持つて居た。生れて親の愛に浴した事がないので、人さへ見れば要心してかゝつた、その根生が大きくなるに從つて、天をも人をも恨む樣になつた齷齪働いて名を成したら、如何するのだ、造物主のお先につかはれて首尾よく務め上げたと云ふ迄の事、何だ詰らないと腹の中で冷笑する、女なんか見るだけで胸が惡くなる、戀なんて何が詩的だと可笑しく思つて居た、生れ落つると孤獨な自分は死ぬ迄孤獨で、世をも人をも恐れずに悠々自若の精神を養つて、超然として世の外に立つてやらう、風に乘るのも一興だと氣焔計りは偉かつたが、坊主にでもなつたら宜かつたらうものを、矢張り負じ魂から不向と知りつゝ法律なんかに手を出したのも矛盾した話で成功仕樣道理がない。」

一寸息をついで繁々と玉枝を見遣りながら、

「貴女は美人だといふと何時も怒るけれど、色が白くつて眼鼻だちが揃つて居るのが、必しも美人ぢやない美の極致は必ず人を魅する力のあるものだ、此點から

私に取つて玉枝さんは、慥に美人に相違ない頑な私の性質を一變させてくれた、始めて慈母の懐に抱かれた様な暖か味を感じさせて、永らく鎖して居た胸の氷は解けはじめた、が併し未だ何處かに解け切らない處があるこれではならんと、始終自分で制しては居るけれども、北極の氷塊の様にともすると打付りたがるものがある、玉枝さんの眼には嘸男らしくないと嫌味に見えた事もあらうが、此處が私の價値なんだから何卒意久地がないなんかと思はないで、卒業後で宜から必ず私に許すと誓つて下さい。」



何と感じたか玉枝の眼は次第に潤んで、聞終ると口では何とも答へなかつたが、素振で充分に承知の意を示して居た、其れを認める明も満足したらしく、何時になく元氣付いた近來の二人の會見としては先づ上出來の部と云つてよからう。

時雨て來たか早や薄暗くなつたので、明は立ち上ると一寸人には氣の付かぬ、鴨居の上からマッチを取つて、本箱の上の小形なランプにパッとすり付けた、其を機に玉枝はそろそろ身繕ひして、

「あらもう日が暮れますのね、私又參り升から。」

「まあ宜さ、私が送るから、大丈夫まだ早いですよ、今茶でも入れるから最少し居て下さい。」

周章てゝ留めながら急いで螢の様な火を搔き起して眞面目な顏で吹きはじめる。

「送つてなんか下さらないでも宜うござんすよ、田舎は口が煩いから。」

と嫣然しながら附け加へる。

「宜ぢやないか何も、私が送るんだから。」

と相變らずの無頓着無邪氣な事を云つて居る。

「でも停車場まで直ですし、途中で又誰かに會うと嫌ですから。」

再び歸り仕度をはじめると、其れならせめて湯の沸くまでと留る、否まば又もや機嫌を損じはすまいかと玉枝は流石に躊躇して居ると、ばら〳〵と窓を打つ音落葉が當るのかとそつと障子を明けて見ると、何時から降り出して居たものか、地面は早やしとゞに濡れて雨垂の音さえ幽かながら聞えて居る。

「あらまあとう〳〵雨になつて仕舞つて……。」

「何直に晴れるさ時雨だもの、だが玉枝さんが歸り急ぎをすると止まないよハヽヽヽ。」

と柄にもない戯言を云つて居る。

葉毎々々に玉を連らねて、散つては結ぶ美くしさ、玉枝は唯ウツトリと眺めて居ると、

「さあ湯が沸た、菓子もある。」

さつと吹く風につれて雨は急に大粒になつて、古樋を漏れて落る雨垂の闇は次第に高く、何時止みさうにも見えぬのであつた。

（終り）



育兒

始めて兒を持つ人の心得

鶯溪女史

初生兒は極めて軟弱いもので、丁度草の芽が始めて萠へ出したやうなものですから、其の取扱には餘程呼吸をしなければなりませぬ、これが母親の第一のつとめで、女子が始めて子を產むだ時は、即ち女が母となつた務めの始まる時であると思はねばなりませぬ。

△浴湯はどうして使はせるか

初生兒に浴湯を使はせる事は最も効能のある事ですから、これを欠かしてはなりませぬ。まづ生後一週間は必らず毎日入浴させるのですが、夏季など發汗の甚だしい時は朝と晝と、晩の三度づゝ使はせねばなりませぬ、湯の加减は攝氏の三十八度、即ち手を入れて試て膚温ぐらひのぬるま湯が丁度よろしいのです、そうして入れるには顔面の外、全身を湯中に浸して、石鹼は刺戟性の弱い白色の固い精製のものを選び、これをフランネルに着け、身體に塗りて後ち洗ひ去るのですが、尤も石鹼は皮膚の垢を去る時の外は用ひずして米の洗汁か又は糠の煎汁を用ふるのが安全です、つまり石鹼は皮膚の脂氣を多量に落して其の爲め初生兒の柔かい肌が荒れるからです。

又入浴中は汚水の眼に入らぬ樣によく注意し、別の器に盛つた清き温湯を軟らかい布片に浸して外部を洗ひ、口中も亦清潔な冷水に浸した布片で拭ふのですさて浴みが終つたらば、小兒を温めた浴衣か又は軟かな廣い西洋手拭に包んで濕氣を去り、其の上フランネルで和らかに身體を擦り拭ふ樣にするのがよいです、これは皮膚を强壯にする益のある事で、幼少の時から此の習慣をつけて置くのが可い。又此の際臍帶の處をよく注意して脫脂綿で被ひ、新らしい綳帶で輕く結び洗濯した着物を着せかへて暖い褥中（冬季は必らず湯婆を用ふべし）に寢かせるのです。

又湯を使はせるのは朝がよいのですけれども、睡眠の覺めぎわや、又は哺乳の前後に直ぐ使はせるのはよくありませぬ。又入浴の際小兒の股、臀、腋の下、頸などの皺襞の深いところはよく洗つてやるやうにせねばなりませぬ。若し赤くなつたり、糜爛たりした時は白粉か亞鉛華澱粉を撒布すれば大に効めのあるものです、それで一週間か二週間も過ぎたらば、後は隔日位でもよろしいのでムいます。

△初生兒に冷水浴はどんなものか

冷水浴は皮膚を強くする効能はありますが、まだ日の經たぬ嬰兒には無理でせう、それは抵抗力が薄弱で到底冷氣には堪へるものではありませぬ、尤も二歳位になつたらば、炎暑の頃冷水浴を使はせるもよろしいですが、なるべくは體溫の近い溫度で朝の中に使はせるのが至極よろしいです、そして浴を出た時冷水に浸した手拭で、手早く身體を摩擦り拭ふのがよい。

△嬰兒の衣物は何がよいか

初生兒の肌に着けるものはなるべく清潔で、換氣法に適つたものを選ぶのがよい、其の目的に適つたものと申せば、無論フランネルでせう。着物は屢々洗濯して彼是れ取かへ、特に襦袢などは皮膚に直接するものですから、最も注意せねばなりませぬ。そして其の胴襲はフランネルをなるべく寛やかな筒袖につくり、腹部に當る部分に後紐を附けるのがよろしい、若し木綿か絹物であれば、必らず腋の下に口を開けて置き換氣法の出來るやうにせねばなりませぬ。紐は腹に當るところで寛やかに結ばねばならぬ、若し胸部で強く束縛すると肋骨を押しつけて胸部を狹め、肺病などに罹り易い體質となります。

衣服はなるべく輕く溫かく、小兒の活潑な運動を妨げる部分は一切除けねばならぬ。世間では小兒の衣服にまで外觀を飾つて、裾綿を厚く入れたり長い腰あげをつけたりするものもあるが、之れは廢めた方がよろ

しいでせう。

△襁褓は何がよいか

これは疎らく、柔らかな木綿、金巾類でなるべく汚物を吸ひ取る物で製くるのがよい、中には汚物の衣服に染しみるを恐れて數枚のオシメを重ね、其中間に油紙などを入れて置く方もあるが、これは衞生上によからぬ事です、殊に細い紐でオシメのすべり落るのをくゝりつける向もありますが、これは第一血液の循環を妨げて身體を衰へさせるばかりでなく、柔弱な身體の諸機關を妨げて知らず〳〵其の發育を害し、成長の後天與の美貌を損ずるものですから斷じて戒めねばなりません。で一番よいのは、フランネルを四角に取り角違ひに裁ちて、三角形につぎ合せ、木綿の褌を重ね、さて下三方より腹を包むのが一番よいのです、又オシメは屢々取換へてなるべく清潔にして置き、其取換の時冷氣に當らぬ樣注意せねばなりません、



△哺乳にはどんな心得がいるか

小兒には出生後六時間乃至十二時間を經て授乳する

のが通例です、乳は止むを得ざる事情の外は生母の乳を與へねばなりませぬ。世間に五六人の子供を持つ母親が皆の子供に一口哺乳する時に生母の身體が虚弱に陷るやうに申すのですけれど、決してそんなものではない、寧ろ却て母體を健全にするのは哺乳のお蔭ですのみならず、生母が始めて分泌する時の乳は自然に適度の下劑を含んで居るのですから生兒はそれを飲んでよく便通を催ふし、胃腸を清むるの効力があります。此の點からいへば、ミルクも牛乳も到底及ぶものではありませぬ。併し母體に異狀のあつた時には直ちに乳汁に影響するものですから第一によく食物に注意し、消化し易い滋養物を選び、熱病や、精神病や、又脚氣其他傳染質の病氣中は斷じて乳を含ませてはなりませぬ。又何かの病氣で母が服藥中は醫師の許可を得てから哺へる事、又喜怒、哀樂等すべて感情を刺激した時、又酒など飲み過ごした時は一旦これを搾りつくして一二時間精神を靜めた後に哺へる事、又月經中や姙娠中は哺へてはならぬ、其の外生母の乳が少い時、生母の體質の弱い時、又生母が十八歳未滿、四十歳以上の年齢に達した時は哺ませてはならぬ。

それから注意すべきは哺乳の度數と及其時間です、これに規律を立つるは小兒の發育上頗る必要の事です、さて晝間の哺乳は出產後二ヶ月間は二時間毎に一回とし毎回の時間は三十分以内、三四ヶ月に至らば、三時間毎に三四十分間の哺乳とし、五六ヶ月より七八ヶ月に至らば四時間毎に一回とし哺乳の時間は前と同樣でよし、又夜間の哺乳は生後一ヶ月以内は宵、夜中、夜明の三回とし其後は宵と夜明との二回づゝと定めてよろしい。

又小兒の啼くのは必らずしも飢を訴ゆるものでないから、泣いたからとて乳を哺ませるには及ばぬ、人乳の消化は一時間と四十分を要するもの故、泣く毎に哺乳するのは却つて胃を損ずるものです、尤も小兒が眞に空腹であるや否やを察して以上の規定時間を斟酌する事も又必要です、即ち小兒の久しく乳を呑まぬ時、乳房を見て喜びの色ある時、試みに手指を口に入れる

と直ぐに吸ひ付ける時、母に抱かれて乳房を捜ぐる時などは概ね空腹のしるしなれば、時間に拘はらず授乳してよし。

次に哺乳の方法は分娩後十日間は横臥の儘にして與へ、其後は坐して哺ませるのがよい、乳汁が充滿して堅く張つた時は、少し吸ひ出し乳房を揉み柔らげて含ませるがよし、そして哺乳の際は小兒の鼻を塞がぬ樣に注意せねばならぬ、夜中授乳の際など母の睡眠せる爲め、小兒を窒息せしめた例が多い。

さて又乳を哺ませた後は乳頭をアルコールで拭ひ置くのがよろしい、こうすれば乳で乳頭を汚れる心配もなく又、衣服の汚れなどの附着する憂がない、又乳汁の分量が多くて常に張り過ぎるものは吸乳器で吸取るがよい、乳の張る爲め頭痛を起し延いていろ／＼の病になる事があるものです。



△乳の不足な兒はどうして育てるか

第一は乳母です、乳母を選ぶには左の條件を心得て戴きたい。

(1)健康にして骨格逞ましく營養佳良にして、皮膚に光澤ありて淸潔なるもの、又齒は揃ひて、蟲齒などなく口中に惡臭なく、血色よく、すべて

厭ふべき疾病のなきもの。

(2)年齢は二十歳以上三十四五歳まで育兒の經驗あるもの。

(3)温和柔順にして感情激動し易からず、貞實親切にして注意深く、且つ怜悧なるもの。

(4)乳汁の善良なるべきは勿論、其の良否を簡單に檢するは、乳房の形中等にして輕く握る時は乳汁分泌し其色白く、味ひ甘く、臭味なく、水中に滴下すればよく散亂して水と和合するもの、及び乳汁の一滴を眼中に入るゝに少しも刺激なきものならば大抵良乳なりと知るべし、倘十分の檢査を行はんには宜しく醫師に依頼すべし。

(5)なるべくは分娩の時日の生母と同時なるを採るべし、少くも三ヶ月以上の差あるべからず。

第二は人工養育です、これは通例煉乳、又は牛乳ですが、牛乳を用ふるには左の割合によらなければなりませぬ。

初三ヶ月間‖牛乳一、水三
四ヶ月より六ヶ月‖牛乳一、水二
七ヶ月より八ヶ月‖牛乳と水等分
九ヶ月より滿一年‖牛乳二、水一
滿一ヶ年以上‖純牛乳

さて牛乳は必らず一回煮沸し、砂糖又は乳糖を加へ亦一時に多量を飲ましめず、其間は三時乃至三時半を隔つるをよしとす、又飲ましむるには哺乳器を用ひ、飲み殘りの乳は直ぐに捨て、清潔に洗ひ置くべし次に煉乳は牛乳よりも滋養の効少ければ、牛乳の得られる場合はなるべく、用ひないのがよろしい、煉乳には贋造品あれば注意して其品を選ぶべし、米國製の鷲印は價高けれども良品なり、又煉乳は罐の口を開けば冬季ならば二三週間、暑中又は梅雨の期節には四五日間は保つけれども其れ以上は酸敗する事ありて危險なればよく注意せねばならぬ、さればそれを貯へ置くにはよく蓋をなし、空氣の入るを防ぎ、常に冷處に置く樣に心懸けねばならぬ、又煉乳を用ゆるには必らず一度沸騰した温湯か又は稀米湯汁、麥湯等にて薄める事を

忘れてはならぬ、さて其割合は、

一ヶ月より四ヶ月までは煉乳一に水二〇内外、五ヶ月より滿一ヶ年までは煉乳一に水一四位の割合に薄めるのです、人工營養品にはまだいろ〳〵あれど、六ヶ月以内の小兒には牛乳に優るものはない、世間往々幼兒に澱粉質の代乳品を用ゆるけれどもこれは營養の尠いもので、初生兒には斷じて哺ませてはならぬ、六ヶ月以後にもなれば牛乳に混じて葛湯や水飴、米煎汁などを與へても差支ない。

△乳離れの時は何を與へてよきか

生兒は滿一ヶ年までは主に乳で養はねばならぬけれども七八ヶ月も經て歯も生へた後は、少しく鹽氣のあるソップを混ぜた薄き粥、半熟の鷄卵、魚肉の少量を毎日一二回づゝ與ふるがよい、されど噛まねばならぬほどの物は誕生の後でなければならぬ、そうして段々食物に慣れさせて乳を放す様にするがよい、斷乳はもとより急に行ふことなく、小兒の長ずるに從ひ、晝は軟き食物を與へ、段々哺乳の度を減じ、進んでは哺乳は夜のみとなし、强壯の兒ならば滿二ヶ年頃、虚弱の小兒ならば滿三ヶ年頃までに全く哺乳を廢めさせるのがよろしい。

△嬰兒の便通にはどう氣を付けるか

小兒の便通は極めて大切な事柄で、若し少しでも異狀があつたら看過してはなりませぬ、小便は毎日數回大便は出産後三日間は四回位が通例です、其後は二回位が適度です、若し一晝夜以上便通なき時は成可く灌腸をして誘ふやうにせねばならぬ、灌腸は三倍の微温湯を加へたリスリンを用ふるのがよい、灌腸器は藥店にあります、マクリなどの服藥で便通を促すのは却つて腸胃を害ふものです。

△睡眠はどんな方法にするの

がよいか

小兒覺醒の時は頗る活潑に運動し、營養物の燃燒作用（消化作用）は頗る盛んなものであるが、睡眠中はその作用の減ずるものであるから、其間に小兒の身體は成長したり發育したりするものである、故に睡眠時間を十分に與ふるのは育兒上尤も重要の事と思はねばなりませぬ、そこで生後一二ケ月の間はなるべく母又は乳母の懷中で暖かに眠らしめ、其後は別の寢床に臥さしめる習慣をつけるがよろしい、尤も冬季寒冷の時は注意して湯婆を入れ、若しくは添臥するを安全とす添臥の場合はなるべく互ひの呼吸の相觸れぬ樣に注意し、又哺乳しつゝ睡るのは大に警めねばならぬ、

それから一歲後は夜分十時間、晝二三時間、三歲以上は夜十時間位、又生後三ケ月位までは終日殆んど睡眠の間に經過するもので、強いてそれを覺ますはよろしくないが、長ずるに從つて漸々規則正しい習慣をつけさせねばならぬ、そして夜はなるべく早く眠らせるのが小兒に取つての健康法です。

△小兒の運動はどういふ工合にするのがよいか

活動は小兒自然の要求に出づるもので、睡眠の中の外（疾病の場合は別なり）は一刻も靜止せぬものです、今まづ嬰兒の運動に就て注意の個條を述ぶれば、

（1）寒冷の候には赤兒は室外に出すべからず、氣管を害し、或は感冒に犯さるゝことあるべし、其他の溫和の時候に於ては分娩後凡二三週間を經たる嬰兒に對しては窓戶を開放して一日中二三時間は溫き光線に浴せしめ、或は風なき日には抱き淸き空氣中に運動すべし但し晩秋以後は生後七週間を經たる小兒にあらざれば外出せしむべからず、衣服は暖く重ねるとも氣管の害は防ぐ能はざるものなり。

（2）酷暑の時外出する時は決して頸部を日光に曝すべからず。

（3）嬰兒を抱いて甚だしく動かし、又強く振り廻はす

などは甚だ害あり。

(4)乳母車はこれを用ふるに大に注意すべし西洋人は一般に是れを用ふれども、多年の習慣にてよく其の邊の呼吸を心得居れども日本人は未だ不慣なれば猥りに用ふべからず、殊に我國の如く道路平滑ならざる處ろにて無識なる子守などが急激に曳き廻はすなどは危險此上もなき事にて、第一其の爲め小兒は腦膜炎に罹る事あり、故にこれを猥りに用ふるは恐るべきことなり。



小兒稍や長じて歩行する樣になれば、天氣晴朗の日には戸外に出で、遊ばしめ、たとへ風雪の日なりとも、五六歳に至りたる者は其好むがまゝに戸外にて運動せしむべく、室内遊戯は唯巳むを得ざる場合にのみ限るべし、又すべての遊戯はなるべく小兒の意に任せ敢て大人の干渉せざるをよしとす、彼の石を投げ、木に登り、犬を追ひ器物を破るなどの惡戯は小兒の好んで爲す所ろにて、小兒の自然性ともいふべきものなれば、親は寧ろそれを喜んで傍觀すべきのみ。

△幼兒には如何なる食品を與ふべきか

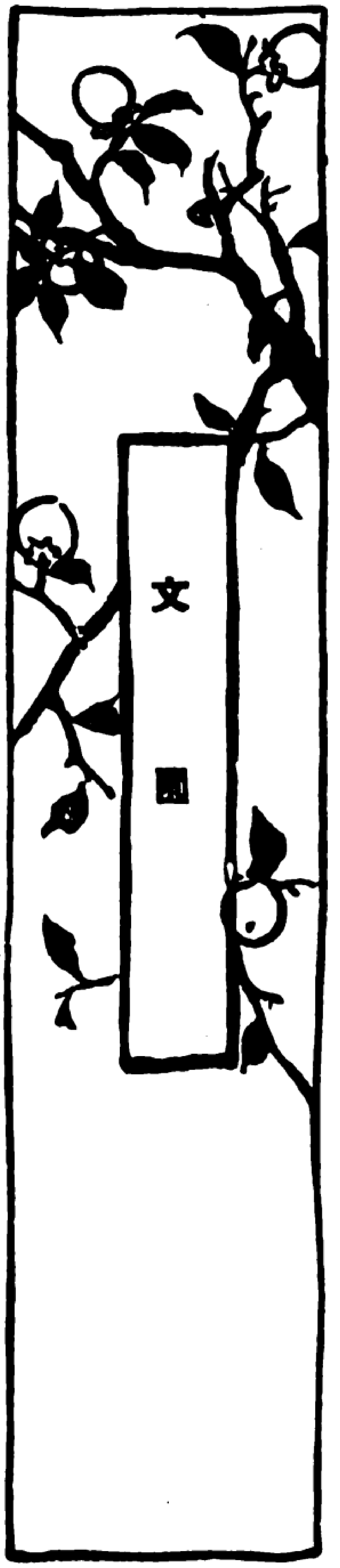
斷乳後の小兒の食物は常に消化し易きものを撰びて與へ、硬き物、甘きに過ぐる菓子、生の果物又は脂肪質等は避けねばならぬ、まづ通例は粥、半熟卵、軟かきパン、豆腐、及び軟かな魚肉等すべて淡泊なるものそれより段々成長しては柔かき飯、柔らかき蔬菜、熟した果物などを與へ、六七歳にも至らば、牛鷄肉を與へてよし、なるべく小兒の食事は大人と別にするのがよし、又小兒の食事を大人と同じく一日三度とするは少しく酷なり、それが爲めに小兒は空腹に堪へずして一時に飽食し、或は種々の間食をする樣になるもの故此の際は日に五回位を與へてよし。

△育兒に心得べき事ども

第一に注意すべきは耳腔と鼻腔なり、これは屢々檢して汚物を除きやるやうにし、若し異狀あれば專門醫に見すべし次には強き光線を眼に直射せしめざる樣にし、又強き音響を耳近く聽かしむべからず、すべて小兒の五官は極めて軟弱のものにて外物の刺激に堪ゆる抵抗力なく、屢々刺激を受くれば遂には成長の後物に感動し易く、體質薄弱となるものなれば幼時大に注意すべし、又幼兒の頭髮は腦髓の保護物なれば、猥りに剃るべからず、且つ頭巾は冬日外出の時若しくは散髮したる時に必要なり、其製は毛孔多き毛織物の類をよしとす。

右は始めて子を持ちたる母親の朝夕心得べき個條の大概ですが、猶詳しい事は育兒上の成書に就て御覽下さい。

○食事の時刻を理想的に言へば、朝餐と午餐との間には五時間半、晝餐と晩餐との間には六時間を隔てるを可とす、然るに晩餐を明るき內に濟さんとて冬季など四時頃に濟すはよろしからず。



煤掃き

煤掃く日の人々の扮裝こそをかしけれ。破れたる古浴衣纒へるもあり。寐卷に繩の帶したるもあり。袢纒裏返して着たるもあり。頰被りしたる者夏帽被りたる者、領卷もて鼻と口とを蔽ひたる者など、後より見ては誰ともわきがたし。

いざとて先づ障子襖を取りはづし諸道具を持ち出すに、箪笥長持は女の力に餘り、神棚へは子供の手届かず。思ひ〳〵に力にかなひたる者をわれ劣らじと持ち運ぶ。押入の隅に鼠の巣を見出して驚くあり。疊の下より詮議の簪を得て喜ぶあり、慾深きは十錢銀貨の一つもと眼を配り。額裏の埃今更に驚くばかりに積れるを見て、錢もかやうにたまらばなど、滑稽いふもあり。

庭前を見渡すに、かなたに夜具の山あり、こなたに鍋釜、茶碗小皿などの河原あり。戸棚米櫃の砲壘の下には、明き瓶の砲彈散亂す。柱時計は佛壇の上に横はりて今日は一日の業務を休み、古下駄古傘は葱畑の中に堆し。垣根の雪斑らなるあたりに古行燈古提燈置きたるは物凄く、梅の枝にランプ懸けたるは、古今たぐひなき配合とやいはまし。

何もかも取り出したる室内は唯四壁のみ立つ。さらばとて一齊に疊を叩き葉竹を振り舞すにぞ、煤飛び埃渦き、人語辨せず咫尺見分きがたし。苦しさに堪へかねて庭へ逃げ出る人々、恰も羅漢の立つに似たり。その眼のおそろしさよと笑へば、その鼻の穴の黒さよと、

かたみに指して笑ひ崩る。時まさに正午に近ければとて、或は立ちながら或は石炭箱に腰かけて握飯など食するさま、戰場の給養もかくやと思はる。

一休みしてまた取りかゝる彼の室、此の室、掃ひ清めて後は、手に手に雜巾持ち、踏臺して天井拭くあり側卸して疊拭くあり。柱拭かんとて釘に手を傷け、棚の上拭かんとて身長の低きを歎ずるもあり。盥の湯水幾たび改めて幾たび濁り、室内到る處、つやつやとして一點の塵、半片の煤を留めず。今はとてまた諸道具運び入るゝに、箪笥の位置を直し時計の懸け處を變ゆるなどは男にうち任せ、女は厨を片付けて夕餉の準備に忙し。

幸に時雨もせず雪も降らず、思ひの外に早く此の歳晩の大役をし果せたる嬉しさはいふまでもなく、湯に入りて煤と埃とを洗ひ清め、皆々うちくつろぎて夕餉を濟ませ、さてあたりを見廻せば、我が家とおもへぬばかりに整頓し、天井も柱も皆澤々として光輝あり。かくてこそ正月も來るらめと、こゝちよさ言はんかたなし。

煤掃きの夜は奇麗な寒さかな　知舟
大黒の日南ぼこりや煤掃ひ　乙由
いづかたに行で遊ばん煤掃ひ　華白
すゝはらひ棒に下げたる瓢簞　一蝶
煤はきの疊もたすな椿の花　沾徳
煤はらひ不動に似たる眼鏡　木導
恥しき人に逢ひけり煤の門　森泉
煤掃きや庭に居並ぶ羅漢達　鳴雪
煤掃くや吾が樓の樓月の家　同
煤掃きに大黒樣を運びけり　碧光
病癒えし叔の業や煤拂ひ　雪死久
煤掃きの握飯くふ戸口かな　春光
煤掃きの明日の雜巾縫りけり　楳面坊
猫にやる飯忘れ居ぬ煤拂ひ　同
煤掃きや其の夜雪ふる煤の上　淺芽
閉ぢ込めて煤も掃かざる病間かな　嶺松
煤掃きや箪笥ひこずる若夫婦　臥天仙

田家の餅搗

一年の間に家庭行事の多かる中に、餅搗く日こそ活氣滿ちて勇しきものなれ。まだ夜暗きに勝手には人聲賑はしく、ランプの光煌々として竈の下は盛んに燃ゆ。

臼も杵も餅筵も餅箱も米の粉も用意すでに整ひ、けふの立役たる力自慢の下男も、わき役つとむる下婢も、今暫しよとて竈の前に手を烘る。やがて飯の蒸し上るよと見れば、いざとて下男は飯おろして湯氣蓬々たる蒸米を臼の中にうちあげ、やをら杵とりて小搗を初む。下婢も手襷かひ〴〵しく手水して臼の傍に寄り添ふ。かくて杵漸く高く上り手がへしますく〳〵忙しく。一上一下調子よく揃ひて響は四隣に徹す。



一臼二臼搗き了り、三臼目ごろより、夜はほの〴〵と白みゆきて、ランプの光、力なく、やがて朝日の臼にさしこみたるはいと心地よし。子供らも早や起き出で來て餅筵をとりまき、米の粉うち散じて餅押す。箱に入れて餅棚へ運ぶもあり。大小幾つの鏡餅恰好よく出來上りたるは、細君の手柄なるべし。をりを見はからひて、こしらへたる小豆餅、黄な粉餅さてはおろし餅に、皆々舌鼓うち、あるは重箱などへ入れて近隣へ贈るもあり。

午ごろとなりてはさすがに下男の腕も痿え杵やうやう鈍るを、下婢がわれこそと代りて一臼搗きたる力量を皆々どつと褒めそやし、陽氣は厨に滿ちわたる。かくて早きは一時過ぎ遲きも二時ごろにはめでたく搗き了り、幾斗の米はすでに餅となりて陳列せらる。そを見て喜ぶは、唯子供のみにもあらじかし。

ありあけも三十に近し餅の音　芭蕉
餅つきや犬の見上る杵のさき　許六
餅つきの臼にさしこむ朝日かな　迎山
餅つきの手水かゝるや馬の顔　田鳳
膝がしら出して餅おす寒さかな　來推
餅つきや梅を開かす音がする　梅分
餅つきや柳に花の返りざき　希橋
梅の木ももつて餅つく小家から　千影
眼に饒つけて餅つくさしづかな　荷了
餅搗のすでに來て居る隣かな　鳴霽
餅十臼つく身の上にならばやな　鶯子

餅を贈る

歳末事多にてけふやう〳〵かちん搗いたし申候不加減には候へども御子供様方へと存じ小豆餅一重御目にかけ候御酒召し上りたまふ御主人様へ御内密に願ひ上候あら〳〵

同返事

御手間入りのおかちん頂戴忝う存じ候ことしは餅屋へ注文の事に致し候ため彼の仁齋先生の古事ならねど子供は何となう物足らぬ心地致し居り候をりから何よりの賜にて子供の喜びは申すまでもなく主人も山川両方に候間見逃すまじと存じ候御禮まであら〳〵

歳の暮

歳月流るゝが如く、ことしも殘る所僅に數日となりては、こゝかしこに煤掃餅搗の音勇ましく市中俄に活氣を帶びて往來織るが如し。

呉服屋の店頭、婦人客充ち滿ちて番頭丁稚、目も舞はんばかりに忙しく、取り出す數々の反物は五彩爛然として花の如し。紳士は洋物店に入りて帽子手袋襟飾の時樣を擇び娘子はショール店の前に立ちて品定めに時を移す。祖母愛孫の手を引きて羽子板店の前に立ち、男の子は既に凧を手にして意氣揚々たり。松、し

め縄、歯朶、ゆづり葉などの嵩高なるを右手に持ち、乾鮭を左手に提げゆく者あれば、柄杓、ばけつ、餅網火吹竹など持ちにくげに急ぐもあり。かしこに數の子ごまめのよしあしを擇む細君あれば、こゝに牛蒡胡蘿蔔の價をねぎる下婢あり。砂糖屋菓子屋、足袋屋、下駄屋の店前には人の黒山を築き、床屋には千客萬來、ジヤキの音絶間なく、櫛笄ひ、剃刀飛ぶ。夜はまた萬燭を點じ列ねて雑閙一しほなる中を、福壽草梅の盆栽など擎げてゆくもあり。



浮世の年の暮を知らぬ顔なる家構の門には、はや太き青竹に松梅添へたるを飾り、七五三縄ゆたかに垂れ、盛砂いと淨げなり。奥座敷には琴の音ゆかしく聞ゆ。南向きの縁側に蘭、萬年青などいじりたまふ御隠居もおはすならむされどまた他の方面を一瞥すれば。餅もまだ搗かず、煤もまだ掃はず、湯にも入らず、髭も剃らず、分別の底叩き盡しても黄金は湧き出でず債鬼の前に平身低頭するもあらん。いよ〳〵大晦日となりては、越すも越さぬも今日一日、泣きても笑ひても、今宵一夜と思

ふものから、さすがに人並に屠蘇も飲みたく、雑煮も食ひたく、子供に一枚の晴衣も着せたくて、夜更けて術ほ金の工面にさまよひ歩くもあらん。人目忍びて質屋の門をくゞるもあらん。

かくて寺々に百八の鐘つき出す頃となれば、さすがに世間は靜まりゆき。やがて初鷄の聲勇ましく、初日さし出づれば、人は皆嬉しげに泰平の新年を祝す。昨日のけしきは更になし。

古郷や臍の緒に泣く年の暮　芭蕉
分別の底たゝきけり年の暮　同
子を持たばいくつなるべき年の暮　其角
ゆく年に疊のあとや尻のなり　去來
來年は〳〵とてくれにけり　露川
鷄があ雀ちうとて歳くれぬ　存亞
世の中やこんな事して年のゆく　來山
盜賊の手に手を借るや年の暮　嵐雪
小傾が大川になる年のくれ　北元
碌々やくれ忙しきこよみ賣り　孤屋
心をそらに羽子板賣の姿かな　歩雲
人に春をこしらへさすよ葉竹賣　蒼鷄
掛乞の白き眼や宿の梅　保吉
行く年や圖像美々しく飾りけり　碧梧桐

金持って江戸あるきけり年の暮　撰天鵬
年の暮何に世渡る人の顔　極堂
百金に丁稚使ひや年の暮　六花
一樽の美酒貯ふる師走かな　春洋
金借りて師走の市を戻りけり　南枝
あんかんとしては居られぬ師走哉　雨石
掛乞や病人もある家のさま　亞々
掛乞の餅搗く中に來りけり　奇峰
掛乞や新聞代の三月分　眉月居
洛陽の灯おびたゞしき師走哉　古白
棒さげて乾鮭さげて年の暮　狙酔
これかへす道も師走の市のさま　普風
年の市馬のまたぐらくゞりけり　月花
皿はちのなだれた音や年の市　卓池
鍋蓋で人をまれくや年の市　黄少
喧嘩するひまはありけり年の市　立志
世の中のかひ〴〵しさよ年の市　葛三
雁鴨を見れば悲しや年の市　松井
市の夜や千鳥かたよる隅田川　蕾太
年の市や晝夜をなすです隅田川　壯舟
年の市條さしわけて通りけり　雨什
君が代やめでたうさわぐ年の市　子規

歳暮の見舞

ことしの日數もはや指折るほどゝ相成申候高門御一

統様ますく御萬福に渡らせられ候御儀と存じ奉り候私方風一つひき候ものもこれなく皆々穏かに暮し居候間御安心なし戴きたく候相も變らぬ品には候へども乾鮭一尾歳暮御祝儀の印として御目にかけ候間御嘉納下されたく候かくあるべしと豫て覺悟致しながらも今更にあれもこれもと用事は山の如く何れより手を着けんかと途方に暮れ居り候事とて略儀ながら書中を以て御伺申上候餘は明けての後に申盡すべく候かしこ



早梅を乞ふ

歳の暮に御庭の梅を頂戴致し候こと何か家例のやうに相成まだ鶯も來鳴かず莟がちなるものを草の家に迎へ取り候はむは心なきわざには候へども緑深き松が枝に添はせて新年の床に上せ永く色をも香をもめでたく存じ候まゝ一枝御わけ與へ下され候やう願ひ上候その代りと申すにはこれなく候へども後園の白椿一枝御目にかけ候かしこ

除夜の主婦

門前の松飾りも、床の間の三寶も掛物も、挿花も、火鉢烟草盆の掃除も、主人の手を煩はして疾くに出來上りぬ。米屋、薪屋、酒屋、魚屋その他數々の掛乞も、晝の間に皆拂ひ終りて、まだ來ぬは唯一軒のみなれば、これも心安し。主人は今しがた子供つれて髪刈らせ、湯あみせさせんとて出で行きたまひけるが、わが任務は尙ほ多し。いづれより手を着けんか。

とりちらけたる厨の中に立ちつ坐りつ働く中に、煮豆も、ごまめも、酢牛蒡も、いと加減よく出來上り、數の子も洗ひ上げぬ。いで鮒の甘露煮に腕前を示さんとこんろの火加減に注意しながら、かまぼこ、小串、卵燒、みかん、栗など重組の取り合せに苦心する折柄、主人歸らせたまひ、その有樣見てまだ片付かぬかといひたまふ。まだ〳〵半ばだものといへば、さらば吸物の鴨のみは、われ料理せんとて、庖丁とりて俎に向ひたまふ。子供はおとなしく臥床に入る。やがて主人も枕に就きたまひぬれど、われはなほ雜煮のこしらへに餘念なし。やがて鰹節もかき、味噌も擂り、菜葉大根豆腐などもとり揃へ、祝膳、太箸、德利、盃、銚子など一點の落ちなくよせ集め、肩の重荷おろしたる心地して、ほつと一息つく。いで遲くとも入浴にと出でんとするに、おゝそれよ子供の着物の縫上げおろすことを忘れたり、明日は早く學校の拜賀式に出でゆくものをと思ひ出して、また燈下に時を移す。まゝよ湯をつかひてこそ濟まさめ、入浴は初風呂の事とせん、せめて束髪になりと髪とり上げばやと、鏡に向へば、はや除夜の鐘撞き初む。暫しなりともとそこ〳〵に枕に就けば、まどろむ間もなく初鶏の聲聞えて、朝日さし登る。されど此の朝ばかりは眠くもあらず。昨夜の忙しさも疲れもうち忘れたらむやうなり。

反古賣て酒買ふ除夜の男かな　桃雨
掛乞の一人日暮れて來りけり　奇峰
寺町の寺こと〳〵く除夜の鐘　雨情
錢を守る灯につく〳〵と妻老いぬ　鳴雪
女等の髪も出來たり除夜の鐘　藤花

歳暮故郷の兩親に寄する

雨に霰に雪しげき都の空も冬げしきと相成候ものから年の市とて市中は景氣づき居候へども故郷にはさることもあるまじければ、さぞ物淋しう候はむ、御父上樣御母上樣さては俊坊どの御機嫌ようおはしまし候や



其の後私風一つひき申さずいと健かに暮し居候間御安心下されたく候昨日にて試驗も都合よく相すみ今日より休暇と相成候まゝかねて申上候通り早速歸鄕仕り候ひて御顔も拜し餅搗煤拂ひの御手傳ひも致したく存じ居候處來年の三月はもはや卒業の事とて外の學友が

たも大抵は御歸省御見合せに相成り申候私もよく〳〵相考へ候に往復の日數など取り除き候ては御膝元にある日も僅かばかりにこれあり、ために旅費を費ひ候はむも、むだな事と存じ候間ことしは一層東京にて新年を迎へんと勝手ながら取りきめ候間御ゆるし下されたく候休暇中の宿題もこれあり候事とて歳晩年始をあだには過すまじと覺悟致し居候淺草海苔一罐小包郵便にて送り上まゐらせ候間御笑味下されたく新版双六これは俊坊へ御與へ下さるべく候甚だ申兼候へどもかちん少々頂戴いたしたく候どうか皆樣御揃ひ遊ばし御機嫌よう御年を越させたまひ候やうはるかに祈上候
かしこ

紅葉狩之記

京都　みどり子

紅葉――紅葉といへば龍田高尾いづれ劣らぬ勝地なり我は高尾のもみぢ見まほしう思ひ居たるに友菜君は來ん日曜にものせんとのたまふいよ〳〵日曜は來ぬ。かねてちぎり置きつる事とて朝まだき友をそゝのかして道を周山街道にたどり妙心寺を左に見て少し行けば御室の二重の塔ありこの地は茶所なればにや到る所茶畑あり道のかたわらなる尾花はもはや枯れはてて人を招かん樣もなし右手に仁和寺を見つ、昔の和尙のこともおもひ出られていと〳〵おかしこゝはもと小松宮殿下の居たまひし處なりとかや久しく遠足せざりしため足いと苦しけれど四方のけしきになぐさめられてあへぎあへぎたどりてつひに高尾へつきぬ。

名におふ高尾なれば……とは思へどもあまりのうるはしさに我をわすれて見とれたるにはや友はつぎへ行かんとのたまふ、いそぎて五ひら六ひら拾ひてブックにはさみぬ、あゝ去年なりしか妾の田舍にありし時都なる友より高尾の紅葉送られたる時のうれしさを思ひ出して歸りなば早速友にも送らんとまた二ひら三ひら拾ひぬ、それより一丁がほども行けば地藏院ありこれぞ山中第一の奇觀にして下に溪流あり兩側には紅葉相連りてはてしなし紅葉を流す溪流とはこの淸瀧川なる

べし、かわらけなげて遊ぶはこゝなるべし。

それより少し行きて槇尾に達すこゝもまた山水紅葉絶佳なり寺の正面なる槇の木はもと松なりしがいつの間にやら變體せしとかいひつたふ、栂尾も山水紅楓の配合よろしきを得ていとうるはし、三尾いづれも吾劣らじと競ふて人待顔なり。

悉く探りたれば紀念繪葉書、紅葉餅などもとめ道を嵯峨に取りつ、半里も行きて、なぎなた坂に至る道けはしくていと苦しかりき坂を下りてあせ道をたどり大澤池畔に出で一行こゝにて少し憩ふ向側に大閣寺あり池中には船形の島あり堤の紅葉水にうつりてさながら一幅の繪の如し。

それより釋迦堂及小楠公首塚の門標など見て小倉山の二尊院に詣づこゝまた楓よし第十七番の札所なり小倉山峰のもみぢば心あらばを思ひ出してそゞろになつかし。

痛き足を引づり／＼遂に嵐山渡月橋に出づ友の二人は寄宿舍の門限といはるゝに餘儀なくをしき別れを告げ我等は船にて大堰川を溯りつゝ兩岸の景色を稱しぬあゝわれに才あらば畫にもかゝましものを歌にも詠ましものを。

温泉の下にて上陸し大悲閣まで上らんとすゝめたまへど到底おぼつかなしとて秋子の君と下にて待つこととなしぬ、まつこと半時にして友は下りたまひたればまた船にて下り、もとの處にて下船し小督局の墓前を通りて昔を偲びいづこにて想夫戀を彈せられしかなど語り合ひあかぬ眺めをあとに春を約し家づとにせんとて櫻餅を買ひ歸路につく嵯峨停車場に行けば人波をつくりて容易に上車すべくもあらず、やうやくにして五時三十分といふに上車し花園驛にて下車しすゝめ／＼足とくすゝめといふ意氣込で暗の中を互に手とりかはしてつひに目ざす京都に歸りぬ、友と別れを告げ歸りつきしは七時過ぐる頃なりき。

あゝけふのたのしさを拙き文にしるして後日の思出の種となしぬ。

修養語

幸田露伴

○

もの思ふものを人といふ。なまじひに悟りて物思はざらんは、人たる甲斐無く口惜し。心のまゝにするは毛ものなり。みだりに狂ひて事を仕果さんも、けものめきてはかなし。

○

眞珠は貝の。戀は人の。

○

涙は鹹からき水ならず。たゞこれ色無き血のみ。

○

ある老いたる紺搔の申しける。たゞ淺く染めて度重ねよ、佳き色其の中にあらん。

○

人の養生養生と云ひてさまざまの事するを見るに、おほくは生を養ふにはあらで、ひたすらに死を怖るゝなり、稽叔夜も形は神を恃みて立つと云へり。生を養ふは死を怖れざるに若かず。

○

世にありて財を保ち身を安くせんとするは、大空にたゞよへる雲を釘づけにせんとするが如し。

○

人の心はやがて世に無き物をも作り出すなり。野猪を畜ひ、山鷄を飼ひ、野鴨をかへば、やがて豚といひ、鷄といひ、家鴨といふ物、世に出で來るなり。菊牡丹の珍らしきを好めば、さまざまの菊も牡丹も世に現はれ、いくたびか接穗されては、終に核子の無き蜜柑さへ世に出づ。恐ろしき火も、凄まじき水も、天の降せる災とのみは云ふべからず、まことは人の招ける禍ならぬかは。今の拙き人の世は、即ち今の拙き人の心の描き成せる畫なり。

○

聞きたきは春のおぼろ夜に胡蝶の醉の歌。見たきは夏の夕日に孔雀の亂れの舞。

○

白き布に墨のつきたるは汚なり。紺紙に胡粉の付きたるも汚なり。けがれに定まれる性無し、地の色とたがふを汚といふ。此故に木工は、器成る時は先づ必らず豫め汚す。其の汚れざらんことを欲すればなり。されば堅き木にて作れるものは、石灰、羅格烏特、茶粉などを塗りて、桑色に汚し、柔らかき木にて作れるものは、砥粉、煤、榜葛刺など塗りて汚す。是皆汚を厭ひて先づ自ら汚すのみ。自ら汚すは汚に遠ざるかの道なり。

○

家居調度は申すに及ばず、草木を愛づるにさへ、富める人はおほかたは世にあるまじきやうなる珍らしきものを好みて、我が方にのみこそかゝるものはあれど、誇り顔なる、たゞ財を費したるを示せるに似て、賤しくすさまじ。朝顔の花の、菊の咲けるに似たる、萬年青の葉の鎬の立ちたるやうなるなど、まことはたゞいぶかしむべし、何の愛づべきことかあらん、資朝朝臣にあはゞ皆掘り棄てらるべきのみ。またやゝもすれば、顔回が瓢、孟母が鋏などいふものを、千金をもて購ひて飾り立てゝ悦ぶ人あり。甚だしきに至りては、神農が甞めさしたる草の葉、小碓の命の用ゐたまひし火打石なんどいふやうなものを、數限りも無く、したゝかに貯へ持ちて、うるさく人に示しては此の上も無く爲たりげなる人あり。いづれも皆おもしろげなくて、しかも卑し。遠き國のもの、またはねぢけかじけたるものなどは、おしなべても誇りがたけれど、先は見にくし。庭の草木は常體にて好きが好く、調度器物手あそびなんども、佳きは佳し、古く稀なるが宜きにはあらず。鵙屋宗安が褒めし古き戸をば、宗易が、定めて遠き山寺などよりわざと乞ひ求めて齎らし來れるならん、面白からず、といひし心こそおもしろけれ。

○

書畫骨董をあきなふものは、愚にして富めるものゝ高慢に税を課せて取り收むるのみ。

○

ある田舍の人はじめて都に上りけるが、其のあるじとたのみたる都人に、香取屋は何處ぞと問ひける。問はれたる人打驚きて、都に住みぬるものさへ特更に香取屋の履物を用ゐるは、財餘りて心至りたるきはの人の上のみの事にて、誰も彼も爲る事にはあらぬを、此の人さばかり價高き下駄をもとめて、天さがる田舍に歸らんとにや、餘りに物ずき過ぎたり、かくの如くば、此の人終によく家を保ち世に榮えなんや、おぼつかなし、と心ひそかに思ひつゝ、淺草とは聞きたれどおのれいまだ香取屋の履物買ひたる事なければ詳しくは知らずと諷しけるが、果して其の人いく程もあらで家を破りけり。

○

釣を垂れてはつくづく人間の技の小さくして天運の力の大なる事を知り、棋を試みては七情の騒げども益無く、一理のたゞ賴むべきをおもふ。

○

多く人の上の噂して嘲み笑ふ事を好むものゝ振舞を心をつけて見るに、たまたま其の嘲み笑ふべき話柄を得ぬ時は、みづから作り事を仕出して、之を人の上に押し被らせて、さて悦びて嘲み笑ふなり。其のさま恰も狗猫のおのが吐き出したる汚を復悦びて嘗め食ふに似たり。よつて知りぬ、世に何の爲ゆゑとも無くて湧き出づる譌言いつはりごとは、多くはかゝる人の作り出すものなる事を。さまでに要無き事をしても人を嘲み笑はんとするは、さてまた如何ばかり賢きわざぞや。

○

櫻のさかりは立春より七十五日と云ひ傳へたれど、よく試みねば知らず。春やうやく暖にして華氏寒暖計の六十五度に至ればやがて花さくことは、年々ためし見るにおほよそ違はず。

○

人はならひによるものなり。華氏六十五度の春の日には、猶小袖をば脫ぎをしみて、同じ度の秋の日には、いまだ袷を着ずてもあるなり。ならひの力の強き事おどろくべし。これをおもへば善にはならひ、惡にはな

らはで有りたし。

○

志すところあるものは身を惜むべし。むかし身延の遠上人、飯高の學校に在りし時、衆徒の浴室に入るに衣を脱して背に灸の痕無きものを觀ては嗟歎して、此の子學に志無きかと云はれしとなり。灸治はせでもあるべし、生を護る道を知らで、或は常に病み、或は蚤く死するは口惜し。

○

米果物なども嚼みて壺の中に貯はれば、夜を經て酒となる。眞蠟の美人酒といへるは、美人をして物を咀み含みて作らしむるが故よりの名なりといふ。我が邦にても酒つくることを醸むといひ、大隅琉球には皆嚼みて作れるためしあり。大古の人のおほやうにさかしげ無き、人の嚼みたるものをも嫌はずして飲みたるなるべし。今は我が爲に嚼むものもあるべからず、又人の嚼みたるを飲むものもあるべからず。智は進み、情は退きたるなり。かくての世のさま、貧しきものゝ酒は水の如く、富めるものゝ酒は油の如くなりぬ。賓主相悅びて飲むも、おもへばたゞ〳〵錢を酒壺に盛りて飲むにひとし。貧しきものには、あらあぢ無の世や。

○

癰を病めるものは、癰去りて後安きを得、鯁に惱めるものは鯁落ちてはじめて痛みを忘る。人の身あるは猶癰あるが如く、心あるは猶鯁あるが如し、身あるが故に累あり。心あるが故に思あるなり。身も心も亡びなん後こそ、苦をも樂をも全く忘るべけれ、風虛空を渡りて如何ばかりか涼しく、氷水中に融けて如何ばかりか無礙ならん。

○

草は枯れて根とゞまり、魚は死して腥氣の殘る。人は死しても業の殘るなり。人此の身だに滅びなば、よろづの罪科も苦も消えはてぬべしと思ふは、大なるあやまりなり。肉は朽ちても負債は朽ちず、骨は灰となりても手形は灰とならず。華嚴の瀧壺、淺間の火口に身を殺すとも、業の殘るをば如何にせん。人たゞまさに緣を謝し業をつゝしみ、舊債を理め盡して、大年の夜の鐘の音を心靜けく聞き盡くすべきなり。

鎌倉の小兒保育園

相州鎌倉の佐介ヶ谷に四十名の孤兒を收容せる鎌倉小兒保育園なるものあり、園主は佐竹音次郎（五十）と云ふ、素と土州の藩士にして幼年の頃より東都に出て、熱心醫學を研究し、成業の後鎌倉在腰越村に開業せしが、當時醫業の傍ら藩の先輩板垣伯の夫人が會長たる、女囚携帶嬰兒保育會の子供數人を引受け養育せし事あり、明治廿九年七月小兒保育院と名け、昨年五月現處に移轉し、院を園と改めたるが、收容兒は最初三ヶ年は一人、次の三ヶ年は二人、七年目は七人、八年目に十人、十一年目即ち現今四十人あり、此れに不幸なる成年婦人をも五人收容して園兒保育の任に當らしめ氏の夫人及び家族等にて殆ど五十人許の大家庭をなせり。

▲現在の建物　は百數十坪の木造家屋にて二反程の宅地に建てられ、園兒の居室は保育室と名け、板間あり疊の間あり、成年家族の居間あり、應接所あり又床の間附八疊敷の圖書室あり、二十五六疊敷の板間を遊戲室とし、日當りよく風通しよく見晴しよく、庭には、運動場として園兒の小田圃、小花壇等あり。

▲園兒の現況　十八歳になる男子は逗子の中學に通學し、失明の一少女は琴の稽古に行き、十五六歳の少女二人は裁縫をなし、十九歳の男子は農事の傍ら讀書を獨習中、其他小學校に十五人、幼稚園時代の幼兒十人、乳兒と離乳期のもの合せて九人あり、爲に園主の夫人は乳兒三四人迄も一人にて撫養し終夜一睡だもせざる事ありと。

▲收容者の品性　園主は尙不遇なる婦人を收容して園の家族となし夫等の人々の品性は兒童の教育上感化上に影響するを以て十分其品性を陶冶する方針なり又園兒にも遺傳と習慣とによりヒガミ根性或はズルケ根性の者あり一度は奇なる境遇の變化にて直ちに矯正し得れども、漸々逆戻りとなり來るには實に困難なり唯根比べにて善化せしむるなりと。

▲將來の希望　將來は園兒の健康を保るため、農園を造りて經濟の一端たらしめ、更に學校をも開きて、園兒特殊の普通教育を施さん希望なりと。

新年號紀念大景品目錄券附

ムラサキ

本券見落す勿れ必所持せよ

第四卷第四號十二月一日發行

現今の男子は如何なる婦人を愛する乎(三) 覆面野史
△髪はヒサシ△リボンは無地△着物の着やう△袴は胸高裾廣△婦人の洋服△穿きもの△スタイルの美△襟元から胸元△帶から褄△案山子肩に地藏肩△後ろ附の良否▲覆面野史の筆愈々熟して益々佳境に入る女子讀むべく男子讀むべし

▲我邦達見の大人物 鎌田榮吉
▲先づ己を知れ 帝商頭取 淺田正文
▲法律問題の解答 中村法學博士
▲銀行業者奮鬪實話 青眸生
▲鐘淵紡績會社の工女 橋瓜同會社支配人

◎第一高等學校 御茶水女學校 比較評 三角生
▲地方の女學生と東京の女學生、甫守ふみ子▲米國婦人の處世振、大屋要作▲當冬のショール、三越呉服店▲最新化粧品、とき子▲布哇野球團の來挑、校友生▲江戸役者の趣考、蝶々子▲十二月の園藝、白榮園主人

▲小説 露さん 小枝子

◎口繪 橋本邦助筆初冬△名家令孃△名家の家庭△受賞閨秀書家△新歸朝大學教授
◎挿畫 文部省展覽會名畫△慶布野球團等

大景品
百圓呉服切手、大形蓄音機、寫眞機。金指輪。銀時計。置時計反物肩掛花瓶等貳千餘點

▲手本とすべき成功せる一人の奧樣 棚橋絢子
▲栗生武右衞門氏 大塊子
▲佐治實然氏の家庭 婦人記者
▲家庭に於ける巴理人 吉田雪子
▲百五歲翁室田與曾次 鐵軒學人

▲男女の梅毒 醫學士田村化三郎
▲生花を嗜む人に惡人はない、花廼本宗壽▲杉田八重さん、みや子▲雜誌抄錄▲女學寮の茶話▲婦人記者室▲口△新聞編輯室其他
▲ムラサキ衞生問答 男女の秘密數十件
◎文藝 ▲論文▲小品文▲短歌▲俳句▲繪畫等

定價一部拾貳錢郵稅壹錢 三ヶ月郵稅共卅七錢 六ヶ月同七拾貳錢

發行所 東京京橋銀座 讀賣新聞社 振替口座六壹貳番

女(なの一)

女（その七）

醫師 糸左近先生立案
陸軍三等藥劑官 川島廣治先生監修

素人藥局

救急箱

重寶無二調藥自在

人は病の器でいつ何んな病氣に罹るか何んな怪我をするか分らぬ例へば鐵瓶が引くり反て手をやけどした、サア何うする。二階から轉げ落て氣絶した、何うする。狂犬毒蛇に噛まれた、何うする。痙攣た、何うする。癪が起た、何うする。其他一切の急病には何うする？無論醫者にかゝらねばならぬが醫者が遠くて間に合なかつたり幸ひ近くに有ても生憎不在だつたりしたら何うするか？かゝる場合に『かうすればよい』と急を救ふのが即ちこの救急箱である。

これまで此の種のものが無いではないがそれは賣藥が目的で器械も何も揃つて居ぬから何んにもならぬ、然るに此の箱には藥は勿論檢溫器もあれば繃帶もあるピンセット、スポイト其他調劑器一切備えてある故これさえ有ればいざ鎌倉といふ場合に少しも驚ろく事はない、なほ此の箱は救急箱といふ名命ではあるが決して救急をのみ目的としたのではない、引風頭痛腹痛齒痛ひゞしもやけ水蟲汗物、腋臭いんきんの如き種々雜多な者や秘密にして人に言われぬ病の處置もこの箱一ッで自由に出來るこれ程便利なものを備えて置かぬ人がありませうか？（糸左近述）

▲本具は糸左近先生及川島廣治先生の嚴格なる監督の下に調製せられたるものなれば使用極めて安全にして用意の周到驚ろく可し

▲本具は日本藥局方規定の藥品三十種を撰集せる故これを更に調合する時は數百種の方劑となり各病に適應す

▲本具は購求者の便を計り純齒磨の材料を挿入したれば此の手製齒磨を毎朝使用せば不正なる齒磨により齒を損ずるの憂なし

▲本具には糸左近先生著の『簡易救急療法』と題する書を添付す『救急療法』は即ち本具の說明書にして、疾病顧問、藥物顧問、藥物調合法の各部門に分ち例の明快なる筆致を以て詳述せられたれば本書一冊にて既に何十錢かに該當す

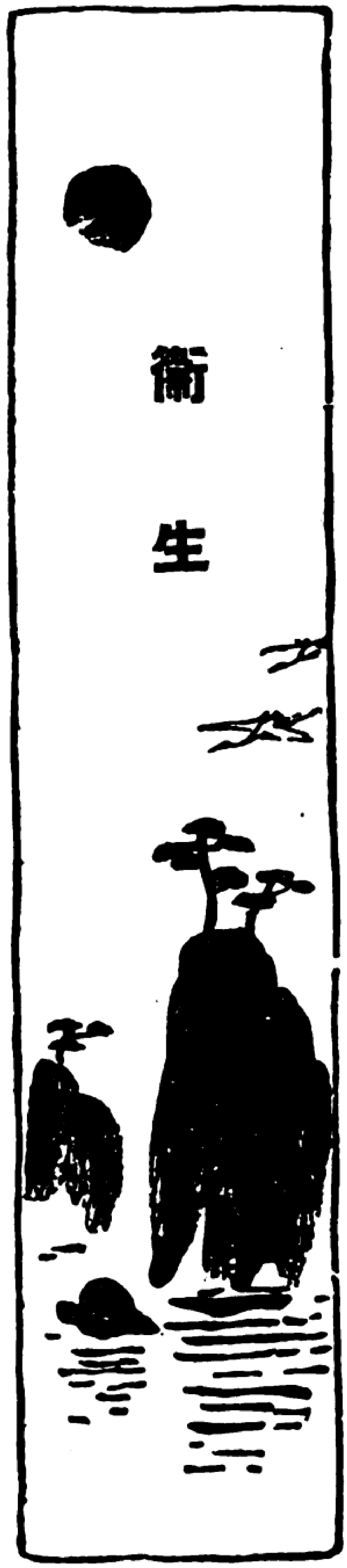
價格
- 特製 金五圓 小包料三十六錢 臺灣清韓金五十錢東京市內無賃配達
- 並製 金參圓 小包料二十四錢 臺灣清韓金四十錢東京市內無賃配達

體裁
- 特製 横九寸縱六寸深サ四寸 木製箱入優美高尚
- 並製 横七寸五分縱五寸深サ四寸 紙製箱入美麗仕立

內容
- 特製 藥品三十種器械及雜品十四種挿入
- 並製 藥品三十種器械及雜品八種挿入

▲詳細申込次第送ル▼

女（なの八）



女代診（其十四）

糸左近

てぶ〳〵に太る病

▲題の説明＝身體の筋肉が肥え太るといふことは健康なるの徴で、男女に拘らず實に立派に見ゆるものだ。立派に見ゆるけれど之も程度問題で其の程度否或る一種の太り方は却つて不健康の源となり、且つ大に美貌を損ふものである。即ち如何に筋肉が肥え太つてゐても堅く締つて其の色艶に一種の活氣を帶びてるは健康であるが之に反し筋肉肥え太りて居れど其の肉締らず觸ればダブ〳〵と波動を呈し所謂股摺がするといふ如きは不健康の徴で外見上に於ても實に醜いものだ、之を素人方は「でぶ太り」と言はるゝし、醫師の方では肥胖病といふのである。而して本病は男子よりも婦人に多く有るものだと東西の醫學が證明してゐるのみならず、本誌の「衛生顧問」にもこの質問が非常に多いから、今回之に就て聊か述べて見たいと思ふのであります。

▲常態と病的との境界＝吾等人體の脂肪なり蛋白なりの量は人々に依て異なるから、一概にこれまでが常態で、これ以上は病的だと、キッパリ界を劃けて言ふことは出來ねど、その肥えてる爲に坐作進退

の上に於て或は靜坐してゐても、何となく一種の苦痛を感じたら先づ病的なりと知り、何等の苦痛も無く活潑に動作するを得れば常態なりと假定しても宜い。

▲原因――何せ「でぶ太り」になるかといふと、之を一言に盡せば、取つた食物が費す食物に比して絶えず多くなるからである。世には肥胖病を以て脂肪のみが増すのだと說く人も有れど、これは大きな間違で其脂肪と筋肉とが殖え然る後筋肉減じ脂肪のみの沈着に轉ずるものである。それは兎もあれ、(一)運動の不足が大なる原因となる抑々我等は適當な運動をして居れど體內に取つた所の食物はよく燃燒して老廢物となり、老廢物となれば又食物が之を補ひて日々に新に又日に新といふ工合なれど運動が不足すれば血液の循環遲くなり隨つて筋肉などの燃燒することも少くなり遂に費す食物よりも取る食物が多くなるのである。これも(二)と同じく血液の循環が少なくなるからである。(三)大酒家は大抵肥滿するものだ、これはアルコールが酸化して熱を發し易い性を有つてるから、爲に取つて脂肪は燃えないで自然に身體に沈着するからである。(四)生殖器の異常も亦誘因となることがある。例へば女子ならば月經の少き爲にデブ〳〵肥え太り、男ならば睾丸を取つて往々本病に罹るやうなものである。西洋では鷄の睾丸を取ることを職業としてる者があつて、之に賴んで睾丸を摘出して貰へば鷄の身體は漸々に脂肪が沈着する、脂肪沈着すれば目方は殖え且つ肉は軟かで食べれば旨い一擧兩得の策となるのだ、併し鷄は迷惑なことである。

(五)精神使用の不足も大なる原因となる。例へば親がかりの娘や夫任せの妻君が何等の精神を使用するでもなく、唯美い着物を何う言つて強請らうか位の考で日を送つてるとズン〳〵デブ太りになるやうなものである、又愚鈍な者の無職の隱居が太るのも精神を使用せぬからである。古い川柳に「大男總身に智惠が廻りかね」とあるはこの道理を詠んだものであらう。(六)大食は少なからず本病を招く縱ひ相當に身體を運動し相當に精神を使用しても分不相應に大食殊に脂肪類を

過すとデブ太りになるは爭はれぬ事實である。(七)遺傳も亦脂肪沈着に與つて力あるものだ、即ち祖父母や父母などが肥胖病者であるとすれば其子孫に本病を遺したる例は澤山あるものである。(八)他病例へば身體の麻痺血行障害などが酸化機能を妨げて本病を誘ふこともある。



▲病狀═始めの中は肥え太つて健康になつたかと喜ぶ位のものなれど次第にその肥方が一定の境界を越え顔は鈍圓になり頤下に第二の肉が隆起して所謂二頤を呈し、胸は大にその形を變へ、殊に婦人に在つては非常なる肥え方をなし腹部の如きは益々前方に膨れ、一見妊娠者の如くなる、醫道では之を懸垂腹といふ。其他手でも足でも悉く肥えて爲に頸は短く肩は聳えて見え、梅ヶ谷宜敷と云ふ按排になる、梅ヶ谷は腕力愈々秀でるけれど本病者の太るは益々脱力するのである斯くて肥え太つた極端は乳房の下部や腿の內側或は鼠蹊部の表皮が赤く爛れるものだ、而して外部のみならず內臟にも脂肪沈着するに至る、是に至れば愈々金箔附の肥胖病である。以上は肥えたるだけの狀態であるが、次に之に伴ふ他の病狀を列擧すれば(一)疲勞し易くなる、即ち脂肪沈着して中には婦人でさへも二十

貫からの體重となり少し運動すれば筋肉を勞することと甚しくそれが爲に已むを得ざる運動の外は可成避けんとするやうになる。(二)呼吸苦しくなる、僅の階段を登り或は少し走つても、心臟の鼓動は直ちに高ぶり脈は速くなりへー／＼と肩で呼吸するやうになる。(三)氣管支加答兒を起すことがある、これも血液循環の障害から起るのだ。(四)浮腫を起し易い、さらでだに太つてる身體が浮腫むのであるから、その醜いことは此上もない。(五)心臟肥大する、これは常に飲食の慾に耽り多年食膳の娯樂を擅にしたる結果が所謂多血症となり、即て肥胖病も起せば心臟も肥大するのである。(六)腎臟萎縮肝臟腫大などの諸病を續發するものである。

▲療法＝＝體内に蓄積したる脂肪を丁度善い加減に除けば筋肉が締つて普通となるのだ、故に此の除き方が取も直さず療法である。乃で此の目的を達する手段を大きく別れば二通りとなる其一は體内に於て脂肪沈着の材料となる食物を節減するもの。其二は體内に在る脂肪が分解するやうに鼓舞するのである。故に如何なる名法があると云つても此の二通りに含蓄せらるゝのだ。されど此の二通りを實行する方法に至つては色々色ある、されば左に逐一之を述べて見ようと思ふが併しこれに就き一つの大注意は身體の脂肪を脫却する爲に却つて從來よりも衰弱するやうでは所謂前門の虎を逃れて後門の狼に出逢ふやうなものだ、故に之を實行する者は身體を衰弱せしめないで寧ろ強壯に赴きつゝ痩せるやうに一歩／＼治療せねばなりませぬといふことである。長たらしい前口上は措いて先づ痩せる方法は(一)從來よりも食物の量を節減せねばならぬ、或人は脂肪及び植物性の食物を禁せざればならぬとまで極端に走るけども斯の如き療法を施せば縱し痩るにしてもそれが爲に大なる衰弱を招くことがある、抑々人體は蛋白質脂肪含水炭素及び鹽類を取つて以て生活するものなるにその二大要素を禁ずるとは實に危險なることゝ謂はねばならぬ、故に蛋白質は從來と同等若くは僅かを減じて居れば追々に身體の脂肪を減少せしむ

ることを得るのである。(二)大いに運動するが宜い。運動すれば身體中の脂肪が漸々分解して筋肉は自然に締つて來る、殊に登山は脂肪を分解せしむる所の有益なる補助法である始の中は肥え太つてる爲に他の人よりは大いに困難を感じ易いけれど之を耐へ忍んで行れば次第に心臟の動作を鼓舞し血行は盛になり何時の間にかデブ太りは除かれて了ふ。(三)は入浴である。入浴は溫浴冷浴共に酸化機能を增進せしめ神經を鼓舞し隨つて脂肪の分解を來すものだ。(四)は液體を飮むことを減ずるのである。例へば湯茶味噌汁の如く液分を含むことの多き物を大いに減ずると勢い血行障害の改善を促し體內の脂肪は燃えて爲に瘦せるものだとオエルテル氏及び先輩が說明してゐる、余は屢々之を諸人に試みたれど、何れも『咽が乾いて堪りませぬから儘よ肥えてゐても關ひませぬ』とまで訴ふるが多く、實行する人は甚だ少いものである。(五)は發汗法である、これは運動に依つてもその目的を達せられるけれど、運動のみしてゐては餘り身體を疲勞せしむる恐があるから別に他の方法を用ゐて發汗を促すのだ、これには藥物及び厚着などの方法もあれど就中蒸氣浴即ち蒸風呂を以て最も適當であると余は信じてゐる。(六)は緩下劑を服むのである。即ち蘆會或は加爾々斯泉の如き物を連服するのであるが、余は斯る藥物療法を餘り賛成せぬ、何となれば之が爲に衰弱して危險を招くことがあるからである、併し強て用ひんとならばその肥えたる人が便秘症で且つ月經不順なる場合に蘆會莉刺巴丸を朝夕二丸宛位三週間連服しても差支ない、この丸藥は緩下劑で通經藥で、而も連服して左程の衰弱を招かぬものである、右の外猶色々の療法はあれど、危險なれば一切略して先づ此位に切り上げておかう。終に臨んで大に注意すべきは今や發達最中の令孃方が病的ならざる健康な太り方をしてるにも拘らず『これはデブ太りなり嗚呼醜し、イデ此の療法を應用せん』と誤解せらるゝに至つては天理に背き却つて圓滿なる身體を傷ふことになる、女の方が女を見れば如何なる身體が美しう思はるゝか知らねど男の眼より女の方を

評すれば、瘦せ細そりと蒼白い身體よりは、フククリと肥えて艶々としたる肉色のあるのが立派に見ゆる、知らず女の方は如何なる男子を立派と見らるゝか聞かまほし〳〵。（完）

季節衛生

▲襟卷ショールの害＝此月になると襟卷やショールが段々世に出て來るけれどこれは内地の人が凜烈肌を劈くが如き寒風の吹き荒む樺太邊や滿洲へでも出てゐるならばいざ知らず我が内地に於ては襟卷ショールを廢したいものだ、併し霜を戴ける老人や水骨の小兒は特別として、血氣盛の式部達が白いショールで必ず頸から顎の邊を包まねばならぬものゝやうに心得て居られるらしいのは抑々の間違です何となれば之を永く用ふると頸部の皮膚を薄弱にし抵抗力を弱くして偶々ショールを忘れたる時や、人前などで之を用ひずにゐると、直様寒冒にかゝるやうな生地無になるからです。

▲隱襟卷を用ひよ＝隱襟卷とは襟卷をせずして襟卷をしてゐる以上の暖さを感ずる方法である、其方法は外出せんとするに當り頸部の冷水摩擦をするのです、然うすると外氣に觸れても寒さを感ぜざるのみならず寒冒に罹らぬ所の豫備にもなるのである。但し乾いたる手拭でよく〳〵拭き取らぬと龜裂の切れることがある。序に毎年申すことながら其病に關する事柄を述べておきませう。

▲龜裂皹裂凍瘡＝早きは木枯の吹き初むる頃から遲くも初雪の降る節となると此等の病が次第に跋扈する、即ち水仕事する女達が寒氣の刺戟に依て皮脂腺より皮脂の分泌が減少し爲に皮膚の乾燥するのが龜裂、同じ原因で一層病狀の甚しくなるが皹裂又寒氣のため手足耳鼻等の血管に變化を及ぼしその部に血が滞り始めは血管收縮して蒼白色となれども長く寒さに觸れてる中に血管の神經が麻痺擴張して紫紅色になり次に腫れて痒みを覺え殊に夜分寝床に入つて温ま

ると甚しく尚進めば破れて潰瘍となり最も進めば壞死とて血液の循環全く止まり筋肉骨等の脱落するに至るをいふ、第一第二を防ぐには不精では不可ぬ濡れた手を風に當てたり冷たいからとて直ちに火に當てたりしてはなりませぬ水仕事する方は常に乾いた手拭を腰につけおき手を濡したる度によく拭ひ剷し〳〵兩手を摩擦して少し暖みのついた所で外出するとか火に當るとかいふやうにして



頂きたい、それから又龜裂性の人は其上豚の脂を少し塗つて摩擦してゐると大に豫防になるのみならず、治療にもなるリスリンや酒又は酢などは餘り感心せぬ何となれば一つはベタ〳〵するも一つは刺戟が強いからです斯く注意しても皸裂になつたら格魯胃謨二十瓦沃度丁幾十瓦を混せて塗布し手袋足袋を以てその患部を蔽うておけば治ること妙なり。

凍瘡には苛性加里一瓦、屈里設林三十瓦アルコール五十瓦水百瓦を混せて浴後に塗布し繃帶しておけばこれ亦大抵は治るけれども壞疽期に及んでゐるやうなのは外科醫の手術を受けねばなりませぬ。全體此等の病は常

に衛生を實行して身體を强壯にし入浴を怠らずに皮膚を淸潔にし且つ强くしてゐる人は罹り難いものである。

▲鼻で呼吸すべし——これは夏でもだけれど冬は殊に鼻呼吸が宜い、寒風を口より吸ひ入れると溫まらずに直樣呼吸器を刺戟するから、氣管支加答兒や肺炎を起し易い、然るに鼻呼吸なれば寒風が迂餘曲折して行く中に溫まるから此の弊を免れることが出來るのみならず運動しても早く疲れぬものである。

▲正月の準備に就いて——今月の二十日過になると徐々正月の支度をなさるゝ方がある、何事でも早く手廻しするは、至極結構なれど、食物の準備だけは大いに注意を拂つて頂きたい。食物中でも干物や鹽藏物を用意しておき、時に臨んで用ふるは何等の害はないが、煮豆や田作を早い中から煮て重詰にしておくなどは眞平御免です、如何に冬期とは言ひながら正月になる頃は變敗して一方ならぬ害をなしたる例は幾らもあります、況んやその變敗したる物を客に食はせ殘りたるを又元の重箱に入れて再度の用を待つに至つてはイヤハヤこれ以上は申しますまい。

衛生顧問

糸左近

小兒科之部

（耳だれの療法）問　九歳の男兒本年四月頃より「耳だれ」に罹り醫療も種々相盡し候へ共今だ治らず候間何卒宜き療法を御敎へ下され。（信州山家の心配女）

答　まづ左の藥をスポイトで注射し軟らかにしておいて然る後微溫湯で洗はねばならぬ。

硼酸　倔里設林　各一、〇　溫湯　一〇〇、〇

すべて耳の中へ注射する藥は水の溫度が肝要である若し冷たければ腦貧血を發し熱ければ腦充血になり何れも眩暈するものである。さてその溫度は水氣を離れてゐるといふ位なのが可い。其他一日に數回酒精を少し

點滴して御覽なさい。

（鵞口瘡の病狀療法）問　生後五ヶ月の男兒口中が白く相成り居り時々治りては又繰返す有樣に候て甲醫は鵞口瘡なりと申され乙醫は粘膜加答兒なりと診察せられ迷ひ居り候が一體鵞口瘡の病狀は如何なるものに候か又治るものにか併せてその療法をも敎へ下されたし。（醫中のGK生）

答　外觀恰も健全なるが如き口中に粟粒程の乳汁の凝固つてる樣な白點を散生し或は數個相近接し日を經るに從ひ數を增し且つ大きくなり遂に頰、唇、口蓋等一面に蔓延し甚だしければ會厭（のどちんこの事）食道胃等に及ぶ乃でその外觀が乳汁の凝固つてるやうである所より若し乳汁ではなからうかと試みに之を拭へども容易に除き去ることが出來ぬ故に本病であることが直ちに鑑別出來るものだ、就中その時日を經過したる者は殊に拭ひ去り難いものである。本病は左程憂ふるに足らぬ病で强壯なる小兒ならば一週間內で大抵治るものだけれど營養不良若くは脆弱の小兒に在ては數月に及ぶ或は死に至ることなしとも限らぬ。本病に罹れば極めて口中を淸潔にし過滿俺酸加里、硼砂鹽酸加里等の溶液に浸したる布片若くは筆を以て粘膜を洗ひ同時に淸潔なる布片を以て之を拭はねばならぬ、そして若し同時に膓加答兒胃加答兒等を發したる者あらば兼て之が治療を施すべきは勿論である。

右拭除料

過滿俺酸加里〇、〇三　餾水二〇、〇

硼砂一、〇―三、〇　グリスリン二五、〇

右同上

鹽酸加里一、〇―一、五　餾水三〇、〇

右同上

（しらくもの療法）問　九歲の男兒去る五月頃學校か散髮屋かで傳染したものでせう「しらくも」に相成り色々手當して見ますが治りませぬ何卒その療法を敎へ下さいまし。（肥前の[illegible]なき浪島女）

答　肝油の如き物を塗りて痂皮を軟化し毛髮は悉く剃り殊に脫け易い毛は丁寧に拔き取り毎日數度刷子を

以て石鹼水又は曹達水を含ませて洗ひ然る後左の處方に依り塗布藥を試むべし。

石炭酸二、〇　酒精偶里設林各二〇、〇　水二〇〇、〇

右一日數回塗布

〔靑色便に就いて〕問　生後十ヶ月の女兒靑色の糞便を致し色色醫藥を服み居候も全治致さず候但し至極壯健の方にて他に何等の異狀これなく候、その療法を敎へ下され。（千葉縣 葉子）

答　偕健康なる乳兒の糞便は一日に二度乃至四五度も有つて別に臭氣もなくその色その硬さは恰も半熟卵の如きもの、そしてその洩し始めは黃色でも暫く經つと綠色に變るのが往々ある、それは便中に含めるビリルビン（膽色素）が空氣中の酸素に觸れビリヴエルヂンといふものに變化するので強ち病的とは言へませぬ、若しやそれではありませぬか今一應御地醫師の御熟診を乞はれよ。

〔乳兒の消化不良〕問　乳呑兒の消化不良とは如何なるものに候やこれが注意及びその療法を御敎示下され度願上候。（加賀の 中曹女）

答　有益なる御質問なれば詳しくお答へ申しませう。夫れ哺乳の量多きに過ぎ或は咳嗽し或は單に吐乳することあるは普通の狀態なれば決して不良なる病的ではない何となれば小兒の胃の位置は垂直であるのと未だ完備してをらぬために其の容量の多きに堪へぬからです之に反して病的は胃の障害を起せる嘔吐を發し顏色蒼白となり食慾減じ何となく精神不安の狀を呈し平常の如く安穩でない大いに啼き叫び時としては眼球を上に向け若しくは搐搦等を發することもある、而して吐乳は往々哺乳の量を節減しても止まぬことさへもある而して嘔吐は多く曖氣に伴ひ吐乳には粘液を混じ臭氣を放つものである、大便は通常綠色を帶び臭氣あつて多少の粘液を混ずるが時としては僅かに綠色を帶ぶるのみで他に異常を呈せぬこともある腹は多少張つてゐて壓すれば疼痛を訴ふ。發熱は初めより強き者もあり或は無熱の者もあつて一定せぬ時としては反射作用のために呼吸頻數となりチヤノーゼ（皮膚紫色を呈すること）を呈

して四肢は冷えて脈は細小に且つ數多くなり衰弱の狀態を呈することもある。又或他の症にあつては初めより嘔吐を起さず或は稀に吐乳し胃病の症狀よりも腸の症狀多く屢々飛び立つやうに泣き全身を前方に曲げ時々眼球を上に向け時として四肢をピク〳〵させ一二の放屁をなし初めて安穩に歸することがある。大便は初めは綠色の狀を呈すれども後には水瀉となり黃色の溶化せぬ凝固つた粘い綱い粘液を混せ厭ふべき安母尼亞性臭氣を放ち初めは一晝夜五回乃至六回を常とすれども時としては十五回乃至二十回の多きに至ることがある食慾は減退し舌は白苔を帶ぶることもあるし又帶びぬこともある、而して小水は大いに減ずるものである。

さて療法はといふに、小兒に在ては病勢の輕重如何に拘らず大にその攝生に注意し之を輕忽に看做してはならぬ。母又は乳母に依て養はるゝ所謂天然養育法に依れる小兒に在つては先づ母及び乳母の攝生如何が非常に大切である。母及び乳母の精神感動身體過勞疾病月經等は一時乳汁の變狀を起すものであるからよく〳〵之に注意せねばならぬ。その他授乳の多きに過ぎ爲に本病を起したる者に在てはその授乳の度數を一定すること甚だ肝要で即ち每二時乃至每三時に授乳するの概則を定め決して泣いたからとて無責任にも只哺乳せしむるのみを務としてはならぬ。元來胃液は消化作用を營むの外に乳汁の變敗を防ぐの力あつて適當なる乳量と適當なる時間とを用ふる時はよくその二つの作用を營むけれども若しその乳量又は時間の一定則を破り多量の乳汁が胃中に入れば之が消化を營む爲に防腐力ある鹽酸は消費せられ而も充分に被消化液となることが出來ないが腸間に入るから十分吸收せられず却つて腸中に存在する細菌の侵す好發育場となり種々の病的を起すものである。故に人口營養法に依れる者はこの危險一層多いのである。若し攝生法のみで治らぬときは一時授乳を廢し（二十四時間乃至三十六時間）其間麥煮汁若くは蛋白水（卵二個の卵白を水一〇〇〇、〇に混和し之に少量の白糖を加入す）を與へて偉功を奏することがある。本病に施用する藥劑は甘

汞鹽酸重炭酸曹達百布聖で瀉下物に多量の粘液を混じ腸加答兒の症を發したるものには次硝酸蒼鉛を用ひねばならぬ。尙ほ左に二三の處方を揭げておかう。

甘汞〇、〇一——〇、〇三　ゴム末〇、三
右一包と爲し一日三回一包宛

百布聖一、〇　餾水三〇、〇　鹽酸〇、三
單舍五、〇
右一日三四回に分服

重炭酸曹達一、〇　餾水三〇、〇　單舍六、〇
右每二時に五、〇程宛

炭酸麻屈涅矢亞〇、二　餾水及び加兒恭水各三〇、〇
右每二時五、〇程宛

次硝酸蒼鉛〇、一　ゴム末〇、三
右一包となし每二時乃至三時に一包宛

〔答者の不審と思ふ事〕——先々月より今月は小兒科を答へますと豫告しておいたにも拘らず他の美顏や毛髮に就いての質問多くて小兒科は漸く右に揭げたる數問に過ぎず、これはいかなる理由でせうか、小生の最も不審に堪へぬ所である。

尙ほ眼科を揭げるお約束申しておきました所質問せられたる事柄が到底手術を施さねば治らぬ重大な病のみであるから悉く略しました。例へば（女學世界大好女）の斜視（晴れみ曇りみ女）の眼瞼粟粒炎（宇都宮の栃木一女）の吊眼其他多くの慢性トラホームの如し、此等は眼科專門醫師に就いて手術を乞ふより外に致し方ありませぬ。

質問心得

一、書體は楷書、假名は變體を用ひられぬ事。
一、姓名年齡は必ず記入せられたき事。
一、葉書に一人一問たる可き事。
一、郵券封入或は往復葉書を以て返書を乞はるゝも必ず應ぜぬ事。
一、匿名は異樣なるを撰ばれたし、「女學世界愛讀女」「困難女」「懸願女」「何歳女」其他病名を名にする如きは甚だ多く有つて紛らはしき事。
一、男子の質問固より差支無けれども、男子生殖器に關することは答へぬ事。
一、面白半分の問と認むるものは必ず沒書にする事。
一、科目を分けて順々に答へますから、問に依ては三ヶ月後に廻るかも知れぬ事。
一、質問書は東京市本鄕區森川町一番地表北寓七十八號　糸左近へ必ず宛てらるゝ事。
一、質問書には「女衛」の二字を匿名の上に書かれたし、何となれば「中學世界」の衛生顧問と紛るゝからである事。
一、ペンや鉛筆で無く、必ず毛筆を以て書かれたき事。
一、繪葉書を用ゐられぬ事。

以上

眼の病と婦人の生殖器

醫學博士　山口秀高

婦人の眼が、直にその生殖器の疾病に關係するかどうかは、一概にも言へないが或種類の眼病は、確に生殖器に關係するものである、例へば虹彩炎などは月經の時に起り易い。又起りて居れば大變惡しくなるものです。

月經の時に起る眼の病

月經の時分には、婦人の身體は抵抗力が弱くなつて殆ど病的です。甚しい間が三日、弱い間を加へて、凡そ九日間もあらう。此間眼病のある婦人は月經の最中になるに從て、眼の病氣も惡くなり、月經の終る頃ほひ眼の病氣も、稍々善くなるといふ風です。假ひ健康の婦人であつても、月經の時は、眼瞼が多少充血したり、眼のぐるりに靑い輪を現し、時として眼の水腫など起すことがある。又或場合には結膜炎など起すことがある。或（三十二歳の）婦人は、月經になると眼疾を煩ひ、瞼が紅くなる。月經が濟めば、同時に直る。姙娠中にはこの事はないが、月經が始る毎に、この眼病となる。其他常人にあつても、月經時には、眼が惡くなり易い。結膜炎なり、虹彩炎なり、眼底の病氣を惹起すのです。殊に常に、眼の惡い婦人は、月經時に不養生をすると、著しく眼の病を高める。さなくとも、月經の不順なもの、不規則のものは、常に眼病を起し易い。この時、視野といつて、眼の物を視る範圍も大分狹くなるものです。殊に、かの虹彩炎などの如きは、月經不順の時、毎に犯され易いのです。例へば貧血性の人、虛弱、腺病性の人などは、この傾向があります。殊に視神經といつて、眼の視力を掌る神經は、月經の不順に、極めて密接の關係を有し、時に視神經炎を起すばかりではなく、往々神經の萎縮を起すことがある月經なき婦人は、引續いて眼病を起し恰で盲目同樣となることがある。かの月經のなほりか

けに、足を冷したりなどして、不發生した爲に、盲目となつて仕舞つたといふ實例も乏しくない。是等は何れも。外に變化がなくして斯うなつたのである。されば月經は、特に眼と密接な關係があるから、餘程注意しなければならぬ。

懷姙時に注意すべき眼の病

懷姙中は、婦人の身體に非常の變化を生ずる、躰質の新陳代謝が一層激しくなり、子宮は擴張して、周圍の諸器官を壓迫し、血液の循環に變化を來す。從つて眼にも、その影響が來る。唾や淚が多くなる。眼の角膜には、腫物が出來る。時として「カタラクト」(眼の「レンス」の病)を起し、其他色々の病氣を生じ易い。又人によると弱視を起すものです。併しお產が濟むと、大概は快くなるものだが動もすれば、之を繼續する事があるから、注意を加へねばならぬ。懷姙中、夜盲となる事あり、其外盲膜の病氣などは起り易い。

お產と眼の關係

お產に臨んでは、誰しも强い壓迫と努力とによつて、烈しい苦悶を來し、眼も大分充血するから、まゝ出血を起し、出血の爲には、晶子體の混濁となり、視神經の炎症を起すものですが、大槪は適當なる治療を加へる時は、出產後日數の經過と共に、快愈に歸する。されば亦之を原因として、蛋白性盲膜炎などゝいふ病氣を起すことがある。啻に出產の塲合のみならず、產褥中は、極めて注意せねばならぬ。此間には動もすれば視神經の病氣を發すものである。總じて產褥中は、毒素を分泌するもので、矢張蛋白性の盲膜炎や、虹彩炎やを生じ易いから、眼の衞生には注意せねばならぬ。

乳汁と眼の關係

乳の出初めには、弱視を起すことがある。視神經炎を起すことがあるから、この時は、早々乳を飮ませることを止めて身體の營養を取らねばならぬ。それから

又餘り子供の大きくなるまで乳を與へると、母體に害があるが、眼にも色々な病氣を生ずる、つまり母の營養分を子供が吸ひ取つて仕舞つて其の爲めに母の體質を弱らせて仕舞ふから起る處ろの眼病である。

分娩の時は如何に注意すべきか

お產の時には、子供の眼を傷ふことがある。眼瞼又は角膜を痛めることがある。これは多くは、子供を分娩さす時に傷るものです。就中、危險なのは產婦の痳病です。痳病のある婦人の子供は、濃漏性結膜炎を起すものです。斯るものは、產婆の義務として、二プロセントの硝酸銀を垂すことを忘れてはならぬ。勿論これは產婆の規則になつて居ります。

女學生は眼を如何にすべきか

敎育が進んだ爲めに妙齡の婦人で近眼に罹る者が日益に多くなるやうだが、その第一原因は、男女とも過度の讀書をして、眼力を疲勞させるからであるが、特に女子としては、男子よりも競爭心が激しいのに拘らず。肝腎の體力は、到底男子に及ばぬ。つまり婦人は比較的虛弱者が多いから、近眼に陷り易い素質を持つて居るのである、のみならず、學生時代に近眼となるのは、頓て人の母となつては、近眼たる素質を子孫に遺傳することゝなる。されば學問などする妙齡の婦人は、特に眼の衛生を重んぜなければならぬ。若誤つて近眼となつた時には、直に適當な近眼鏡を用ゐねばならぬ。近眼鏡を用ゐるのは、女子の風姿を害する。女子の謙德上如何はしいといふ論もあるが、是等に頓着して、眼鏡を用ゐぬ時は、近視は、非常なる速度を以て、危險の程度に達するのである。さうして近眼にかゝつたら第一に運動と滋養をよくして體質の强健を圖らねばならぬ。

子供は眼に就てどんな養生をなすべきか

幼少の女子にして、貧性眼のショボ〳〵して居るも

のがある又小學校などに通つて居る者に、先天性の近眼がある。尤も是等は、母胎に居る時より、眼の病氣に罹つた爲に視力が弱い、つまり眼が不健全な爲です此のやうな眼の弱い子供を、普通健全の子供と一緒に、小學校に通はせ、細かい字の讀み物や書き物などをさせると、眼は非常な速度で惡くなる、終には盲目となることがあから、大に注意せねばならぬ。其外男女とも「トラホーム」に罹り易いから、母親は餘程注意を拂はねばならぬ。

ヒステリーと眼はどんな關係を持つか

婦人がヒステリーに罹る時は、乾度眼に影響する。眼が好く見えない。眼が痛む、眼が錐で刺さるゝやうに、眼のぐるりが痛む、鼻の方がチク／＼痛む、額や額の方も、引張るやうに、又壓されるやうに痛む、斯んなことが、僅に一時で止り、又は一時間も續き、一日續き、一年續くといふことがある。併し是等も、性質の好いのは、旅行したり、鬱散をして、氣分が替りさへすれば、霧消てしまふて、醫師が診察しても、別に眼に異狀はない。その痛む局部を檢査して見ても、異常がない。併し遠視眼などで引續くものは、眼が見えなくなることがある。總じてヒステリーで、眼の惡い人は、月經時にでもなると、之に比例して、その病氣が高まるものです。甚しいのは、盲目同然となるこのヒステリーは婦人の一人前となる時、即ち十七八歲より二十四五歲まで所謂、靑春期の婦人に多いのです。(田中久筆記)

○我れに最もよく似る者は吾が子なり、殊によく似る處は吾が欠點なり、故に親は吾が子に其欠點を傳へざるやう常に注意せざるべからず。

○母たる者の其子に施す家庭教育は決して智識を與ふるに重きを置かずして心情を育成する事を貴んずべし。

江海之遺珠

貯金の新工風

金森通倫氏

貯つたら溜めやうと思ふけれども何うも貯らないと大抵の人はいふのであらう。私は此貯つたら溜めやうのたらが氣に入らぬ。朝五時に起きたら御一緒に參りませう。之は實に當にならぬ約束ではありませんか。

又貯金は福の神である。神樣に御酒を上げるには口をつけずに上げるのが普通だ然るに此福の神たる貯金には殘り物を供へるといふのに、マルで福の神を乞食扱にして居るのだ。夫では福の神が舞ひ込まぬのも尤もな次第、諸君！貯金は何うしても御初穗でなくてはいけない。金が手に入つて初金を見た時に、必ず貯金をなさい。そして農夫は作物の御初穗を貯金にすると宜しい。私は斯ういふ樣なのを御初穗貯金と申します。

次につもり貯金といふ事は。私が一日髮を刈らうと思ふて或理髮店に、行き主人に向つて、此店では貯金をして居るか何うかと聞いた。すると彼は何う致しまして貯金どころの騷ぎではありません、貯金でもすると忽ち食ふに困るといふ仕末ですと答へた。夫れて理髮料は幾何かと問ふと。十二錢ですと答へる。外に安い床屋はないかと更に問へば、十錢位の所が澤山ありますといふ。では其方に行かうと云ひ出した所、マア私の所で刈らして下さい。ナニ十錢に負けて置きますからといふ。併し夫れではお前さん食ふに困るであらうといふ。と高が二錢位の事で食ふに困る程のこともありませんといふた。そこで私は例の說教を始め、然ういふ譯ならば今後は十錢で理髮したつもりで二錢宛貯金しては如何だと勸めた。すると彼は、では私の所に毎日平均十四人位の客がある一人に就て二錢づゝ貯金するとして三十一歲になる私が六十一の歲迄に金の千圓も溜るで せうかと念を押して問ひ返したから何うして何うして、一日十人としても二十錢、三十年間には四千九百二十六圓、も一少しで五千圓だぞと答へると、彼は益々感心して其日から直ぐと實行する事にして。十錢で賣つたものならば九錢で賣つたつもりで貯金する十圓取は九圓取のつもりで貯金する。農夫ならば十俵出來ても九俵のつもりで貯金する。之をつもり貯金といふのです。酒飲家の一本槍に曰く「下戸の建てた藏はない」と。成程下戸の建てた藏はない。之は下戸が一つ忘れて居る事があるからなので。即ち飲んだつもりで貯金しないから藏が建たないのである。

諸君！酒と煙草とは大に費用の嵩むものであるとは既に御承知であらう。私は敢て之をお禁めなさいとは申しません。併し乍ら毎日敷島一袋宛を儉約すれば、二十一歲の人が七十歲となる迄には六千二百三十三圓十六錢となる。酒一合宛を儉約すれば五十年間には七千七百九十一圓四十五錢となる。乃でさつきを喫むつもりではぎを喫み、一合の酒を飲むつもりで少し控目にして二錢宛も貯金する事にしては何うであらう。（教育時報所載）

予が二つの誓

安田善次郎氏

余が幼時に、質粗、勤勉、正直、節儉に鍛い上げられて來たことは、今日迄に非常な効果があつたことを認めて居る。余が後に東京に出て來て日本橋の人形町通りに僅かに間口二間奥行五間半の家を借りて、二十五兩の資本を以て商賣を始めた時に、小僧と傭婆とを使つて一生懸命に稼いだ時などは、生活費は店の收益の十分の一を超えないと云ふ規定を立てて、遣り通したが、之なども幼時の訓練のあつた御陰と思ふ。又その頃より今日までも心中二つの誓ひを立てゝ居る。第一は如何なる場合でも虛言を以て自分の一時の都合を圖つて、他人の迷惑を犠牲にする如きことは斷じて爲すまい。第二は如何なることあるも身分不相應の生活は斷じて爲すまい。此二ヶ條を守つて能く今日に至ることの出來たのは、矢張り幼時の訓練のお蔭と云はなくてはならぬ。此二ヶ條の誓文は極めて單純で何でもない樣であるが、之を實行するに就ては却々容易ではなかつた。例へば自分が十分と思つて居ない品でも、客を安心させる爲めに上等の品と云ひ度くなることは幾らもある。客の方は全く素人で何も氣の附かない場合に、自分の品の惡い所を善く知らしてやると云ふことは商人に取つては非常な苦痛でなる。余は斯樣な場合に斷じて一時的の事をやらなかつた。又嘗て斯樣なことがあつた、段々と信用を得て店も繁昌する樣になり二千兩近くの資產を作り上げた、その時のことである、近所に間口二間半で土藏附き格構の家、それを四百三十兩で賣り度いと云ふ者があつた。その頃自分の店は過分の繁昌で、今までの家では何うしても狹まい、その上少々の金も殘して居る、そこで此家が買ひたくつて仕方がない、それを靜つとこらえたのは收入に十分の一を過ぎる生活は爲まいと誓たからであつた。余が斯樣な主義を通して來ることの出來たのも、幼時の兩親の訓練のお蔭であつたと云はなくてはならん。（太平洋所載）

大切なる七ケ年

故　島田蕃根翁

私自身の經驗から云ふも、また八十年來いろ／＼の人に接し、書生を養ひ敎へた實驗から云ふも、人間一生の學問は僅七年間を以て出來るものであると云ふことを悟つた、これは吉田松陰が松下村塾の塾生に向つて常に訓戒した言葉であるが、「人間一生涯の學問は七年間に其の土臺が出來るものである、その七年間とは年齡十七、十八、十九、二十、二十

一、二十二、二十三までゞあつて、この七年間が一番學問の身につく時で、この時に刻苦勉勵した人が將來の大學者となるのである」と云つたいくら勉强しても十七歳以下の學問は十分身につかず、また二十三歳以後の學問は七年間に練り上げて來た土臺に枝をつけるに過ぎぬ、即ち附け加へをするばかりで眞の學問が出來るのではない、故にこの七年間を空に過し、道樂に身を窶して來たものに學者となつたものは一人もない丹成で私は現今の若い人を見ると、必ずこの七年間の話をして、大いに勉め勵むやうにと勸めて居る、つまり私は松陰の云つたことを實際に他人に行ふて見て、其の誤りならずして効多きを知つたので、松陰の受賣りをして居るのである。（新公論所載）

我が無二の友

內村鑑三氏

余の過去半生を通じて余を感化し薫陶し、以て余の性格を作り上ぐるに至りし偉大なる力のものが四つある。其第一は余の父である純朴なる儒流の武士氣質であつた父の感化が余の性格に少からぬ影響を與へた其第二は米國ペンシルバニヤ州の白痴病院長ドクトル、ケルン氏である氏は恐らく米國第一等の實務家である、若し余に此人の感化がなかつたならば、恐らくは余は一種の夢想家と爲り了つたかも知れない、又氏は余に向つて眞正の慈善の何物たるかと敎えて吳れた、即ち基督敎の實際的方面を敎えて吳れた。其第三はアマルスト大學のシリー先生である、氏は余を基督に導き、基督の何たるか、人生の何たるか、其目的の何たるか等の大問題に關して最も健全なる智識を與へて吳れた。其第四は北海道の天然である、之が余を和らげ、詩人的とし寛容にし、且つ天然物に非常なる趣味を持たしめて都會を嫌はしむるに至り、同時に政治文學等の都會附屬物を嫌はしむるに至つた、即ち北海道の天然が余をして永久に一種の野蠻的性格を成さしむるに至つた。此四大勢力の感化は今日に至るも終に脫することが出來ない。

余は東京の片田舍角筈の一寒村に僻居を構へて居るが、之れすら尙ほ雜踏の響きに閑寂を破はれることがある。故に秋の暮冬の朝、暇さへあれば郊外を漫步して天然然の福音を充して居る。年々日々に都會、都會の附屬物なる似而非文明、東京の輕跳なる青年學生、新進の學者、敎育家、宗敎家、文學者等とは大分に遠ざかつて來て居る。唯だ喜んで接するものは田舍の農夫である。

考へても見よ、よしや其言說行動に就て、世間の稱賛喝采雷の如く湧き來つて周圍を取り捲くことがあつても、己が心の奥底に深き、平なる所がなかつたら畢竟其等に何の價値があるか。高き思想、深き心情を慰め勵ますものは都會の雜踏と田舍の大自然と何づれが力あるか。樂しげに囀づる鳥、無心に泳げる魚、蓊として茂れる森林、路傍の花卉是等の自然は何も言はず語らざるが、然かも靜かに接すれば無限の味津々として盡きない。此味みは、蓋し都會の似而非文明人は恐くは解し得ないであらう、之を解するものは唯だ田舍の農夫であらう。（農業新聞所載）

今の文界の作物に就て

內田不知庵氏

今の若い作家のものが皆清新なえらい物などゝ言ふのでは絶えて無いが、然しその內には從來にない新しいものが確かにある。で、自然主義といふ樣な處へ氣が付いて來たので、始めて日本の小說界が世界最近の潮流と稍々雁行してゆける樣な傾向が見えて來たのではないかと思はれる。そこは慶すべき事であらうと思ふ。と言つたからとて若手の作に隨分拙いものが多い。少しも感心しないものが多い。決して妄にそれに謳歌するのではない。が、その內に往々前言ふやうな傾向か仄見えるので、それは進步だといふのだ。といふはあの正宗白鳥や佐野天聲。あの二人のには善い處がある。天聲の「大農」に私が吃驚して了つたとか新聲に書いてあるさうだが、何も吃驚もしなければ、肝を潰しもしない。全體としてあれが傑作か否かは知らぬ、が兎も角も新しいものがあれに含まれてゐるは事實だ。白鳥のも拙い物が多いが、唯あの「塵埃」、あればいゝ。書き方などに就いては、種々の批評も出來るだらうが、ともあれあの全體に、人生といふものがぼうつと映じ出してゐる。そこが善いといふのだ。部分々々の描寫がいかに巧緻であらうが、下手であらうが、其麼事は何でもない。それが全體として人にいかなる感銘を與へるか。人生に關する感銘を、その作全體の上から如何樣に與へ得るかといふことで價値が定まるのだ、もう局部の技工などは我々の問題でない。近い譬が彫刻物でも、從來の趣味では、此處の毛彫がいかにも巧だ、毛筋が一本々々通つてゐるなどゝいつて滿足したものだ、が、それが全體として意味ある感銘を與へ得れば何でもない。銅像などが善い例だ。その人物に關する全體の感銘が大事で、その力が無ければ幾ら爪の垢まで彫つた處で、それは爪の垢彫が旨いだけの事だ。小說も以前は紅葉を眞似、種彦を眞似、西鶴を眞似、京傳三馬を眞似るといふ事だつたが、もう其麼處に首を突込んでゐなくなつたゞけは善い事だ(中略)不思議な事は、今の小說中の人物は飯を食つてるか何だか分らない。戀ばかりしてゐるやうだ。經濟といふ人生の大いなる一面が小說に這入つてゐない。西洋のにはちやんとある、態々それの說明をせずとも、自ら犇々と其處に觸れてゐる。此間も時事新報で坪井九馬三博士が、日本從來の歷史研究は經濟を忘れてゐる、政治歷史でも何でも、その底には經濟事情が潜んでゐて、それによつて種々の事業が起伏して來るのだと論じてゐた。這麼事は西洋でも夙に言はれてゐるし、誰にも分り切つた事だが、其處へ氣の付いて來たこと、實世間と緣遠き歷史上にまで、それが注目される樣になつたのは、それ程までに社會が經濟上に逼迫して來たのではないか。十九世紀の問題は經濟問題だ今度とても富豪は益膨脹し、貧乏人は愈々困ることにならう。經濟問題はもう社會一般の、何人にも共有の問題だ。だから小說家とても亦問題にして善い事でないか。處が今の若い作家のものには、一向その影響が見えない。白鳥の「塵埃」には其味が少し出てゐる。幾らか善いといふは其處

を指すのだ。

かう言つたからとて、裏店住居の貧乏人さへ稱けばと言ふ樣な、其空淺薄な事ぢやない。經濟で煩悶するのは却つて富豪かも知れない。ルーズベルトがトラスト征伐を盛んにやる。ロックフエラーの恐慌は我々意想外にあるかも知れない。(中略)單に貧民では題目にならない。食へないから苦しい。それだけだ。單に物質的ならば苦痛は輕い。そこへ精神的の苦悶が加はつたものは大なる題目だ。何故に今の作家はこれを題目にしないのか、人生はプレトー一點張では押通せぬ。經濟の方面にも十分目が付いて來れば、恐らくは眞人生に接したものでなからう。畢竟、若い男女の戀――それも飯を食はぬらしい者同士の戀などに局限されてゐる内はだめだ。中年の男が蒲團を着て若い女學生の香りを慕ふなどといふ、それも可からうが、その中年の男は生活といふ事を考へなかつたかどうか。私はあの「蒲團」は雜誌が手に入らなかつたのでまだ讀まぬが、實際は必度その問題が胸に往來しただらうと思ふ。妻が死んで自分は其の若い女と同棲したら定めし愉快だらう、然し子供はどうとか經濟はどうとか、その衝突が若し作の上に現はれてゐないとすれば、其男がちと淺薄になりはせぬか。或はそれを考へなかつたか。世間には考へぬ人もないではない。がさういふ人間にして了ふと、又其問題にも苦悶する人間にするとは、何方が深かく人生に觸れるであらうか。また古女房に飽きて若い女が欲しい。それは事實だ。我々にも經驗がある。が、それが事實ならば、又古女房のいゝ事もある、それも事實だ。さういふ側も少し書いていゝ事だらう。親子の事などは今の小說に殆ど見受けない。それも放蕩息子の親に食つて懸かる處を書くよりも、親を主にして、親が放蕩息子を持餘す所をちつと書いて貰ひたい。或は家庭的執着、必ずしも家庭の樂みとかいふのでなく、一種、家庭に執着する感情、どうもそれを攪き回し、打ち壞すことを能くせぬやうな妙な處、これ等は「蒲團」の作者に聽いて見たい。あの作の主人公は、さういふ處に什麼感じを持つただらうか。或は又世間を渡つてゆくと共に、功名心の縮んでゆくところ、朝鮮でも支那でも一呑にする勢の青年が、やがて小つぽけな庭一つ呑めないことになりゆく處なども面白いであらう。

又かういふ事があるだらうと思ふ。惚れ合つた男女が一緖になつて暮す内に、漸々とその戀が褪めてゆく事。これは什麼戀中の夫婦でも必度さうだ。その褪めてゆく具合や事情は人每に違ふだらうが、褪めるには違ひない。で、さうなりゆく根底の因緣は、つまり一歩々々生活問題に切に觸れてゆく處にある。嘗て恁ういふ事實があつた。惚れた同十が逃落して夫婦になつて、遂に食ふに困つて心中した。約めて言へばそれきりの話だ。がこれを柳浪君に面白いものぢやないかと言ふたら。「ええ、あれは僕是非書くつもりです」と言つてゐた。果して書いたか否かは知らぬが、これも衝突の一例だ。が心中するのはまだ褪めてゐない。然し恁う心中せずに、生きてゐる以上は、勢ひ褪めざるを得ない。戀といふやうな、浮いた、夢のやうな境涯から、漸々眞面目になりゆくのを餘儀なくされるのが人生だ。食はねばならぬ。食ふには仕事もせねばならぬ。仕事は胡麻化しては出來ない。忙がしい。駈けあるく。その間に戀もする。戀をしつゝも忙がしく駈け廻る。そこを寫してこそ人生の眞相が出る、現社會に生きた人間の痛切な煩悶も出ると思ふ。我々は飯を食つて屎を垂れる人間の葛藤を書いてもらひたいのだ。(太陽所載)

予が五十五年間の養生法

文學博士　重野成齋君

私の毎日の行ひにはチヤンと規則があつて、モウ彼れ是れ五十五年間一日も缺かさず、それをやつて居る、まづ朝は四時から五時までの間に起きて、凡そ一時間程運動をする、それは日本の里程で一里位も歩くのでサテ運動の濟んだ後で手水を使ふのぢやが、之が一寸手間が取れますまづ水とシヤボンとで頭を洗つて海綿で拭いて、次に顏を洗ひ之もシヤボンで一應洗つて置いて其後を又糠か洗粉かで洗ひ、なるたけ滑かにして置く、斯うしないと艶がなく血色が悪くなりますそれから今度は身體に夏の頃ならば手桶に二杯位冷水を浴るのぢやが、寒くなつてからは並みより長い濡手拭を輕く絞つて身體を拭く、之にも又順序があります、一番先に胸から脊中の邊を拭いて、次に兩手から兩足といふ順序で、三度ほど拭き、四度目に腹を拭く、どういふ譯か知らぬが、私に灌水法を敎へて吳れた醫者が、腹は一番後で拭く様にといつて吳れたからそれを守つて居るのです、其後でモウ一度今度は總體を拭く、それから更に一度乾いた手拭で拭いてやう〳〵身體の方が濟む、今度は衣服だが、之は私の國(薩摩)でアブリコといふ竹で出來て居るものを火鉢に被せ、其上に衣類をかけて乾かして置く、即ち灌水法を始める前に、このアブリコの上に足袋や腰卷、その上に襦袢衣服といふ順序に載せて乾かすのです之は濕り氣のあるやうな衣服を着るのは毒ぢやから濕氣を取るためにするのです。衣服を着ると、次は頭のお化粧ぢや。鏡を前に置いて水油を付け梳櫛で梳いて、其上へ油の濃いのを付けて置く。大層おシヤレの様ぢやが斯うやらないと何うも氣持ちが悪い。それから食事にかゝる又其食事が大層長い。私は壯年の頃から食事は緩くりやることにして居る食事を急ぐと身體の養生に悪い。齒で十分に噛んで胃の働きを助けるのがよいやうぢや。日本の武士は早飯早糞などゝ、早いのを好いとしてあるが、私は是だけは全く武士道と違つてゐる。食事も便通も共に緩くりやる。又私は隨分大食する方だから一つは夫れで長くなるのです。日本食ならば大きな茶碗へ十分に盛つて三杯、味噌汁を二椀、又牛肉を毎朝食べる事にして居る殊に私は肴が好きで肴も一色か二色位用意して、あつてそれを食べる。こんな事で食事が非常に長くなり、濟むのは大抵八時頃。サテ朝食が濟んでからは、出勤する處があれば其方へ行つて三時か四時の頃に歸つて來る。出勤しない折には來客に接する事にして居る。出勤して歸つてからも今日の様に客に接する事もあり、又然うでない時は調べ物をしたり、人に賴まれたものを書いたりなどして居る。

こゝで一つ晝食の事に就てお話をしやう。私は晝食といふ物はやらない。ホンの凌ぎに雞卵を一寸湯でゝそれを二個位食べて置く。何うかして時に空腹を感ずる場合には、麵麭を一片位、或は菓子を少し食べることもある。

一體食事と食事の間は八時間位も置かないと胃にある食物が消化し終つて居ないから衞生上甚だ悪い。八時に朝食をして十二時に晝食では

間が四時間しかない。だから晝食をしない事にして居るのです。

晩の食事は此頃では六時か七時の頃で、副食物の數は朝よりも更に多く、七種から八種位ぢや。私は書生であつたけれども食事丈けは昔から贅澤にして居る。又晩食の時には酒も飲む。御飯の前から始めて御飯を食べながら飲む。これは普通の酒飲とは少し違ふ。酒の量は一合二勺、之はモウ昔からキチンと決つて居る。(家庭の友所載の一節)

予が見たる妃殿下の御婚儀

前英國公使夫人

昨年の(一八九一年)暮は三條公の姫君智惠子の君と閑院宮殿下の御結婚にて芽出度祝られ候、婚儀の御式は御内にて擧げられしが、御披露の宴は青山御所にて御催あり、我等も皆御招きに預かり候、皇族方は殆んど殘らず御列席あり、上流の紳士淑女も大方は此一堂の下に集められたれば其美しさは月も妬むばかりにて候、三條智惠子の君が、今日改まりて妃殿下としての嚴格なる御挨拶を受けさせられ候、御挨拶ありて後、妃殿下には特に自分に座を賜はりたれば同じ長椅子に倚りてくさぐさの御物語を致し候、妃殿下には最上のダイヤモンドの飾ある、最上等の白き繻子の御召物を召され始終御快活に笑ましげに渡らせられ候其御様子に何處となく御威儀が備はりたるは申までもなき事に候、是れまでは一般日本の令嬢の習はしにて嚴格なる夜會には一度も御出ましはなかりき、されど異國の宴會の初より終りまで極めて御快活に在らせられ、少しも御屈托の御様子を見受け參らせず、快活なる御氣丈なる御氣質の方に候。

載仁親王殿下は日本古來の君主の典型を代表せらるゝとも申上ぐべきか、小柄の御體格にて高貴なる氣高き御容姿、御手も御足も御優しく正しく中位の若き天子様も斯くこそと想はるゝばかりに候、されど又殿下は男らしき立派なる御壯年に渡らせらる、剛毅なる御態度、明断なる眸、輝く御眼など外形の御優しき御容姿とは全く反對せられ候、(中略)

自分は殿下の直ぐ御隣の席に就くことゝなりたれば、長き間の宴會もたえず、殿下と御言葉を交ゆるの光榮を有し候、殿下には特に自分に從來の妃殿下との交情を謝し給ひぬ、食事は長かりしも、一切の設備は遺憾なく整へられ候、花はすべて幸福と慶びに因めるものを用ひ、美はしきと限りなく、すべての装飾は皆、松の枝、鶴龜の細工物、作り物、優しき物にて巧みに調和せられ候、御菓子は美術的に富士山の形を現はし麓には雲、嶺には松原、其松原には幸福なる動物が跳れ戯むれ居り候、食事につける接待も果てたる後、皇族方も退かせたれば、自分は殿下の家令に向ひ、英國にては新婦の御菓子は其場にて客に分ち與ふるが習ひなりと語り候に、家令は成程左もあるべけんと直ちに小刀を取りて中分に切りひらき、然る後小刀を自分に渡し候ゆへ、自分は其端しの少しばかりを切り取りて見せたれば、列れる貴婦人方も自分の例にならひて我も〳〵と此上なき御土産を得られ候包み紙にとて宮中御用の美麗なる紙も添付されたれば、自分は序でに自分の前にありし小さき松と鶴

と鶴と、花とボンボンの箱とを乞ふて持ち歸り候、鶴は富のしるし、龜は長命のしるし、松は幸福のしるしに候、自分が親愛なる妃殿下に祈る所も此外に出でず候。（太陽所載）

間食と手土産

女子大學　靜　子　君

一般幼稚園の經驗を聞きますと、夏季休暇の後は著しく幼兒の體質が劣ると申ます。是れ酷暑が其の體質を弱めるのも一因でせうが、しかし主なる原因は他に存するのであります。即ち休暇となると、比較的遊び友達は少なし遊び場所はなし、徒然なる所からつい「お菓子下さい」が口癖になるのであります、又幼稚園では務めて厭かぬ樣に遊ばせますが、一般の家庭では、そうは參りません。自然洗濯、張物などの家事に追はれて、十中の八九は、暑ついのにうるさいがさきに立つて、知らず知らず間食を與へ過ごすのであります。これ即ち健康を害するの一因であると申すことで御座います。

しかし間食を全く與へてはならぬと言ふ事は御座いませんが、嚴格に時刻を定め、なるべく消化し易いものを撰ばなければなりません、かるやき、煎餅、ビスケットの類は最も適當なるものと存じます。砂糖を多量に用ひたる菓子は、自然兒童の好む處でありますが、齒及び胃を害する恐れがありますから、與へない方がよろしう御座いませう。

往々手土産に菓子折を携へて、直接に兒童に與へる人がありますがこれは宜しからぬことゝ存じます。何故なれば注意深き親達は兒童に間食を與へる刻限及び制限を設けて居ります、然るに、心なき客人が時ならず兒童に手土産を與へまするならば、頑是なき兒童は、最早自分のものと心得まして如何に言ひ聞かせても離さず、强く與へては食傷いたしまするし、さればとて、其の樣に喜んで居りまするものを、無理に奪ふて、もし泣き出す樣の事が御座いましては客の手前、それも氣の毒なり母樣はほとほと困じはて、切角好意の贈り物が、却つて仇となる樣な場合があるので必ず手土産は兩親に渡す樣いたしたきもので御座います。（家庭週報所載）

風琴の稽古二十年

吉　川　晋　水　氏

人は凡べての事を知らんとするを以て、一事を知らずして終ること少なからず。初めより一事を知らんと努むれば、何の苦痛もなく、安々と其の目的を達することを得べし。されば現今の青年に、ソレ外國語、ソレ歴史地理、ソレ科學倫理と濫りに其の腦中にツメ込むは、弊害こそあれ決して利益あらざるべし。何となれば學ぶべき科目の多きに從つて、一日の勉强時間を細分し、歴史一時間物理一時間といふ按排に少時間づつ勉强するを以て、一册の書を讀むに半年を費やして、二册の書を讀むに一年を要し、結局何事も中ばにして其の研究を止むるといふ有樣に立ち至るを以てなり。シドニー、スミス曰はく、「我等は凡べての事に通ぜ

ざる弊害を避くる爲に澤山の事を知らんと欲する情慾に打勝たざるべからず」と。

英人嘗て伊太利の大音樂家ジャルデニーを訪問し、風琴を一通り彈くまでに稽古する日數を尋ねたるに、ジャルデニーは答へて、『左樣一日に十二時間宛、二十年間稽古すれば一通り彈くことを得べし』と語りたる趣なるが、實際彼は此の言を實行したる一人にして、每日十二時間より多く種々の樂器を研究して、遂に音樂界の大なる人物となりたるなり彼常に學生を戒めて曰はく、「一度や二度の失敗に挫けてはならぬ、如何なる困難の裡に於ても、一生懸命其の的を見つめ、脇視をなすべからず、百度失敗しても百度試むれば必ず成功すべし」と軒下に落つる雨滴も、累なれば石に穴を穿つ例もあることなれば、我等にしてドコ迄もヤルといふ精神さへあれば、遂には其の目的を達すること疑ひなし。意思の弱き青年は宜しくジャルデニーを學ぶべし。（太平洋所載）

豫習、實習、復習、

文學博士　高橋龍次郎氏

何人も知つて居ることでそれで世間の學生が怠つて實行せぬ爲に貴重の時間を空費したり、徒爲な努力を費したり、竟には其の身體と精神の健康とを甚だしく害して、その上得た學問は少しも消化されて居らぬと云ふのが、世間滔々乎として然りである。

この豫習、實習、復習と云ふ三拍子を揃へてさへ行けば、其の學生は直ちに學業を進歩させることが出來る、然るに若し此の拍子を亂すと、何時までたつても決して進歩はしないのである。

偖て此の三拍子を調子好く揃へて行くにはどうしたら好いかと云ふに先づ第一に此の豫習と云ふ事であるが、是は讀んで字の如く下讀みをするのである、教師に付いて授業をして貰ふ前に其の書物を必ず讀んで不解の個所には何かしるしを附けて置く、最も完全にするには其の個所の文句をノートブックに抜書しておくことである、而して實習の時に教師に聞いて其の不解の個所を糺して、それを又手帳に書き留めて置く、さうすると實習に於いて初めて其の書物に不解の個所がなくなる譯である。そこで授業が終了を告げてから、必ず直ぐに復習をすることゝするのである。これも他の授業時間の爲めに時間がないときは致方もないのだが、時間さへ繰り合せが出來たら必ず直ぐに復習しなければならぬ、で、豫習實習復習と云ふのは之れだけの話しで、至極簡單で考へると誰れでも容易に爲し得らるゝ樣であるが、扨て其の實行者は何割あるか、調べてみると實に僅かなもので、百人の學生中恐らく十分の一をも見出すことは出來まいと思ふ。世人の好く云ふ彼の男は能く出來るとか、彼の男は出來ないとか云ふのも、要するに之の豫習實習復習の三拍子を揃はせたのと怠つて爲なかつたとの二つの結果に歸着するのである。（新公論所載）

女子と美術趣味

久良岐

◎女子と美術と云ふ題を揭げたからとて、別に高尙な理屈を申上げるのではない、只漫然と感じた事を、いろ／＼寄せ集めてお話をするまで。

◎料理はどうして甘くなるか、裁縫はどうして手際よく行くかと云ふやうな、實用的方面の硏究は、是迄隨分奮立てられて、我々の門外漢などの云爲する必要はない、が、人生必しも實用一點張で行く者ではない必ずや趣味的な仕事がなければ、家庭も面白く、のんびりと悠和して行くものではあるまい。

◎世に道樂は樣々ある中にも、男兒の一番陷り易いのが女道樂と酒道樂であるが、此他に骨董道樂がある、道樂の中でも、先づ品位があり趣味のある道樂で、萬更な物質的の男兒なら知らず、多少敎育ある男兒ならば、四十前後になると必ず此書畫骨董の道樂に耽り出すので、昨今大に流行しつゝある、此書畫骨董と云ふとに就いては、今の青年の男女は、何のツマラヌ黴臭い不潔物をと、思はれるであらう、ソレよりは繪葉書屋か、リボン屋の前へでも立ッて見物でもする方が利益であらうと思はれるであらう。

◎が、人間いつ迄も繪葉書やリボン抔の子供臭い趣味に滿足するものでない、學校も卒業し一家をも構え、子供も出來、扨細君も少く鼻についてくると、扨床の間の裝飾と云ふ事に感興をひいてくる、それは西洋畫の趣味の方が學生間に、汎く普及されてはゐるものゝ日本座敷の存在する限りは、どうも水彩畫や油畫では座敷の調和を破ぶると夥しく、ナゲシの上から、時折硝子入りの額が轉り落ちる抔の殺風景は、どうしても日本座敷へ調和しない、所でどうしても掛物趣味の必要を感じてくる。

◎尤近年では、女子美術と云ふ聲が盛んで、どの學校でも毛筆畫の稽古をやるから、我々の小學校時代のやうに殺風景な物ではない、多年新細君たる人の繪畫に對する眼識も進んでゐるは疑ひもない話だけれども、

中にはかう云ふ美術趣味に缺けたる婦人が十中八九のやうに見受けられる。

◎曾ッて自分の持家を借りてゐられた、某工學博士があッた、古るい博士で随分知名の人であつた、此人が大分書畫に浮身をやつしてゐられたが、さりとて別に高金の物を買ふと云ふのではない詰りは我々と同じ新米の書畫好であつた所がその夫人は、舊女子高師出の方であつた、ソレ故に經濟上の方面には却々精通でゐられる、且其姑といふ人も肥前あたりの人であるから、勞働的方面には薫陶も届くと見えて、日々紺



屋のシンシで、張物を何反とせられる、下女も夫人も總出で庭一面に、紺屋の張場を作くられる、爲めに「阪井さんお氣の毒ですが、此櫻の枝が邪魔で日當りが惡いから伐ッて下さい」と云はれる、ソコで餘義なくハイ〳〵と云ッて、太い櫻の枝を伐ッて上げる、日々張物に熱中されてゐる、時には此座布團の前身は何だと覺し召す抔と云ふ試問が始まる、イヤ一向に分かりませんと云へば、これは古浴衣を染直したもので、恰で品質と云ひ模樣と云ひ新らしい物に異ならぬではありませんかと自慢される染物は一切鐵道便が利用されるので京都で染められる

との御自慢。

◎自分は、此無趣味な物質的な、庭園の眞ん中を、紺屋の張場と心得た非美術的な婦人を、私かに憫笑せざるを得ない、その爲めの紺屋あり、張物屋ありで、僅かの染料や洗濯賃を利せんが爲めに、切角の庭園美までを犧牲に供する、賢夫人に贊同は決して出來ないのである。

◎此夫人はかくの如く、物質上の智識に富めるに係らず、ある日良人が掛物を展覽して、其片付を夫人に命ぜられた、所が夫人は、實際掛物の卷方さへ知らぬと見えて、風袋を全く外へ出して、マゴツカれてゐたのには、思はず噴飯せざるを得なかッた、風袋は左右から折ッて、重ねて平にして卷込むべきと位は、大抵の人ならば心得てゐるのに、それすら一向に辨へなかッたので、よい物笑ひとなッた。

◎これが德川時代であッて、上流社會の夫人で、こんな擧動があれば、一の恥辱となッたもので、いかに立派な邸宅に住し、衣服調度に美を盡くしたとて、社會では成上り物として爪彈きしたものである。

◎其後、荊妻が同窓會の砌、他の紳士の宅で逢つた時に、其夫人がその宅の繪を見て、これは鐵園の畫ですねと云ッたので、荊妻も大分近頃は畫がお分りに成りましたねと云へば、アレから大分研究しましたと答へられた。

◎自分は、近來駈け出し書畫狂で、日々畫家の席畫や安書畫などを運動目的で、雨が降ッても風が吹いても出掛けて買求める、が、一々細君の鑑別にはねられてしまッて、また及第した繪は僅かに一二點より外はない、ソコで自分も近來大分眼識が上達しつゝあるやうにも思はれる、ソレと云ふのが、家内の里には文晁の大幅や密畫が數十幅あッて、幼時より此等の畫に見馴れてゐるので、自然と眼識が高いのである。

◎自分が、女流畫家で知ッてゐるのは、野口小蘋、同小蕙、跡見玉枝、武村耕靄、奥原晴翠、伊藤古仙、上村松園、福田瀾月、横田小蓮等の諸先生である、此等の先生の話について何か其中書いて見たいと思ふ。

妻君子守論

高嶋米峰

○

今でこそ、彼等は、大學の講師だの、高等學校の教授だのといッて、まづどちらかといへば、エライ人間の部類に、屬するやうにはなッて居るが、今から十二三年前の事を考へて見ると、大學出たての青文學士、私立中學の先生樣で、一時間が五十錢以内の時間給。

それでも、下宿屋では、兎も角も上等のお客樣として、下女も、御用を承はる時には、一寸腰を屈めるだけの敬意は表する。

授業が濟むと、同僚を誘ッて、下宿に歸る。牛肉でも煮て、まづ校長の惡口、同僚の評判から、さては生徒の罵倒に至る。それも濟んでしまふと、「僕は、大に下宿屋生活の呑氣なのを愛するが、たゞ、學校から歸ッて來て、羽織や袴をたゝむ時だけは、そゞろに、妻君なるものゝ、必要を感ずるなア。」などゝ言ひ出すものがある。

さア、こうなると事だ。獨身生活論も出る、戀愛神聖論も出る、男女交際論も出る、理想的妻君論も出る、果ては、肉は無くなる、鍋は焦げつく。

○

或時、僕は、誘ふにまかせて、B君と共に、A君の下宿に押かけ、鼎坐して、牛鍋を眞中に、氣焔を吐く。惡口評判罵倒、例によッて例の如く、婦人問題に入るに及んで、鍋の焦げつけることも、また例によッて例の如くであッた。

AB二君、共に赤門出の秀才、殊にB君は、既に妻君を迎へて、約半歳。凡そ婦人に關する事件は、どンな事でも、持ッて來給へ、と言ひたげな樣子。この日の談論は、要するに、「妻君とは何ぞや」。

當時、僕、最も年少、袴も羽織も、たゞ脱いだまゝで、部屋の片隅の釘に引ッかけて置いて、聊か不便を感じなかつたし、五年級へ講義に出る時には、僕より年上の生徒が澤山居るので、いつも、面喰ッてしまふ

といふ時代、ＡＢ二君の甚深微妙な妻君論には、あまり多く喙を容れ得なかッた。

○

まづこうだ、……これは多く、ＡＢ二君の御名論だが、一々ＡだＢだと斷はるのは、七面倒臭さにつき、のべつ、のべたらに書きッぱなす。

妻君とは、相談對手である。例へば、僕が校長と衝突したと假定する、エヽ馬鹿々々しい、米の飯とお天道樣は、ついて廻はるといふではないか。いッそ辭表を叩きつけてしまはうか、イヤ待て、お天道樣は、必ずついて廻はりもしやうが、米の飯の方は、事によると怪しいかも知れない。まづ兎も角も、一つ妻君に相談して見やうとか、或は、いよ〳〵月末、まだ、洋服の月賦と、米屋と、新聞屋とが殘ッて居るのに、早くも既に、貰ッた月給が盡きてしまッた。どうだ妻君、何とか工夫はあるまいかとか、その他、學術上の事でも、宗教道德のことでも、一切自分の一量見で決しかねた時には、これを妻君に相談して、何等かの解決を得るといふ位でこそ、眞に妻君の有り難味も、あるのではあるまいか。

そういへば、まア、妻君は、チヨツト友人といふ格で、誠に結構なやうだが、いろ〳〵の問題を、妻君の力によッて、解決して貰ふとあッては、この亭主、少少座蒲團的傾向を有して居ることになッて、イヤ、縦令、それ程ではなくとも、妻君には、五分以上の權利と自由とがあッて、上等の部類では、今日は愛國婦人會だ、明日は慈善演藝會だ、園遊會には、音樂會、委員會には、幹事會と、毎日のやうに飛び出して、子供の世話から家事萬端、一切雇人任せの不しだら。

一段下ッて、奏任程度のもの丶妻君と來ると、大概は、高等女學校卒業位の連中だが、これはまた、物の役にたゝないこと、言語道斷で、中には、袴のたゝみ方さへ、怪しいのがあるそうで、相談どころか、新婚早々、まづ妻君の敎育に、取りかゝらざるを得ないと來る。こうなッては、妻君を迎へたといふよりは、寧ろ、ナト御念の入ッた、女生徒一人預ッたといふ方が、

適切かも知れない。

○

妻君とは、妹のやうなものである。稀には、年長の妻君を迎へるものもあるやうだが、概して、妻君は、夫より年下である。自分より年下の女の子が、始終自分につき纏ッて、何を言ッても、たゞハイ〳〵と、至極柔順に、且つ至極まめ〳〵しく働いて與るところ、何だか自分を、「兄さん」と呼ばないのが、物足らないやうな氣のすることもある。故に、妻君を待つには、まづ妹に接する心持で居たら、間違はあるまいといふものがある。



こういふ議論を、疊水練といふのである。實の妹でも、可愛いのは、子供の間だけで、少し歳でもして、口返答の一ッもするやうになッては、「親なき後は兄親だ」位のことを言ッて、時には、親風を吹かしても、見たくなるといふもの、まして根が他人の寄合もの お互に或る血の熱して居る間こそ、柔順でもあり、従つて可愛くもあるが、双方とも、長所よりは寧ろ缺點を知り合ッて來ると、まづ妻君の方から、柔順を取下げる、拗ね

る、反抗する、怒る、泣く、此くの如くにして、一家に波風の絶ゆる時がない。

○

妻君とは、永久的下女である。一家に於ける、妻君の事業の、主要なるものは、勿論、階級によッて、多少の相違もあるが、中流社會、及びそれ以下のところでは、三度の食事に、四季の被服の世話である。これさへ可なりにゆけば、夫も滿足だし、妻君もまた、したり顔である。若し、夫婦の關係が、戀愛以外の事情……金……地位……勢力……などが目的で、結ばれるものだとすれば、妻君は、無給の永久的下女に、等しくはあるまいか。

イヤ、今の女學校出の妻君と來ては、まづ御飯の炊き方が覺束ない。鹽加減がわからない、羽織は仕立屋で縫ふもの、シャツは、唐物屋で買ふものと極めてかかつて、「食道樂」に誤植でもあらうものなら、それこそ、一家早速、胃腸病にかゝらうといふ始末、氣の利いた下女程の能もないのが、マア通り相場。

○

妻君とは、子守である。まだ、腹の工合の尋常なうちは、それでも、勝手元をマゴついても居るが、「三月四月は袖でも隱す、ハヤ五月の岩田帶」となると、餘程のお手柄でも、したかの如く、お腹のせり出す度合に應じて、我儘が根を張り出す。さて、おギヤと產れたその子が、無事に肥立てば、永久的下女は、こゝに一轉して、永久的子守となり、乏しき全力を、このために傾倒する。而して、この子守としての妻君は、相談相手としてよりも、妹としてよりも、下女としてよりも、最も成功に近いやうである。

成功といッても、勿論、子守としての話であッて、母としてのことではない。彼は、何等育兒上の知識があるでもなく、保育の手腕があるでもない。たゞ自然に流れ出る乳を飮ませて、比較的、子供の泣くことを少くするといふだけである。これを以て、若し何等かの障碍のために、一朝乳が出なくなッたとか、縱令出ても、飮ませてはいけないとかいふ場合になると、彼

等はます〳〵、その無能を發揮して、正に乳母ほどの役にも、たゝないといふことを、示すのである。

○

ＡＢ二君の妻君觀略して右の外には出ない。もとより、まだ世の酸いも辛いも十分には嘗め分けない、書生時代の觀察として、殊には、どッちかといへば、人生に對して、責任の輕い獨身者や、まだ子供といふものゝ味を知らない、新婚者の議論としては、こンな亂暴な言ひ草も、一應は許してやらねばなるまい。イヤ、少くとも、現代妻君氣質の半面は、こゝに遺憾なく暴露されて、眞に痛快なところもある。



そこで、當時年少、かゝる問題には、多く言を挿み得なかッた僕も、今は、夫となり、父となッて、また多少の觀るところがないでもない。特に數言を附加して見やう。

○

妻たり母たるべく、敎育され訓練された女と、結婚した男は、甚た幸福である。世には、結婚してから後に、これを妻たり母たらしむべく、敎育し訓練して居るものさへある。イヤ、これを敎育し訓練し得る程の女と、結婚した男は、まだしも幸福である。世には、これを敎育することも出來ず、訓練すること

も叶はざるまでに、ひねくれたるものを妻として、苦しんで居るものさへある。

妻によッて、内助せらるゝ夫は、甚だ幸福である。よし妻によッて助けられずとも、少くとも、妻を助ける程の、必要なき夫は、まだしも幸福である。世には、朝から晩まで、妻を助け、妻をして、夫の面目を損ずるが如きことを、爲さゞらしめるために、努力して居るものさへある。

妻によッて、慰めらるゝ夫は、甚だ幸福である。よし、妻によッて、慰められずとも、少くとも、妻の御機嫌を取ッてやる程の、必要を感せざる夫は、まだしも幸福である。世には、常に妻に苦しめられて、これと闘ふがために、精力の大半を、費して居るものさへある。

以上の三項を、逆に書き直すと、即ち、僕の妻君觀の結論になる。

○

A君、今や高等學校教授となり、男女併せて三人の子供がある。しかも尚、「妻君子守論」を固持して居るだらうか。B君、今や大學講師となり、妻君もまた、教育に從事して居る。しかも尚、B君は、「妻君永久的下女論」を唱道するの勇氣があるだらうか。（終）

大日本婦人技藝會

婦人間に美術的技藝の普及を計る爲め下谷區上野櫻木町に伊澤千世子、鳩山春子、櫻井ちか子諸氏の賛助に依り表題の如き會を設けられたり、同會にては親しく技藝を教授すると共に美術技藝雜誌并に講義錄をも發行する由にて、其課目は必習課として造花、裁縫、刺繍、編物、押繪、編物、摘み、果實、袋物、繪畫、割烹、挿花、點茶、禮法等を置く外、隨意課として博物、美學、教育、家事、育兒、經濟、國語、漢文、英語等を設けあれば、是迄往々見受けたるが如く只技術に偏せる婦人を造るの弊は無からん、會費は、普通科修業期間六ヶ月にして毎月一圓、高等科四ヶ月にして毎月一圓五十錢、在外員は一ヶ月二十五錢なり、尚は十名以上の會員あれば實費を以て出教授をも爲すと云ふ、委細は同會へ問合さるべし。

經營の才ある一婦人

× × ×

女學世界の讀者諸姉に、一ツ不思議の女丈夫を紹介しましやう。

○

久留米絣で名高い福岡縣は久留米の市街に、一種異様の實業家が居る。それは日露戰役後の景氣にぱつと世間に現はれた成金流の實業家でもなければ、福岡名物に數へられてゐる福岡市や門司市に羽振を利かせてゐる炭礦家でも無論ない。久留米停車場前に建物が見ゆる、運輸會社の一社長に過ぎないが、その人物は歐米は知らず、我國には類のない社長であるので、福岡縣は固より、九州一圓その名が鳴り響いてゐる。

といつて、此の運輸會社の實權者は、高位高爵の人でもなければ、長者鑑に名前の出てゐる分限長者でもない、又は福岡人物特有の豪傑に山師の分子を加へた水滸傳的人物でもない。讀者諸姉は、運輸會社社長といへるすら、風采の揚つた、きりとした當世紳士を想像せらるゝ方もあらうが、それも外づれてゐる。——久留米運輸會社の社長室に、汽笛の音を傍らに聞きながら、終日兀々と事務を執つてゐる此の社長殿は、世間に有り觸れたその様な實業家とは、截然と違つてゐる。然らばどういふ人かといへば、まだ三十の上を四ツか五ツしか出ない、切髪の美婦人であるから、案外に打たれる。

けれど、福岡縣下にその名が鳴つてゐるのは、自から會社に出勤して、數十の社員を使つて、實業に從事してゐるといふばかりでなく、人柄が温良で、貞淑で、然かも那處か違つた人格の燦爛してゐるばかりでなく常に久留米町に至大の刺激を與へてゐるからである。

○

此の運輸會社の社長は、よほど模様が變つてゐる。

父の遺業を繼いで、運輸業に關係したのは、今から十幾年も前であるが、風が吹いても、槍が降つても、身體に異狀のない限りは、大抵會社に出勤するのである

が、隣家に店を出してゐる女房の顔を知らないとは不思議ではないか。自宅を出ると、顔を右にも左にも向けず、凝乎と、一直線に會社に出掛けるものと見ゆる。ぢや愛相もそつけもない婦人かといへば、會つて見ると、伏目勝の、遠慮深い態度で、靜かに用務を辨じてゐる模樣は、那處までも婦人の特色を失はない。然かも私人の關係を離れて、婦人協會の席上などへ出會すると、愼ましげな日常の態度が、がらりと變つて、明斷した、鈴の如き雄辯を揮つて、壇上に立つのを見受くる。

單に壇上に立つて、恁う雄辯を揮つてゐるのを見ると、自由民權論の喧しかつた當時、其處等に見受けた、マーランド夫人を型に取つた婦人のやうに思はれるが會社に出ると、温良の中に嚴格な態度を持して、乾然と社長の貫目を備へてゐるからたまげる。で、亡夫の墓所なる梅林寺の前を通るのを見ると、何時も花を手向けて、未だ曾て素通りしたことがない。

九州の片隅に縮まつてゐるから、博くその名は知られないが、複雜つた、變つた婦人であることは、想像することができやう。

久留米市民に奇拔の眼を以て迎へられてゐる此の婦人は、舊と久留米町長星野彌兵衛氏の令孃で、名は房子、以下、聞けるが儘、此の婦人の略歴を紹介しましやう。

○

此の婦人が久留米の小天地を通り拔け、福岡縣民に奇拔の眼を以て迎へられたのは、久留米市に高等女學校が設立された頃からである。

今はいづれの都會でも、一萬戸以上の都市では、大低高等女學校が設立されてあるが、明治三十年頃は、東京、大阪、京都、名古屋の如き大都市を除くと、殆ど高等女學校の類が無かつた。然るに福岡縣でも、餘り大した都會でもない久留米市に、ひよッこりと高等女學校が設立されたから、福岡市民は言ふ迄もなく隣縣の熊本縣を初めとして、九州一圓驚嘆の眼を以て久留米の此の高等女學校を見たのも無理がない。九州

で高等女學校の看板を見たのは、熊本でもなく、福岡でもなく、實に此の久留米がイの一番であつたのである。

で、久留米に高等女學校が出來たのは、久留米市民の奮發といふよりは、當時はまだ花の盛りの、二十五六を出ない纖弱き一婦人の熱心と奔走で成つたのであるのを思ふと、久留米に高等女學校が出來たそれよりも、創立を見るに至つた來歷に自分は驚嘆を覺ゆる。



一體福岡縣下では、福岡、門司、小倉、柳川と、幾ツの都會ある中にも、獨り久留米は敎育の盛大なるを以て推されてゐた、現に三十年頃は尋常中學などの外に、市立工業學校さへ建てられてあつた。されぱその敎育費も從つて多く、一戸に付平均五圓二十錢に上つてゐた、一戸の平均負擔額が五圓二十錢、久留米は恐らく全國第一額であつたらうとおもう。だから、久留米市民は敎育熱心の名を博してゐたが、中流以上の資產家等は、負擔の大なる丈けそれ丈け、那邊樣といへば學校費の多いの

に內心顏を顰めてゐた。

此の時星野房子の口より高等女學校設立の議が持ち出されたのである。

左らぬだに教育費の多いのに顏を顰めてゐた久留米町民、特に中流以上の資産家連は、何條高等女學校の設立に耳を假すべき、言葉を左右に托して、いづれも高等女學校の設を非議した。それを見た星野房子は、久留米隨一の大地主林田守隆といふ富豪を說き、高等小學校の隣地に同氏の所有地千六百坪あるを幸機、千圓の金額が添へて、土地ぐるみ久留米町役場に寄附した。そして日頃懇意にせる二三の同志と、高等女學校の運動に取り掛つたのだ。

最初は奉加帳を携へて、久留米町を戸毎に運動した頭で話題に乘らなかつた町民も、房子の熱心に動かされたこの頃、そろ〳〵一部の問題に爲ると、不思議や今度は町會議員が先棒に立つて、公立高等女學校說が久留米町の人氣を呼んだ、その譯は私立の女學校であると、房子は地所と千圓の金額を抛げ出して先例を出してゐるから、星野家以上の資産家は、より以上の寄附を敢てすべき餘儀なき破目に出會するからだ、と穿つたことをいふものもあるが、內情は暫らく措き、案ずるより產むが易く、高等女學校の設立が久留米町一般の輿論と爲つたのである。

初めは久留米一部の問題であつた高等女學校が何時の間にやら、縣立說に進み、今度は福岡市に出掛けて縣立運動とまで發展したのである。當時の縣會議長由布惟義氏等（今の衆議院議員）大に贊成を表し、東部議員等の大反對あつたにも拘らず、遂に久留米に縣立高等女學校を見るに至つた。

此の間房子等の奔走は尋常でなく、縣會の開會當時は、腰辨當で傍聽に出掛け、反對議員の牽制に力めた具合は、愛國婦人會に奔走した奥村女史の模樣が、眼に浮んでくる。斯くて、久留米は九州で高等女學校創設の率先者たる名譽を負ふやうになつたのであるが、その後、踵を接して、福岡、熊本等の諸地に、高等女學校の創立を見たのは、此の久留米に端緒を開かれた

結果といつて好からう。而して久留米に縣立高等女學校の創設を見たのは、星野房子の力が與つて多いとは以上の記事で判つて居らうとおもう。

○

星野房子の名がぱつと世間に知れ渡つたのは、高等女學校運動からであるが、是非の見を指して公共の事業に意を注いだのは、此時初まつたのではない。之は少女時代の房子を知つた者の話說であるが、房子がまだ十四五歲の頃だ、久留米に遊郭設置問題が起つたことがある、當時町長であつた嚴父星野彌兵衞氏は、熱心なる設置論者であつた。今、農工銀行頭取である三谷有信氏は不用論者で、兩派鎬を削つて、勝敗を爭つたいよ〳〵可否の論決せんとするその日に及んで、如何したもの歟、設置論者の雄を以て稱せられてゐた彌兵衞氏は、何時もの元氣に似もやらず、論鋒頗る弱かつたので、一同大に怪んだが、後に至つて、當時中學生であつた房子は、(その頃は、婦女子も中學に入り得たものと見ゆる）熱心な不用論者で、房子の熱心が乃父の意見に變化を與へたものと判つて、當時の町會議員等舌を捲いて驚いたといふ。少女時代すでに此事あり、女學校運動の如きも房子の性格に於ては、別段不思議とすべきでないらしい。

なほ久留米人に就て聞くと、少女時代の房子のは、まだ斯んな話說も遺こつてゐる。房子が中學に入學つた當時は、女子で中學校に入つてゐたのは、郡長某氏の令孃と、房子と、たつた二人きり。亂暴盛りの男生の間に交りて、授業を受けてゐることとて、授業の休息時間に種々の惡戯が描かれる。けれども男子勝りの房子は微動ともしない。男生の間に在りて、何時も泰然としてゐた、その態度が眼に障つたものと見え、「あの澄まし樣が如何だい、あの澄まし屋を笑はせやうではないか」といふので、それからといふものは、房子を見ると、校外と校內とを問はず、種々の手段を設けて、堅く縮つてゐる頰邊の結目を解かんとした。けれど、笑はない。如何しても笑はない。莞爾ともしない後には手段に盡きて、流石の惡太郎等も、房子の剛情

に呆れて、匙を投げたといふ。中學在校の少女時代に、すでに鋒鋩を露はしてゐるではありませんか。負かぬ氣の此の少女は、學問を續けずして、十六歲の時に、本家の大和屋といへる呉服屋に緣づいて、早くも世帶女房と爲つたのである。

○

學問で身を立てんと期してゐた房子は、親戚の都合より、十六歲の時、すでに人の妻と爲つた。けれど、房子は婚姻に依つて、大なる幸福を得なかつたのである。されば、嫁して二三年すると、良人は偶としたことから、發狂したので、房子の生涯は、爰に一轉機を見たのである。

然かも房子の人格は、此の細君時代に最もよく發揮されたやうに思はれる。……恰も良人が發狂して間もなく久留米の市街に、斯んな風評が立つた。良人の某氏は發狂したのは好いが、才女の名ある房子も發狂したといふ風評が、四方に立つたのだ。房子の人物を知つた者は、いづれも彼女の不幸を悲んだが、之は良人は日中といへども、家外に飛び出し、獅子の如く狂ひ廻るので、粧飾も外見も關はず、房子も跣足の儘、その跡を追ふを見て、房子發狂の風評が、ぱつと世間に散つたのであるといふ。

讀者諸姉、顏見らるゝだに耻かしき、蝶舞ひ花狂ふ二十歲前後に、如何に良人の身なればとて、房子の此の所爲は出來得べきや。記者は、房子過去の半生涯に於て、病中の夫と喜憂を同ふした此時が最も感を惹く。――斯くて良人の世を終るを見て、初めて實家に歸つた。

○

不幸は常に星野房子に伴ふてゐる。良人を見送つて實家に歸ると、今度は實父の彌兵衛氏は、事業に失敗して、一家の沈淪してゐるのに際會した。間もなく實父も病歿したので、一家はます／＼生活の最底に沈んだ。

彌兵衛氏の事業といふのは、運輸會社の事業であつたが、房子が實家に歸つた頃は、最も破滅の境に落ち

てゐたのだ。で、房子は、父の失敗を回復せんとて、亡夫の親父に謀つて若干の資金を調達し、運輸會社の再興を謀つた。良人と別れ、實父と別れ、一家の零落を脊負つて立つた房子は、死地に活路を求めんとして大膽にも會社事業に身を投じたのである。

一種異樣の實業家は、斯くして九州の一角に、その面目を露はして來た。

實業家としての星野房子は、一直線だ、馬車馬だ。黎明より日沒まで、會社に詰めて、社員に奬勵を與へてゐると、恰かも此時、棚から牡丹餅のやうな幸運は房子の前に落ちて來



た、それは久留米を終點として汽車が架つたので、運輸會社附屬地なる筑後川沿岸の沿地は、非常の價格を現はして來たのである。地價は昂る。運送品が殖へる一二年の中に、運輸會社は非常の盛運に向いて來た。二十八年の決算報告を見るに、負債を償却せる上に、動產不動產を別にして、一萬六千圓の剩餘金を出してゐる。是れ一に鐵道敷設の好運に當つたからであるが、また星野房子が、傍眼もせず、一心不亂に事業に努めた結果で、部下を使役するに巧妙なると、婦人に不似合なる精悍の氣とは、今日の運輸會社を致したも

のとも言へやう。

と書いてくると、會社長としての星野房子は左も荒々しき女性のやうに思はれるが、社長室を覗いて見ると、ちよんぼりと椅子に倚りて、靜かに帳簿を調べてゐる模樣は、ちよと世間に見られない圖である。溫良、優婉、有らゆる女性美は、粗末なる社長室に發揮されてゐるやうにも見へて……

○

以上の記事で、星野房子の幾分は、讀者の前に現はれて居らうと思ふから、房子が嘗て高等女學校の生徒に語つた演說の一節を揭げて、本稿を結ばう。

房子は本家に嫁して、最も氣骨を折つたのは、姑との折合であつたらしい。「世間の事は、十が七八まで、我身の思つたやうにゆきません、家庭の事に爲ると、特にむづかしいやうに思はれます。中にも姑との折合が、最も骨が折れ、今でも兩脇に汗を搔くとがございます」といつてゐるのを見てもわかる。

で、房子の姑に對する意見は如何かといへは、「我身の思つてゐること、姑の思惑とは雪と炭、とてもがつちりと一致しません、といつて、我身の思つたことを姑に思はせやうといふのは、出來ない相談であります。私も最初は色々に考へましたが、後には自分の思惑はさらりと棄てゝ、姑と同化するとに努めました。いゝへ、出來ないとはございません。同化するとと決心を定めれば、むづかしいとはありません、その間に我身の思つた家庭も、まあ幾分歟作られやうと思ふのであります」といつてゐる。高等女學校の創設に熱心した星野房子の家庭意見も、以上の談話で窺はれやう。房子、本年三十六歲、人格の發揮せらるゝのも之からであらうとおもう。

◎二個の耳と一個の口あるは多く聞きて少しく語れとの自然の敎訓なり。

澤庵のつけかた

◎澤庵の風味はどうしても東京が第一等です、これは東京近在練馬地方の大根が澤庵に適して居るのと、今一つは乾燥の工合がよいのでございます、澤庵には甘いのと辛いのと二た種ありますが、甘いのにする大根は一週間、辛いのにする大根は十日から十四五日迄の見積りで、畑の中に仕掛けして乾燥するのでございますが、それには丁度好い工合に寒い空風がつゝいて吹けばよいけれども不幸にして乾燥期間に雨がつゝくか又た南風でも吹くと中に鬆が出來ておもしろくない。

◎澤庵の漬け方は三升鹽、五升鹽、七升鹽と斯樣云ふ名稱になつて居ます、その譯は一樽が通例百本としてあるけれども、大根の太さに依正味七十五本もあれば九十本内外もありますが、其の一樽は鹽と糠と交せた一斗で漬けるから、つまり鹽の割合が澤庵の名稱になつたのでございます、例へば六升と云ふ澤庵になると鹽が六升で糠が四升の割合になり、市中で甘鹽として賣つてゐるのは鹽三升糠七升の割で、漬けて、凡そ一ヶ月も經つたものです、辛鹽は大抵五升七升の二種ですが、五升の方は漬けてから五六ヶ月目、七升の方は土用を越してから食べることになつて居ります、さて一番手加減の必要なのは大根の排置です、能く大小を取合せて間と間、層と層、それが水も溜まらず風も通らないやうにきつちりとなつて居て、そして押も一方に片寄らずに全體にかゝるやうになつて居なければなりません、そして押の重量は一樽に二十五貫目位がよい加減で、この押が効かないと味がよろしくありませぬ。

◎それから大事なのは風味の保ち方です、これは尤も澤庵を出す時の注意が肝腎で上層はうまくても下層が不味いといふ事になりますがこれはつまり手當の屆かない爲め風味が變つた譯で、この手當さへしつかり遣れば漬物は何時でも旨く食られるものです、ですから澤庵を樽で貯へて置く家ならば、漬け方と同じ注意を手當の時にも用ゐなければなりませぬ。下女任せにし

て、二本なり三本なり取つた跡をその儘好い加減に放擲り投げて置かれては、どんなに風味の好いものでも十日と經たぬ間にまづくなるのは當然です、ですから出す時にあちこちと拔かずに順々に取り、そして取つた跡が何時でも漬けた時のやうになつてぴつたりとして居るやうに爲ねばなりませぬそれから蓋が大きいと減るに隨つて押が効かなくなるものですから蓋を大中小の三段位に作つて置いて、減るに從つて蓋を取替へることにしたらば、押の効きが善つて變味を防ぐに都合がよからうと思ひます、又押を大事にする漬物を漬ける器は、樽に限らず桶に限らず凡そ轆轤仕掛が善いでせう、手數も省け上げおろしの力も減つて取扱に都合が好いだらうと思ひます。

羽子板の話

◎新年玩具として嬢さまが、母親さまにお要求遊ばして、年の市でお求めなさる羽子板は押繪細工と云ふ單純な玩具でありますが、之を此の市に登せるまでの經歴は、頗る複雑をして居ますから、季節物と見て頂き、羽子板は奈何して作るかを、紹介しやうと思ひます。

◎例ば羽子板一代記とも稱すべきもので、一枚の羽子板に對し何位の、職工の手を經るかと云ふと、桐や織物吳服類の原料は別と見て、先づ板屋、押繪師、畫工、際物問屋、際物師等の手を經るのです、最初は際物問屋で原料を仕込み、當年の當り狂言とか風俗畫とかの下繪を畫工に描せ、之を下職の手へ廻すのです、その下職は前述した板屋、押繪師などであります。

◎押繪の舞臺即ち羽子板の木地は、孰も板屋と稱する職工の手になるのです。板屋先生は際物問屋より、桐材を廻され、之で二六時中、羽子板の木地を作つて居るのですが、此木地には色々寸法がありまして、最も大きいのは大看板、それより二尺物、尺八、尺七と云ふ順で段々小さくなります。夫以下は孰れも符牒で呼んで居る。尺五が孫、尺四が大京、尺三が小京、尺二が大相、夫より中相、相方と段々寸法が迫つて來ます。その、

◎木地の寸法に由つて、押繪師は押繪を作らなければならぬ、大看板は當り狂言の三人立、二人立と云ふやうな大きいもので羽子板屋の看板にする外殆んど實用に適しません。此押繪師の側にも面相師と、普通の押繪師とありまして、普通押繪師は下繪に由つて、衣類の衣紋や、首や手を厚紙で切拔き、夫へ首や手なら繪絹、衣類の衣紋なら夫々適宜な織物を裁ちて、糊附細工にするのです。

◎此押繪に使用する織物類は、孰れも帶地を一卷宛買つて、之を細く

裁切るのですから、目下のやうに呉服類が騰貴をしましては却々格安な羽子板は作れないさうで御座います。乃で胴が出來上つてから、首や手を附屬させるのですが、肝腎の首は俳優の似顔や、風俗人物であるから畫工の手を要するのです、元來押繪と云ふ所よりしても、

◎押繪師自身が畫筆を揮ればならぬ筈ですが馴れぬ仕事をやつて居ては捗取ぬので、之を分業とし押繪は押繪專門となり、首の似顔や美人の顔は、面相師と云ふ一種の押繪師の手にかゝるのです。併し今日では普通な似顔のみでは不可ませんで、寫眞模しの押繪羽子板が流行して來ましたから、在來の浮世繪師では間に合す、ボツ〳〵肖像畫師が筆を染るやうになりました。

◎夫から羽子板の附立則ち背景は之れまた別に畫工があつて、奥庭の遠見とか浪とか岩とか、雪とか雨とかを描て居ます、此先生等は單に背景のみでなく、羽子板の裏繪の松竹梅や福壽草など云ふ、春の景物を描て生活をして居るのですから、附立師は押繪師の下職と見て宜いでせう。

◎押繪師にも際物問屋より原料を廻されて手間仕事を專門としてゐる者と自家で材料を購求し押繪を作つて、際物問屋へ十枚一把として卸して廻る者とあります。先に云ひ殘しましたが、押繪の頭へ、石橋や土蜘蛛などになると毛を植てあるでせう、之を仲間では毛葺き或は、スガ植と云つて居ます。つまりスガ糸を繪の具で染めて作るから略してスガ植と云ふのです。

◎以上は職工側の話してありますが、際物問屋の方では、その下職から蒐集めた押繪を板へ鋲止めとし、繪柄を取混ぜ十枚一組に束れ、際物問屋が事務所へ會合し、一定の卸し相場を取極め、之を小賣屋へ卸すのであります。此の小賣屋は保證金の若干かを投じ、跡は賣揚勘定で各所の歳の市が了り、而して後に總勘定と云ふ事になるのですから、際物小賣屋は信用と敏腕が資本で、別に多額の資本金を要さないと云ふ事です。



塚越停春選

（天）冬の月　大阪　鎌田琴子

阿闍くむと氷わる夜半全山の
　猿の音凄く月冴え渡る

評。悽愴の景人に迫る。

（地）題知らず　豊前　祥雲ふしえ

きりぎりす昔契りし誰なれば
　起きては枕のもとに鳴らむ

評。着想何ぞ奇可なる。

（地）失題　下總　岩瀨不二野

にごり江の岸の柳のかげやせて
　ほそくもかゝる冬の月かな

（人）暮秋　小田原　白露子

露にぬれし芭蕉の葉かげこほろぎの
　むくろ殘りて秋くれんとす。

評。筆調穩健。

（人）題知らず　姫路　柳田白百合

茶の花のかほりつめたき朝あけを
　鐘樓高く殘月かゝる

評。清麗。

（人）冬の歌の中に　館林　奈良政七

何神の下りますらむうつせみの世は
　銀となれるあしたに

評。何神とは面白し。

（人）暮秋　岡山　武島かほる子

立田姫の紅の御袖にしぐるゝは
　ゆく秋おしむ涙なるらむ

評。巧思を見る。

（人）雪　千葉　初子

はなもよし月も又よししかはあれど
　雪こそよけれみよしのゝ山

秀選

▷○○朝落葉　丹波　野ぎく
夜もすがら風やよせこむ今朝みれは落葉山なすにはのおもかな

▷○○露　磐城　猪又とし
花もちり人まつむしの音もかれて露のみしげくなりにけるかな

▷○○逸題　京都　流水女史
いく千年よる荒波にゆるぎなき沖の小じまをこゝろともがな

▷○○風前菊　筑前　天の花
いと清き人の心のそよぎにもたとへまほしき風の白菊

評。着想超凡。

○○殘菊　下谷　窪田幸子
うつり行くその千草を霜枯の野末にしるやしら菊の花

評。用調巧妙。

▷○○千鳥　新居濱　山崎くま子
波の音にねさめて船の窓をせば月かたふきて千鳥鳴くなり

▷○○田舍歳暮　牛込　平塚白百合
もちつきの音もとたえてか歳のうたまれてゐるとしのくれかな

評。田舍の實景なるべし。

▷○○題知らず　姫路　三輪波留子
打鐘のひゞきに秋の日は落ちて夕日つめたく山茶花の散る

評。閑寂の景想ふに堪ゆ。

▷○○秋の歌の中に　尼ヶ崎　阪本榮子
小萩原うちながめてもおのづから秋の心となりにけるかな

▷○○秋のうたの中に(蟲)　仙臺　內ケ崎きみよ
あきの野に小草をやどになくむしの夜ごと〳〵にあはれますなり

、○○題知らず　巢鴨　高橋英太子
萩ちりて蟲の音かれて友逝きて涙の秋は今くれんとす

評。たゞさへ悲しき秋の暮に、友を喪ひし恨さこそと思はる。

▷○○題知らず　神戸　井口うの子
小狐の啼く音を寒み夜もすがら灯かげ守りぬこがらしの宿

○○逸題　周防　貞弘八千代
化はひをへて朝もやつゝむ窓によれば花は見わかで菊の香のする

▷○○西條山懷古　越後　中野好
ふきおろす西條山の朝風に駒いなゝきし昔をぞおもふ

、○○偶成　美濃　山田愛子
事しげきわが世のがれて歌思ふ窓にうれしき白萩の月

、○○折にふれて　肥前　嬉野登子
幸きくませと君を送りし夜に似たり月はさやかにかどをてらして

、○○氷　岩手　澤田たま子
もみぢはをとぢし氷や見し秋のおもかげうつすかゞみなるらん

評。巧緻。

▷○○朝寒　前橋　宮內りき子
中庭の菊の枯葉に霜見えて文机寒しおりあけの窓

、○○旅泊霜　京都　秋子
あけたれどまだ霜深し孤まくらなれぬ浮れの夜こそながけれ

▷○○冬月　大阪　久子
七くさも蟲のなく音もかれはてゝ月のみさゆる猪名の笹原

、○○閑居蟲　攝州　たつ子
八重むぐらしげれるやどのしづけさに人まつむしのこゑのみぞする

、〇〇秋雨　河内　田中八須子

さらでだに秋は淋しきならひなるを夜すがらひゞく軒の玉水

、〇〇砧　攝津　山路儀子

さらでだに身にしむ秋の風の音をきゝさだむれば衣うつなり

〇〇時雨　備前　鎌田やゑ子

昇る日の影はつま戸にさしながらしぐれ降るなり冬の山里

評。面白し。

〇〇木曾路にて　信濃　大塚靜枝

月闇か落葉靜かに音もなき木曾の一夜を旅日記よむ

〇〇たびの歌のうちに　越後　以久亘清子

宿かれば主は學びの友にして昔語りによるは明けゝり

評。其喜知るべき也。

、〇〇題知らず　上毛　増田太喜

みどりなる松にかゝれるつたもみぢいかなるつゆのおきてそめけん

〇〇紅葉　四谷　乙女菊

武士のむちうつこまの黒かみにくれないふかきもみぢちりくる

、〇〇題知らず　福井　島ます子

二三軒ならぶ草家のゝきさきに小鳥さへづる野の小春かな

、〇〇題知らず　本所　露子

取いれも殘るかたなくなしをえてゆたけきひなの冬ごもりかな

、〇〇枯野　大阪　山田かつよ

見し秋の千草八千草枯れはてゝつきさへ寒し武さしのゝ原

佳調

寄糸述懷　京都　齋藤つれ子

今日も又おなじ事のみくりかへしむなしく暮らすしつのをだ卷

琴　福井　藤野つか子

まちわぶる人のすさびにかきなすかつまを聞てふ琴の音ぞする

寒月　京都　三田とし子

ふくろふのこゑものすごき山のはにもる影さむし冬の夜の月

或人の婚禮に　飛騨　國武子

むつまじく幾千代かけてちぎりませけふを妹背の始めとはして

薄命　三河　八代子

たよりなき身はながらへて今日こゝに秋風さびし松山の里

川落葉　堺　清水榮子

秋風にちりてうかびし川なみの紅葉の小舟たれかこぐらむ

暮鐘　高崎　池野たま子

いくそたびつゝれぬふ手をとゞめては母きづこふる秋の夜中かな

失題　美作　山村たき子

我がむれのくもりしなくは今日の月いかにうれしき光りなるらむ

案山子　鹿兒島　貴島よし子

刈りはてし稲田の畔に淋しとも立てる案山子に雨細う降る

失題　新潟　齊川こう

朝霧は四方に晴きて出づる日の光りにけぶる野邊の初霜

失題　神戸　船戸ゆき子

枯蘆の葉風淋しく夕暮れて新月細うさし登りけり

冬の月　衣ヶ浦　なでし子

それほどゝばかりにふじをみもやらで足柄山の冬の夜の月

紅葉　秋田　今村滿子

この秋も紅葉のいろはかはられどながむる友のなきぞかなしき

失題　東京　三衛子

やむ母の御肩さすりて其上のものかたりきくあめの夜半かな

失題　山梨　井出まさじ

山寺の傾く塔に晩秋のあはれも見えて照る月の影

秋の夕　伊豆　古谷靜江子

たへ〳〵の野寺の鐘に淋しさのいやまさりゆく秋の夕くれ

寄菊祝　巣鴨　大塚藤

千代八千代ませの白菊君ませとかさしていはふませの白菊

親友　東京　金子艶子

へだてなき友と語ろふ言の葉のつくろはぬこそうれしかりけれ

秋のくれ　金澤市　佐藤かつ子

野の家の井戸のはれ木に百舌鳥なきて枯葉さわぐ秋のくれ哉

題しらず　新潟　櫻井登代子

木枯にふきかへされし柴の戸をおこすひまなくうつ砧かな

失題　室蘭　上村雪江

豊秋の新嘗まつり午すぎて櫻もみぢの里日和かな

失題　攝津　岩井文子

うらぶれの身を秋風にふかれつく羊追ひ行く若き人かな

失題　南品川　平瀬

業ならず病いもゐんずことしまた思ひ出多き秋に逢ふとは

落葉　下總　かげ山靜波

かご負て山路を通ふ賤のめの姉様かぶり紅葉かつちる

紅葉深　周防　登貝子

稲荷山あけの鳥居の色さへもみわかぬまでに紅葉しにけり

失題　大阪　日高清子

うなたれて思はす落す一しづく消えも入りたき心地するかな

失題　大阪　淡水子

針の手をしばしとゞめて片頰笑み緣ごしに見る萩の花かな

失題　靜岡　坂梨よし子

人や知る夢ならなくに滄波の青海原に傾聞行くみを

失題　岡山　美妙

月高く靜けき庭に蟲鳴きて夜風に聞ゆつま琴の音

秋の夕ぐれ　長崎　光岡とら子

はら〳〵と庭の紅葉のちりしくに袖ぬれやすき秋の夕ぐれ

近衛隊　徳島　高瀬とよの子

うち日さす大宮ちかく奉仕るやそ伴の雄や賢の八重垣

失題　臺北　宮崎孝子

高砂を幸なき島と思ふ人秋に來ませよ冬に來ませよ

失題　岐阜　和田美子

鵜船見ぬ長良の川の秋たけて水馴れ柚木のやなら流るゝ

失題　武州　井上千代子

みなさけのこもれる君か玉章をけふも終日ながめくらしぬ

蝸牛　東京　町田まき子

平かなのいろは長屋も持つ家の塀に文字かく蝸牛かな

秋　東京　村木まさ子

我が宿のあれにし庭は秋さびてまがきのあたり風渡るなり

孝　群馬　栗原康子

人としてつとむる道は多けれと基となるは親につかふみち

菊に對して天長節を祝し奉る　伊勢　熊谷友枝

夏に叉色香も添ひて花毎にきみか八千代の數そこもれる

短文

甲賞

菊作り翁

和歌山　山口文枝

金盃銀盃を、ならべた様な菊畑の傍へ、筵を敷いて日向ぼつこ、をしながら、爺様の例の自慢話が始まつた、ノウ婆様、菊は奇麗だ〳〵と、皆ふけれど、之ほどまでに咲かせるにやなみ大抵な事ぢやないて、五月に株分してから、水をくむやら、蟲を取るやら、しかし、マア御互に幸福な事ぢやノウ、年を取つてから、かうして菊でも作つて樂めるのは……此時菊畑の彼方の隅に風もないのに、菊が動き出した、爺様吃驚して、延び上つて見ると、可愛らしい眞黒なお毛しの、菊よりも背の低い、愛ちやんが、何か小聲で歌ひながら、無心に菊の花を、むしつてゐる。

乙賞

片身の琴

岩代　菅野和子

學校から歸へると妹の泣き聲、何とはなしに非常に胸を衝いた。怎うしたのかと聞くと、誤つて母ちやんの大切な茶碗を毀したとのことで小間使のお詫びも聽屆けられず今土藏に押閉められやうといふ刹那であつた。

琴は嗔れてとーノ〳〵してなる。「美ちやん、お前は常にお粗匆してゐるので、けふばかりではありません、あとをよくきをつけなさい」といへば、感謝の意か私の胸にひしと抱きついた、而して「今度の母ちやん怖い」と頑是ないことを云ふ。

それから三日目だ、美ちやんは危篤な病氣になつた。

私は一週間學校を休んで看病した、其故で今日琴をきゝたいと稍本性になつた、で一つ彈うと思つたら誰の惡戯か糸は寸斷〳〵にされてゐる。

乙賞

木枯しの夜

姫路　中田歸未子

「春ッ」、肉の家から駈走つた女の聲、續いて「文が風ひくぢやないか、れたら歸らんか、馬鹿ッ……」とどなる。目を泣きはらした春ちやんは、やつとれた子を負ふて歸る。年は九ッ。

入日の月は西に落ちて、木枯一しきり物凄う、木の葉は舞ひ上る、我は歩をしのばせて寄ひ寄つた。春ちやんに事無かれと祈りつゝ。

丙賞

庭の晩秋

埼玉　小山榮子

ほか〳〵と暖い日は、縁側一パイに射込むで何とも云へない靜かな好い日である、庭の池にも今日は、めづらしく金魚が三ッ四ッ浮いて居る。

池の端の老木の梅に、今しも雀が一羽パクと飛んで來て花芽を啄き初める、と向ふの、梧桐の葉影からも又一羽顔を出して同じく來てとまる。二つは樂しさうに、枝から枝へ、チョン〳〵と飛んで居る。縁の外には菊が時を笑顔に咲いて居てなんとなく賑やかである。

丙賞

千代子の君

小石川　平塚八重子

春の花秋の月皆默々の裡に過ぎ、親しき千代子の君と此河畔に別れを惜しみたる時も早や五年の昔となり、我はまた此なつかしき岸邊の客とはなりぬ、終日照らせし日はかくれて今は夜のうす絹の如き黒幕は靜けき天地を蔽ひぬ、仰ぎ見れば月は磨きあげたる銀盆の如く映々として我影を砂上に印しぬ、此森嚴なる光景は轉た懐郷の小琴をかきならさしむ、あゝ親しかりし千代子の君よ、君が一朝の不平より此河頭に一條の水烟を揚げて消へたまひし時も亦今宵の如き淸き夜なりしか、あゝ思ひ出多き夜なるかな、渚によする波の音いと高う聞ゆ、す、さなりあす朝とく起きてかの森の影にねむれる君が奥津城を訪はんとやをら一歩を返せば、一連の雁月になき、流星また南に飛びぬ。

丙賞

都のはづれ

牛込　平塚白百合

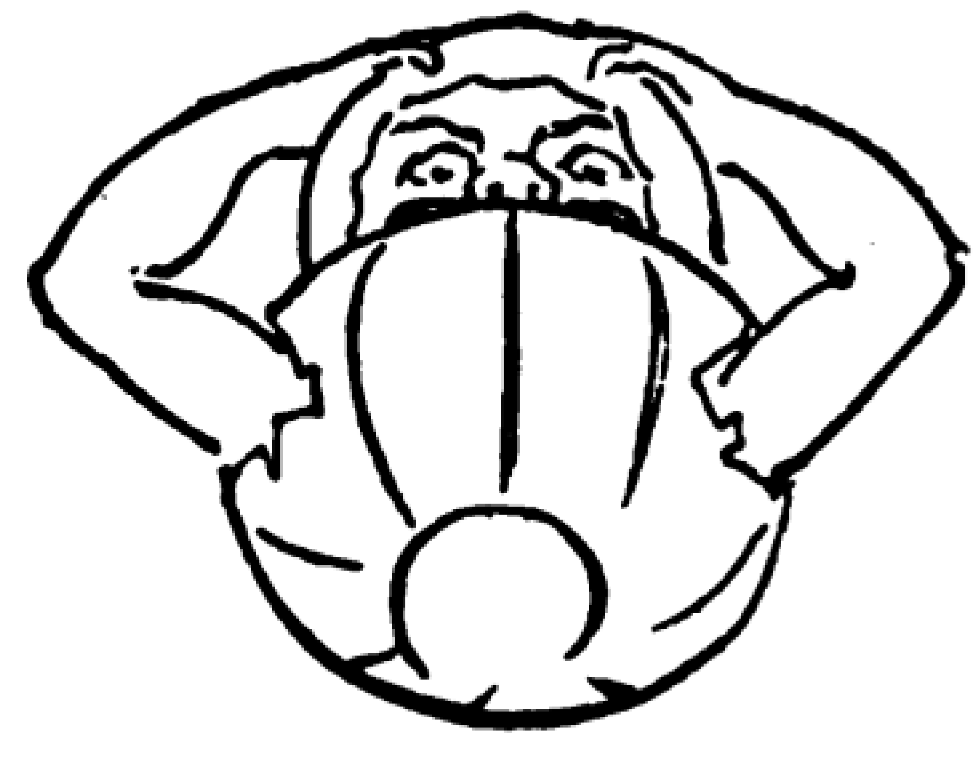
袷せの袖のうすらさむきに、羽織かされて出でたるに、日はあか〳〵とてれどまだ何となく肌さむし、屋後の空林にはもづ高く鳴きて井戸端の柿は朱金色の實いと美し、空林のそとは尾花打つとき、畑地を距てたる隣家よりはわら打つ音トン〳〵と聞ゆ。

琴の音

姫路　鈴木ふじ子

此間借りた御本を返しに、裏から美代子さんの、はなれの方に廻ると、突然琴の音が聞こつたので私は止つて耳を澄ませる。……初春に日向へうつす福壽草。……めでたき御代の長閑さよ。まア何と云ふ御手際でせう。私は萩の垣根に突立つたまゝ、恍惚としました。香しい薫がプーンと鼻を打つ。障子の内では、琴は益々佳境に進む。曲中一の美い聲を頼く合せて。傍の大輪の黄菊に虻がブンと云ふ。踏石の上には小さい丹塗の下駄が小春日に輝いてゐる。花ちやんのでせう風もないのに紅葉が散た。

懸賞はめ繪　第一等



埼玉　笠間はる子

友の許へ

牛込　市來こと

三とせむかし君と共に見しみやぎの秋草、變らぬ色に又もや咲き初め中

候、桔梗、かるかや、女郎花、何れ見の秋草ならざるはなく、月影淡いてしめやかにありし昔の面影思ひ出し、かくは秋草を添へて、十六日夜更けて。

門前

駿河　泉とし子

始てのお產なればとて妾は里に歸りぬ。生れたるは嬉しや男にて一郎と名づけられぬ。扨て程經て若や是切り……と繰返り〳〵したる門前に、妾は一郎を抱きて歸れり、あゝ今よりは慈愛深き御兩親と優しき人との前に、可愛き一郎を育てんことの如何に嬉しきや。

秋の暮色

東京　秋野月枝

蕭條と降り頻りし秋雨あがりて、華やかなる夕日の光、窓の障子に山茶花の影をば暫時寫すと見せて、やがて暮れ行く空の紅は淡紅となり、黄となり、紫となり、白となり、灰となりつゝ、靜かに鮮かに、ポツカリと紅き町の灯、つゞいて二點、三點、夜のカーテンは次第に擴がる。

秋の夕

丹波　武部安子

釣瓶落しの秋の日は、島山影にかくろひて、金波銀波のさゝめき細う、冷風靜に面を拂ひて鐘樓の影一つ、折柄寂寞を破り響く遠寺の鐘、餘韻嫋嫋たり。

懸賞はめ繪　第二等



伊勢　細野ふみ子

山口　三浦富子

明日の用意にと山のふもとの筧の水で、お米をといで居ますと、俄にあたりが明るくなりまして、桶の中にまんまるいお月様が浮き出ました、しばらくお月様を洗つて、さて家へはいりて來るとお祖母様が、緣側でお月見していらつしやる、からお肩をもんであげますと、いろいろのお話をなさりながら、なほもあかずに夜の景色をながめていらつしやいましたが、月も大分かたむきましたのでお祖母様は、まもなくおやすみになりました、あとで、私は女學世界を見てやすむのが、何よりの、たのしみでございます。

秋の川

神田　田尻とみ

澗れ〳〵の谷川、あちらこちらに大石が五つ六つ、底は見え透くばかりに、淸く、折々それへ木の實が落ちて行く對岸には柳一本、今のぼりかけた月に背を見せて、風無きに枯葉一葉ひら〳〵と散つた、かなたの丘にポツカリ紅き灯天には秋を齎す雁の聲。

家庭日記

京都 三宅幹子

十一月十日、日曜、晴。
朝、美ちやんを連れて、加茂川原へ大根を買ひに行く、大株一つ四錢、武坊二階から落ちしも幸ひ怪我なし、故里の父に金參圓郵送す、夜、青野さん來訪、新審和歌に關しての大名論が出た。
古寺の仁王に語なし奈良の秋。

秋

北海道 太田まさ子

十三夜の月は皎々と青白いさびし相な光を放つて居る、あたりの蟲の音は哀絲の曲を奏でゝいと〳〵悲し。折しも吹き來る寒風に楢の枯れ葉二ッ三ッ、はら〳〵と落つ……秋は最早半ばで有る。

家庭日記

羽前 谷山たに子

十一月七日、木。女學世界着く。
同 八日、金。憐れの少女を連れて男乞食來る、妹の着古るを與ふ。
同 九日、土。父君赤湯溫泉に行かる。
同 十日、日。妹を訪ふ友達朝來り賑ふ。
同 十一日、月。記事なし。
同 十二日、火。季の妹發熱して醫師の診察を乞ふ、大事なしと云ひ去る。
同 十三日、水。親家より新餅を惠まる。

懸賞はめ繪第三等



山梨 山本於庫

村の娘

新潟 田澤千代

今年は近年にない豐作だつたし、お前もよく働いて呉れたからといふて昨日爺さんが町からわざ〳〵帶を買ふて來て呉れた、餘りうれしうて私やゆふべ一晩寝られなかつた、ほんに見れば見るほど美事な品だ、衣裳自慢のお夏さんもよもや斯んなのは持つて居まい、村の祭が早く明日にも來ればよい。

雪の暁

和歌山 植木素子

暁告ぐる鐘の音に、夢おのづから解け、聞くとはなしに、聞けば、弟の、庭の方にて、雪よ〳〵と呼ぶにぞ、いで我もと起き出で〻眺むるに、いとめざまし。あゝ、夜中まで、月さやかなりしを、今朝は野も、山も、皆白妙にて、木々は、時ならぬ花を咲かせてけり、折りしも弟のしたり顔に、はせ來り、姉上よ見給へ。井のほとりに、雪達摩をぞつくりゐると、いふも勇まし、犬は、白銀の世界を、踏みつぶし、梅は咲き、雛はもみぢ葉を、ちりばめぬ。

庭の山茶花

豐後 菅原よし子

南の縁近う妹のきる紅ゆふぜんの着物を、餘念なく縫ひゐたりしが、何

となくゆかしき花の香のなりくゝわが室をめぐると覺へしまゝ、つと立つて障子を開ければ、二三日前まで蕾がちなりし庭の山茶花は小春日の温かき光をうけて殘らず、ま白く咲き居たり。

祖父の命日

本郷　多門徹子

十一月十日、今日はお祖父樣の御命日で、幸ひ日曜だから、母樣と姉樣と妾とがてんでに異つたお料理をこさへてお寫眞の前でみんな一緒に晝飯を頂く。お父樣と兄樣は色々お祖父樣のお話をなされる。するとお祖父樣もあのにこくゝしたお顏で、矢張そこにゐらつしやる樣な氣がした。

良人を懐ふ

奉天　雪子

雪坊主は元氣なりや、寢冷させぬ用心肝要に候、今日は中秋の月見なれば一日靜に當地にて英氣を養はんと存候、支那の祝日なればボーイに心付よきほどにおやりなさるべく候、昨年は公主嶺の月見、今年は哈爾賓の月見に候明年はキツト雪坊主と御身の三人にて月見致さんと存候、小生は雪坊と御身の健康を祈り居候。

右は九月廿三日附を以て旅行中の良人より賜わりし御文なり。夫は今如何なるうたやおもふらん、我は荒野に月ふみてゆきつゝも去年の月見に日本にある妾が許へ贈りこされし御葉書の風に散りても重き情はこもるものよとてうれしかりしとを思ひ出しつ。

旅衣いかにや君のおはすらん、秋風寒く世はなりにけり。

ハルビンと名にこそたてれ秋風の身にしむ夕いかにおはさん。

秋の夜の長き旅にもおはすかなおしろいの花色あせにけり。

夕暮

下野　筑波はな

烟りこめつゝくれ行く黄昏にひゞき渡る鐘の音を知りてや、村鳥の雲路をわけて、五つ三つ打連れて、鎮守の森へといそぐ、空にはきらめく、星の光が三つ七つ、こゝかしこに。

懸賞はめ繪　第四等



岡山　中島遊龜子

嫁のつとめ

上總　梅子

吹き來る秋風も身に浸みて淋しき夕方、かすかに聞ゆる暮鐘をきゝながら、白の手拭姉樣かぶりに赤いたすきも若々しう、青々とした菜畑に草取りらしい、先刻まで居た母らしい人はもう歸つたのに、一人殘されてさぞ淋しいであらう、やがて取り終つたのかもう薄暗い中を小走で家の方へ、と急ぐあゝ嫁の務は辛いものだ。

勸工場

四谷　八重子

一寸立止まると。「いらしやいまし、何ぞいかゞさま」。

五月蠅程身の廻りに付きまとつて、様子を窺ひジロ〱と、頭の先から足の先まで眼を光らし注目をして、買ないものと見れば、狐鼠見張の塲所に乙つにツンとした素振を見せ、戻つて行くと、猶一層眼をとがらし、お客の動作通りに目をあやつるっ店頭を立ち去つてしまうと、氣抜けた風に溜息一つゝいて、今迄讀みかけた講談本をまた讀み初めるが、時を見計つて、たまさか顔を擡上げて店を見張る。頭上の白熱瓦斯は行儀よく一列に、曲り角まで三十個の瓦斯は晃々と輝いて、袋物屋の煙管、墓口の金物に反射し、鏡の様にキラツイて、まぶしい。狹苦しい所に多くの品物が並んで、人は絶間なく出入しておる。瓦斯に札がヒラヒラと「お頭りを御注意願ひ升」。出口に來るとパツと身體がしまる様に蒸暑い氣が去つて、初めて蘇生した氣持になる。向側の植木屋の掛聲も、人垣から漏れて、勢いよく、電車のベルの音はチナン々々と忙しく、走つてゐる。

夕の磯

能登　天野星子

青葉を渡る夕風涼しき夜我は漂然と宿を出で夕べの海景色を見んとて辿り行きぬいつしか渚につき險しき突き出でたる岩に腰懸け見渡せば海は蒼茫と海黒く月は皎々と冲天に輝ききら〱と水面にうつる其影波にゆられて伸びては金線の如く、縮りては星の如し、夜はいたく更け行きて萬籟死するが如く、只寄せては、返す白波の音のみ幽かに寂寞を破りて聞ゆるのみ、この靜寂たる自然の景色を眺め入る眼はいつしか蟲りてはら〱と頬を傳ふものあり。嗚呼人世かくまで辛きものなるかつく〲世の果敢なきを感じ只燃ゆるは熱き胸の想ひ裂きて開きて、此苦しみを解く人あらばとまたしても妾は憂愁の惱みに掻きみだされて、我知らず眺むれば、月はいよ〱冴えて星光いよ〱清く沈み行く夜の靜けさに、岩に砕けて玉と散る波の音のみ煩悶の胸に辛くも響きぬ!!!

懸賞はめ繪　第五等



茨城　小林花子

桐一葉

下野　栗原くに子

障子開くれば藥の香鼻を衝く、此處は姉上の病室である、十八の歳の暮にある銀行員に嫁ぎしが病ひ勝なりし身は明る年の此の頃、肺結核と醫師に宣告されてよりは夫は側に寄りつかぬのみか、家内中に辛くあたらるゝに耐え兼れて、自から離縁を求めて家に歸りてより再び秋は來つれども枕さへも上がらぬ長の病氣、ふくよかなりし頬は骨高く出で、淡紅色なせし顔色も白蠟の如く、息つく様さへ明に見得らるゝ。

徒然の折りには戀しと思ひし其人の寫眞を取出しては涙に濡らす事もありし。

不如歸をとの言葉に取出す本箱の中には、未だ嫁がざりし頃、先の其人より寄せ給ひし文殻の一たばれ、見るも涙の種と、元の如く納めて病室にかへれば、俄に變る姉の容體に母や呼ばん父や呼ばんと病室を走せ出でぬ、秋風颯と吹いて哀れ散り行く桐一葉。

紅葉ヶ谷の夕

三重　神田青子

青々とした大川にそふて、白樺の林を通りて行くほどに、絶壁の山がある、其の麓は紅葉ヶ谷である、老樹數十株、爛熳たる錦、唐紅に織りなして、青く澄み渡りし空、よきコントラストである、ゴーゴーと聞ゆるは早き川瀨の岩石に當りて水の碎くる音であらう、日は山端に紅の光線を放してかくれんとするとき、玲瓏たる花影は水に映じて入相の鐘暮れて行く。

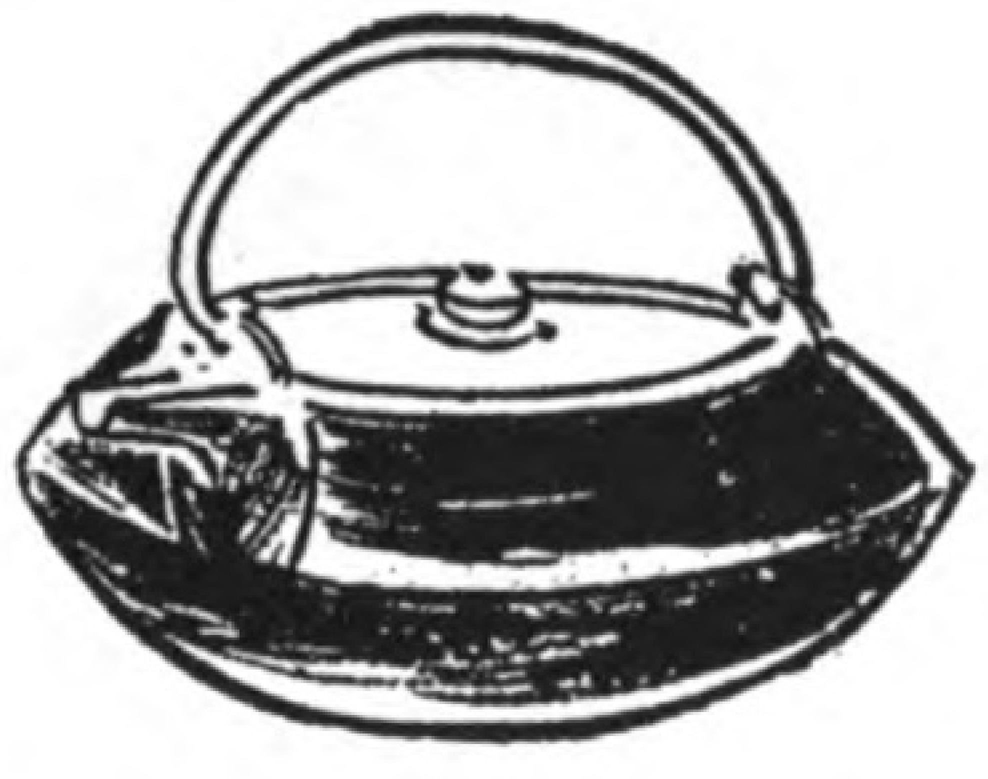
旅衣

磐城　吹雪

年久敷く住み馴れし我が古里を彌生の末つかた袖をぬらして立ち出でゝ此處に在る事四月五月六月七月八月九月あゝモウ丸六ヶ月餘月日の經つのは早いものだ。さらぬだに我思はする秋の夜とりわけ今宵の月に戀しい樣にも有り恨めしい故鄕の父君は此の月を何と眺めて居られるだらうか母君はさぞや此の月に我が面影を寫して欲しう思はせ給ふらん。

流石に旅に出て見れば古里が戀しい、父君は如何に母君はいかにはた可愛い妹のやゑちやんは何をしてるだろふか門出の折に妾の袖に縋つて早く歸つて頂戴と愛情有る眼に露を宿し後は何も云ひ得ず俯伏したのが何より目に止つて居る。

賞外佳作



伊勢　中川まつ

四つの柿の實

岐阜　度會よし子

朝な夕な見るにつけうれしかりし背戸の柿四つ、昨日一つは烏にさらはれ、一つはわらはが食へたれば、殘りはたゞ二つなり、それを近々京都より御歸りなさる姉さんにと思へばもう氣にかゝつて堪らず、色々と思案のすゑ到頭紙袋で掩ふべく智慧袋を絞りぬ。

砧

攝津　芙蓉子

梢に低う月落て、枯れし尾花を渡る夜嵐の、肌にしみてうら寒う、叢の露の臆より行く秋の恨を喞つ蟲の音の絶々なるに打交りて幽に響く遠の砧、身を切る霜夜にたが爲に起居て營む業にやと、故鄕遠く隔てし身には一しほ哀深く老ませる母君やいかにとそゞろ涙のさし催されつ。

晩鐘

千葉　初子

妾は今里川の畔に立つてサラ〳〵と流れ行く水を見て居る、あゝ行く水と零落の身、何と云ふ哀れな對照であらう、ふと心に浮み出づるは其角の句、年の瀨や水の流れと人の身は……ボーンと一つ遠寺の晩鐘、アヽもう歸らればならん、さぞ母樣は御待ちであらちう。

新築落成を祝ふ文

東京　町田なつ江

つるかめのときはにすむべき新室に移らせ給ふことのうらやましさよ、此の松竹梅の一幅は無落款には候へども、探幽の筆と申事にて、祖父の代より傳來のもの、御よろこびの心ばかりに御目にかけ候、御とめおき下され候はゞいと〳〵嬉しくぞんじ候かしこ。

筆子姫

青森　田舎女

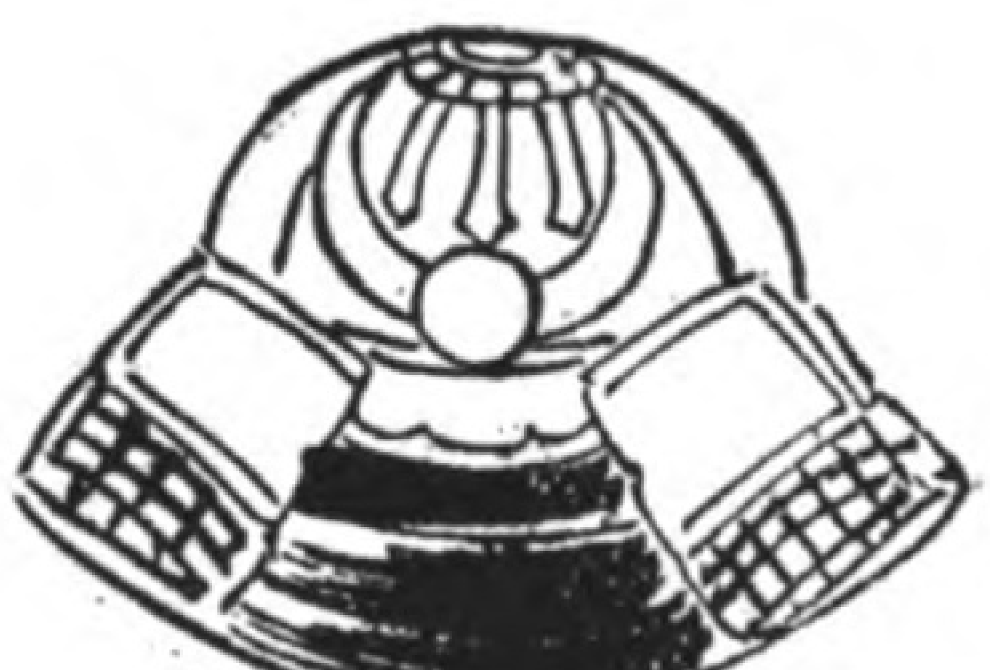
我が書齋に筆子とて實に我が無二の友あり、色の白きは雪の如く、其の性質至つてやさしく忍耐の心強くて吾が意にまかす。我かれと話すを最上の樂とす、一日姫の祖先を問ひしに「我が鼻祖は詳かならねど、昔支那の管城にありし毛穎にて、西洋には金さんと云へる親族あり、古より今に至るまで東西國に住みて學者先生の大著述にはた種々の側をはかりつゝあり」と答ふ。生れはと問へば東京なりと云ふ、我初て筆子の祖先を知る、嗚呼筆子は幸なる身の上なるかな、誰か彼れをうらやまざらむ。

夕暮

下野　筑波はな

煙りこめつゝくれ行く黄昏にひゞき渡る鐘の音、そを知りてや、村烏の雲路をわけて、五つ三つ打連れて、鎮守の森へといそぐ、空にはきらめく星の光が三つ七つ、こゝかしこに。

賞外佳作



伊勢　松原たま子

憎し可愛し

岐阜　杜若會育子

隣のブチと内の玉猫とくるつて遊んで居たのに兄はそれとは知らずに雛を籠から出すと、ブチはいきなり飛びかゝつて一羽をひつさらへ外部屋の縁の下へと逃げ込んだ、と内の玉は後追かけてとう〳〵雛を取り戻して來て兄の前に据へたが、兄は玉の頭を撫でつゝ東京から取つたのはもう一羽きりになつたと致命症を見つめて早や泣きさうな顔になる。

謎々　◎印は入賞

△花嫁とかけて

◎成金の三日大臣と解く、心は麻（久）からすして丸髷（丸敗）になる。　靜岡　大村　菊子

七面鳥と解く、心は人に見られる毎に赤くなる。　四谷　向　きく

◎散りかけた櫻花と解く、心はやがて葉々（母）となる。　牛込　深野みつ子

呉服店の賣出と解く、心は人が見たがる。　日本橋　山田　みい

綻びそめた梅と解く、心は何となく耻かしい。　東京　中村ちよ子

監獄の看守と解く、心は囚徒に氣を配る。　下谷　太田とめ子

行ひの正しい人と解く、心はどつちから見ても美しい。　信濃　工藤　わか

紅葉と解く、心は葉（顔）を染める。　信濃　百瀬　みゑ

源三位頼政の不平と解く、心はわづか四位（恥かしい）　京都　波多野ひろ

△かるた會とかけて

◎亂れた家庭と解く、心はお手付で騒ぐ。　横濱　馬場まこと

◎きみじかなる親父と解く、心は口で言ふより手が早い。　高崎　峰岸眞佐子

毛生液の廣告と解く、心は鼻髭の女もある。　新潟　大橋　とし

いざりの喧嘩と解く、心は目と手で戰ふ。　栃木　稲見　もと

茸狩と解く、心は目の前で取らるゝ。　備中　蘇　園

ポンチ繪葉書と解く、心は島田より廂が多い。　青森　村林やす子

諏訪の御柱祭と解く、心は木を挽く（氣を惹く）　信濃　工藤　のぶ

兒島高德と解く、心は夜中名歌をよむ。　磐城　玉造　久子

生見の氏神參詣と解く、心は「お宮」の逃ひ（詣り）ぞめ。　丹波　武部　歌子

△繪探しとかけて

◎下手な職人と解く、心は當りさうで却々當らん。　三河　夏目るい子

理想にかなつた夫と解く、心は容易に見つからぬ。　長野　小平かつゑ

寫眞館の主人と解く、心はさかすのに苦心する。　周防　太田　久子

◎夜中の鐘の音と解く、心ははてなんだらう。　東京　矢口　すみ

呉服店の買物と解く、心は横竪にしてみる。　牛込　深野みつ子

幽靈の噂と解く、心は見つかれば何でもないもの。　京都　波多野ひろ

冒險家と解く、心はみなとすが多い。　羽前　谷山たに子

不治の病と解く、心はだん〳〵むつかしくなる。　新潟　田澤　千代

次號の新題

△年賀廻りとかけて　△内助とかけて

△羽子つきとかけて

一口噺 ◎印入賞

◎ 駿河 天野ふじ子

ミス様子、「雪子さん、私し英文不如歸を讀んで泣きましたよ」
雪子「さう、そんなに六ケ敷くつて？」

◎ 磐城 小野あさ子

お嬢「お竹さん、あなた博覧會見物に入らしつて何が一番きれいだと思つて」
お竹「さうれー、私しのばずの池のイ子ムリシヨンがいちばんきれいに思つてよ」

◎ 磐城 柴田 吹雪

母「坊やわるさなんかすると、あれ御らん、おてんとう様がちやんと見て居らつしやるよ、」
坊「さう、そんなら雨ふりはわるさしても、いいの？、」

下總 落葉 女史

子「母様、展覧會におあしをつかはないでいこうよ、」
母「感心だねー、往復ともおあるきかへ、」
子「それぢやナツメリおあしがいらア、」

東京 山田 ミイ

孫「おぢいさんねんねをするのにめがねをかけて何が見えるの、」
祖父「ゆめが見えるの、」

下總 阪山 靜波

姉「アラ〳〵兄様ごらんなさい、次郎さんが蛙に灸をすへて居ますよ、」
兄「ソンナ事するど蛙が死んぢまうよ、」
次郎「イエ死ませんよ、お灸は蟲の藥だと母様が云つたもの、」

東京 中村ちよ子

甲「君日比谷公園はまだかね、」
乙「モウ疾に通り過ぎちまつたよ、」
甲「馬鹿に早いぢやないか、」
乙「だから公園、光陰、矢の如しと云ふのさ、」

攝津 平林ふさ子

君子「花子さん私子現念で〳〵立つても坐つても居られないわ……」
花子「ホ……それなら腰をお掛けなすつてはどうですか、」

京都 三宅 靜子

甲「あなた新刊の小說を何かお讀みなすつて？」
乙「いゝえ讀みたいけれども平凡ですから不必要ですよ……」

横濱 馬場 せい

下女甲「内の奥さんは随分吝だよ、」
下女乙「ナゼさ、」
下女甲「アノ松茸の香みばかり嗅てお買ひなさるんだもの、」

第四回繪探當選披露

（應募總數二千百五十三本）

（内正解者三百七十八名）

前々號の解答、（一）家（二）兎、（三）花瓶、（四）鼠、（五）豌豆、（六）犬、蛇、鵜、（七）蓮の葉、

當籤受賞人名

東京下谷區上野花園町十八	野上 まつ
同牛込區早稻田鶴巻町一六九	菅本 けん
同本郷區湯島天神町二ノ二十六	山田 末枝
同麻布區箪町一五二一	鮫島 琴歡
同北豐島郡日暮里村元金杉二六〇	柄内 富子
京都葛野郡川岡村	上田 つる
同伏見稻荷境内	鷲尾 鈴子
福岡縣田川郡添田村	原田 ちか
山形縣山形市七日町五七九	小笠原ふき
山口縣都濃郡徳山村二十一	田畑 近
神奈川縣津久井郡靑野原村八四四	井上 鎮子
茨城縣下妻町	加藤 りう
神戸市元町六丁目二〇四	齋藤 たつ
静岡縣磐田郡天龍村中野	堀内 千代
備中淺江郡三島町大字乙島	中井 繪子
常陸稻敷郡木原村大字受領	沼崎 てう
甲斐國中巨摩郡飯野村	岸田 ゆき
美濃國郡上郡八幡町	伊藤 悦子
筑後山門郡瀬開村大字西開	吉川 ますえ
北海道札幌區北四條東二丁目七	菅原 たか

下婢の親切



米國の家庭

▲男女の交　日本の家庭では、年頃の男と女が對坐でもして居るのを發見けますと既う罪悪でも犯してゐるやうに大騒ぎを爲ますが米國では一向平氣で何とも思ひません、寧ろ交際するのを奨勵する位ですから女同士や男同士ばかりの會合などは殆んど無いと云つても宜いのですから學問であれ藝術であれ婦人は男に負けぬ氣で遣ります、何んな立派な家庭の令嬢でも盛んに男子に交際を求め亦訪問されても誰も何んとも思ひません、當然だと思つて居るのです。

▲子供呼棄て　日本では何んな家庭でも主人と奉公人の權利は大した違ゐですが、米國では全然反對です、奉公人は主人の子供の名を呼棄てにします、悪い串戯など爲てゐるのを發見ますと遠慮も無くどん／＼自分が打擲します、親が側に見て居ても平氣で遣ります、また見てゐる方でも何とも思ひません、又主人の方だつて決して無理な使ひ方は爲ませんそれに時間を定めて働くのですから朝から晩迄束縛されると云ふ事は無いのです、大概一日十二時間位でそれも仕事をして仕舞へば、後は自由勝手に自分の用事をする事が出來るのです。斯う云ふ風ですから隨つて奉公人同士の交際が盛んに行はれます、約束の時間さへ勤めて了へばずん／＼主家を飛び出し、下婢が下男と手を携へて公園を散歩したり、劇場へ行つたりするので、日本の習慣に馴つた眼から見れば實際呆れて言葉も出無い位です。

▲子供が新聞賣　米國では富豪でも名門でも立派な家庭になればなる程子供を教育するのが嚴格です、決して日本の家庭のやうに甘い風にも育て無いやうな殿様訓育は爲ません、學問は兎に角幼少な時から思想を豐富にしやう／＼と云ふ方針で、一つ教へて二つを悟らせるやうに自然的な薫陶を爲るのです、假令ば僅少な金を與へまして何して是れが殖えるかと云ふ風な事を考へさせたり又富豪の子供が新聞賣子と爲つて路頭や公園や停車場などを歩いて居ります。（英語専修館長櫻井なみ子女史の談）

本誌新年號の豫告

第八卷第壹號（四十一年一月一日發行）

新年附録　百人一首歌かるた

一條成美意匠

大版―極彩色（百人百色の書分け）無類の美彩

記事の要目

▲趣味の正月
都會の正月　山家の正月　海濱の正月　旅の正月

▲名婦人内助談……婦人記者
捉へ來る人果して何人

▲斯る家には斷じて嫁るな……愛染女
深痛なる彼女の懺悔談が如何にお孃を警戒するか

▲何故に妾は斯く長命なるか……九十九嫗の實驗談

▲年齢に執着したる婚嫁の弊害

▲人事活斷▼

石龍子

▲大阪ゼイロク女へ＝未だ開かざる盆梅を求め或は水を注ぎ或は日光に觸れしむるの勢を怠りながら何うも此の梅は開き方が惡い、捨てゝ了はうかと思ふが如き卦見ゆ。されば婿君のテキパキせざるは貴女及び御兩親の赤誠籠らざるが故なり赤誠を籠めて對し給はゞ將來必ず有望なり。

▲横須賀美登里女へ＝蛟龍の時を得て風雲に乘せるが如き卦なり。故に兄上の成功更に疑無し。

▲東三河國一婦人へ＝今や先達に從うて峻坂を攀ぢ登りつゝある卦なり。先達を捨てゝ歸らんか如何なる岐路に踏み入るや圖られず先達を促して共に歸らんか遂に何等の成功無し。故に貴女は良人を先達なりと心得何事も良人の意に任せらるべし良人は一時は非常なる不幸に陷ることあるも才氣ある人なれば最後に之を挽回せらるべき時來るや必せり。

▲群馬縣月花女へ＝猛虎の檻中を出でたるに出逢ひたるが如し。一時逃れて隱るとも又何時逢ふか計られず斯る場合に有力者あらば其の人の手を藉りて再び檻中に入れて貰ふの安全なるに如かず、御身の母上も亦之と同じ道理なれば親類又は御鄕里の長者に助力を受けて兄上の說諭を乞はるべし之より外に名策無し。貴女は遠からず良緣あり憂ひ給ふ勿れ。

▲神奈川縣秋の紅葉女へ＝滿二ヶ年を待たるべし、二ヶ年を待たるれば御身及び弟方の爲に何れも幸運有り強てその不可を申す人あらば二ヶ年をお待ち下されと斷らるゝが上吉なり。

▲麹町桂月女へ＝足弱の者二人手を携へて激流を渡るが如き卦なり互に他に依賴する心を生ずる爲に一人倒れば他も亦倒るゝ危險あり寧ろ大に注意して獨力渡るを可とすされば御身も造花の道を益々專修して獨力世に立たるゝは可なれども友達との共力は甚だ危險なり、夢々此心有るべからず。

▲出雲萩の白露女へ＝剛なれば吉、弱なれば、凶な

るの卦なり。故に御身は剛以て萬事を處置し必ず以て他人の犠牲となるべからず換言すれば養母姉妹など丶如何に不和を生ずるも更に之を意とせず人倫の大道たる良人と飽くまで離れぬ策を取らるべし、末必ず吉なり。

▲牛込の植富女へ――縦ひ借財あるにもせよ、業は旅館なるにもせよ、幼少の頃より育てられ、一眼失明の不幸あるにも拘らず養子を迎へし御身を力となさんとせる養家の恩を打捨て丶實家に歸られたるは實に御身の失策なり不徳なり、されども過つて改むるに憚る勿れ、速に罪を謝して再び養家に歸らるべし、借財は御身の作りたるに非ざれば末には必ず何とか處置も附き幸福向ひ來るなり。

▲大阪小痛女へ――無學の賣卜者は頻りに彼此申すけれど易の大道より判斷すれば正義に從ふ者は必ず吉也乾であらうと巽であらうとに論なく人道を守つて居れば聊か恐るゝ所無し、假にも無智識の賣卜者を信じてはなりませぬ。

▲大阪神信女へ――貴女の身上を判斷する前に先づ石龍子の身上を語りませう、石龍子幼少より不幸勝の者にて悲觀煩悶止むことなかりしが今より十五年前に師の君の判斷を乞ひたれば「有難い〳〵と思へ」の一語を忘れずば末必ず幸運なりと申され、成程と感じて以後何事を處置するにも有難い〳〵と我が心を慰藉したりければ今は此の世に於て何等の心配も無く愉快に日を送らるゝやうになりました。されば貴女もあゝ有難い世には夫を有つ事の出來ぬ不幸者もあるに我が身の樣な不束者が橋の下にも寢ないで一人前の夫を有ち剰へ姑までに仕ふることを得るとは有難い〳〵と思うて見給へ、昨日まで不服に思ひし夫は今日は神の如く斷高となり昨日まで恐ろしかりし姑は今日は佛の如く優しくなるものなり、露だも不服の心あるべからず。

▲山梨縣菲江子へ――御身の志は剛なれども恰も小資金を以て鑛山業を企つる者の所業に彷彿たり小說家云々は失禮ながら到底不可能なりと知り給ふべし。さ

れば士官との結婚、一刻も早く良媒を求められよ返す返すも期を失ふべからず。

▲京都府下名菊子功不運女へ——貴女と先方の人とは水火相容れざるの趣あり。されば御兩親の言葉に從ひ破約せらるゝを可とすこれ貴女のみならず先方の人にも末吉なり。

▲北海道よしつ女へ——入籍は何れよりするも敢て關する所に非ず、貴女にして赤誠を傾注せらるれば末益益幸運なり。

▲鎌倉名無草女へ——幽谷の花其の開くこと一時他に遅れたれども開かば將に馥郁の芳香を放たんとするの趣あり、來年中には良縁ありて末益々目出度し。

▲京橋横雲女へ——石龍子の知人に貴女と同境遇の人甚だ多し、即ち良人不幸の身に迫り遂に妻と共に妻の實家へ一時寄食したるに妻の兩親は其の良人を生地無として離婚せり、然るにその良人は日を經月を累ぬるに從ひ風雲に乘ずるの勢を得家運益々盛なるに引換へ妻なる人は益々逆境に沈み遂に舊良人の下婢とまでなりたるもあれば、或は又殘酷なる夫に再縁し、泣の涙で暮せるもあり、是れ天は其の薄情を惡み給へるの罰なり嗚呼罰なり、されば御身も此理を母上に語り母上をして御身の良人を相憐むの情を起さしむべし一旦結んで夫婦となり、義の母となり、義の子となりたる以上は不幸貧苦に迫ればとて一尺の布も共に着るべし一合の米も共に食ふべし、嗚呼々々余は御身の文を繙いて感慨轉た起りト筮を捨てゝ唯余の衷心を吐露せるなり。

▲大阪保柳女へ——葉は落たりと雖も枝幹未だ枯れざるの卦なり。抑々結婚は夫婦の結婚にして舅姑と結婚するに非ざれば其の良人にして御身を捨つるの心無き限りは再び良人の門に至つて泣かるべし、その泣かるゝ時一點の怨なくんば良人の祖母とても血あり涙あるの人必ず翻りて慈愛の人となり給ふべし。

▲秋の蟋蟀女へ——進んで事を爲せば吉退いて守れば凶なるの卦見ゆ。故に御身は飽くまでも意志を貫きて高師の入學を斷行せらるべし。卒業の上は良媒良縁

續々たり。

▲香川縣石山是非伺度女へ——丘林に栖める狐狸が深山に移轉せんとするに似たり。元の丘林に居れば住むべき穴もあり餌食にも困らぬけれど、住み慣れぬ深林に入れば或は猛獸の爲に嚙殺されん恐あるのみならず、逃れて元の丘林に歸るも穴は既に他獸の爲に奪はるゝの憂あり。是を以て是を考ふるに御身等は飽くまで郷里に留まり氣長に良人の錦を着らるゝ時を待たるるに如かず、噫。

▲津部田の女へ——半可通の骨董家がつまらぬ石を見所ありとして珍重するが如き趣あり。去ば父上姉君の言葉に從ひ海員との結婚は謝絶せらるゝを吉とす。

▲大阪稻荷子へ——占ふことを止めて古い諺にある「五合入の瓢簞は何處へ行つても五合なり」の眞價を味つて下さい、之より外に申しますまい。生兒は男子なるの兆あり。

▲富士山麓草の舍冷子へ——千里の馬が槽櫪の中に畜はるゝの卦なり。されば貴女大に奮發して海外渡航を飽くまでも貫き、他日聲を大きくして嘶き給へ、躊躇すべきに非ず。

▲京橋梅雪女へ——男子歿して女子殘ればその女子が相續すべきは我が國の法律上にて又天理の然らしむる所なり、然るに貴女はその義務を捨てゝ家を斷絶せしむるは豈孝と謂ふべけんや財産は縱ひ義兄に蹂躙せられたりとて御身の罪に非ざれば聊か惜むべきに非ず御身にして清廉潔白ならば何時か御身に復り來るべし、故に御身の敎員資格を利用して飽くまでも細き烟を擧げらるゝを吉とす三年を出でざる中に相應なる婿殿の養子あるや疑なし、聊か憂ふる所に非ず益々身體を自重して節儉勤勉以て高潔の淑女となられたし。

▲姫路節子へ——少し進めば玉を得らるべきに今や急いで一方の手に石一方の手に死を摑まんとするが如き姿なり、須らく兩者を捨て進んで玉を得給ふべし。換言すれば神戸なる兄上の言葉に從はるゝを吉とす。

▲富田林の若綠女へ——清貧塲裏有樂地の一句を味つて御地に留まり良婿を得て母上を早く安堵せしめらる

ることを吉とす。

▲神戸わきゑ子へ――貴女には煙草屋兼貸本屋の如き簡易なる營業をなして日を送らるゝこと大に適當なりされど「不レ貪富之本」といふ一句を一生の守札とせられよ。

▲甲斐の不幸女へ――御身の境界は再び緣家へ歸らるるか獨身にて一生を送らるゝか、更に他へ嫁がるゝかの三點に迷はるゝ所。然るに再び緣家へ歸らんとするも姑及び良人は之を歡迎する方で無いのみならず御兩親も亦之を拒まるゝ所獨身にて暮さんか前途多大の障害ありされば殘る所の處置法以て推せらるべきなり。

▲愛知山谷川の葉山女へ――冬期に旅行して午後四時頃一小驛に着し、斯る小驛にては旅宿も思はかしらざれば遲くはなれど次の町へ行かんかと迷へるの姿なり一小驛に宿れば成程旅宿は不完全なれど左程の困難を感せずして安き夢を結ばるべし、然るに次の町まで疲れたる足を曳き摺らんか途中で日は暮れ寒さは愈々加はり大なる困苦をして而も如何なる災難あるか計られず、御身此の理を悟らば上京を思ひ止りて養子を迎へらるべし、二年の中に良緣ありて平和の春來るなり。

▲丹後江なみの君子へ――正々堂々たる本妻及び愛兒のあるにも拘らず他婦の家に流連して歸らざる人は獸慾を縱にする人非人なり、されば貴女は其人非人を更に念頭に浮べず即ち寡婦なりと諦め力の及ぶ限り老舅及び愛兒の爲に盡さるべし。

▲攝津の恐怖女史へ――良人と貴女とは水魚も啻ならざるの好夫婦なり、然るに無學なる賣卜者の言を信じて互に相疑はんか不幸之より大なるはなし。以後斷々乎として何人が何と言つても互に相愛し相信じ「お前百までわしや九十九まで」と歌はるべし、家運隆盛平和の氣藹々堂に滿つべきなり。

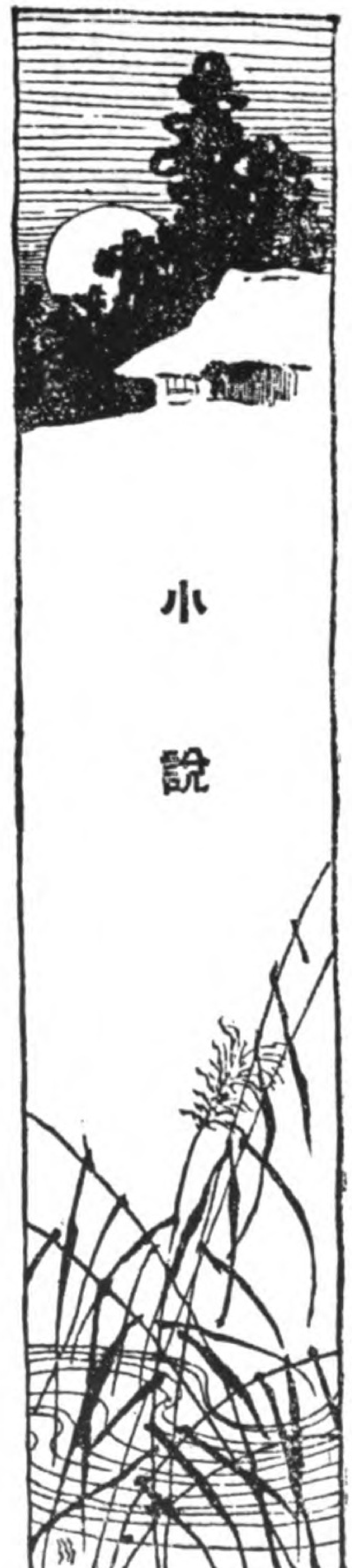
▲播州迷鹿女へ――小學卒業だけの學力も中學卒業だけの學力も大學卒業の學力も或意味に於ては同等なり小學卒業だけでも世に立つて社會の爲に貢献し又家をも富ます人ならば大學者たるの價値あり大學卒業したりとて人の後に尾いて碌々日を送れる人世には澤山あ

り、石龍子の知れる文學士で一人は何の爲すこともなく我兒の襁褓を洗つて妻君の御機嫌取てるし、今一人は市内の本屋を廻つて新聞の廣告を勸誘するを業とし僅に十八圓の月俸を頂戴せるもあり、此等は高等教育を受けながら無學者と稱して可なり。貴女此の理由を眞に解するを得ば廿八歳なる會社員に結婚せられよ末必ず大吉なり、若し右理由を解すること能はずんば醫師なる人と結婚せらるべし、中吉なり。銀行員との結婚は大凶と知らるべし。

▲兵庫縣井上かをる女へ――十九歳と二十八歳とは十歳違に非ずして九歳違なり、昔の人は斯る愚な勘定をするけれど、若し之に從へば十九歳と十九歳は一歳違と謂はねばならぬことになる、笑ふべきの至りなり、それは兎もあれ、易道に於ては十歳以上の大差ある夫婦を不可とすれども其の他は年齢を彼此問はず、二十八歳なる人との婚約大吉なり、早々式を擧げられよ。

▲大阪お枝女へ――盆梅時未だ來らざるの卦なり。時未だ來らざるを或は室に入れ或は爐邊に置きたりとて何條美しく咲かんや、御身も亦之と同じき趣あれば只今申込の人を悉く謝絶し、一兩年時を待たれよ、父上の氣にも叶ひ御身の心にも慕はるべき良人を得らるゝこと必せり、急ぎ給ふべからず。

▲銚子天野はつ子へ――母上に忠臣藏の九段太閤記の十段を御讀み遊ばせと申されよ淨瑠璃本とは言ひながら許嫁を重んじたる我國の精華を寫したるものなり。而して貴女と良人とは許嫁どころか綢繆纏綿たること茲に一年然るに良人が肋膜炎後薄弱になられたりとて今更別れよとは日本婦人に非ず、卜筮を以て占はざるも天罰あるべきことは、鏡にかけて見るが如し大凶大凶。



故郷

杉浦翠子

（上）

異郷の地に漂泊の身となつて居たのも、思へば八年の長い月日であつた。

僞善猜疑有らゆる罪に汚がれた都の地に、只一人の身方もなく遊學の途に就てた頃、彼の下宿の四疊半で、如何ばかり故郷の懐しさを思はしめたで有ろう、何事も實利主義な宿のお内儀さんの、冷たい待遇に逢ふ毎に、如何ばかり生みの母の情を思はしめたであろう。

私は學校の卒業證書を得るよりも、懐かしい故國に歸られる事が嬉しいので、漂泊の身の悲しさを忍んで勉強したのであつた。

と岩崎雅夫は、今故郷に歸つて母と同棲するのがこよなく嬉しいのである。

雅夫は三歳の時、父親に死別れた、母は二十五とかで後家となつたので、親類の者どもが年が若いからと云て、頻に再縁を勸めたが、戀しい夫が死でも生寫しの忘れ形見の雅夫を見ると如何にしても、再縁などする氣はなく、よしや女の痩腕なりとも屹度此の子を立派に育てゝ、亡夫の靈を慰めやうと云つてかよはい女の身を以て、有ゆる處世の艱難を甞めた。三千世界を

尋ねても血を分けた者と云へば、一人の母と一人の子であるから、二人の情は世の親子よりもはや更に深いのである、殊に依頼少なく生れた雅夫は萬事に人懐こく、母の涙で育てられたゞけ、男ながらも性格が優しい。

仲秋無月は、今宵後の月にまたなき上天氣となつた、是では桂男と秋姫が囁く戀も圓らかであろう。

家根から出でゝ家根に隠れる、都の月の景色をのみ見て居た雅夫は今しも、黄色み付いた稻田の末に現はれたる淸らかな月を見ると、堪らなく嬉しくて、我が故鄕こそ我國隨一の月の名所である、といひ度い程に思つた。

「お母さん、良い月ぢやありませんか！　僕は鳥渡散歩に行つて來ますよ」

と云ひ乍ら雅夫は、緣を立ち奥の間へと這入る、西向である、この部屋は月の影もさゝず行燈の灯が薄く、母は今佛前に向つて夕の念佛を唱へて居たが、お珠數を持たまゝ振り向いて、

「お前、風を引きだといけないよ」と云つた。高樓ならば、小屏風立てゝ眺めもしよう、後の月は冷々として居る。

「大丈夫ですよ、直ぐ歸つて來ますから」

「それでは一寸御待ちなさい」

と云つて母は立つたが、納戸から綿の厚い羽織を持て來て、

「是とお着更へなさい、此方が暖かだから」

と云つて雅夫の肩に羽織つてやる。

二十五になつても矢張り母親の眼から見れば、いたいけな小兒と見えるのであろう。

牛に踏まれ、馬に蹴れはせぬかと氣遣ふのである。

「風引くといけないね、襟巻でもするか」

「お母さん、大丈夫ですよ、未だ冬ぢやありませんもの」と雅夫はカラ／＼と笑つた。

「それでは成たけ早く歸つてお呉れよ、獨で淋しいからね」と母はいと優しく送り出たが、また奥の間へと引返した。

雅夫は縁の下を覗いて、月の明りで下駄を探ぐつて居ると、何處の野良犬の兒か、縁の下の炭俵の中に三匹ばかり、白いのや斑なのや、可愛いのが尾を振て、親でも來たと思つたのか懐し氣にくう〳〵と闇から月の庭へ。

（中）

雅夫は外へ出て見たが目的もないので、村盡頭の街道へと出た、昔江戸へ上るにはこの街道を眞直に三十里行くのだそうだが、草より出でゝ草に入りける武藏野とは其頃の事、明治の御世はその草原も田や畑に耕されて、今や秋、一眸限りなく稲田が實つて居る。

然はれ世は開けても人家は增しても武藏野の原は依然として猶廣く、片岡に戰ぐ千束の薄、年々に葉は枯れても、その堅い根ざしは千年の昔より長えに朽ず。

嘗ては、業平の中將が萩の花妻にあはれを契りし事や、西行の法師が、月に征衣の露潤ほせし事など、その銀色の穂に千古の歴史を記して、今年も老詩人のやう、丈六尺餘りなるが白い頭を月に嘯ぶいて居る。

晝ならば尾花が果てに富士も見えやうに、夜の靄は秩父甲斐が根のあたりに白布の帯をなして、武甲の山も大山も一刷し薄墨色たゞ茫乎として居る、冴え渡りたる月の光、千里の外までも輝やくが、さしもの平野が隅なく明るい。

嵯峨野ならずとも時は秋なり、この良夜に夫戀ふ曲を調ぶる人もやあると、雅夫は徐ろ虫なく野面をなつかしみて來たものゝ、廣漠の野に人影らしき者は自分の影法師と悄然と立つ案山子ばかり、秋風身にしみて慄ともしたが、知らぬ他國の土ではなし、生れ故郷の山や水、幼馴染も思ひ出でゝは風荒ぶとも寒くはないのである。

『そゝ彼處に見えるのは白駒山だ、自分が十五位の時であつたか、人の制めるのも聞かないでお小夜とたつた二人であの山へ茸狩に行つたところが、獲物澤山に氣が取られて、日の暮るゝも知らず夢中に取て居たが、何だか足元が暗くなつたのに氣が付いて、空を見ると

驚いたわ、もう日は西に沈んで直ぐ其處の道さへ判らなくなつた、困つたのは月のない頃だつたから、夜道は眞暗で何處が何處やら皆目分らない、薄の蔭萩の細道分ても見たが奈何しても街道へ出る事が出來ない、二人の冷たい手を握り合ふて途方に暮れたが、年下のお小夜はくす〳〵泣き出して、雅夫さん私達は狐に化かされたのよ、今に蚯蚓の饂飩を食べさせられるよと云つた、自分も或は狐に化かされたかもしれない、それで恁なに道が判らなくなつたのだらうと思つたから、一生懸命に眉に唾つけて猶も彼の道をガサ〳〵と掻き分けて居ると、遙か向ふの方に提燈の灯が見えた、是はいよ〳〵狐の仕業だなと二人は默つて、どうなる事かと思つてると、灯が漸々と近付いて來て自分の前にまでくると狐どころか、大好きな田作爺であつた、お母さんが心配して皆を方々へ探しに出したのだといふ、それから大急ぎで歸つて來て、さあお母さんお土產よと云つて松茸を出そうとすると、袂の中に一個もない、あちこちと途を迂路ついた時に落して終つたのであらうけれども自分は、奈何しても狐に奪られて終つたのだと信じて疑はない、今でもまだ信じて居る、可笑しなものだ。あゝお小夜は奈何したかな、もう十年も經つのだもの顔さへ判然とは覺えて居ないが、今逢てこんな話をしたら、面白い事だろう」

と雅夫は罪のない幼な時代を思ひ出した。

見れば白駒山は十年の間に大樹悉く伐とられて、殘りし薄が穗先揃えて霞のやう滿山に直立して居る。今でも狐が魅かそうか、理學や化學なんか、生噛おつた頭腦なんか、狐の方で愛想盡かして魅して呉れまい、眉に唾して魔除けとした昔が戀しい。

仰げば皎々の月は高く、神白木の弓張りて虚空に立ちますか、時に紳すみ、氣清みて、百錬の鏡下界を照せば、夜を我物の狐共何れへ隱れ候か、魑魅魍魎も影を潜めて、白氣滿ちたる玲瓏の世にそゝり立つたる銀の尾花、その雄々しき蔭にやさしく添ひたる女郎花の、黃金色なるが、五彩の露の珠身に裝ひたり。

松蟲鈴蟲、地なる學童二十五粒や十三粒や、悉々と

して歌を奏すれば、颯と吹く風にも徐かに聲あり、詩なりけり矣。

長安一片月、萬戸擣衣聲、秋風吹不盡。

と雅夫は吟じた。美聲は靜かなる空氣を襲はして、嫋嫋の餘韻は長く、大野に見えざる波打たせつゝ遙かに傳つて行つたが、遠く小野のあたりにまで流れるやうであつた。見渡せば茫々の稻田を越えて彼方は小野の里、三里もあるが遮ぎる物なければ、家の灯近うも見えて呼べば答へんばかり、更けたる夜にたゞ孤の赤き灯、見守れば雅夫が詩に領いたやう、嬉しや人もまだ起きてるか、聞ゆるは砧の音。

今は昔、在原の業平が東下りの時、武藏野の原にゆきくれて夢にも人に逢はざりけるが、月にまかせてゆくまゝに着きしは小野の里、とある草の戸に灯見ゆるに業平喜びて近づけば、萩の妻戸葺の屋根廂にも似ずいと風流なる住居なりけり如何なる人の住居にやと外より垣間見れば、中には燈幽にて花紅葉の屏風後に引き廻して、夜寒をいとふ小女房の年二



八ばかりなるが母なる人とつゞれさす針の運び、面て白く、眉薫り房やかなる黒髪、實に觸れなば散らん萩の露艶めかしき風情に、見る眼もそゞろ、あはれ我魂も知らず其の袖の中にや入ぬらんと、業平覺えしが、遂にほと〳〵と門訪なひて、一夜の宿を乞ひたるに、母子はいと忠實やかに招じ入れぬ、旅の衣手寒からで、草枕の夢を圓らかに、娘が情に二月の程を過せしが、かくてあるべきならずと心を決して、霜月といふに業平の君は名殘惜しき袂を涙ながらに振り給へば、娘はいとゞ悲しがり、露を命となく蟲の儚き玉の緒に忍ひくらべて、消えぬ可くも泣き崩をれしが情の言の葉に慰められて、さらばまたの逢瀨を待ちまする、また來ん秋に蟲の音聞き給はゞ、小野の里孫が宿に夫まつ蟲の哀を思ひ出でませ、とぞ云ひて別れぬる。

女は松蟲と申すなりけり。

その翌年もまたくる秋も音づれますや來ますやと、荻の葉音にも耳傾け、雁のなく音にも思を遣りて、君に參らせんの心づくし衣を擣ちて夜もすがら、夫まつ蟲の音も哀れ、暮れゆく秋の歎しき空に枯れゆきしとかや。

ゆかしや所も同じ小野の里、またも聞ゆる砧の音、如何なる人の手すさびぞ、今でも松蟲のやうな女があゝして衣を擣てるのであろうかと、若き人は胸を抱いた。

業平ならずとも己も男よ、露を含める花の顏垣間見んとて雅夫は小野の方、夢のやうな道を辿つてゆく。

此時。

* * * * * * *

可愛や〳〵三郎や、鯉が欲しけりやな………、

歌ふでもなく譫のやうな言を云ひながら畔よりすつと現はれたのは、六十ばかりの老母、髮は茫々と亂れて枯野に荒ぶ小草のやう、纏ひたるもむさくるしき衣の色、皺の顏に波よせてカラカラと破顏一笑する異形の人が雅夫と擦れ合ふと、冷やりと一瞥したが何の意識も認めないやう、ずん〳〵と行き過ぎる、雅夫も始めは驚いたが狂女だなと合點したので恐れもしな

い、反つて何となく哀を感じた、奈何して狂したのであらう……あの老の身を以て可愛相に……峻しい人生の行路を辛くも辿つた最後は狂女で終るのか、……と木立にかくれてゆく後姿をつく〴〵見送つたが、またもしきる砧の音に心惹かれて耳を澄せば、泣くが如く戀るが如く詫ぶるが如き悵恨の音、徐ろにこの廣野に響き渡れば、月も顔を曇らせ、案山子も頭を垂るゝか、遊子の胸轉た憂愁の涙に咽ぶ、想胸に迫つて雅夫は、

總是玉關情、何日
平胡虜、良人罷遠征。

と吟ずれば、胸の響にあやしくも聲慄へて、切々の情に自ら聲の細りゆくを覺ゆ。



月下に細き遣水の、滾々として涙をたゝへて末枯れの岸を遥かにし。

如何にも人を待てる樣な砧の音、慰さめても遣り度くなつて、雅夫は芒が招く道へと急いだ、夜の更くるまに〳〵、あたりの露次第〳〵に濃くなつて、しつとりと下りた草の露、道傍に棄てた草鞋にも、降り懸りたる一升の露、見るからに重そうである。

田は盡きてこゝよりは薄原の一筋道、雅夫

は薄と肩競べして通りゆくと、月華十里、並みたる尾花の隅動くと見れば、ガサ〳〵と衣摺れの音して物影より出でたるは若き女、彼方も人ありしと氣付かざれば、驚いたやう、互に見會したが星の眸、行きずりのたゞ一目に雅夫は妙に懷しくもその女を思つて、何とか聲を掛けて見ようかと躊躇て居る間に、

「あの鳥渡伺ひますが、今此邊を年とつた老婆が通りは致しませんでしたらうか?!」

と女の方から進み寄つた。

二十越えてるだらうか、身には手織らしき縞の袢纏を着て居る、氣高き菊花の色香はなくとも露を含める野菊の薄紫、何となく優しい面もちであつた。

「ゑ、もう少し先刻通りましたよ、何だか妙な人が……」云ひ過ぎたと思つて雅夫はきまり惡そう。

「そや、左様で御座いますか! こゝそですねそれはまあ有り難う御座います」

と女は挨拶もそこ〳〵、急ぐやうにゆくのであつた。見返へれば黑髮が白い薄の穗とすれ〳〵に路を過る。

母かしら、娘かしら、奈何して氣狂になつたのだらう、二人の間にはどんな涙の歷史を持てるのであらう、そして彼の女は夫があるのかしら、何だか失戀の人のやうに自分は感じた。

と雅夫は斯る事を思つてたが、如何にも女の事が氣に懸るので跡を追ふて見ようかと思つた位。

相生橋まで來ると空想の人は佇ずんだ。

脚下に流るゝ利根川の支流、水白く、うねりゆく白蛇の流、月に輝きてキラ〳〵と波立つ黄金の細鱗、今にも龍女の浮びますかと雅夫は、暫時秋水の瞬を凝らして居たが、偶と思ひ出されし砧の音、今も猶有りや無きやと首を傾け耳澄したが、いとせめて聞くものゝ耳にも今はもう、何のその、只一擣の音さへもないのである。夜は更けたり、小野のあたり、懷しかりし灯の赤きも、砧の音と諸共に、薄絹の帷の裡に封ぜられて了はんぬ。

こはいかに、砧の主は寐たのであらうか。今の女彼の女が今まで衣を擣てたのではなかろうか、……をゝ

そういへば細き眼元や、打けぶる柳の眉のさまが何となく雛のやうな面容で、藤原式の女の俤があつたやうだ。

何處まで狂女の後を追ふのであろうか。

と暫く、思ふ事半時ばかりして後、思ひもかけぬ件の女がまた引返したが、橋の傍に茫乎と立て居る雅夫を見ると悦ばし氣に、

『あなた、未だ此處に御出で御座いますの、先刻は有り難う御座いました』

と馴々しく云れて莞爾とする。

その懐し氣なる擧動、月にあからさまなる顏をよく



見れば、何だか見覺えがあるやうで、此世始めて會ふ赤の他人のやうには思はれなかつた。

『いや、奈何です御判りでしたか』

と雅夫は女の顏を覗く。

『否、居りませんでした、何しろあんな風ですから、飛び出したら、もう何處へ行くか分りは致しません』

と女は濕やかな聲、撫肩細面の色白く、見るからな纖細な姿、見るからに薄倖の樣は惹付けるやうな哀みをもつて居る。

雅夫は何だか事情が探り度くて堪らない。

『失禮ですが、彼は貴女の御母さんですか』

と卒直に聞いた。
『はあ、母で御座いますが眞實のでは御座いません、私の十五の時後添ひに參りましたので御座います』
と云つたが俄に伏目になつて。『矢張黒谷かしら……』
と娘は獨言のやうに云つたが、あゝと深い太息を洩して俯向くと、根の抜けた銀杏返がガクリと前の方へのめるやうな心地がした。
『是から貴郎樣は何方へ御越しで御座ますの?!』と女は更めて問ふ。
『僕ですか? そうですね、小野はまだ餘程遠う御座いますか?!』
もとより目的もない、ぶら／＼散歩を行手問はれて當惑したが、つひ口からこんな言が出た。
『小野ですか、私の方ですがまだ一里半も御座いませうかね、御出になりますの?!』
小野はこの女の郷とよ、されば雅夫が空想は現實であつたか、砧の人は正しくこの女よと雅夫はひとり定めて、一層の懷しさ、貴女砧を擣ては居ませんでしたか、と聞き度かつたが、あまり突飛な問よと思ひ止まつた。
『そんなに遠いなら、止めます、吉見の方へ歸りませう』
『をや吉見の方へ御出になりますの、それでは恐入りますが其處まで御一緒に行て頂ませうもう少し探して見ませうと存じましたが、女の獨り路何だか淋しくて堪りませんので引返しましたが、少の間でも御連があれば心丈夫で御座います』
と女は嬉し氣であつた。
一河の流を汲むも他生の縁、是も何かの因縁だろうと雅夫は、この女を擁護す可く命せられた樣に思つて快よく肩を並べて路を辿る。
『一體奈何して、お母さんは氣狂になつたのです?』
と雅夫は遠慮もなく聞いて見る。
『まあ聞いて下さいまし、あなた……』
と云つて女はもう鼻をすゝる。
『私には、繼母で御座いますが、弟の三郎と申は眞實

の子で、私と反對に可愛がつて居りましたが、昨年黒谷の奥の池へ鯉を捕りに參りましたが、主が住でるといふあの御池へ落ちて亡くなりましたが、それから氣が變になつたので御座います、父親はもう疾に死別れて一人の母があれで御座います、御察し下さい』と女は聲が曇つた。

『氣狂になりましてから何も彼も頓珍漢で御座いますのに、三郎が死だ日お十三夜ばかりはよく覺えて居りまして、今日も朝から泣いたり



笑つたりして居りましたが、つひ私が夜業をして居ります間に姿が見えなくなつたのです屹度三郎の事を思ひ出して、黒谷へ行つたのだらうと存ますの』

聞くものも同情の涙を禁じ得ない、況してこの美しく、優しき手弱女の涙の言の葉をや。

『それではこれから黒谷へ行くのですか？』と雅夫は氣づかはしさう。

この邊で黒谷といへば誰知らぬ者なき魔所である、昔は舊藩の所刑場であつたとか、今でも亡魂幽靈が現

はれるとか、豆狸といふ性惡の古狸が住で居るとか、種々な妖怪の噂がある、晝でも氣味が惡い程樹木が鬱蒼として居て日影も洩らさない陰欝の中に、恰も古鏡のやう暗碧を湛えた古池がある、三郎が死だといふのはそこであらう、此頃では火葬場の設けられて、白骨の煙濛々として、肉燒く臭ひ、腥きが、鼻を打つのである。

『奈何も棄てゝも置けませんから、行て見ようかと存じますの』

『其にあなた此頃では、人通りのないのを幸にあの邊で惡漢等が月の晩なんか芒の蔭で博奕を打つのだそうですが、負けた者などは腹立ち紛ぎれに追剝したり、女を辱めたりして惡い惡戯ばかりするので、先日も私の村で女がやられましたので御座いますよ、私なんか殺されたつて飜弄になどされません覺悟ですが、それでも何だか氣味が惡う御座います』

と云つて女は夜寒の襟を震はした、光澤の拔けた黒繻子の襟に目立つて、頸元が白い。

隈なき月に輝きて、自然が描ける秋の色、その畫面が動くと見れば、花野の末に一掉の雁が音低う渡りて、二人の袖もしつとりとした。

世は青いと一度思つては、何物も皆その色に化せられて見える雅夫が性質であるけれども、實に今夜のも神經の迷かしらんが、然りとも不思議、見れば見る程この女が何處かで見た事のあるやうな、例ひ此世でなくとも、過去の世にでも逢た事があるやうで、其の神秘の餘りに不思議なのに呆れながら、雅夫は奈何かして思ひ出しても見ようと思つて、記憶の胸を叩いたが遂に要領を得なかつた、あはれ懐し氣なる女かな、路傍我にも何の隔てなく親しみ語る此言の葉、戯れますなよ戀の御神よ運命の御神よ、この女と若き己とはそも如何にかなし給ふぞと、月の道、高いのと低いのと二つの影が添ふて行くのを見れば、雅夫が胸は穩かならず、單に精神の迷ひ馬鹿らしいとは思はれなかつた。

女は矢張り俯伏いたまゝ最とゞ愁に沈んでたが。

『子を思ふ親の心ほど深いものは御座いませんね、矢張り生みの親でなければ駄目ですわ』
と突然云つたが、ハラ〳〵と落涙した。風一陣、花芙蓉の露を振ふや物狂るはしの様であつた。

實に親を思ふ心に増さる親心とよ、我が母上は我が爲に、紅白粉を捨て給ひ、有髪の僧切髪姿で今日まで老いさせ給ひしものをと、雅夫は女の言に、急に恩愛の情を呼び起した。

身には母がなさけの布子を着たり。

『本當に親程い〻者はありません、そ〻僕もお母さんが待てるのだつけ』

半獨言に言つたが、俄に懐手を出して帯のあたりを掻い探ぐり、取り出したは月に冷やかな銀時計、パチンと蓋を明けて見ると十二時に垂んとして居る、これはとばかり雅夫は驚いた。

早く歸つて來て呉れと宣給ひし言葉、嗚呼母上如何にか待ち給ふと、夢の人は夢より醒めた。

『大分遅くなりました、僕はこ〻から吉見の方へ歸ります何卒貴女も氣をつけてお出なさい』

馬頭觀世音と彫りつけた墓石と並んで石地藏の立ち在すところ、右の街道へ出れば吉見の方、左の細道行けば黒谷の方、その道境に立ち止まつて雅夫は鳥打帽を取らうとする。

『そや、こ〻で御別れですか！　それでは……』
と女はいと〻名殘惜しそう、哀深い眼を雅夫に向けた、垣を離れし朝顔の依賴なさ相、月に立つ影悄乎として、此儘夜の露に吸ひ込まれて終ひはせぬかと思はれる、其の姿を見ると雅夫も流石に哀と思つたが、親は一人の母なるものをと思つて氣强うも別れやうとする。

『それでは氣をつけてお出なさい』

また繰り返した。

『有り難う御座います』と滅入るやうな女の聲が、雅夫の頭には妙に泌むやうだつたが、是が是がこの女との最後かと云ふ情無い感じが、電光のやうに腦に閃めいた。

かくて男は月にむかひ、女は月を負ふてゆく、並だ二つの影が西と東に別れ〳〵。
虫がなく、松虫がなく。

（下）

翌日、雅夫は眼が醒めて、寢床を離れると朝寒の嚔一つ、そゝ寒むと云つて羽織り引掛け、障子を明けるともう縁には、秋の薄日が一パイにさして、小猫が心地よさそうに眠て居る。

　野の末に紫水晶の塊とも見える朝富士に對て、雅夫は、ふと深呼吸をすると、低う降りて居た霧が漸漸に晴れて、綠の葉に白い花が入り亂れて、霜降りのやうな蕎麥畑が、恰も小紋模樣のやうに浮き出て來る、布だつたら、小袖に欲しいやうな其を雅夫は茫乎と眺めて昨夜の事を忘れて終つたやうであつた處へ。

「そや、お起きかい！　昨夜あんなに遲くつて何ともないかね」

と母は氣遣ふのであつた。

「否、別に何ともありません、隨分寐坊しましたな」

と雅夫は瞼を擦り眩ゆ相な眼つきをする。

「雅さん！　もうお前は忘れたらうね、そら新家へ一寸計り養蠶の手傳ひに來て居たお小夜と云ふ娘を、今ぢやもう娘ではないけれど」

と母は仔細あるらしく尋ねる。

　雅夫は一寸首を傾けたが、

「覺えて居ります、覺えて居ります、色の白い娘でしたらう……」と雅夫は思ひ出すまでもなかつた。

　然しお母さん、家に居たのではありませんから眼がどんなで鼻が奈何なだといふ事までは判然覺えて居りませんが、僕とよく遊だ事は知つてます、だけどもう今じや逢てもお互に判りますまいな、何しろもう十年も經つのですもの」

「お前それが、大變なんだよ、昨夜殺されたんだよ」

と母は口早に云つて安からぬ色。

「奈何して殺されたんです」と雅夫も意外な聲を高うした。

「奈何してつてね、死人に口無で分りはしないが、何しろ器量よしだから何かの遺恨ぢやないかと人は云ふのだけれども、お醫師などが云ふには奈何も汚がされた跡があるつてね、また惡漢どもの仕業ぢやないかつて、云ふのだがね、何しろ場所が場所なんだからね」

「へー、何處で殺されたんです?!　何時頃でしたろうね」と雅夫も胸騒ぎがする。

「黒谷の森の中だつたそうだよ、そうだね何時時分だつたろうかね」と母も時刻までは言ひ兼ねた。

「奈何な着物を着て居たでせう?!　今ぢや何歳位になつてるでせうかね」

と雅夫は迫き込みながら聞く。

「何でも縞の袢纏だつたそうだよ、年かい二十二三にもなるかね、恰度今年のお正月には年始に來てね、雅夫様はいつ御歸りになるかつて聞いてたよ、それでも可愛いではないか、いつも來る度びにお前の事を尋ねて呉れるよ」と母はもう涙ぐんで居る。

「二十二三の縞の袢纏」と雅夫は深く考へたが、痩せて居る女ではありませんか!」

と心當でもあるやうに聞く。

「あゝ、彼の子も苦勞するので此頃は滅切り痩たよ、だつてお前、獨であの氣狂のお母の世話をするのだもの」

「ゑ!　氣狂のお母……」

と雅夫は一秒も置かず、鸚鵡返しに言たが見る〳〵唇が、戰慄いて、豊かな頬の色が變つてゆく。母は足早に臺所の方へと行きながら、雅さんお小夜の事ではまだ色々と話があるのだが、後で緩り話そう、まあ御飯にしようぢやないか」

と母は云つたが、雅夫は答へもしなかつた。

見覺えがあるやうだつた昨夜の女、懐し氣な姿、殺されても翫弄などにされませんと云つた言葉を思ひ合せてぶる〳〵と身を慄はした。

矢張りお小夜だつたか、昨夜の女、あゝ自分さへ黒谷まで送つて遣たなら、男が隨いて居るのだものそんな悲慘な目には合さなかつたものを、無情の自分は、

死地に進みゆく人を手を束ねて傍觀して居たのであつた、をゝ怖ろしいと我ながら、己の行爲に戰いたが、潸然と涙を落して何とは知らず、小夜ちやん許て呉れといふ言葉が嗚咽と供に咽び出た。

御母に賜ひし我れ男子、二十五年の今日まで何一つの瑕瑾もなかれと、手まれし清らの胸を爰に始めて罪てふ刄に傷つけられし思ひして、雅夫は母様にも許しませとばかり泣いた。

永劫に憧がれし我故郷。

菫さく春の朝にはやさしき少女あり、悲しき秋の夜には慈愛の御母居まして、慰樂盡きざる故郷の史の巻物一度開展げなば砂漠に立つ身もオハシスに渇を癒やせし想なりしを、あはれ憂たてや、爰に一頁をくろ〴〵と汚し了さんぬ。

血汐に染めし紅葉の秋や、緑若かりし春もありしを、思出多き、御母が物語りかな。

（終）

我が身

秀子



一

『貞さん、鳥渡きてご覧いゝ物みせるから、』と母様のお聲に、活けかけし花は其儘急ぎ入れば、お居間の中は所狹く反物や小切類をとりひろげ、『これね此秋に着ようと思つて、……いゝ柄だろう、』といつになきご機嫌のよさ。見れば地は香色、霰の地紋に白の雨絣の妾が着てもよき程なるを、嬉しさうに微笑み給ふ。

『まア好い柄ですこと、袷にでも遊ばすの？、』と問へば『あゝ、あの小紋のが何だか古くさくなつたからね、重ねにでもしようと思つて、』と飽かぬ風情にお目細うして眺め給ふ。黒髪艶々と丸髷にし給ふて、意氣な浴

衣にひつかけ帶のいとゞお美しければ三十八とはみえ給はず、わが姉ともよばゞよばるべきお姿して、裙廻しの色は何よからむこの友禪は襦袢の袖に相應しなんど、春に浮かるゝ若き人のようなり。

父上の一周忌は廿日程前に過ぎし許なるを、去年のお悲歎はやなくなりて、着物に帶に新調の數增えしのみか、母樣の從兄とかよばるゝ人この春の頃より繁々出入して、果は泊りて三日五日歸らぬ事あり、亡父上のお書齋に入りては自由に書棚など開くさへあるに、時には母樣と弟連れて物見遊山に出かくる事等あり、近所の所思下女の陰口そしらぬふりに人を人とも思はぬ樣子の、此頃法事の手傳ひするとて來りし儘に歸りもせず、萬事に主ぶる憎らしさ見たくもなき人ぞかし。

二

父君亡くならせ給ひてより、家の財政總て母樣處理し給ふが、此頃例の從兄なる人遂に入浸りになりて、長火鉢の――曾て父上の坐り給へりし處にその肥えたる體を据えて母樣と差向ひの、食事に着類に日毎奢りの目にしるくなりまされば、奥樣には二度目の旦那樣出來たりなど、はしたなき者の陰口も强ちに無理ならず、佛壇に燈明もたえがちなれば心憂さはいふべくもあらず、去り乍ら繼しけれども親のおん上、わが身の德さへ未しと思はるゝ身の、何として意見がましき事いはるべき、唯よそにみぬふりの辛き涙のみぞやるせなき。

殘る暑さもいつか薄らぎて、朝夕の風も淸うなりまされど心は澄まず、せめて懷しの從妹でも訪はゞやと、是はその人の姑君への心許に鹽瀨の甘味を一折包むで訪へば、いつも美しき春樣のいそいそ迎へくるゝも嬉しく、お姑樣は?とゝへば、お寺參にいらしたれば誰も不在なりといふ。糸屑一ッなき六疊に針箱すゑて、縫ひさしの袖無も誰爲と心にくう問へば微笑て、『姑樣に寒くなつたら上ようと思つて、』と片寄せ乍ら『ま、けふはよく來て下すつてね、』など嬉しさうに待遇さるゝも眞ぞ嬉しく、『眞個は此方は羨ましいわ、お母

樣も好い方で貴女幸福ね、私なんぞ詰らなくて』と云へば、『妾はまァお母樣が優しくして下さるから如何にいいかしれないの、貴女だつて今にお嫁にいらつしやれば』と、妾を見て『千早樣はどうなすつて？』と、首を斜に莞爾笑む。千早、千早、千早！　つらき名よ、羞しき名よ、されど其君も如何にしけむ久しくみえ給はねば、そゞろ心にかゝれる此頃なり。『どうしたんですか、もう久濶會はないの、……此頃はね唯部屋に入たきりですよ、一周忌が過ぎてからけふ始めて出た位ですわ、せめてね叔母樣でもいらして下すつたらと思ふのですけど、あゝして遠方へ行つておしまひなさるし眞個に便ないの、身寄と云つたら貴女許よ。』『さうねえ、母からも音信のある度貴女の事の書いてない時ありませんよ、案じてゐるんでしよう、それにねお貞樣、萬一すると妾も貴女にお別れしなけりやなるまいかと思ふの』『えまあどうして』と驚けば、『この秋はね、良人が大阪詰になるだろうといふの、妾もなるべくなら東京に居たいと思ひますけど、……』と物案じ顔に唇かみつゝ、あらぬ方に眼をやる春樣。

これのみを寄る蔭と心密に頼みしものを、西に東に別れはてなば寄邊なき身を何とすべき、いとゞ穩かならぬ胸に悲しき思ひの深くして、とみに打沈む妾をいとしとや、かにかくに優しう慰めくるゝを、慰められてもきえぬ愁ひは唯ちゞにうち亂れて。

三

晩迄遊んでいつてとお姑樣迄とめては下されど、遲くなりなば何とかやいはれむと強いて辭して、進まぬ足をひきずり乍ら歸る道に、夕日傾き風淋しく、往來の人も何となく急ぎがちなり。

我は急げど待つ人もあらじをと、是にも心の結ばれつゝ坂を降れば、士官學校に喇叭の音冱えて、白雲流るゝ夕空はかき曇りたり。

彼方より勢込むで走り來りし一輛の腕車を、何心なうふとみやりて胸は忽ち騷ぎそめぬ。それかあらぬかとうちまどふ瞬間、俥は疾風の如く過ぬ。君なりし、

げによ、寒きわが影に目はとめ給はざりしが紛れもあらず千早樣なりし。立止りて見返りしが早影もなかりき。

足は地を踏めど心は空なり、往來ふ人も目には入らず、怪しき胸のときめきを抑へつゝ漸う歸れば、早もう燈火つきて、茶の間に母樣の艶なるみ姿、主ぶりたる彼の人の憎らしさよ。

『遲くなりまして』と挨拶すれば『ふん』と許りお顏背け給ふ。彼の人は唯氣味惡き笑みを含みて。そこに居たる弟に、土産の菓子包を與へて立たむとすれば、『貞さんッ』と疳高なお聲。何事と恐々伺へば、『先刻ね千早樣が來て、』はつと胸うたれつ。『種々話があつたがね、今度會社をやめて、…



…えゝ何とか云つたつけ……あ、遠洋漁業か、それに行くんだとさそれで、行けばもう鳥渡は歸らない、歸らない處ぢやない、波の上の事だから何時何處で骨をさらすか分らない、就てはお前との緣談だね、お父樣のお話は重々有難いけれども、かういふ譯で生きて還るか骨になるか分らない體だから、……お貞樣も段々年が更けるし、的もない自分の爲に嫁入期を過さしては濟まんから、とまアかういふ話なんだよ』と、長烟管とり上げて悠々とふき給ふ、餘りの事にいふべき言も知らず、胸は千引の岩もて壓へられたらんようなるに、せぐりくる悲しさの眼も朧なり。

「人を馬鹿にしてるぢやないか、一年も默つて釣つてをいてさ、今になつてあんな事をいふ、釣られた此方こそいゝ面の皮だ」と、びつくりする程烟管叩きつけ給へば、弟も驚きてとび起き樣、妾と母樣を七分三分に見比ぶる。

「いつお立ちでしよう。」われならぬ聲の耻かしさよ。

「いつ行くとも云はないよ」と、冷かに仰せられて、偖わざとの聲高く『松何してるんだねさつさとお膳でも出さないか。』

立上らむ力もなくまじまじとそこに坐れば、母樣そしらぬ樣にて烟草のみめし上らる。彼の人やがて『お貞さん若い男なんてものは氣が知れないからね、貴女も外に緣付いた方が宜しいよ、貴女位の容姿なら玉の輿には乘り次第といふものさはゝゝゝ。』きく耳持たずと胸に應へて、つと立は上りしが。

四

暮れ果し空に雲のゆきゝ早く、池のほとりの亂れ白萩さや〱と風にゆらぎて、露に啣く蟲の聲いとゞしく身にしみぬ。食もほしからねば唯茫然と坐りこみつ。

思へば去年の初秋なりき。蟲の音もかゝる夜の、風涼しき座敷の緣に、父上妾を召し給ひて、我も此頃何となく心地惱ましく、其方の上も心に掛るが、幸ひ社の千早は將來に望ある者なり、それとなく汝の事も隱見かし置つれば、輙て日を撰み表立て談せむいかにとの仰せ、ひしと胸射られて身は熱く、月の光も映ゆくて、唯宜しき樣にとのみ俯向けば、偖は嫌ではなかりしよと呵々と笑はせ給ひぬ。年來のご苦勞にや、お髮も白うなり增りて何處ともなきお窶れの、そゞろ悲しう、且は深きみ慈愛の程骨肉に透りて、唯不覺の涙に咽びたりし。

こえて五日目、けう千早に改めて談し置きぬ、やゝて何とか返答あらむ、彼も嫌ではなき樣なりと、宵はしげに微笑み給ひけるが、……思ひもかけざりし、ああその翌朝ぞ空しくならせ給ひける。涙もいでず、我か人かも辨へず、醫者の腦溢血との診斷きゝて、始め

て我に返りては狂はしう、おん亡骸にとりすがりて恨みつくどきつ、などあの時わが身も共に死なざりけむ。葬儀萬端殘る隈なく、整のへ給はりしも大概千早樣の蔭なりき。夕風寒き新墓に泣き沈みし妾を、優しう慰めて給はりしもその君なりけり。

それよりぞわが胸に、嬉しきもの〻力覺えて、耻かしや、涙の中に獨笑みせし事もありける。

夢の如なる一年の此秋、偖もかうならむ運命なりしか、恐ましきわが身哉。さり乍ら、一度いで〻は生還を期せずとや、さ程の覺悟きのふけふにもあらざるべきに、この月日などて一言も妾に洩し給はざりしぞ、捨てられて徒に頷く妾と思すか、餘りかひなき君の心ぞと、限りなき悔しさの苦しき許身を焦して、溢る〻涙の眼をとづれば、生憎や夕見し車上の俤のちらつきて去りもやらず、空しくよそに過しけふの恨みの染染と覺えて、果は父戀し亡母も懷し、生きておはさばおはさばと、熱き涙は冷き頰を傳ひぬ。一聲なきしは雁かあらぬか、風颯々と梢に鳴りて、はらはらと軒に音するは雨なるらし。

五

さらぬだに人の蔭口、眉ひそめらる〻事のみなるに、お誂への二枚袷美事に仕立上りしより、母樣のご機嫌斜ならず、例のと弟と三人連にて、一日は芝居に、一日は秋草見になど心も空に浮かれありき給ふほど、穗に出て招く尾花に秋は闌けて、その袷さへ來む春迄を簞笥の底に納めらるれば、菊見の衣裳も流行に古りぬと、母樣又も白木にと赴き給ふ。餘りの事と思へど如何にすべき、肩臂張りて諫めむ親類もなければ、日毎衣類の品評の暇には小說落語の賤しき書を離し給はず、况して弟の、小父樣とよぶ例の從兄の擧動いふべくあらず、父上の書齋を己が部屋にし、なす事もなく奢侈にのみ日を送るに、限りあるわが家の遺產のいつ迄かはと心苦しう、我身一の憂ひの上に、そへて佗しき數重なれば、菊も紅葉も樂しからず、いと〻の顏色靑ざめゆくに、早や妾も廿歲を二つこしたり、年は空

しく更けゆきて愁ひは日毎に深くなるのみ。波を友なる旅にいで給ひしや否や、君よりはそよとだに消息なければ、曲りしわが心には、薄情き君の心とさへいとゞ恨めしく。

秋風わぶる世を春にして、浮々と暮し給へる母様、ある夕小父様と何やら口論し給ひしが、その人の怒りて物投うちなどして、足音荒かに出行きしより其夜歸らず、妾始め罪なき弟下婢迄、母様のご不興うけて散散に當りちらされつ、下女の臺所に赤き舌はくをふと見ては、坐に苦々しく且は腹立しう。

道ならぬ快樂は長う續かぬものぞかし。小父様歸りてよりも母様のご機嫌悪く、是より折にふれ物につけ、疳高なお聲に續きて、小父の負けず遣り返すさへ隣に迄も響く様なり。

さる程に、團子坂の菊見にと樂しみ給ひし紋羽二重のお羽織出來上り來りしを、衿先が氣に入らずとて仕立屋呼付て散々のお叱言聞かねて、差出がましと知りつゝ宥めまつりし妾は、お前の知つた事でないとのるまじき大聲うけて退きたりしが、是より妾を目の敵にし給ひて、朝夕の食事にすら物も仰せ給はず、小父との口論日に絶えず、陽々たりし茶の室に漸く黒雲の覆ひかゝれば、如何になりゆくらむと心許なさいふ許なし。

六

朽葉にそゝぐ雨の音淋しく、秋も今はの名殘心細きとある日なり、小父は昨日より出て歸らず母様朝より例の貸本に耽り居給ひしが、午後ふと何か物探し給ふ様にて、文庫は更なり簞笥の中手函等、ガタリピシヤりと開閉し給へりしが、やがて妾に銀行の通帳と印形を知らぬかと仰せらる。「見た事も厶いません」と申上ぐれば、どこへ藏つたろう確に文庫へ入れて置いたのにと、落着かぬご容子して其處此處かき探し給ふ處に郵便！と聲す、松は井戸端にや出る氣色なきに、走りて玄關に受取りて見れば、昨日出し儘の人よりの葉書なり、此度商業の目的にて滿洲方面に渡る故、旅費其他の用として銀行の預金暫時借用致したり、何れ數

倍にして返し申さん新橋停車場にてとあり、仰天して『母様々々。』けたゝましう呼びかけつゝみせ參らすれば、讀み終りて呀と許りみるみるお顏蒼褪めて戰々と慄ひ給ひぬ。人をッ……貞さん何うしやう。お目も据はらずおろおろし給ひて、堂と坐り給ひつ、そのお顏の凄さ見上られず人非人よ恩知らずよ薄情者よ盗人よと我を忘れて罵り給ひし果は、欺されし口惜しと、齒嚙寸裂にし給ひて物狂はしう泣き給ふ。流石に何と慰めむ言葉もなく共に悔しく思ひしが、されど心の底には、勿體なけれどそれみ給はぬかとの……小さき囁きありき。



跡追ひかけむか訴へむかなど、母様恰ど啻ならぬご様子なれど、それも詮なき事なればと兎に角に慰め參らすれば、斯る時は流石に我子賴もしと思しけむ、母様少し落付きて、唯何事も年甲斐なき此母が罪ぞかし、父上にも其方にも合すべき面もなきをなど、悔の涙の果は又、わが一旦の奢より衣食に費ひし金高も莫大なるに、今千圓近き預金は悉く持ちゆかれて此末何とせむ、坐して食へば寶も空しきそと、始めてさめし人の如にいとゞしく悔しがりかきくどき給ふ。此後は妾かひなき者なれど如何にともし侍らむ、み心安うておはせなど慰めまつるも涙なり。實に昨日の

夢は追へ共歸らず、時々刻々に移りゆく身の運命こそ奇しけれ。

いつか雨やみて晩秋の空に日影斜ならむとする頃、勢よく俥走らして訪づれ來しは從妹なり。苦勞なき面華やかに、縞お召の二枚重ね、姿美しう『けふは愈々お暇乞にきましたのよ』と、聞ては胸に釘さす思ひ、吁妾許り何處迄つらきや。

七

人の聲、人の足音、機關車の響亂れあひ混みあふ中を、待合室に入りて吻としつ。未時早きにやそれらしき影はみえず。彼方の隅に四五の若き人達のうちよりて談笑したりけるが、その中よりつとぬけ出て、急しう妾に寄りし人あり。

『貞子樣。』覺えある聲やとみれば、……こは夢ならぬか、絶えて久しき千早樣！

心も顔も妹と逆上せて、何仰せらるゝやら妾何をいふやら覺えず。

『先達上りまして委細はお母樣に申上て置きましたが……』と仰せらるゝに、漸う我に返りつ、『は、其節は留守で失禮致しました。』ゆく雲の淋しき夕を、よそ乍ら君の影み送りし我と思さずや。

『疾うに出發する積でしたが、少し體を害ひましてな、……今日一先歸國して兄にも逢ひ、兩親の墓參もしたいと思ひまして、お暇乞に上る筈でしたが、つひ……』ようも仰せらるゝよと、悔しさは瞬間に込み上げ來りぬ。『此場合に申上る必要もないですが、實は私多年の希望を斷行するに就て、昨年來非常に迷ふたのですが。』

騷がしき物音に耳も遠くなる樣なり、君のゝ給ふ『會社に入りましてから貴女のお父樣にも種々御厚情を戴いて、而もご依賴を果しもせず定めてご不快にお思ひでしよう、昨日は鳥渡御墓へ參りまして、お詫やら何やら私の意志は一通り申上て來ましたのです、』と、聞てはとみに悲しくなりて涙わきけり。人は集ひ來りて我等みる目もいと多くなりぬ。

「どうか千萬自重なすつて下さい、私も無事にして望みを遂げた曉には、必らずお父樣のご厚情に報います決心ですから、……又陰乍ら、貴女のご幸福を祈ります。」

堪へず涙のほとばしりて、云はむとするに聲出ず、身内わなゝき足ふるへて、氣も心も遠くなりなむとす。

汽笛けたゝましく響き渡る折柄ドヤドヤと人音して美しき從妹、夫の君姑君もご一緒に入り來給ふ。

かきむしらるゝやうな愁さを包みて夢心地にプラットホームへ出づ。

從妹の一行と千早樣とは同じ列車なり。

「大變顏色が惡いわ、お貞樣大切にして頂戴よ、又直に歸りますから、何もね心配しないで、え？有難う、あゝもう出るわ危くつてよ……。」車窓より半身出して涙ぐみつゝいふ從妹。覺悟せし別れなれど今更に悲しく愁く、生憎や涙のとまらぬ程汽笛はなり渡りぬ、車は揺ぎ出むとす。

「やアご機嫌よう。」「お母樣に宜しく」と、夫の君姑君口々にの給ふ。友の君達と別離の言葉交しゐ給ひし千早樣、この時つと此方向いて會釋し給ふ。涼しきお目と濃きお口髭のみ目に入りて他は分かず、無量の思ひは胸に餘れど、僅に見交す顏とよび交す聲とはやゝに離れて遠ざかりて。

* * * * * * *

父上亡くならせ給ひてより、一人に減らしゝ下婢さへに暇を遣りつ、住なれし家を去りて、昔戀しき紫の袴姿に、朝夕小學校の門くゞる身と妾はなりぬ。何を望み何を夢みて過す星霜ぞ、唯嬉しきは母子三人が昨日に變りし團欒のみ。

* * * * * * *

木枯も春風にうつりゆくけふ此頃、舷に碎くる波の音に夢寒からむ船の人よ、通ふ面影のありやなしや。

第二等

才媛腕競 懸賞募集（締切十二月二十日）

▲和歌（一人一首）

▲短文（百二十字以內）

▲謎（一人一解）

▲一口噺（一人一題）

▲諸國珍料理（百字以內、成可珍奇なるを採る）

▲家庭日記（百二十字以內）

◎用紙は總てはがきの事◎字體は楷書にて鮮明なるべき事◎住所姓名は必らず原稿に記しおく事◎投稿は博文館女學世界宛の事

◎賞品……▲一等一圓▲二等五拾錢
▲三等參拾錢（圖書切符）
▲謎と一口噺は入賞參拾錢

毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二册
增刊四回…一、四、七、十月價格同一）

郵稅 一册 二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（惜二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	四十圓
一等	五十八錢	十七圓	三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文署規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十年十二月五日發行　第七卷第拾六號

編輯發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番
千十八番
二千六百二十番
三千二百二十九番

豫告

博文館發行
十五大雜誌

新年號

第十四卷

太陽

毎月一回
一日發行

●大判（四六判二倍大）本文紙數二百五十六頁
●寫眞版 光澤紙四頁二色刷二頁 普通……十二頁
●外に本文中寫眞版數十個挿入す
▲正價一册金參拾錢　郵税一册三錢五厘

外人の伊藤公山縣公大隈伯に對する三大政治家人物評最も珍

本誌内容

▲時事評論（新聞雜誌に現れざる秘密の材料に據りて痛論す）
▲人物月旦（山縣公爵の個人的性格を顯微鏡的に分拆記述す）
▲論　說（日本論壇の最高府也看過して時勢に後るる勿れ）
▲文　藝（柳浪眉山葉山文學士桂月天溪等の創作評論新年文壇に波瀾を起すべく、有明泡鳴外諸子の詩及漢詩皆異彩を放つ）
▲學　藝（織田長岡兩博士外諸大家の論述學界に獨歩せり）
▲雜　纂（横山理學博士、姉崎博士、坪谷水哉子等の記說通信をはじめ材料皆各自独得の光彩を放つて燦爛たり）
▲口　繪（製版印刷の美最も優秀、材料の多方面亦珍奇なる比類無し）
▲懸賞寫眞募集…………十二月五日締切

新年大附錄◎短篇小說集

册二百頁

今や文壇に一大變革生じて自然派是非論囂々たり本誌附錄に執筆せる新進作家が作は一時代を劃する警拔の名篇也

（後付の一）

第七卷

商工世界 太平洋

▲日本の商工業を世界的たらしめんとす
▲大和民族の海外發展を圖り
▲勞働者に慰安を與へ

毎月二回
一日、十五日發行

▲資本主に新智識を供給し
▲先輩の意見を紹介し
▲人格の習養に重きを置く

●大判（四六判二倍大）本文紙數百十二頁
●光澤紙寫眞版四頁挿入
▲正價一冊金拾貳錢　郵稅一冊貳錢

新年の大附錄 ●當世實業家細見

▲漫然たる成功熱は吾人是を欲せず
▲致富術は說くと雖も
▲不可能なる者を强ゆるの愚を演せず
▲海外に現はれし新式實務を傳達し

鬼が出るか蛇が出るか、當世の實業家の半面を暴露して、之れはと驚かれるもあるべし、彼がと笑はれるもあるべし、委しくは言はぬが花、細見なれば日常の人が、氣がつかぬところを探つて御目にかける。

▲之を日本化するの術を敎ゆ
▲經濟界の現象を公正に判斷するは
▲吾人の本領なり

第三卷

農業世界

本誌は戰後農界の燈明臺たらんが爲めに昨春四月發刊してより未た二歲ならざるに、既に早くも中外の好評を博し、本邦雜誌中唯一の大雜誌を以て目せらるゝに至りしは、時運の宜きを得たるならんも抑も亦讀者愛顧の賜なり依て本誌は其厚意に報んが爲に更に來春よ

毎月一回
十日發行

●菊判本文紙數二百四十頁
●寫眞版（光澤紙…四頁　普通…四枚）●彩色石版水彩畫（動物標本）●原色寫眞版（植物標本）
▲正價一冊金貳拾錢　郵稅金貳錢五厘

●本誌は　農業、林業、水產に關する朝野名家の有益斬新なる明論卓說」耕種、園藝、釀造、養蠶、畜產、土地改良、林業、水產、副業等の各事項に涉れる各專攻の學者實際家の執筆に係る學說實驗」農政問題、自治農村、產業組合、耕地整理等に對する意見と經驗」とを揭げ、斯界を改良指導することを期すべし。
●本誌には　農業、林業、水產業者の人物經歷、事業言行逸話等」農家が家庭に要すべき育兒、攝生、娛樂、料理、雇人待遇家風家法等」を揭げ一は農界の人物を獎勵し、一は農家の家庭を改善することを期すべし。

り一層努力奮勵して記事を精撰し有益にして趣味ある材料を揭け錦衣更らに一段の光彩を添ふことを期すべし其內容は之を一月の初號に就て見よ

新●年●附●錄●として鮮明にして最も美麗なる四六四ッ切の『農家繪ごよみ』なる大附錄を添ふ

●本誌には各地方に於ける冠婚葬祭、祝事娯樂、奇談等の風俗習慣」農界に行はるゝ俳句俗謠、俚歌より詩歌談話小說の類」を揭げて文藝的趣味と娯樂の念とを與ふべし。

●本誌には內地に於ける農林水產に關する狀況及時事を明かにし、尙滿韓、西比利亞、南北亞米利加、布哇に於ける各國の農事の模樣移民の狀況」等を詳記して讀者の參考に供すべく、讀者より提供する各種の質問に對し一々叮嚀親切に解答して其良師たるを期すべし。

第十四卷

文藝倶樂部

每月一回
一日發行

●菊判本文紙數三百二十頁●原色寫眞版一枚
●寫眞版（光澤紙（二色刷）二頁 普通……八枚）●木版摺錦繪一枚
▲正價一冊金廿五錢　郵稅一冊三錢

▼如何に盛裝して讀者にまみゆるかを待て!!!▲

長く東洋の雜誌界に覇王を稱せし文藝倶樂部は茲にめでたく十四の春を迎へんとするに當り、讀者が積年の愛顧に酬はんことを期し、其の外觀に其の內容に愈々益々趣味の向上と實益の充實とを圖り、其材料を精撰するは素より表紙、木版、口繪、原色版、寫眞版、卷中の挿畫はいはずもあれ用紙印刷皆悉く天下の精粹を萃め、ひとたび卷を開けるもの其の美に打たれ恍然自失久之矣の力あらしめんとす殊に戊申文壇劈頭の一大偉觀として豫て壹千參百圓の賞を懸け江湖より募集せし百美人の肖像を、四六判十六倍大の色刷寫眞版大附錄として第一號第二號の兩冊に添附し、綾羅錦繡の上更に紅紫爛熳たる美花を添へんとす仰ぎ願くは滿天下の讀者本誌が日本文藝の普及發達に盡瘁する誠意を諒とし歲と共に大飛躍大發展の實を擧ぐるに倍舊の扶掖指導を吝み賜はざらん事を千祈萬禱の至りに堪ざる也!!!

▼附◉錄◉寫◉眞◉版◉の◉百◉美◉人◉喜◉ん◉で◉讀◉者◉を◉迎◉へ◉ん!!!▲

第八卷

女學世界

毎月一回 一日發行

●菊判本文紙數二百八頁●附錄美麗繪葉書
●寫眞版(光澤紙四頁 普通…四枚) ●石版(極彩色口繪水彩畫 習字帖鉛筆畫毛筆畫 七頁)
▲正價一冊金貳拾錢 郵稅一冊金貳錢五厘

新年附錄

一條成美君意匠
百人一首歌かるた
大判二十極彩色
(百人百種の書分け)
無類の美彩

(本誌内容)

▲趣味の正月 都の正月‖山家の正月 海濱の正月‖旅の正月
▲名婦人内助談(婦人記者) 捉へ來る人 果して何人
▲斯る家には斷じて嫁るな(平凡なる人の妻女) 深痛なる彼女の懺悔談
▲何故に妾は長命なるか(九十九嫗の談)
▲貴女には何が出來ますか(横倉女史) 困難なる職を求めて成功したる女の談
▲筆のパノラマ(高北貞子) 粧はれたる古戰場の記

▲表情的美容法(見玉ドクトル)
▲科學上より見たる百人一首(來左近)
▲女の容貌の程度(元祿姉さん) 美人不配美男子論
▲井上侯爵家の勝手元
▲我家の日々の出來事(羽仁女史) 殿様のおさし圖、庖厨は山海の珍味
▲倫敦の交際社會(大隈信常氏談)
▲文明人と色の配合(田添女史) 上流婦人の衣服のいろいろ
▲哺乳の時は母に如何なる感を與ふべきか(女醫者)

第十卷

中學世界

毎月一回 十日發行

●菊判本文紙數二百四十頁●附錄(美麗繪葉書)
●寫眞版(光澤紙……四頁 普通……四頁) ●水彩畫、ペン畫 鉛筆畫色鉛筆畫 五頁
▲正價一冊金貳拾錢 郵稅一冊金貳錢五厘

明治四十年の吾が學界、誰か星と菫とにのみ暮るゝと云ふや。また誰か試驗勉强と野球の狂熱とに占領されたりと云ふや。學界は刻々に活動し、進歩して止まずや、膨脹的邦家の發展と共に、青年學徒の元氣は愈々旺に精力一際密ならんとす。また一代の壯觀ならずや。今、吾徒、第拾卷の終末を結びて、近く新春の歡喜を迎へんとするに當り、這般の感想胸に突いて出ずるを禁ずる能はず。願くは此の心を把持して寸時も休まず、努力、勤勞、忠實、大にしては學海の權威の維持たり、小にしては、青年學徒の父母たり、朋友となり、飽く迄意志の貫徹を期せん哉。

(内容要項)

▼學校事情 各學校特設の通信者の手に依りて、學徒必須の事實若くは面白き出來事を報道す。學海に志あるもの、これを外にして、他に何の便宜を有する乎。

▼學生生活 社會の事情と全く絶緣の學校生活は詩的にしてまた多趣味なり。且つ、各種の學校にはそれぞれ特殊の風俗あり、氣風あり、習慣あり、材料の富有知るべし。

▼受驗界 受驗の動靜を知るは現代學生の主要課目たるが如しこれ學校成功に對する銳利なる刀劍也。本欄は受驗學生諸君の爲めに最も老練なる指導者たるべし。

▼學界評論
▼修養
▼學術講話

これ本誌の權威也。大町桂月氏の快筆は益其の精鋭を加へ、佳麗 倍すべし。學界の思潮に對しては某々の博士また椽大の筆を揮つて起つべし。これ本誌の光輝なり。スチユデントライフと其の理想的生活法、健全なる人生觀等すべての教導にあたる實驗を得たる現代諸名家の訓話は句々金玉の誨を傳ふべきなり。學校の課業は乾燥なり。然れども本誌の學術講話は趣味に富みて面白し。これ學識豐富の諸專門學者の筆なれば也。

▼學事顧問
▼文學繪畫
▼學校通信
▼衞生等の材料悉く網羅せらる

主として在地方學生諸君の爲めに設けらる。語るに友なく、詢るに師なき人の境遇程哀れなるはなし、本欄はあらゆる學事に關してあらゆる人の質疑に答ふ。これ本誌の色彩なり。學餘、清泉を掬み美神の柔腕に觸れて麗はしき慰藉を求めんと欲するものはこゝに來れ。

▼海外通信 ▼談叢 ▼運動界

▼新年附錄──短篇十種

數十頁の增加を行ひ現代新進作家の創作を收むべし ▼

第三卷

文章世界

毎月一回
十五日發行

●菊判本文紙數二百四十頁●附錄(美麗繪葉書)
●寫眞版(光澤紙……四頁 普通……四枚) ●石版刷水彩畫二枚
▲正價一冊金貳拾錢 郵稅一冊金貳錢五厘

▲口繪
▲論說
▲創作
▲談叢
▲月旦
▲時評

彩色畫二葉繪はがき一葉寫眞版アート共八頁◎材料珍奇◎趣味津々◎是れ本誌獨特の光彩也

朝野の名家大家の高論卓說を收む◎文章界の新問題及びこれが解決は獨り本誌の此の欄に依つて知るを得べし

短編小說、紀行文、寫生文、史論、時論、詩歌俳句等、何れも中央文壇に名ある人の新作を揭ぐ

時事に觸れたる諸種の問題について各方面の大家の高話を聞くべし◎座らにして大家の風丰、口吻を偲ぶに足るべし

各方面の文學者、文章家、もしくは文壇の新運動に對して徹底せる評論を試むべし

新たに時評欄を設く◎中央文壇の新思潮、新機運は勿論、月次の新作について田山花袋、前田木城の兩人、責任を以て批評の筆を揮ふべし

▲文章講壇
▲文範
▲評釋
▲資料
▲評傳
▲家庭
▲文叢

專ら文を作る上についてこの心得を說くべし◎時評の一般文壇的なると兩々相俟つて本誌の主張を見るべし

東西古今の名文を擧げて註釋を施すと共に批評すべし◎主筆田山花袋專らこれに掌る

文章詩歌俳句等各其の道の大家に囑して懇切なる評釋を揭ぐべし

名句新選、詩語、雅語、俗諺、科語其の他諸種の難解なる熟語の解釋文章顧問等此の欄に收む

東西古今の文豪を傳し且つ評す◎執筆者は論壇の大家

現今文壇諸大家の家庭を紹介すべし◎興味盡きざるべし

文叢は滿天下の青年文士の錦心繡腸の文字を集む◎其の選評は親切丁寧を極む

○新年大附錄

現今大家の苦心に成る小說數編を收む明治四十一年文壇初頭を飾る最も價値ある產物也

(後付の五)

第二卷

鉄道汽船旅行案内

本誌は四十一年度より一層迅速と精確とを期し旅行家をして些の遺憾なからしめんとす

毎月一回
一日發行

●菊版紙數約二百頁
●石版二度刷表紙美本
▲正價一冊金十錢　郵税一冊一錢五厘

第一卷

冒險世界

本誌は四十一年の劈頭に創刊せんとするものにして其内容は本誌廣告欄中に特掲せり注意あれ

毎月一回
五日發行

◎初號に限り一月一日發行
●大判(四六判二倍大)本文紙數百二十八頁
●三色版口繪一枚光澤紙寫眞版四頁
▲正價一冊金十五錢　郵税一冊二錢

第三卷

幼年畫報

毎月一回
五日發行

◎新年號に限り一月一日發行
●菊判美麗畫本
●石版極彩色刷十六頁
●活版寫眞入二度刷十六頁
●光澤紙寫眞版四頁
▲正價一冊金十錢　郵税一冊一錢

▲新年大附錄◀

イロハ合せ

巖谷小波君作
宮川春汀君畫

●御覽なさい來年の幼年畫報を……もうじきにお正月が來ます、お正月にはいろいろ面白いことや樂しいことが御座います、先づ男の子は凧あけ、女の子は羽子つき、かるた遊びも樂しう御座いませうが、夫れよりももつと面白いのは何でせう、來年は三つになる幼年畫報、これが立派なイロハ合せをお年玉に持つて、皆さんのお家へ參りますから皆さんの爲には凧あげよりも羽子つきよりも、先づこの本が一ばん面白いと云ふてよろしいでせう、來年からは書もお伽噺も出來る丈吟味して、なるべく面白い樣、又なるべく爲になる樣に致しますから、まだこの本をお讀みにならぬお子さんは、一日も早く御覽なさい、又お父さんやお母さんは、是非買つて上げて下さい。

第十四卷

少年世界

毎月一回
一日發行

●菊判本文紙數百三十六頁(内八頁着色二度刷)
●原色寫眞版一枚　●石版色刷一枚
●光澤紙寫眞版四頁
▲正價一冊金十錢　郵税一冊一錢五厘

年を重ぬる毎に益々盛大なる本誌は早くも玆に十四卷を迎ふるに至る本誌が常に力を普通教育の發達に注きて、趣味津々たる間に聖諭の主旨を全うし、全國幾十萬の少年諸子の愛友として到る處に歡迎せらるゝや深し見よ本誌今や一齡を加ふると共に如何に空前の發達をなせるかを

◉表紙　第十四卷より用ゆべき表紙は其圖案を愛讀者中より募集したる最も美麗なる者を以てすべし◉口繪　西野氏が動物標本書は實に本誌の一特色たり特に本年度よりは世界の動物中極めて著名なる奇動物を紹介すべし◉水彩畫　三宅、大下、丸山の諸氏交代にて執筆せらる以て書齋の花と飾るべく又練習書帖となすも可ならん

新年大附錄
開國五十年雙六
(極彩色石版四六判十六頁大)
巖谷小波君立案
尾竹竹坡君揮毫

『記事』(本欄)主筆小波氏は空前の長篇「お伽太閤記」を物せらるべし之本邦著名の稗史として何人も知らさる者なき豐公の一生をお伽化したるもの古英雄の珍面目を我少年諸君の眼前に躍動せん其他菊地男爵の「英國みやけ」松村博士の「目出度き植物」石川博士の「猿と人間」窪田中監の「軍艦の正月」坪井博士の「人類談」岸上博士の「ごまめの話」等皆時機に適切の材料を集め加ふるに江見水蔭、押川春浪、吉岡文學士等の冒險談お伽噺を初め各欄無前の光彩を發輝すべし

(少年欄)少年文壇は更に課題懸賞を增し寫生畫募集は年二回必ず勵行して當撰者の作物を彩色石版に附すべく又考物講談會等をも屢々新奇なる題を課して讀者を樂ましむべし

第三卷

少女世界

毎月一回
一日發行

●菊版本文紙數百二十頁(內十六頁着色二色刷)
●石版口畫二頁　●普通寫眞版四頁
▲正價一冊金十錢　郵稅一冊一錢五厘

少女出世雙六
新年大附錄として

縱二尺六寸橫一尺八寸の美麗鮮明なる雙六を添へます繪は鏑木清方畫伯の筆のあまり美しい面白いこと!!!

少女諸子が愛讀措く能はざる本誌は、號を重ぬる毎に大高評を博しつゝあるのですが、明治四十一年初刷のものよりは、更に一大改善を施し外觀內容ともに、善美を極めて、新春第一の好讀みものたらしめんことを期します、即ち、第三卷第一號の面目は次の通りです

表紙　某少年畫家彩筆になり、更に宮川春汀氏が校閲正修されたるもの、蓋し本誌空前の美裝でせう。

口畫　彩色石版刷りには追羽子(水野年方筆)と初日の出(丸山晚霞筆)とを飾り、その他寫眞銅版四葉を挿みます。

◉みどり草紙　これ實に、新春第一の卷頭お伽噺で巖谷小波氏の作、挿繪は宮川春汀氏の筆です。

◉おもなる記事　新年號は、平素に倍するほど記事が豐富ですが、その中のおもなるものは左の通り

◉(冒險少女)無人島の正月　江見水蔭◉少女冒險小說　押川春浪◉(少女劇話)見眞似姬　石橋思案◉若水物語　竹貫佳水◉松の內日記　沼田笠峰◉正月に咲く花　石坂橘樹◉鳥の壽命　鈴木苔花◉少女お伽噺　西村渚山◉つばき山　永富小翠◉(少女劇話)今年の望　鳩山春子◉猿字慧　武田櫻桃◉千代の綠　木村小舟◉(少女唱歌)春遊び　田山花袋◉黃金の蓮華　福田琴月



健腦丸（けんのうがん）
神經病全治良劑
腦病
本劑の赫々たる信認は世既に定評あり
迷ふ勿れ腦病患者
腦病藥の霸王
本舖 大阪市心齋橋 丹平商會藥房
▲一日早く本劑を服せば。一日早く不快なる病苦を脱して。爽快なる健康を得るのである
▲常に持藥として連服せば。逆上を引下げ。恐るべき腦充血を全治し。中風卒中を未發に防ぎ。記憶力を増進する特効あるは獨り健腦丸のみである
効能
腦充血
腦膜炎
頭痛
大便秘結
逆上症
中風
卒中
五週分 金貳円 郵税十錢
三週分 壹円廿五錢 仝 十錢
二週分 八拾五錢 仝 六錢
一週分 四拾五錢 仝 四錢
三日分 貳拾錢 仝 貳錢
一日半 金拾錢 仝 貳錢

(明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可)

女學世界

第七卷第拾六號

(明治四十年十二月五日發行 每月一回五日發行)

(定價金貳拾錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版㊱
明治40年11月（第7巻第15号）、12月（第7巻第16号）

2008年12月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3511-0　C3321